柏原市文化財概報　1986-Ⅵ

高井田遺跡 Ⅱ

—高井田土地区画整理事業に伴う—

１９８７年３月

柏原市教育委員会

はしがき

生駒山系や玉手山丘陵に代表される美しい緑、そして大和川や石川に象徴される豊かな水。柏原市は山と川に恵まれ、快適な自然環境のもとに発展してきた市であります。ところが、昨今の開発はめまぐるしく進み、緑は減り、川は汚されてきました。大阪の衛星都市として発展する柏原市にとって、平野部はあまりにも狭小であり、開発が山麓部へ、そして更に中腹部へと拡大していくことは、当然のことかもしれません。しかし、玉手山丘陵では、再々の地崩れが住民の生活を脅かし、数十年前には泳げたという大和川も、全国第二位の汚れた河川として有名になりました。

文化財においても例外ではありません。埋蔵文化財の宝庫として注目される柏原市ではありますが、その保存問題、あるいは活用方法において数多くの問題が山積みされており、その問題が十分に解決できないまま消えていった遺跡も少なくありません。

今回の調査でも、烏坂寺を建立した烏取氏の集落跡と推定される遺構が発見されたにもかかわらず、十分な検討を加える時間もなく、調査後、すぐに削平されてしまいました。

このような事態は、市民のためであるべき開発が、市民共有の財産である文化財や自然を破壊するという矛盾を生じていると言えはしないでしょうか。市民の快適な生活環境を守っていくことは行政の努めであり、私たちは今後も、柏原市の文化財保護のために努力していきたいと考えています。御理解、御支援をよろしくお願いします。

昭和62年３月

柏原市教育委員会

例　　言

1．本書は、柏原市教育委員会が、柏原市高井田所在の平尾山古墳群安堂支群内において、柏原市高井田土地区画整理事業に伴って実施した緊急発掘調査報告である。

2．発掘調査は、柏原市高井田土地区画整理組合（理事長・谷口俊春）の依頼に基づくものであり、調査費用は全額、依頼者の負担によるものである。

3．発掘調査は、第２次調査を昭和60年９月30日から昭和61年１月31日まで実施し、第３次調査を昭和61年４月１日から４月８日まで実施した。調査に伴う整理作業は、昭和62年３月31日まで実施した。なお、第１次調査は、昭和60年４月２日から６月６日まで実施し、『高井田遺跡Ⅰ』（1986）として既に報告済みである。

4．当該地は、平尾山古墳群安堂支群に含まれるが、第１次調査の成果によって、『高井田遺跡』の仮称を与えた。今回の調査においても、この仮称を採用し、遺跡範囲等が明らかになり次第、正式名称としたいと考えている。

5．発掘調査、および整理作業は、柏原市教育委員会社会教育課　安村俊史が担当した。

6．本書の編集、および執筆は、全て安村が担当した。

7．本書で使用した方位は磁北、標高はＴ．Ｐ．である。なお、真北は磁北より約６°東に振っている。

8．調査・整理の参加者は下記の通りである。

石田　博	竹下　賢	北野　重	桑野一幸	田中久雄	石田成年
谷口京子	寺川　款	西村　威	松下　修	秋田大介	伊藤芳匡
稲岡俊彦	今中太郎	清瀧健二	西　一晃	仲井光代	江波佐知子
中田ゆかり	藤本直美	松村富子	乃一敏恵	松成早苗	横関勢津子
吉居豊子	岡西万里子				

東海アナース株式会社　　村本建設株式会社

目　　次

第1章　調査経過 …… 1
第2章　遺跡の概略 …… 2
第3章　第2次調査の成果
　1．層序 …… 6
　2．遺構 …… 8
　　飛鳥・奈良時代の遺構 …… 11
　　平安・鎌倉時代の遺構 …… 45
　3．遺物 …… 51
　　古墳～奈良時代の遺物 …… 51
　　平安・鎌倉時代の遺物 …… 85
第4章　第3次調査の成果
　1．遺構 …… 92
　2．遺物 …… 96
第5章　安堂第6支群3号墳横穴式石室の移設
　1．概略 …… 97
　2．横穴式石室の移設 …… 98
　3．まとめ …… 100
第6章　まとめ …… 101

挿 図 目 次

図－1　周辺の遺跡分布図……3
図－2　調査地位置図……5
図－3　土層図……7
図－4　遺構平面図①……8
図－5　調査地区全体図……9
図－6　建物－3……11
図－7　建物－4……12
図－8　建物－5……12
図－9　建物－6……13
図－10　建物－7……13
図－11　建物－8……14
図－12　建物－9……15
図－13　遺構平面図②……16
図－14　建物－10……17
図－15　建物－11……18
図－16　建物－12……19
図－17　建物－13……19
図－18　建物－14……19
図－19　遺構平面図③……20
図－20　建物－15……21
図－21　建物－16……21
図－22　建物－17……21
図－23　建物－18……22
図－24　建物－19……22
図－25　建物－20……23
図－26　建物－21……23
図－27　建物－22……24
図－28　建物－23……24
図－29　遺構平面図④……25
図－30　建物－24……27
図－31　建物－25……27
図－32　建物－26……28
図－33　建物－27……29
図－34　建物－28……31
図－35　建物－29……31
図－36　建物－30……32
図－37　建物－31……33
図－38　建物－32……34
図－39　遺構平面図⑤……35
図－40　建物－33……36
図－41　建物－34……37
図－42　建物－35……38
図－43　建物－36……38
図－44　建物－37……39
図－45　建物－38……39
図－46　建物－39……40
図－47　建物－40……40
図－48　建物－41……40
図－49　柵－1……41
図－50　柵－2……41
図－51　井戸－1……42
図－52　遺構平面図⑥……45
図－53　建物－42……46
図－54　建物－43……46
図－55　建物－44……47
図－56　建物－45……47
図－57　建物－46……47
図－58　建物－47……47
図－59　建物－48……47
図－60　遺構平面図⑦……48

図－61　柵－3……49
図－62　柵－4……49
図－63　建物ピット内出土遺物……52
図－64　ピット内出土遺物……53
図－65　井戸中・下層出土遺物……55
図－66　井戸上層出土遺物……56
図－67　土坑－1～4出土遺物……58
図－68　溝－1・3・6出土遺物……59
図－69　溝－2出土遺物①……60
図－70　溝－2出土遺物②……61
図－71　溝－4出土遺物……63
図－72　溝－5出土遺物……65
図－73　包含層出土遺物①……66
図－74　包含層出土遺物②……68
図－75　包含層出土遺物③……69
図－76　包含層出土遺物④……70
図－77　包含層出土遺物⑤……71
図－78　包含層出土遺物⑥……72
図－79　包含層出土遺物⑦……73
図－80　包含層出土遺物⑧……74
図－81　包含層出土遺物⑨……75
図－82　包含層出土遺物⑩……76
図－83　包含層出土遺物⑪……78
図－84　包含層出土遺物⑫……79
図－85　包含層出土遺物⑬……80
図－86　包含層出土遺物⑭……81
図－87　包含層出土遺物⑮……82
図－88　包含層出土遺物⑯……83
図－89　包含層出土遺物⑰……84
図－90　ピット内出土遺物……85
図－91　土坑－5出土遺物……87
図－92　溝－7出土遺物……88
図－93　包含層出土遺物①……89
図－94　包含層出土遺物②……90
図－95　包含層出土遺物③……90
図－96　建物－49……92
図－97　調査地位置図……93
図－98　遺構平面図……94
図－99　建物－50……95
図－100　土坑－1……96
図－101　土坑－1出土遺物……96
図－102　土坑－2出土帯金具……96
図－103　安堂6－3号墳石室実測図……97
図－104　出土遺物……100
図－105　鳥坂寺出土軒丸瓦……105

図　版　目　次

図版１　全景
図版２　建物－３～８
図版３　建物－３～５・９
図版４　建物－10～13
図版５　建物－10・13
図版６　建物－14～18
図版７　建物－19～32
図版８　建物－28～30
図版９　建物－28・30
図版10　建物－30・31
図版11　建物－24・26・柵－１・井戸－１
図版12　建物－33～39
図版13　建物－39・軒丸瓦出土状況
図版14　建物36・37・40・41
図版15　溝－３～５
図版16　建物－42～46
図版17　建物－45・柵－３・４
図版18　建物－48
図版19　ピット－328・土坑－５
図版20　溝－７
図版21　井戸出土遺物
図版22　溝－２出土遺物
図版23　溝－４・５出土遺物
図版24　包含層出土遺物
図版25　包含層出土遺物
図版26　包含層出土遺物
図版27　包含層出土遺物
図版28　包含層出土遺物
図版29　平安時代ピット・溝－７出土遺物
図版30　土坑－５出土遺物
図版31　包含層出土遺物
図版32　第３次調査・遺構
図版33　第３次調査・遺構
図版34　安堂６－３号墳石室移設
図版35　安堂６－３号墳石室移設
図版36　安堂６－３号墳石室移設

第1章　調査経過

本調査は、柏原市高井田土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として実施したものである。区画整理事業に関してのいきさつについては、『高井田横穴群Ⅰ』に詳述しており、その総括として『高井田横穴群Ⅱ』を予定しているので、ここでは簡単に触れておくことにする。

柏原市高井田土地区画整理組合、柏原市建設部都市計画課、柏原市教育委員会社会教育課の三者は、区画整理事業の計画に基づいて、再三にわたる協議を重ね、昭和60年9月に至って、ようやく調査範囲、調査方法等について合意に達し、直ちに調査に着手することになった。協議の結果、切土予定地は全域発掘調査を実施する。但し、過去の削平、盛土等により遺跡の存在が考え難い部分に対しては、立会調査で代用する。一方、盛土予定地は原則として調査を行なわない。但し、遺跡の存在が予想される部分に対しては、調査を実施するという結論に至った。この協議結果に基づいて、区画整理範囲内を南西から北東へ貫通する道路より北側を第2次調査とし、昭和60年度に調査を実施する。道路の南西部、鳥坂寺僧房跡の東側を第3次調査、谷川より南側の高井田横穴群内を第4次調査とし、昭和61年度に実施することになった。

本書には、平尾山古墳群安堂支群内にあたる第2次・第3次調査の成果を収め、第4次調査は別稿を予定している。

第1次調査は、河川盛土用土砂採掘工事に伴うもので、昭和60年4月から6月まで実施しており、『高井田遺跡Ⅰ』（1986）で報告済みである。

第2次調査は、第1次調査地の西側に位置し、昭和60年9月30日から昭和61年1月31日まで実施した。調査に先立って、またも一部で事前着工があり、調査対象地北東部の約2000㎡が無断で削平された。削平地には平尾山古墳群安堂第5支群6・13号墳の2基の古墳が存在したはずであるが、現地を確認した時には既に地山も削平されており、古墳の確認はできなかった。その後、切土予定地のほぼ全域、約15000㎡を調査した。しかし、区画整理事業計画に発掘調査の予定が組み込まれておらず、補助事業として工事期間が制約されているという理由から、調査終了地から工事に着手するという事態になった。

調査によって、飛鳥時代から平安時代に至る数十棟の建物跡等が確認されたが、数mから十数mの切土を要するため、全く遺構を保存できなかった。このように、期間の制約が強く、保存が不可能という全く不本意な調査に終わったことは残念な限りである。

第3次調査は、鳥坂寺僧房跡の東側にあたる。盛土予定地ではあるが、過去に横穴1基が報告されており、その確認のために実施したものである。調査期間は昭和61年4月1日から4月8日まで、調査面積は約630㎡である。

なお、安堂第6支群3号墳の移設作業について、第5章で報告する。

第2章　遺跡の概略

調査地は、生駒山地の南西端、大和川の右岸に位置し、標高40～90mの南および南西斜面である。調査前は荒地となっていたが、かつては大部分がぶどう畑として利用されていた。従って、平坦地と斜面地が数段に重なる地形を呈している。

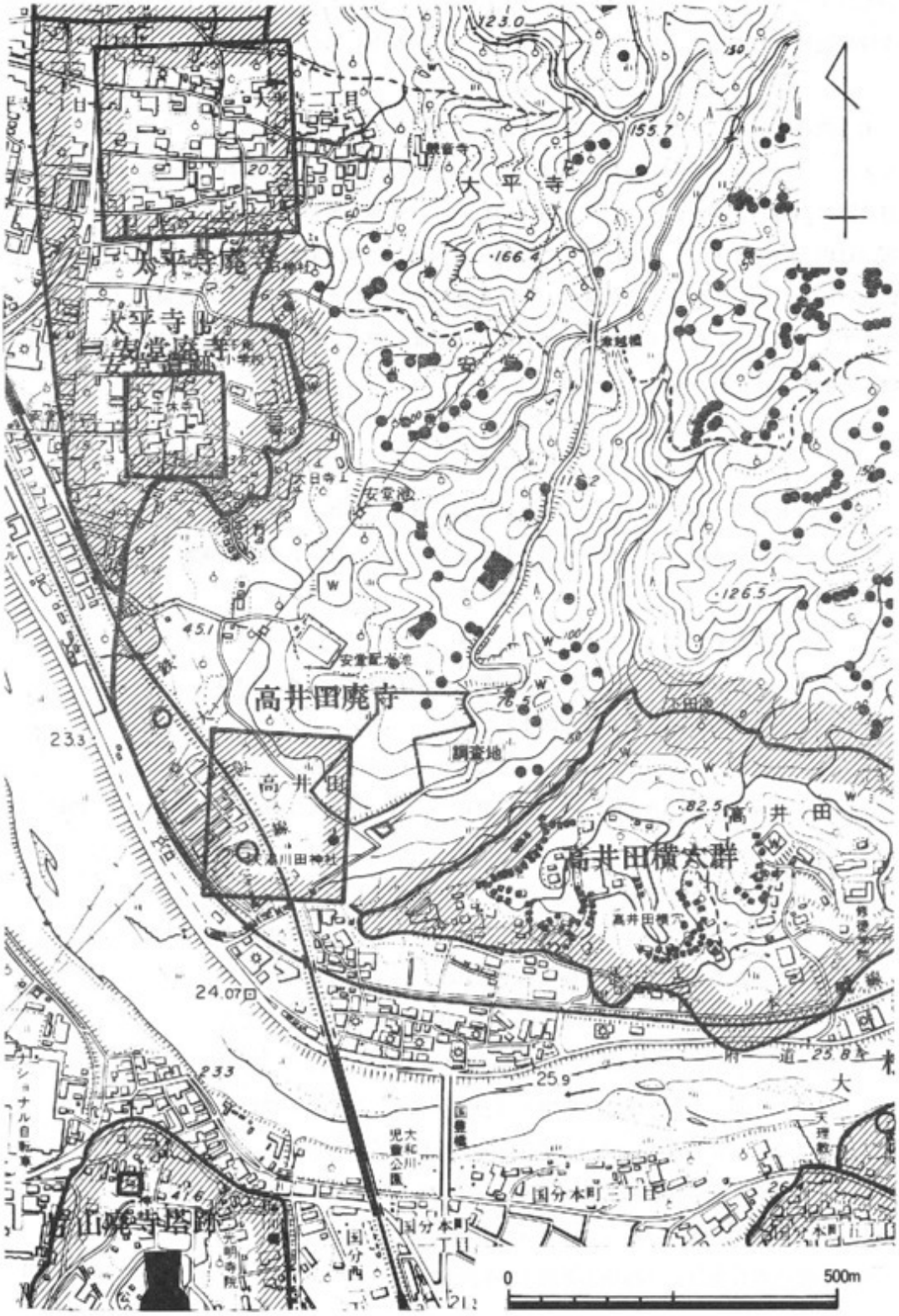
本来の地形は、南西へのびる尾根状を呈していたと考えられる。調査地の北側には、南西方向への谷状の地形が観察され、南斜面は幾度も地ごりを起こした急斜面となり、谷川へのぞんでいる。地質は花崗岩の岩盤、風化土から成り、部分的に大阪層群がみられる。

生駒山地南西部は、古墳の密集地帯として知られ、柏原市内の東山一帯には約1500基から成る平尾山古墳群が分布する。平尾山古墳群は数支群から成り、調査地は、安堂支群に含まれ、周辺には古墳時代前期から後期の古墳が分布する。今回の調査地内にも、安堂第5支群6・7・13・15号の4基の古墳が存在するはずであった[1]。しかし、6・13号墳は事前着工によって、調査を行なえなかった。両古墳は分布調査によって、古墳状の隆起として報告されていたのみであり、古墳か否かの確認さえできないまま消滅してしまった。7号墳は円墳と報告されていたが、7号墳の位置には中世の遺構面があり、明らかに古墳とは認められない。15号墳は試掘によって円墳の周溝の一部と推定される溝状遺構が確認されていたが[2]、今回の調査では、周溝をはじめ、古墳に伴うと考えられる遺構は全く認められず、これも古墳ではなかった可能性が強いと考えられる。このように、今回の調査では古墳は全く確認できなかったが、埴輪や古墳に伴うと推定される土器は若干出土しており、調査地内に数基の古墳がかつて存在したことは間違いないであろう。それらは、斜面地であるための土砂流出と、後世の建物建築の際の削平によって、破壊されたものと思える。

第1次調査では、横穴式石室を主体とする安堂第5支群16号墳と、切石による岩屋山式横穴式石室を主体とする安堂第6支群3号墳が発見されている[3]。また、区画整理範囲内には、他に7基の古墳が確認されており、安堂第6支群1・2号墳は埋没保存、第4支群1～5号墳の5基は、現状のまま緑地として保存される。これらの古墳は、いずれも部分的なトレンチ調査が行なわれているのみであり、詳細は不明である[4]。

更に、谷川を挟んで南側の丘陵には総数150基以上にのぼる高井田横穴群が分布し[5]、その東側には平尾山古墳群平尾山支群が分布する[6]。

調査地の西方には、鳥取氏の氏寺と推定される鳥坂寺跡（高井田廃寺）が位置する。鳥坂寺跡は1961・62年に塔・金堂・講堂が調査されている[7]。現在、塔跡は天湯川田神社の境内に、金堂・講堂はぶどう畑の一角に残っているが、塔と金堂の間を通る近鉄大阪線によって分断されている。伽藍は金堂・講堂が南北に並び、谷を挟んで南西の丘陵上に塔を配する他に例を見な



図－1　周辺の遺跡分布図

い配置をとる。その後、1983・84年の調査によって、僧房・食堂と推定される建物を始め、掘立柱建物11棟や木炭窯、井戸なども検出され、「鳥坂寺」等の墨書を有する土器も多数出土している。(8)

第1次調査の際に、掘立柱建物等の遺構が検出され、その性格から「高井田遺跡」の仮称を与えた。(9) 今回の調査でも、多数の遺構・遺物が発見され、平尾山古墳群安堂支群と重複する集落遺跡であることが明確になった。遺跡の範囲は、南側と東側はほぼ現在の道路に一致し、西側は鳥坂寺に接することがほぼ確認できる。しかし、北側は調査地北側の谷で終わるのか、更に北へ拡がっているのか不明であり、今後の課題としておきたい。この集落遺跡は7・8世紀代を中心として、一部、平安時代や鎌倉時代の遺構も確認されている。鳥坂寺に関わる集落遺跡であることは、ほぼ確実であろう。

註

（1）大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』1975
大阪府教育委員会・柏原市教育委員会『柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書』1980
柏原市教育委員会『高井田遺跡Ⅰ』1986

（2）柏原市教育委員会『高井田横穴古墳群試掘調査概要報告書』1983

（3）柏原市教育委員会『高井田遺跡Ⅰ』1986

（4）大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書』1974

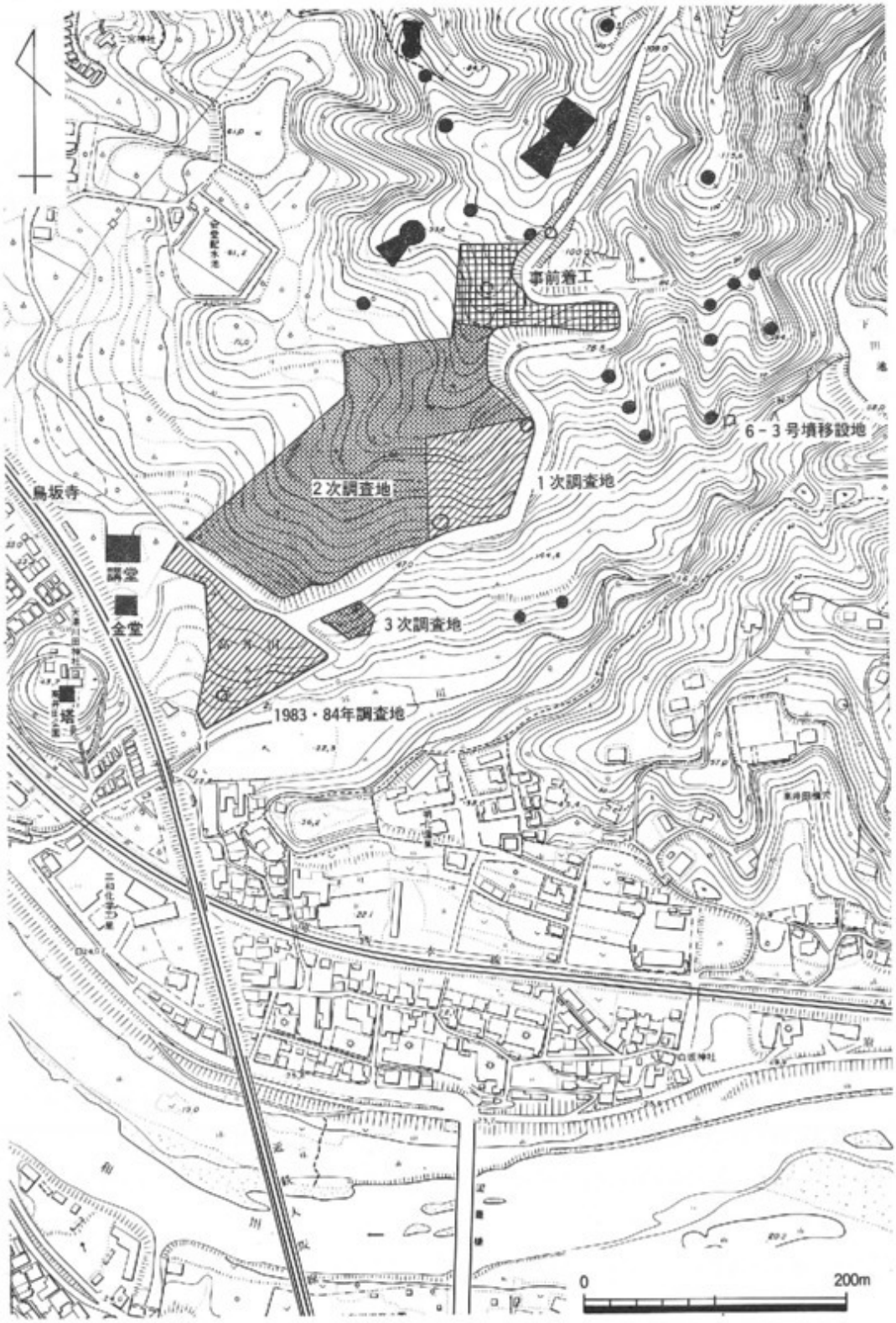
（5）梅原末治「河内高井田に於ける横穴群について」『人類学雑誌』第31巻12号　1917
高橋健白「河内高井田なる藤田家墓地構内の横穴」『考古学雑誌』第9巻9号　1920
和光大学古墳壁画研究会『高井田横穴群線刻画』1978
大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書』1974
柏原市教育委員会『高井田横穴群Ⅰ』1986　など

（6）白石太一郎氏らによって、平尾山千塚と呼称される古墳群である。
白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』42・43合併号　1966
白石太一郎「大型古墳と群集墳」『考古学論攻』第2冊　橿原考古学研究所　1973
大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』1975　など

（7）大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』1968

（8）柏原市教育委員会『鳥坂寺　－寺域の調査－』1986

（9）柏原市教育委員会『高井田遺跡Ⅰ』1986



図－2　調査地位置図

第3章　第2次調査の成果

1．層序

第2次調査地の大部分は、表土直下で地山に至り、遺物包含層が存在するのは北端、南西端など約3000㎡、全体の調査面積約15000㎡の約20%にすぎない。これは、過去の削平、土砂流出が著しく、谷状の地形をなす部分にしか包含層が残っていないためである。土層図Ⅰ・Ⅱは、調査地北端部にあたり、土層図Ⅰは南北断面の西面、土層図Ⅱは東西断面の南面である。第1層から第5層の無遺物層下に、鎌倉時代の遺物を中心に、一部平安時代の遺物を含む第6層黒褐色粘質土と第7層黒灰色粘質土がみられるが、遺物量はそれほど多くない。平安時代・鎌倉時代の遺構は、第8層赤褐色粘質土と第9層灰褐色粘質土の上面で検出されている。平安時代の遺構は、土層図Ⅰの更に南側に建物、柵が検出され、鎌倉時代の遺構は、土層図Ⅰ付近で、溝を確認している。これ以外の部分では、若干の土器は出土するものの、遺構は全く認められない。

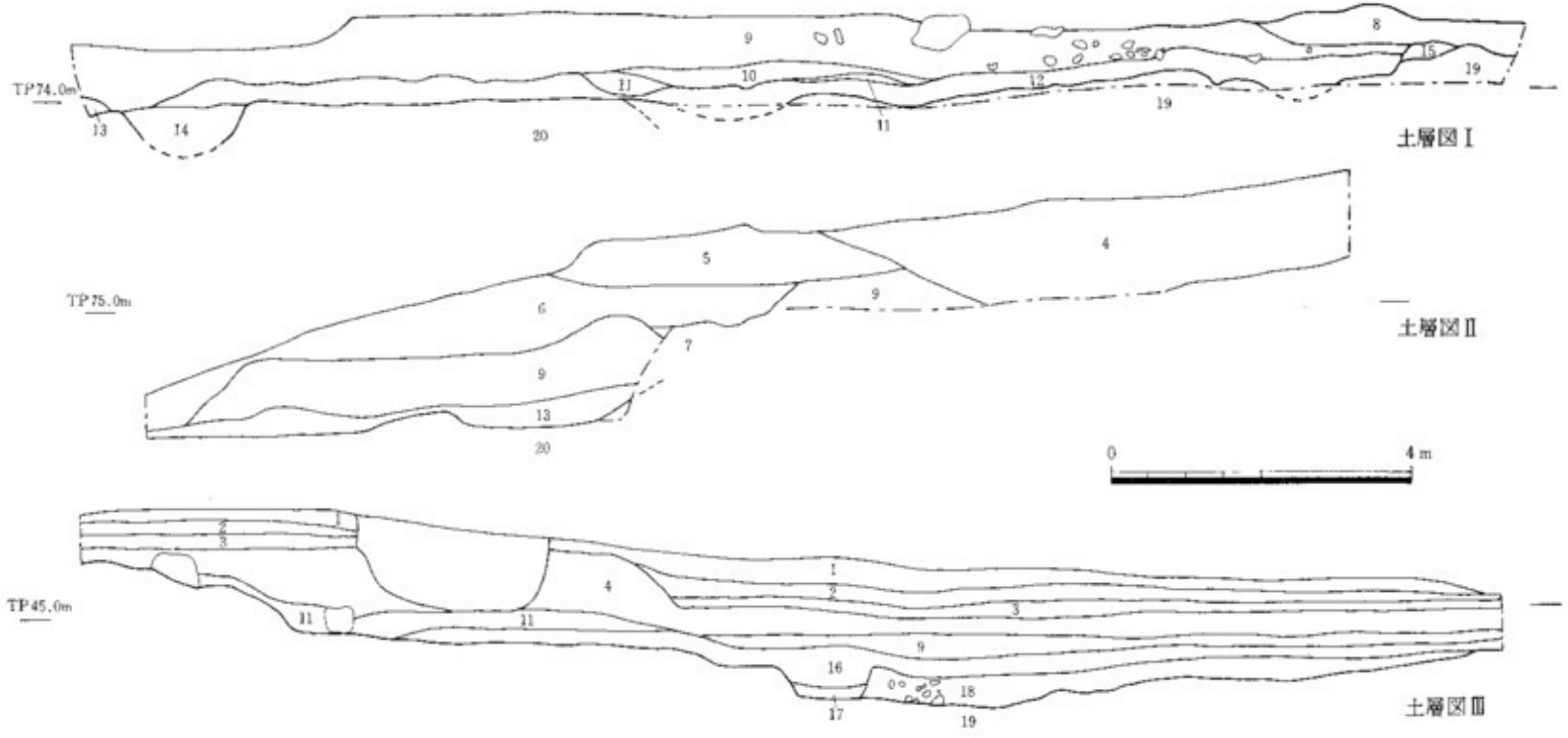
平安・鎌倉時代遺物包含層の下層には、灰色～灰褐色の粘質土を中心とした飛鳥・奈良時代の遺物包含層がみられる。これらの遺物包含層は数層に分層できるが、上下で時期差はみられない。遺物は多量に含まれており、埴輪などの古墳に伴う遺物も含まれている。飛鳥・奈良時代の遺構は、全て地山面で検出されている。地山は第19層暗黄褐色粘質土、第20層青灰色シルトであるが、山地斜面であるため、種々の土層が堆積しており、複雑な地層を呈する。基本的には花崗岩の岩盤、もしくは風化土、黄褐色系粘質土の大阪層群である。

土層図Ⅲは、調査地南西端の最も標高が低い位置にあたり、東西断面の北面である。平安時代以降の包含層は認められず、飛鳥・奈良時代の包含層が数層認められる。

以上のように、層序は比較的単純であり、遺構面は2面、時期は大きく3時期に分けることができる。調査地区全体に、周囲より高い部分、つまり地山の浅い部分に遺構が集中し、逆にそのような部分は後世のぶどう畑開墾等に伴う削平が激しく、遺構の残存状態は良好とは言い難い。

調査は、無遺物層を機械掘削、遺物包含層を人力掘削で行ない、北東部の標高の高い部分から南西部の標高の低い部分へと順次拡大していった。調査記録は、調査地区全体にトラバース測量による10m方眼の区割を設定して行ない、写真は調査範囲が広く、調査も長期にわたるため、遺構群ごとに撮影を行なった。

以下、遺構・遺物について、それぞれ時期別に記述を進めていくことにする。


TP74.0m
土層図Ⅰ
TP75.0m
土層図Ⅱ
0
4m
TP45.0m
土層図Ⅲ
1．表　土
2．鹹　土
3．床　土
4．褐色土
5．暗褐色土
6．黒褐色粘質土
7．黒灰色粘質土
8．赤褐色粘質土
9．灰褐色粘質土
10．黄褐色粘質土
平安・鎌倉時代包含層
飛鳥・奈良時代包含層
11．灰色粘質土
12．暗灰褐色粘質土
13．青灰色砂礫土
14．灰色シルト
15．淡灰褐色粘質土
飛鳥・奈良時代包含層
16．淡黒褐色粘質土
17．黒褐色砂礫土
18．灰色砂質土
19．暗黄褐色粘質土
20．青灰色シルト
飛鳥・奈良時代包含層
旭山

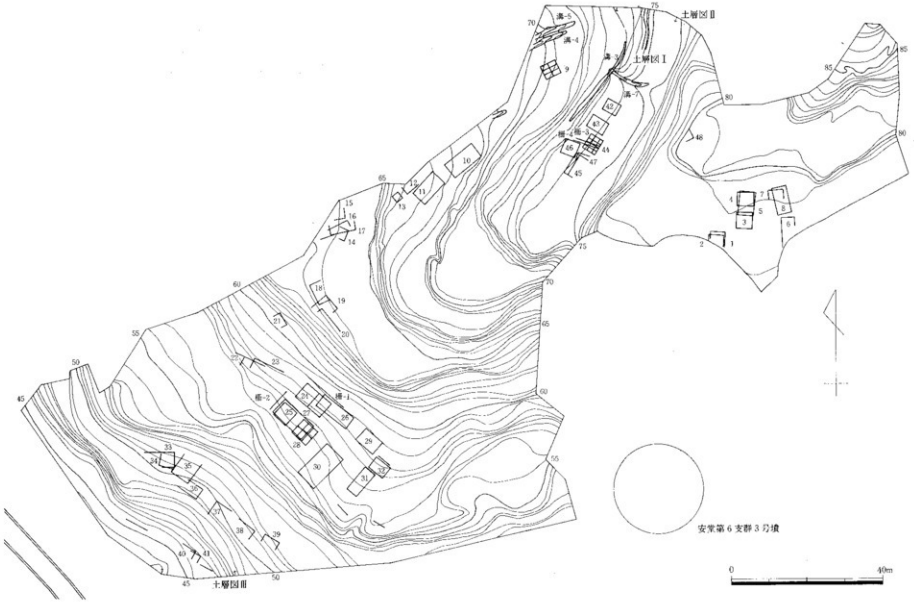
図－3　土層図

2．遺構

第２次調査で検出された遺構は、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物38棟、竪穴住居１軒、柵２列、井戸１基、土坑10基、溝８条、平安時代の掘立柱建物７棟、溝７条、鎌倉時代の土坑１基、溝２条である。建物の総数は46棟にのぼり、これ以外にも柱の配列が不明なピットが多数存在し、ピットの総数は647になる。従って、更に多数の建物が存在したものと思える。

なお、遺構番号は建物のみ、第１次調査の続き番号として建物－３から始めたが、他の遺構は新たに番号を打つことにした。なお、図中のピットは、略号Ｐで示した。また、他のピット、土坑、溝は時期の明確な遺構のみ記述する。

図－４　遺構平面図①



図－５　調査地区全体図

飛鳥・奈良時代の遺構

A　建物　（図－63）

飛鳥・奈良時代の建物は、第１次調査で確認されたものを加え、41棟になる。そのうち、建物－14のみが竪穴住居で、他はいずれも掘立柱建物であり、その大半は７世紀後半代に位置づけられる。

建物－１・２は、第１次調査で確認されたものである。建物－１は、３間×２間以上の規模を有し、建物－２は、２間×１間以上の規模である。いずれも南半は後世の地すべりによって消滅している。建物－１は、建物－２の建て替えによるものであり、時期はいずれも７世紀第３四半期頃と考えられる。

建物－３

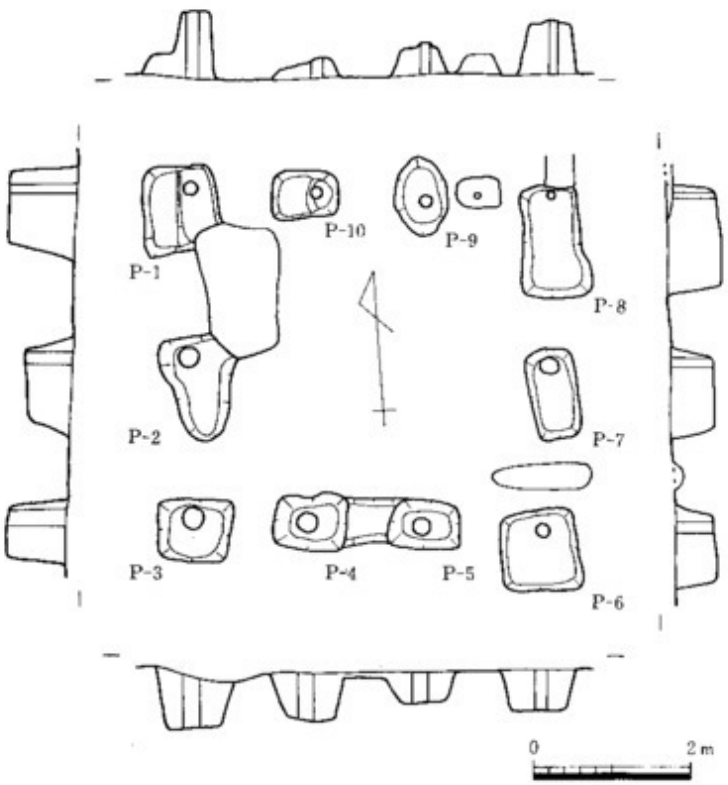
建物－３は、梁行２間、約430cm、桁行３間、約450cmの建物である。建物－３の南半は、第１次調査で確認されていたものである。梁行の柱間寸法は215cm等間隔、桁行の柱間寸法は150cm等間隔である。四隅のピットの掘方は、他の掘方より大きいが、全体に掘方の大きさ、形に均一性がみられない。柱の太さは約20cmと推定される。建物の主軸は、Ｎ－４°－Ｅ。ピット－１・２・８は建物－５のピットと切り合い関係にあり、建物－３が、建物－５に先行することがわかる。

遺物は、第１次調査の際に、ピット－２掘方内から内面に低く鈍いかえりを有する７世紀第４四半期の須恵器杯蓋が１点出土している。(1)

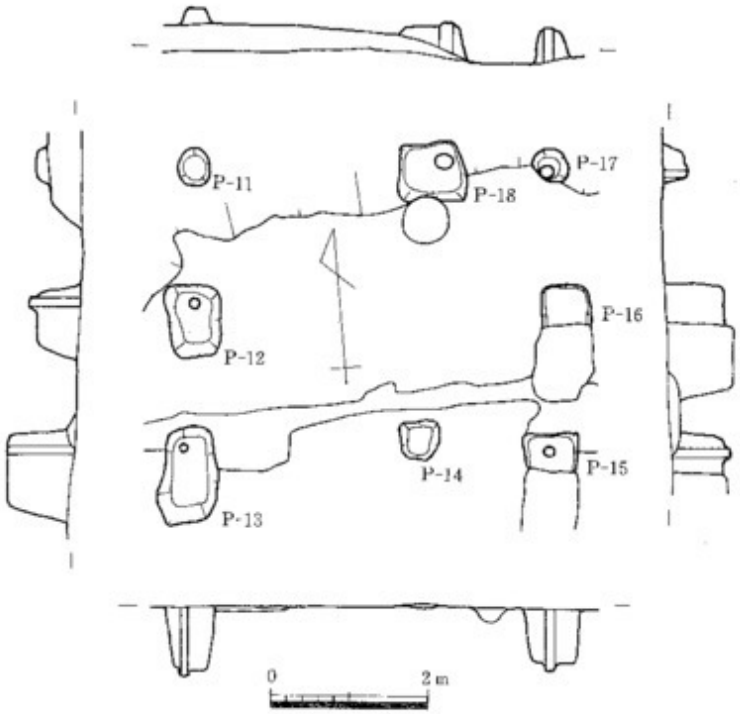
建物－４

建物－４も、梁行２間、桁行３間の建物と考えられるが、ピットを２個欠いている。梁行の柱間寸法は、約180cm等間隔で約360cm。桁行は約460cmとなり、柱間寸法は、150cm強であろう。北辺のピットは、溝－２によって削平されている。

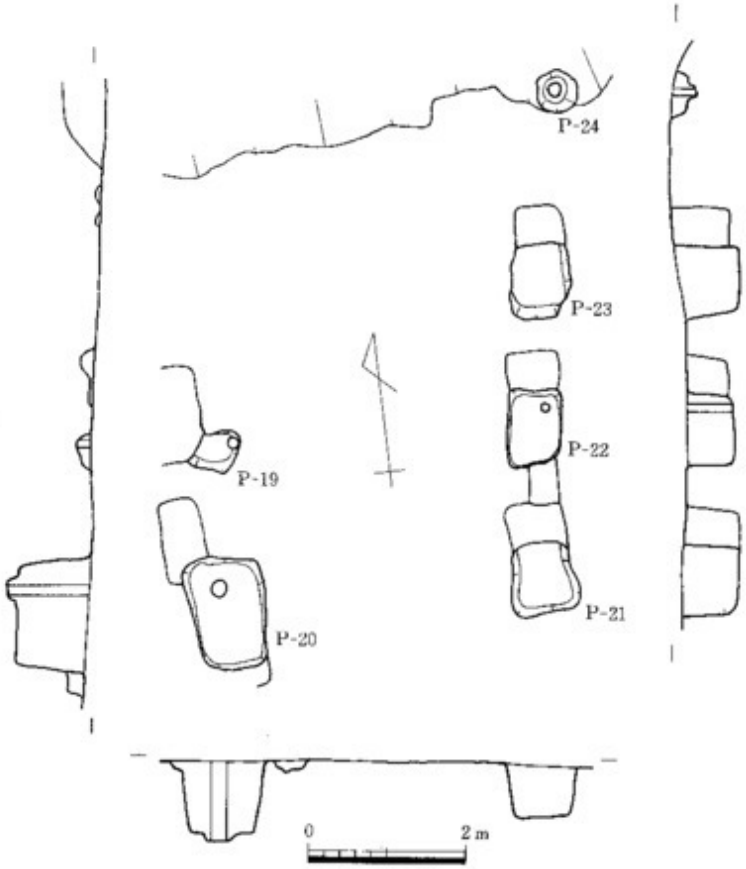
また、ピット－13・15・



図－６　建物－３（レベル高79.0m）



図－7　建物－4（レベル高79.0m）



図－8　建物－5（レベル高78.0m）

16は、やはり建物－5のピットと切り合っており、建物－4が建物－5に先行することがわかる。軸はN－5°－Eとなり、建物－3にほぼ一致する。やや近接するが、同時期の可能性が高いと思われる。

ピット－13掘方内から土師器片が出土しているが、時期を決定できるものではない。

建物－5

建物－5は、梁行2間、桁行3間の南北棟の建物と推定される。しかし、4個のピットを欠いており、ピットの平面形態等に差が大きく、若干の疑問が残る。梁行は約410cm、桁行は約640cm、柱間寸法は明らかでない。

北辺は溝－2で削平されており、東辺のピットは建物－3・4のピットと切り合っており、建物－3・4に後出する。ピット－20～23は、いずれも南北方向に長い形を呈する。建物の軸はN－7°－Eである。

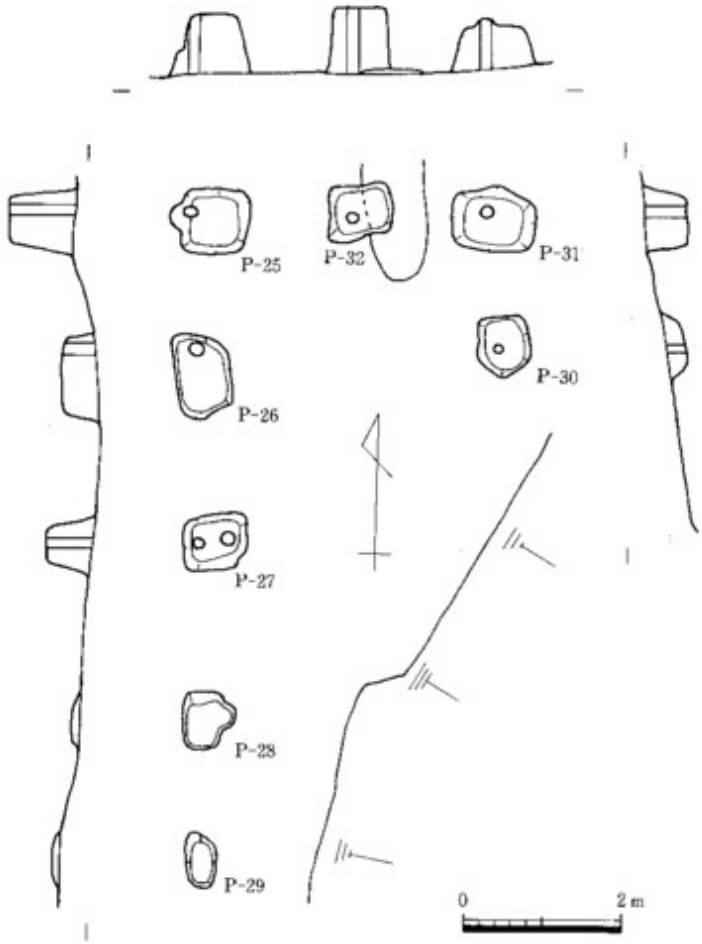
ピット－23掘方内から、土師器杯片（1）が出土している。内面に放射暗文、外面にヘラミガキを施し、7世紀第4四半期頃と思える。おそらく、建物－5は建物－3・4に引き続いて建てられたと考えられる。

建物－6

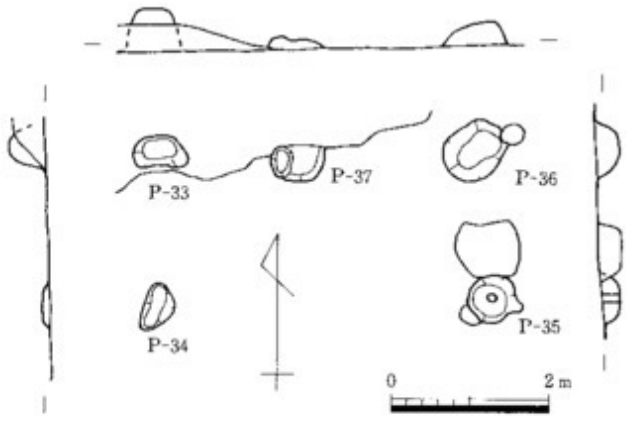
梁行2間、桁行4間以上の南北棟である。南西部は、後世の地すべりによって消滅している。梁行の柱間寸法は、約190cm等間隔、桁行の柱間寸法は、西辺で北から174cm、250cm、250cm、174cmと復元され、中央の2間の幅がやや広いようである。この数値から考えると、建物－6は、2間×4間の建物であったと考えられる。

ピットは、ほぼ方形平面をなし、1辺80cm前後、北辺のピットは良く遺存しているが、南半では削平が考えられる。柱の直径は15cm前後である。建物の軸は、N－3°－Wとなる。

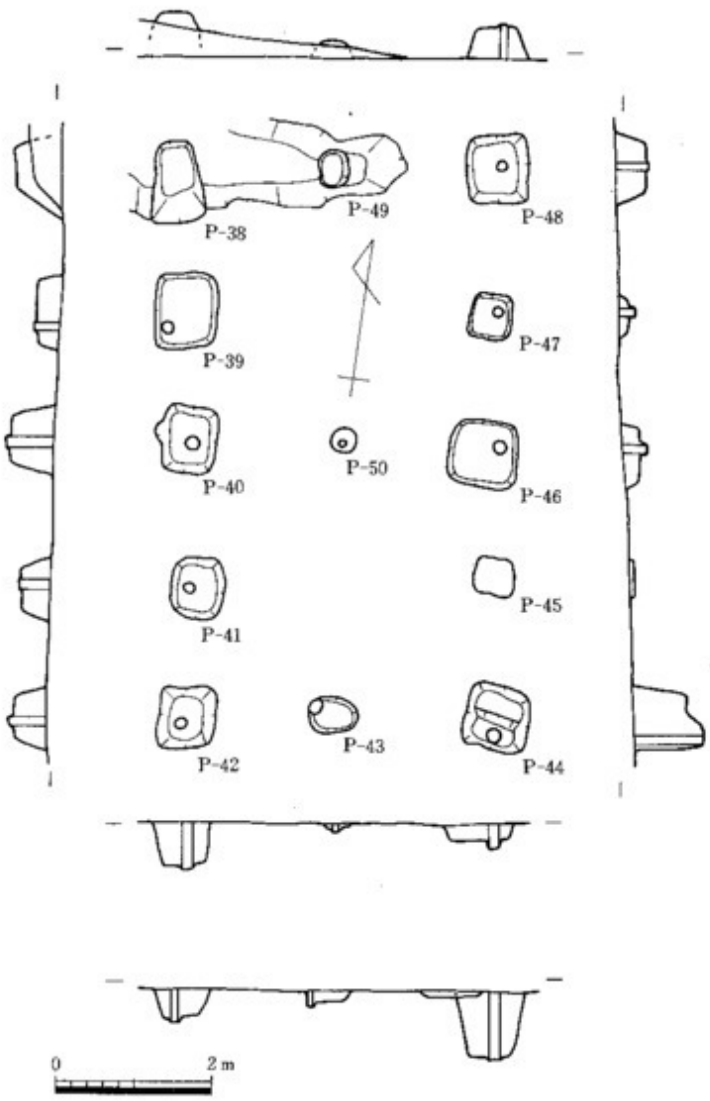
ピット－26～29は、第1次調査で柵列と推定していたものである。第1次調査の際に、ピット－27から須恵器杯蓋と土師器杯が出土している。(2)



図－9　建物－6（レベル高79.0m）



図－10　建物－7（レベル高79.0m）



図－11　建物－８（レベル高79.0m）

今回の調査でも、ピット－31から土師器杯（２）が出土している。いずれも７世紀第３四半期頃と考えられるがピット－31掘方内より、須恵器杯蓋の扁平なつまみ部分が出土しており、７世紀第４四半期、もしくはそれに近い時期まで下る可能性もある。

建物－７

２間×１間以上の建物である。南半のピットは不明。ピットはいずれも不整円形をなし、直径60cm前後とやや小さい。深さも10～20cmを残すのみである。ピット－33・37は溝－２に切られている。建物の軸は、N－１°－W。

各ピット内から、土師器・須恵器片が出土しているが時期を明確にできる遺物は認められない。

建物－８

建物－８は、梁行２間、桁行４間の南北棟であり、中央に間仕切りのピットを伴う。ピットは方形平面を呈し、四隅と東辺、西辺の中央のピットは、やや大きくなる。これらのピットは１辺80cm前後、深さ30～90cmを測る。他のピットは１辺50cm前後、深さ８～40cmを測る。中央の小ピットは、直径30cmの円形、深さ約10cmである。柱間寸法は梁行200cm等間隔、桁行180cm等間隔となる。軸はN－８°－W。

図化できる遺物は出土していないが、ピット－39から、立ち上がり、高台を有しない小ぶりの杯身が出土、ピット－44から内面に弱いかえりを有する杯蓋が出土している。いずれも、掘方内からの出土であり、建物－８の時期は７世紀第３四半期頃と思える。

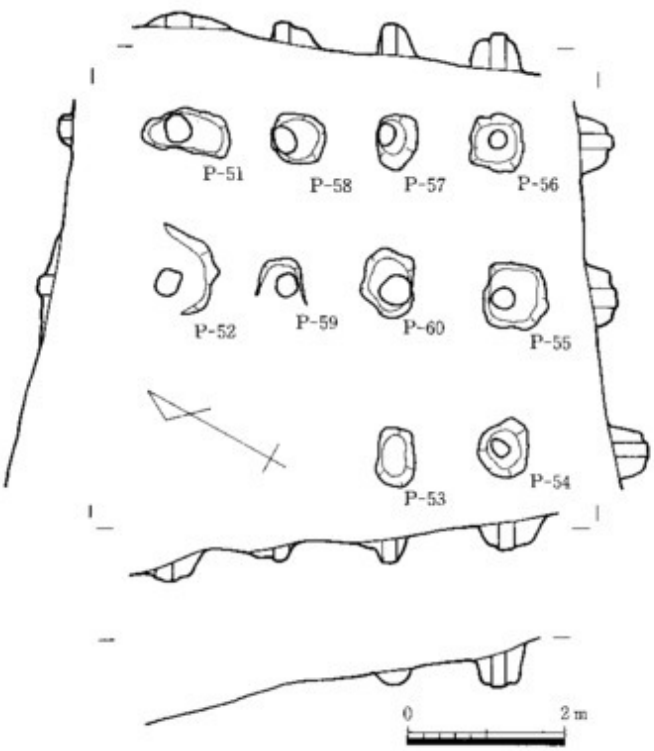
建物－1～8は、同一平坦面に営まれ、南、東側が急斜面となる。建物の軸は、いずれも南北にほぼ一致する。建物の方位、ピットの切り合い、掘方内から出土した遺物等から、西半の建物群は建物－2→建物－1→建物－3・4→建物－5の順が考えられる。東半の建物群は、建物－6が7世紀第3四半期、あるいは第4四半期と考えられ、建物－6と主軸をほぼ等しくする建物－7も同時期と考えられる。建物－6・7より、更に軸を西へ振っている建物－8は、7世紀第3四半期の遺物を伴い、西半の建物群の軸が次第に東へ振ってくることを考慮すると、建物－6・7に先行する可能性が強い。以上から、7世紀中葉から末葉にかけて、建物－2・8→建物－1・6・7→建物－3・4→建物－5と変遷したと推定される。建て替えの時期は10年前後と短く、東西に建物が分かれている前半期は、東西の建物の主軸がそれぞれ異なっていたようである。

建物－9

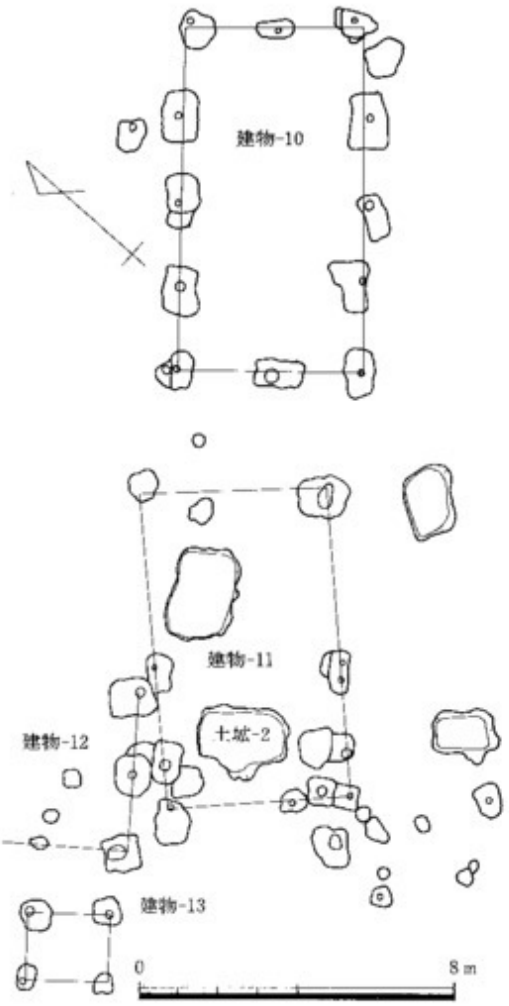
建物－9は、調査地北端に位置し、調査地の北西にみられる谷状地形の奥部にあたる。2間×3間の総柱の建物であり、倉庫と考えられる。北西の2個のピットは削平されており、他のピットも残存状態が悪い。ピットはほぼ方形平面を呈し、1辺60～80cm、柱の直径は30cm弱であり、掘方に比較して柱が太く、重量物を支えていたことがうかがえる。梁行は200cm等間隔、桁行は136cm等間隔である。主軸はN－29°－W。等高線に平行に建てられている。

建物－9周辺には、他に建物はみられず、北西に建物の軸と直交する溝－4・5がみられ、南東の斜面上にも、斜面に平行する溝－3がみられる。建物－9の立地を考えると、居住地と離れたやや奥部に倉庫のみが単独で建てられ、排水のために溝が築かれていたものと推定される。

ピット－56から土師器の小形甕の口縁部（3）が出土している。溝－4から、ほぼ同形態の甕が出土しており、7世紀第3四半期から第4四半期にかけての時期が考えられる。



図－12　建物－9（レベル高70.5m）



図－13　遺構平面図②

建物－10

建物－10～13は、標高68m前後の平坦地に営まれており、居住地は更に北西方向へ拡がっている可能性が考えられる。いずれも等高線にほぼ平行し、西側は約２mの落差を有して下段の建物群に至る。

建物－10は、２間×４間の建物で柱間寸法は、いずれも220cm前後の間隔を有する。ピットは、いずれも各辺の方向に長い縦長の平面形を呈する。ピットの掘方は、長辺ではほぼ垂直な壁面をなし、短辺では緩やかな傾斜面をなす。各ピットは深く、最も深いピット－71では約130cmの深さを有する。

他の建物に比して、ピットが深く、そのためかピットの短辺にステップ状のテラス面を有するものがある。各ピットの大きさは短辺60～80cm、長辺100～140cm。柱の直径は15～20cmである。軸は、N－48.5°－Eとなる。

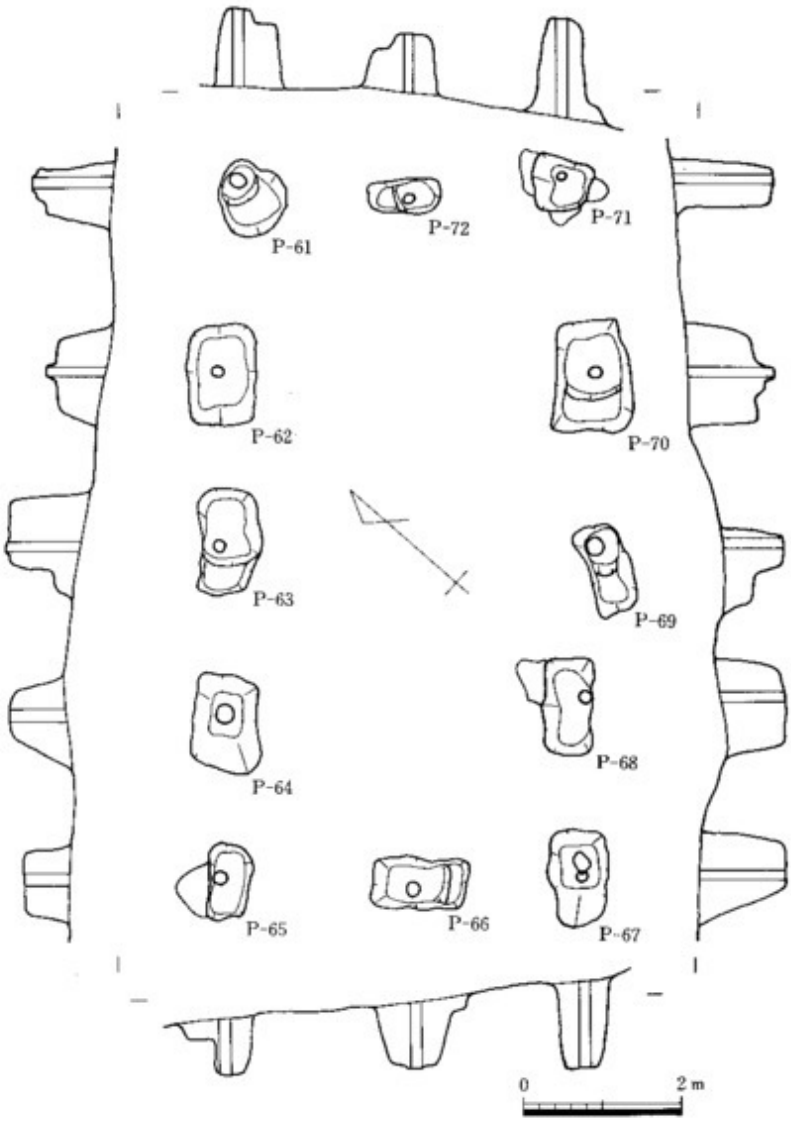
ピット－66から、須恵器杯身、土師器杯・甕（4､7～10）、ピット－67から須恵器杯蓋・杯身、土師器皿・甕（５・６・11・12）、ピット－70から土師器杯（13）が出土している。出土遺物の時期に若干の相異が認められるが、７世紀第４四半期頃と考えられる。

建物－11

３間×４間の建物かと推定されるが、不明な点が多い。ピット－75と76、ピット－78と79の間隔が約120cmと短く、ピット－77が建物－11に伴うかどうかもはっきりしない。また、各ピットの残存状態が比較的良好であるにもかかわらず、ピット－73と74、ピット－80と81、ピット－81と73の間にあるべきピットが確認できなかったことも疑問に残る。

各ピットは、規模・形状とも一様でない。建物の軸は、N－44.5°－Eである。

ピット－80から、高台を有する須恵器杯身片が１点出土しているが、他に時期を決定できる遺物は認められない。

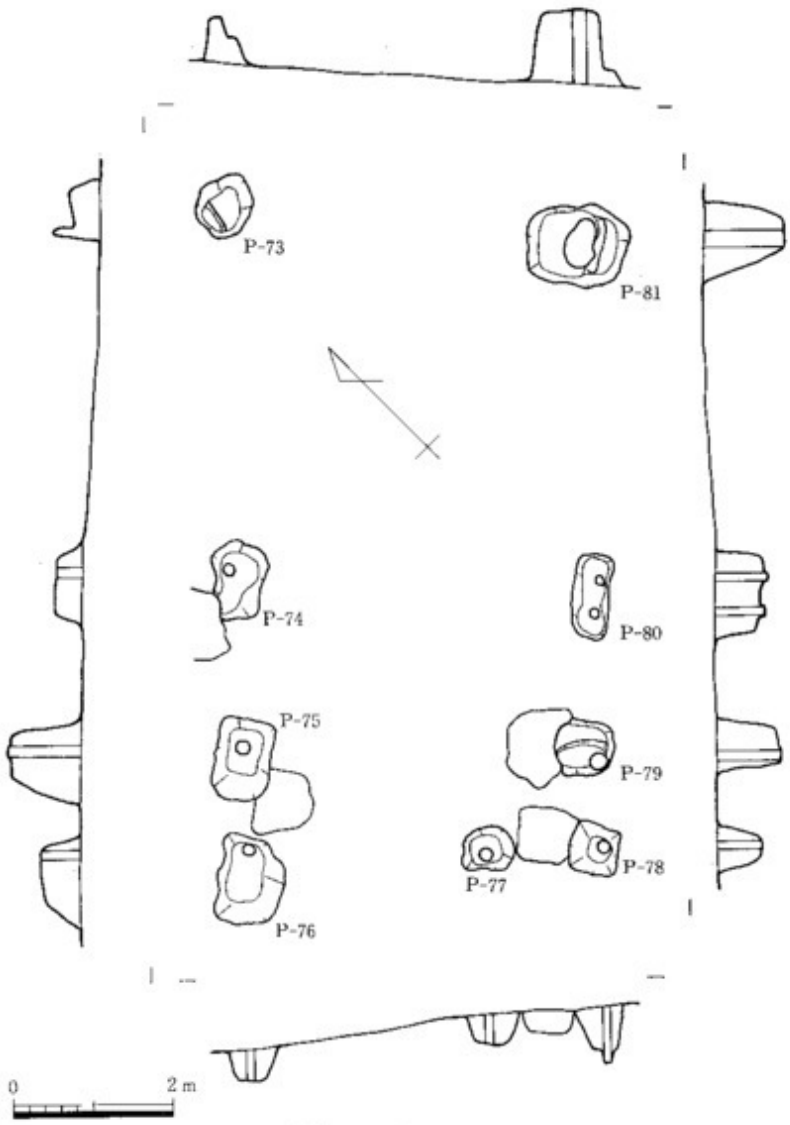


図－14　建物－10（レベル高68.0m）

建物－12

建物－10・11と同様に、北東から南西方向の建物と考えられるが、4個のピットを残すにすぎない。これは、北西側が若干削平されているためである。各ピット間の間隔は210cm。ピット－82はやや小さい。ピット－83～85は、いずれも方形平面を呈し、1辺90cm前後、深さは70cm前後を残す。主軸はN－51°－E。

ピット－84から、土師器羽釜（14）、ピット－85から土師器杯・甕（15～18）が出土している。7世紀第4四半期頃か。



図－15　建物－11（レベル高68.0m）

建物－13

建物－13は、１間×１間の建物と推定される。ピット－86と87、ピット－88と89の間隔は、約180cm、ピット－87と88、ピット－89と86の間隔は約200cmである。ピットは１辺60cm前後の方形平面を呈し、柱の直径は約20cmである。主軸は、N－50°－E。納屋状の建物と推定される。

遺物は、ピット－89から少量出土しているのみであり、時期を決定できる資料は認められない。

建物－12と13は、方位をほぼ同じくし、同時期と考えられる。建物－10も近い方位を示し、出土遺物からも、同時期である可能性が強い。建物－11は、建物－12との切り合い関係から、これら３棟の建物に後出するものと思える。

建物－14

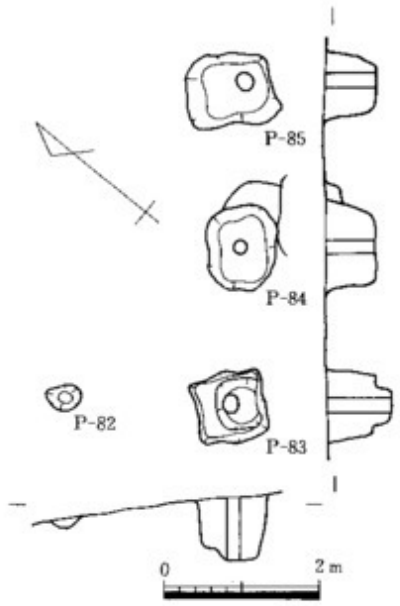
建物－14～20は、標高64～65mの平坦地に営まれており、平坦地南側は、約３mの高さの崖面となり、建物－21～32が位置する平坦面に至る。建物－14～20周辺には、非常に多くのピットが認められるが、削平が顕著なことと、調査地の西方へ更に建物群が拡がっていると予想されることから、建物の復元は困難であった。そのため、７棟の建物を復元できたにすぎず、実際には、倍近い数の建物が存在したものと思える。

建物－14は、今回の調査で唯一検出された竪穴住居である。隅丸方形平面を呈し、規模は350cm×264cm以上である。床面の周囲には、幅15cm、深さ５～10cmの溝が掘られている。壁面は、良好な部分で20cmの高さを残すにすぎない。また、各壁面に沿って、３辺に直径10～15cm、深さ５cm程度の小ピットが認められる。主柱穴が認められないことから、これらの小ピットに柱が立てられていたものと思える。後世の削平のために西辺が不明であるが、柱穴が異常に小さいことから考えると、簡単な上屋構造の住居であったと推定される。周囲の建物が、全て掘立柱建物であることから考えても、一般の住居と異なる性質の建物であったと推定される。

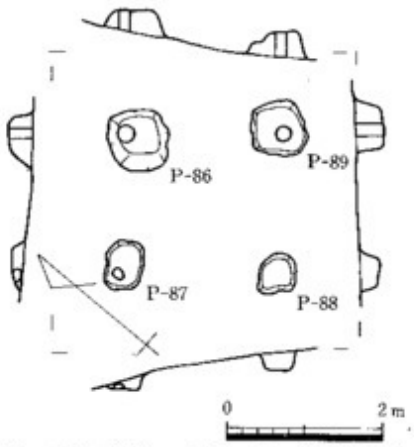
建物の軸は、N－59°－W。埋土内からは、遺物が出土しておらず、時期は不明。周辺には、軸を同じくする建物もみられない。

建物－15

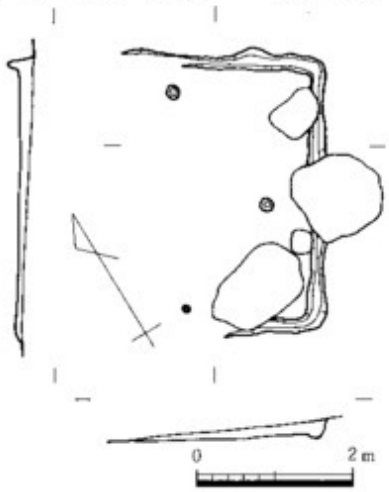
１間以上×１間以上の建物である。西方は調査範囲外へ続いているため、規模は不明である。柱間寸法は、ピット－90と91の間が144cm、ピット－91と92の間が184cmである。各ピットは、１辺約70cmの方形平面を呈し、ピット－90・92で確認された柱の直径は、約16cmである。建物の軸は、N－17°－W。ピット－91から土師器片が少量出土しているが、時期を決定できるものは、みられない。



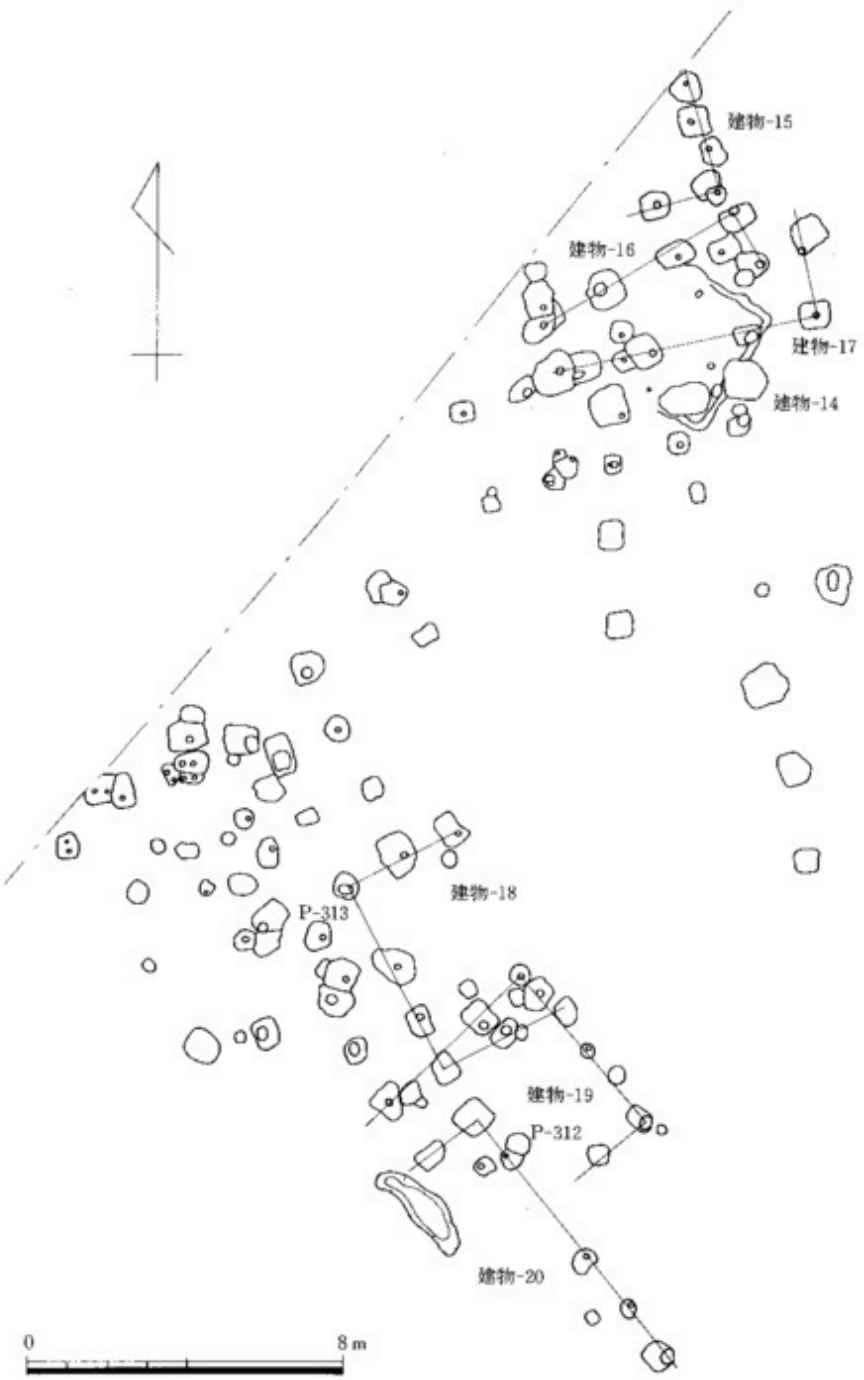
図－16　建物－12(レベル高67.0m)



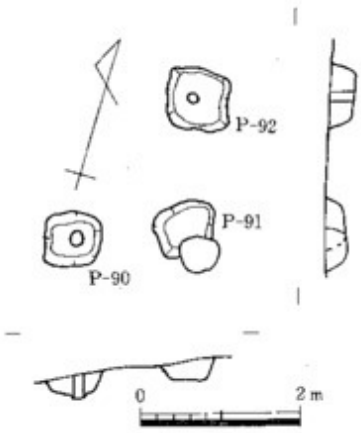
図－17　建物－13(レベル高67.0m)



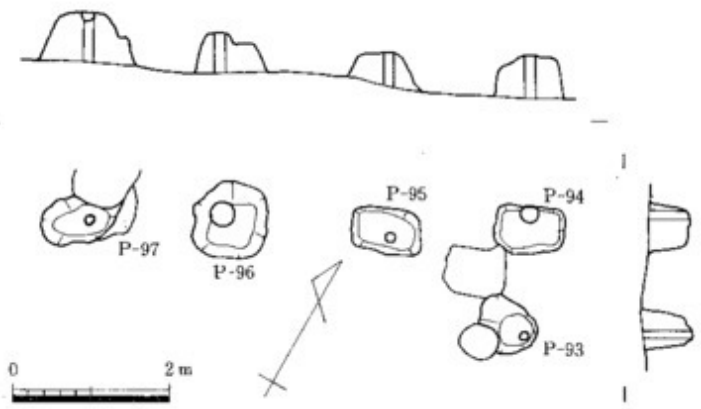
図－18　建物－14(レベル高65.0m)



図－19　遺構平面図③



図－20　建物－15
（レベル高65.0m）



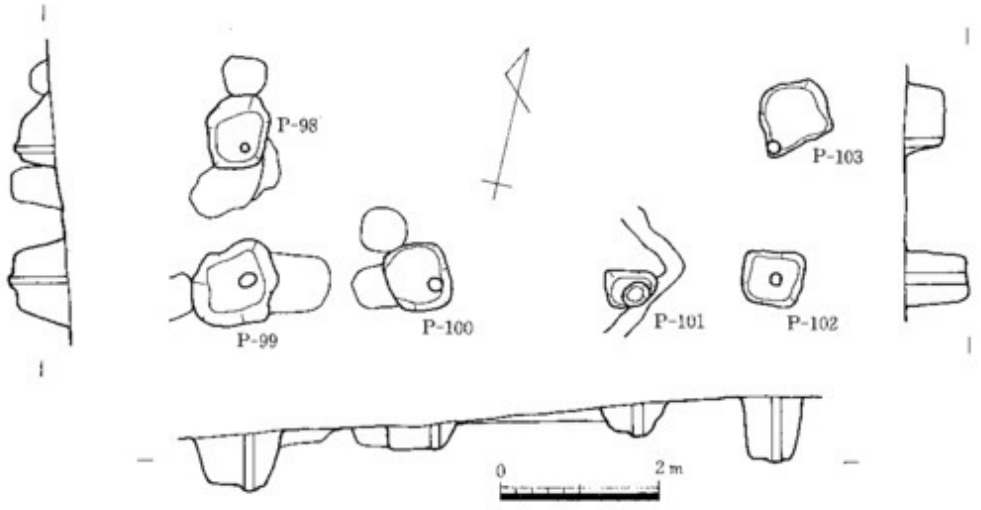
図－21　建物－16（レベル高65.0m）

建物－16

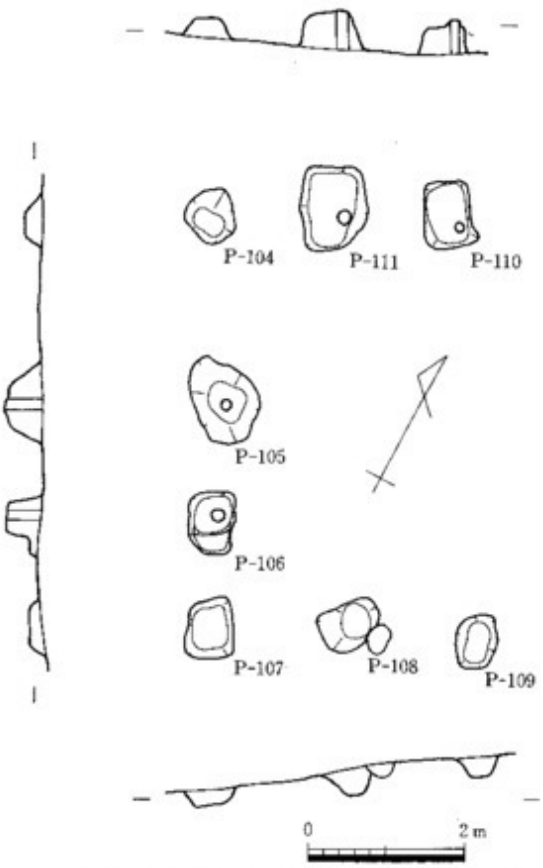
1間×3間以上の建物である。ピットは、隅丸方形、もしくは長方形平面を呈し、60cm×80cm前後の大きさである。各ピットは、50cm前後の深さを有するにもかかわらず、南半のピットは確認できなかった。主軸はN－60°－E。

ピット－97と建物－17のピット－98が切り合い関係にあり、建物－16が建物－17に先行することが確認できる。

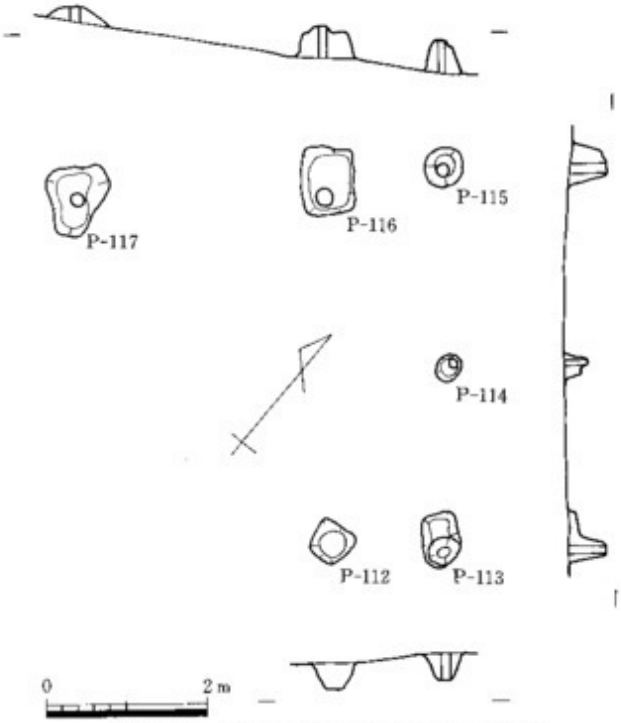
遺物は、ピット－93から少量の土師器片が出土しているのみであり、時期を決定できる資料はみられない。後述するように、建物－17も時期を決定できる遺物を伴っておらず、その時期は確認できなかった。



図－22　建物－17（レベル高64.0m）



図－23　建物－18（レベル高64.0m）



図－24　建物－19（レベル高64.0m）

建物－17

1間以上×3間の建物である。南北方向の柱間寸法は、172cm。東西方向は、3間で680cmであるが、柱間寸法は一定しない。ピットは、いずれも方形平面を呈し、大きさは60cm～100cmと一定しない。北半は、後世の削平がみられ、ピットを残さない。主軸は、N－78°－E。

各ピットから、土師器・須恵器片が出土しているが、時期を決定できるものはみられない。

建物－18

2間以上×3間の建物。東辺のピットは不明である。柱間寸法は一定せず、ピットの平面形態も均一性がみられない。主軸は、N－29°－W。

各ピットから、土師器・須恵器片が出土しているが、時期を特定できる遺物は認められない。

建物－19

2間×2間以上の建物であるが、規模は不明である。ピットは比較的小さく、平面形態も円形、方形のものがみられ、一定しない。建物の軸は、N－50°－E。

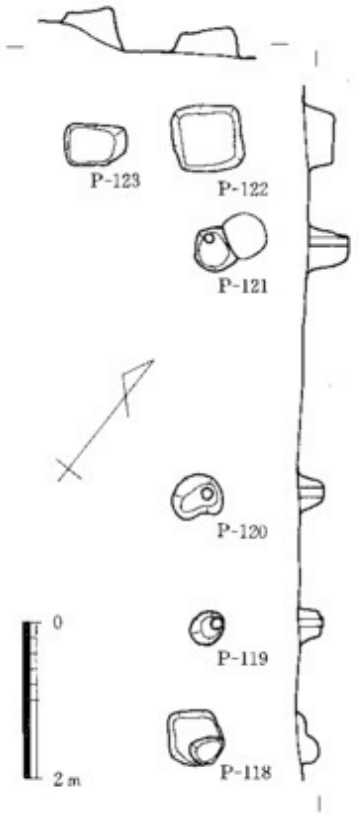
ピット－116から、立ち上がりを有しない杯身が出土しているが、他に時期を決定できる資料はみられない。7世紀第3四半期頃であろうか。

建物－20

1間以上×4間以上の建物である。南西部は崖面となり、ピットは遺存しない。ピット－118・122・123は方形平面を呈し、他は円形平面である。ピット－120と121の間にもピットが存在したと推定され、柱間寸法は、平均152cmとなる。主軸は、N－40°－W。

ピット－119から、土師器羽釜の口縁部（19）が出土しており、7世紀代と考えられるが、他に時期を決定できる遺物は認められない。

建物－14～20は、規模を復元できるものが全くみられず、方位からも、遺物からも前後関係を推定することは困難である。ピット内から出土したわずかな土器や、周囲の包含層から出土した土器を参考にすると、7世紀代の建物と推定されるが、7世紀でも後半期を中心とした時期であると思われる。建物の配置からは、最低4時期の建て替えが認められ、10～20年の間隔で建て替えられたと推定されるが、詳細は不明である。



図－25　建物－20（レベル高64.0m）

建物－21

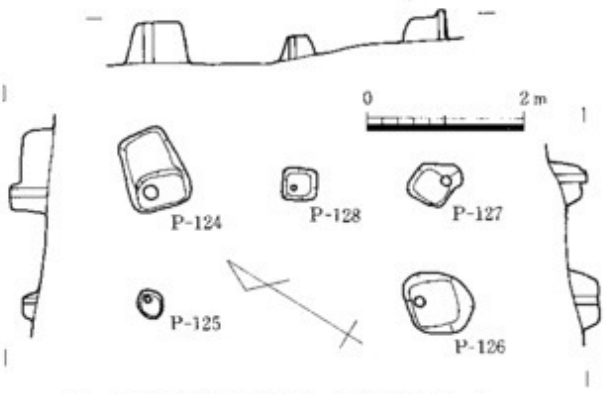
建物－21～32、柵－1・2、井戸－1は、同一平坦面に営まれている。標高は56～60m。建物は、地形に沿った方向に建てられている。建物－24～32、および柵－1・2は整然とした配置をなし、遺跡内で最も重要な建物群であったと推定される。建物群の南西には、浅い谷がみられ、遺物包含層が認められた。

建物－21は、2間×1間以上の建物である。ピット－124は、やや大きいが、他のピットは、いずれも小規模である。柱の直径も10cm前後と小さい。ピット－127と128、128と124の間は、180cm間隔、ピット－124と125、126と127の間隔は140cmである。

建物の軸は、N－60°－E。

ピット－126・127から、少量の須恵器・土師器片が出土しているが、時期は不明。

周囲には、他に建物は認められないが削平されている可能性も考えられる。



図－26　建物－21（レベル高60.0m）

建物－22

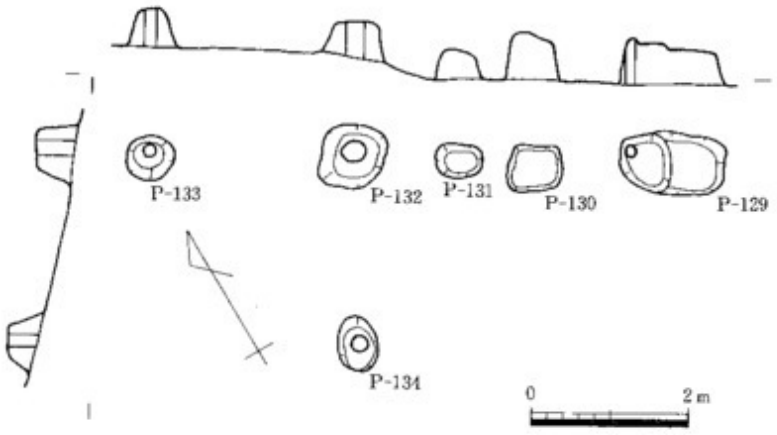
ピット－129から133が一列に並び、その南側は、後世の削平によって１m以上の落差が認められる。その斜面でピット－134を確認したが、これらのピットが、どのように建物を構成するのかは、明らかにできなかった。主軸は、N－60°－W。

各ピットから遺物が出土しているが、時期を明確にできるものは認められない。

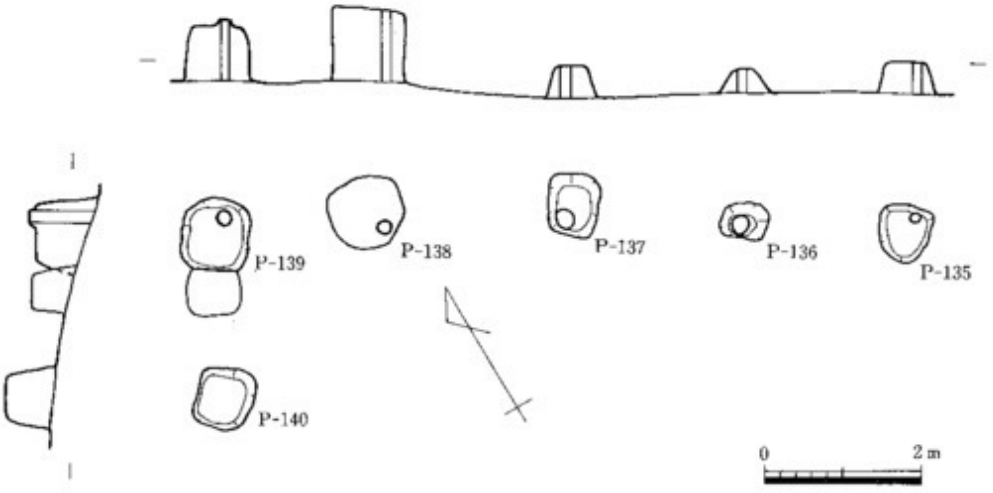
建物－23

１間以上×４間以上の建物であるが、やはり、南半が削平されているため、規模は不明である。柱間寸法は、いずれも220cm前後となり、ピットは隅丸方形状をなす。柱の直径は、15～20cm。建物の軸は、N－60°－Wで、建物－22に一致するが、切り合い関係は明確にできなかった。

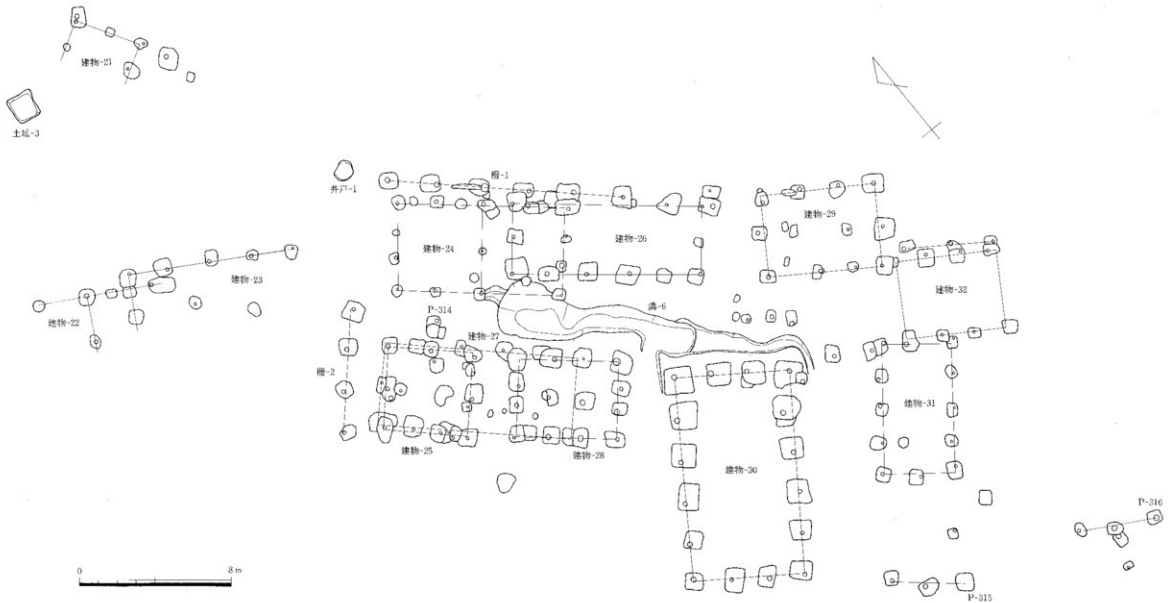
ピット－138から、低い立ち上がりを有する須恵器杯身が１点出土しているが、１点のみの出土であり、時期決定は困難である。



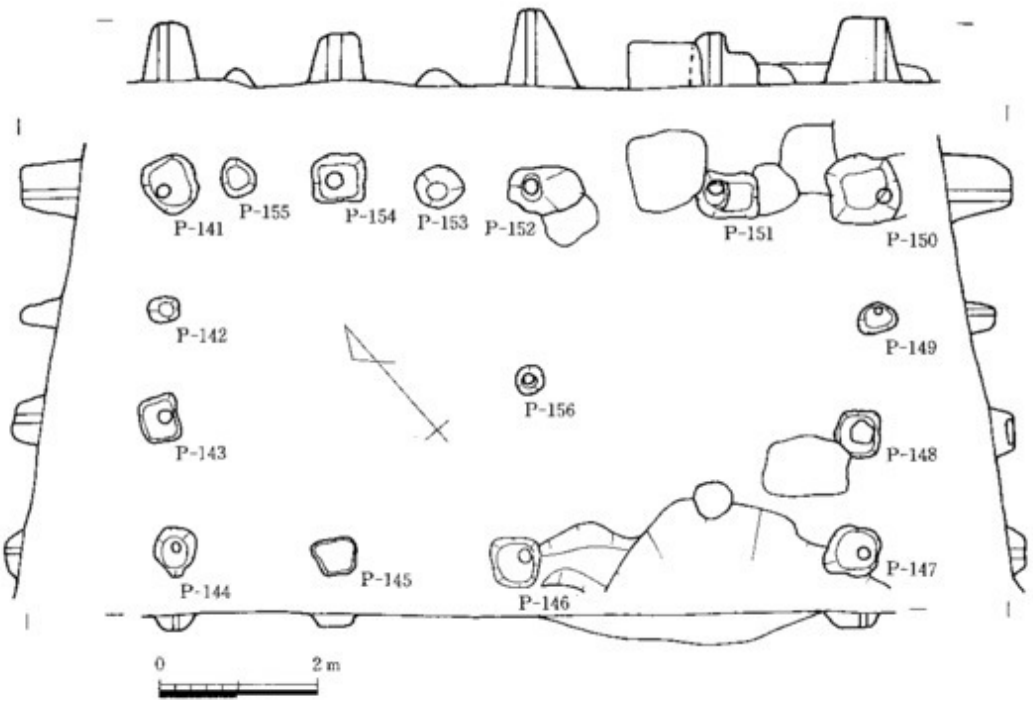
図－27　建物－22（レベル高58.0m）



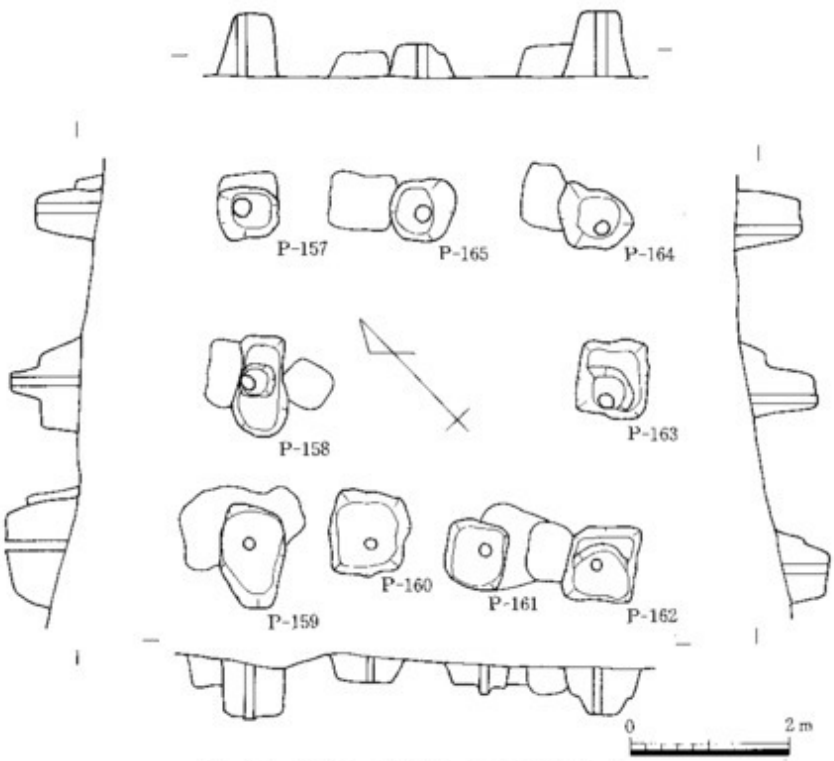
図－28　建物－23（レベル高58.0m）


建物-21
土坑-3
井戸-1
柵-1
建物-24
建物-26
建物-29
建物-32
建物-23
建物-22
P-314
溝-6
建物-27
柵-2
建物-31
建物-25
建物-28
建物-30
P-316
P-315
0
8m

図－29　遺構平面図④



図－30　建物－24（レベル高58.0m）

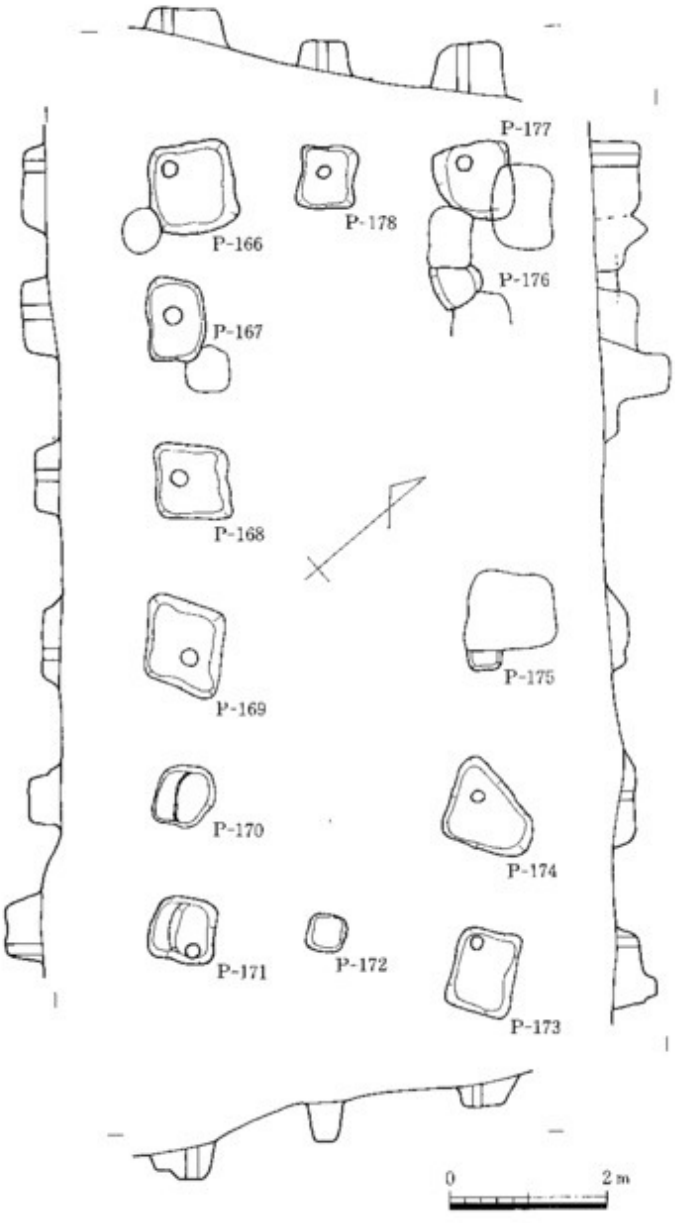


図－31　建物－25（レベル高57.0m）

建物－24

梁行３間、桁行４間の建物かと推定されるが、北辺の柱間に、ピット－153・155がみられる。南辺は溝－６に切られて、ピットが１個消滅している。各ピットは隅丸方形状を呈し、１辺40～90cmの規模である。中央には、小円形のピット－156が認められ、間仕切り、もしくは、棟持ち柱と思われる。梁行柱間寸法は平均153cm、桁行柱間寸法は平均223cm、建物の規模は460cm×892cmとなる。主軸は、Ｎ－50°－Ｗ。

ピット－146から須恵器杯身（20）が出土し、ピット－150から須恵器杯蓋（21）が出土している。両者に若干の時期差が認められるが、いずれも掘方内からの出土であり、新しい須恵器杯蓋（21）が、この建物の時期を示していると考えられ、７世紀第４四半期頃の時期に比定できると思われる。



図－32　建物－26（レベル高58.0m）

建物－25

２間×２間、もしくは２間×３間の建物と考えられる。ピット－160は、建物－27のピットと考えられるため、建物－25に伴うものではないかもしれないが、そのように考えた場合、ピット－161の位置が不自然になり、検討の余地がある。建物の規模は440cm×454cm。ピットは、ほぼ方形平面を呈する。柱の直径は、15～20cm。主軸は、Ｎ－42°－Ｗ。

各ピットは、複雑な切り合い関係がみられ、建物－25は、建物－27に後出する。ピットの残存状態は、比較的良好である。

ピット－158から土師器小形高杯（22）、ピット－163から須恵器杯身（23・24）が出土している。また、ピット－158からは、短い立ち上がりを有する須恵器杯身片も出土している。時期は、7世紀第2四半期頃であろう。

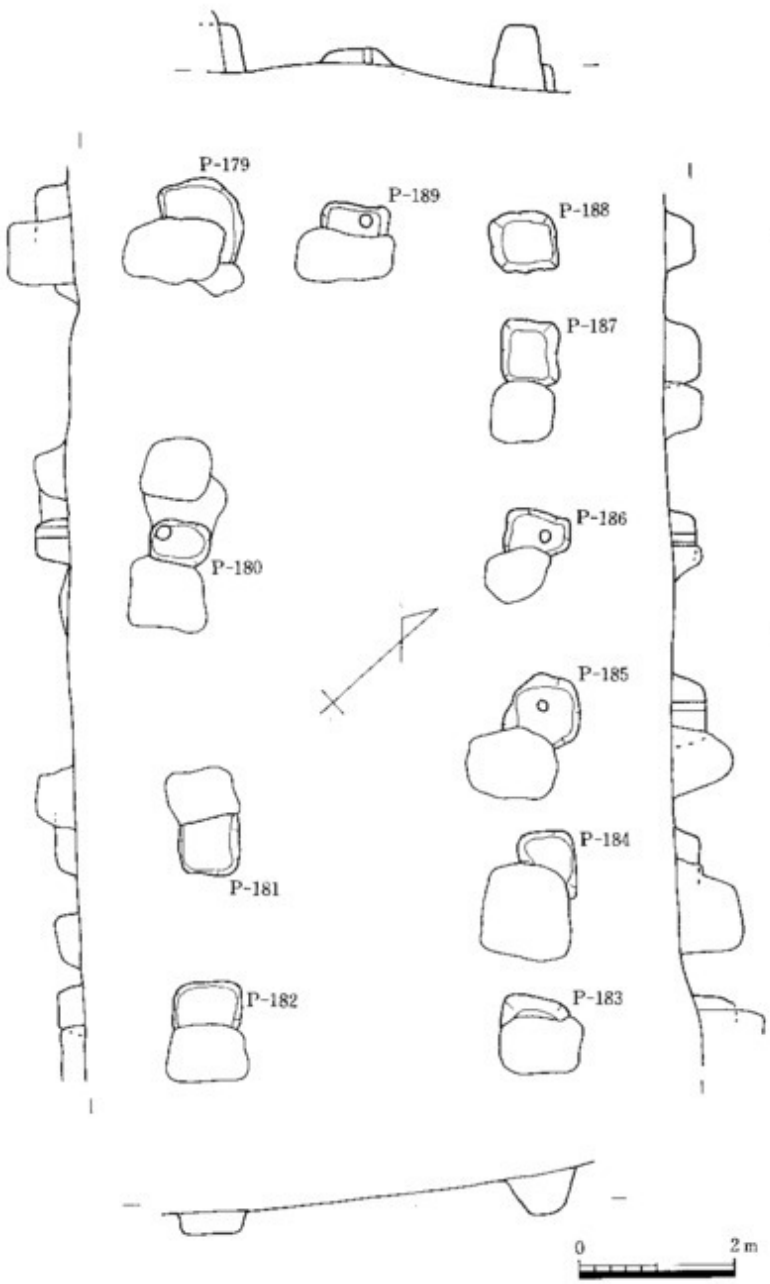
建物－26

梁行2間、桁行5間の建物である。規模は、368cm×1000cm。梁行柱間寸法は184cm、桁行柱間寸法は200cmとなる。ピットは、いずれも方形平面を呈し、一辺80～100cm。梁行中央のピットは小さい。深さは40cm前後を残すのみで、残存状態は、良好ではない。主軸は、N－50°－W。

遺物は、土師器・須恵器片の出土をみるが、時期を決定できるものは認められない。しかし、ピットの切り合い関係から、建物－24、および柵－1より新しいことがわかる。

建物－27

梁行2間、桁行5間の建物と推定される。梁行は、柱間寸法が、216cm間隔の432cm、桁行は、柱間寸法が200cm間隔の1000cmとなる。ピットは、いずれも方形平面を呈し、一辺80cm前後の大きさである。建物の軸は、N－48°－Wである。ピットの残存状態は、良好ではない。



図－33　建物－27（レベル高57.0m）

ピット－183掘方内から、須恵器杯蓋（25）が出土している。時期を示す遺物は1点のみであるが、全体の約80%を残す杯蓋であり、ほぼ建物－27の時期を示すと考えられる。7世紀第2四半期頃であろう。また、ピットの切り合い関係から、建物－25・28に先行する建物であることがわかる。

建物－28

3間×3間の建物である。規模は420cm×532cm。柱間寸法は、梁行140cm等間隔、桁行177cm等間隔である。中央に束柱と思えるピット－202・203がみられ、倉庫と考えられる。ピットは、いずれも方形平面を呈し、柱の直径は20cm前後である。主軸は、N－50°－W。ピットの切り合い関係から、建物－27に後出する。

ピット－190から、立ち上がりを有する須恵器杯身（26）、ピット－197・199から、立ち上がりの消失した須恵器杯身（27・28）が出土している。他に、ピット－193から、蓋内面に鈍いかえりを有する須恵器杯蓋片が出土しており、7世紀の第2四半期と考えられるが、第3四半期まで下る可能性がある。

建物－29

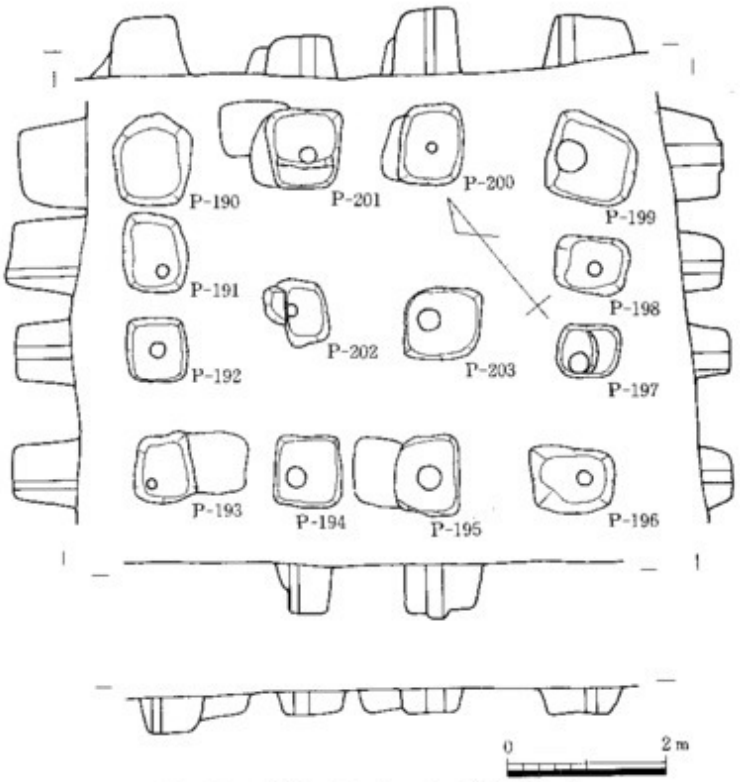
梁行2間、桁行3間の建物である。建物の規模は、440cm×620cm。柱の通りが、ややずれるが、梁行柱間寸法は平均220cm、桁行柱間寸法は平均207cmとなる。各ピットは、隅丸方形平面を呈し、一辺60～100cm、深さは10～80cmを残す。柱の直径は、20cm前後であろう。建物の軸は、N－58°－W。

ピット内からの出土遺物は少なく、時期は不明である。

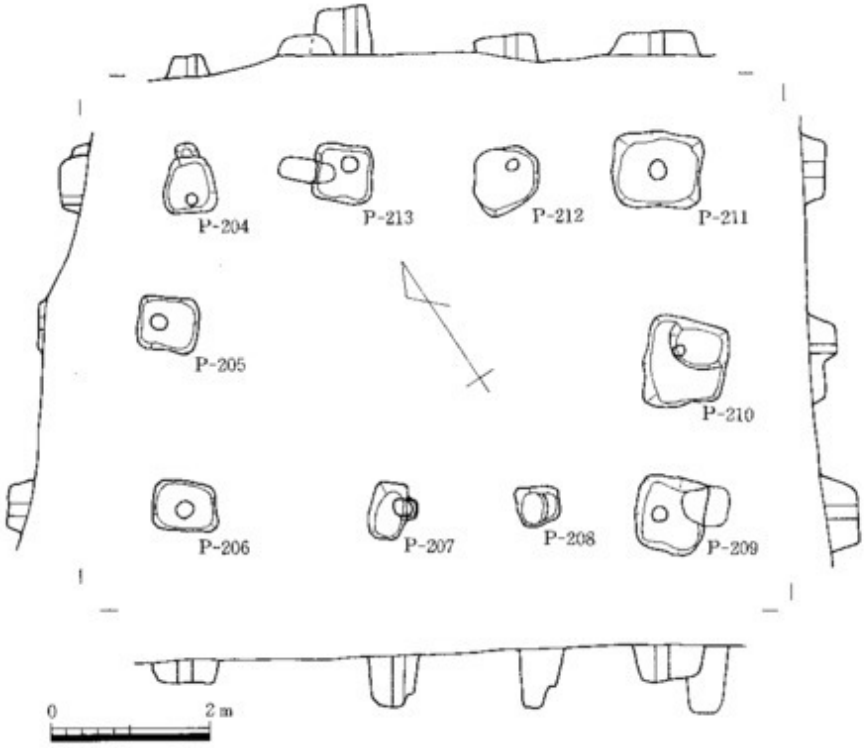
建物－30

建物－30は、遺跡内で最大の掘立柱建物である。梁行は3間、600cm、桁行は5間、1088cmである。梁行柱間寸法は200cm等間隔、桁行柱間寸法は、やや異なるものの、218cm間隔と復元できる。各ピットは、ほぼ方形平面を呈し、ピット－214～216は、四隅が直角をなす。ピットの一辺は、80～140cmを測る。南半のピットは、上半部の削平が考えられるため、北半のピットを中心に考えると、ピットの一辺は平均120cm前後となる。深さは、最も深いピット－228で128cm、最も浅いピット－218で20cmを測る。柱の直径は25cm前後と考えられる。建物の軸は、N－34°－E。

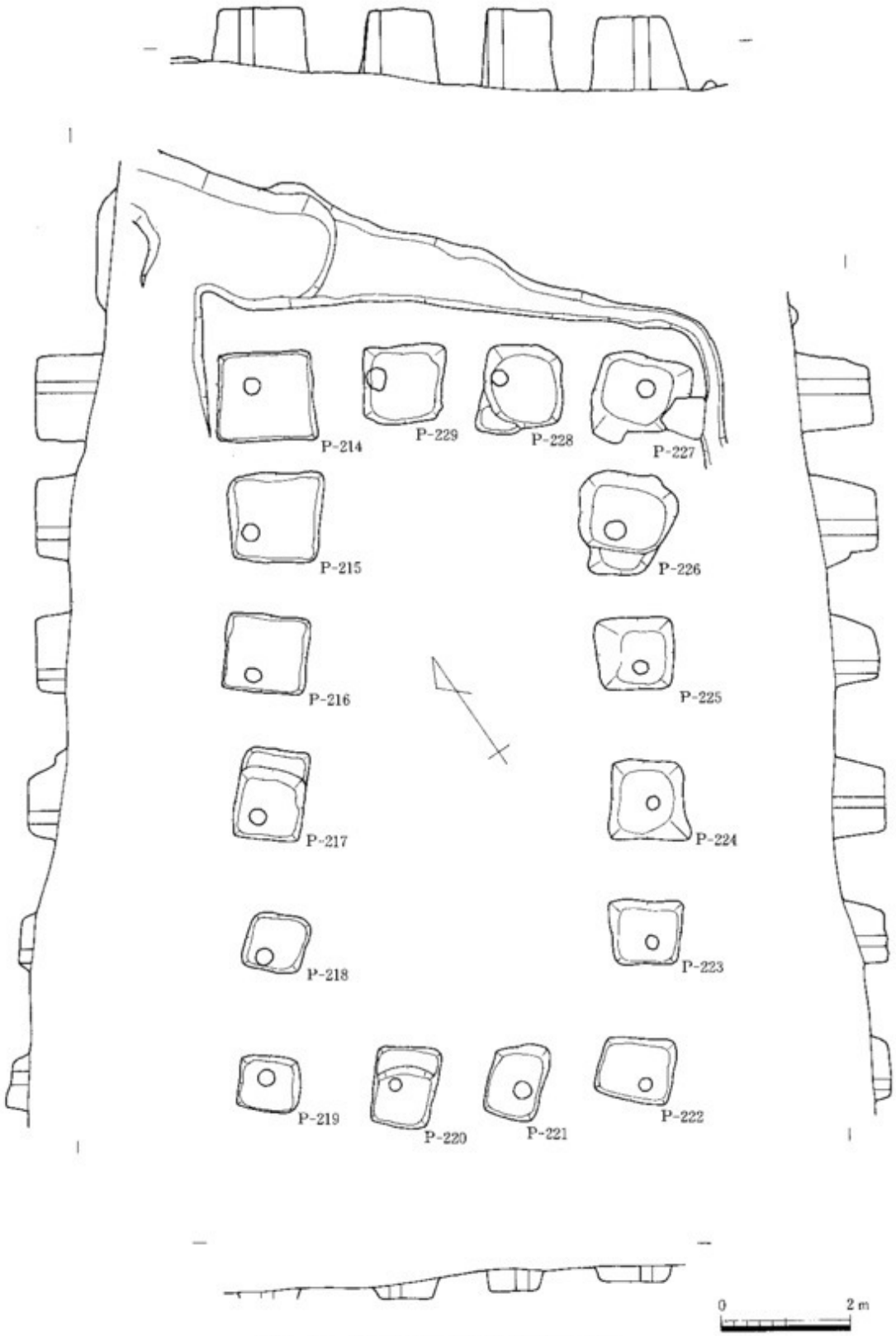
現在の地形は、後世の削平によって、南西へ緩やかに傾斜しているが、ピット底面の高さが、南西部のものほど低くなっており、原地形も、緩やかな南西向きの傾斜をなしていたと推定される。また、北から南へ続く溝－6が、建物－30を囲むようにめぐっている。後世の削平を考慮すると、建物－30の桁方向に沿って、更に南へ延びていたものと考えられ、北側からの雨水を排水するための溝であったと推定される。建物－30のピットは、残存状態が良好であったにもかかわらず、遺物の出土量は少なく、時期を決定できるような遺物は、認められなかった。



図－34　建物－28（レベル高57.0m）



図－35　建物－29（レベル高59.0m）



図－36　建物－30（レベル高57.0m）

建物－31

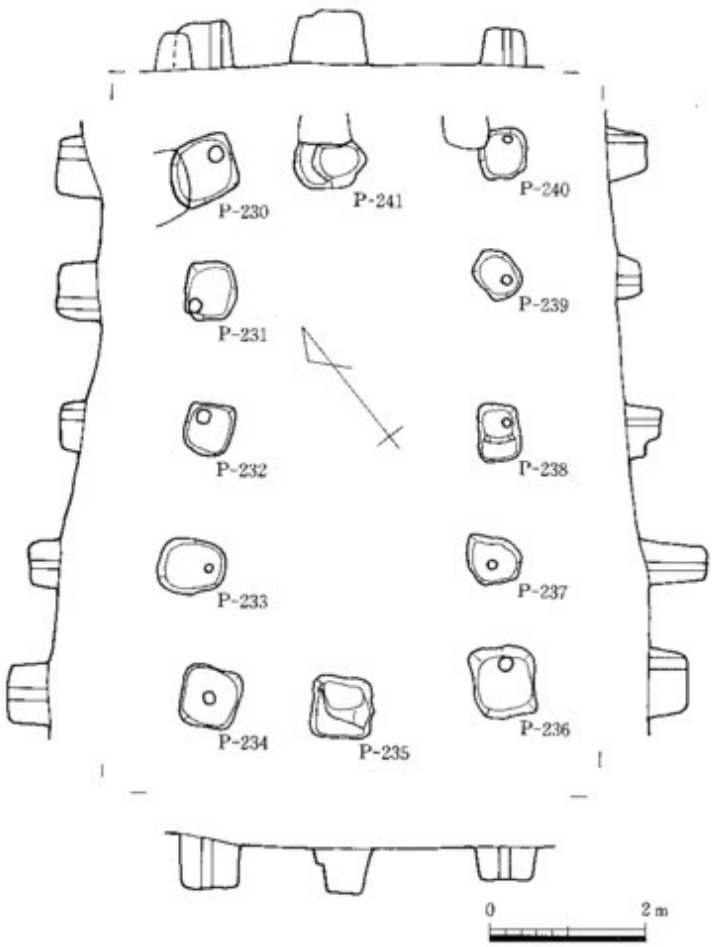
梁行２間、桁行４間の建物である。梁行は188cm間隔の376cm、桁行は174cm間隔の696cmを測る。各ピットは、隅丸方形状を呈し、辺を建物の軸に合わせている。ピットの一辺長は、60～90cm、深さは30～90cmを残す。柱の直径は15cm前後である。建物の軸は、N－38°－E。

各ピットから、土師器・須恵器片が出土しているが、時期を明らかにできるものは、みられなかった。

建物－32

梁行１間以上、桁行３間の建物と考えられる。ピット－242と243、246と247の間には、ピットが確認できなかったが、梁行が408cmの長さであることから、中間に、１個ずつのピットが存在したものと推定される。おそらく、梁行は、204cm間隔の２間であろう。桁行は、173cm等間隔の519cmである。ピットは、ほぼ方形平面を呈し、１辺長60～80cmである。ピット－243、248、249の底面は二段に掘り込まれており、ピット－244の底面には礫が充填され、ピット－245の底面には扁平な石が置かれている。これらは、ピットを掘り込んだ後、柱の高さを調節するために施されたものと考えられる。主軸はN－61°－W。

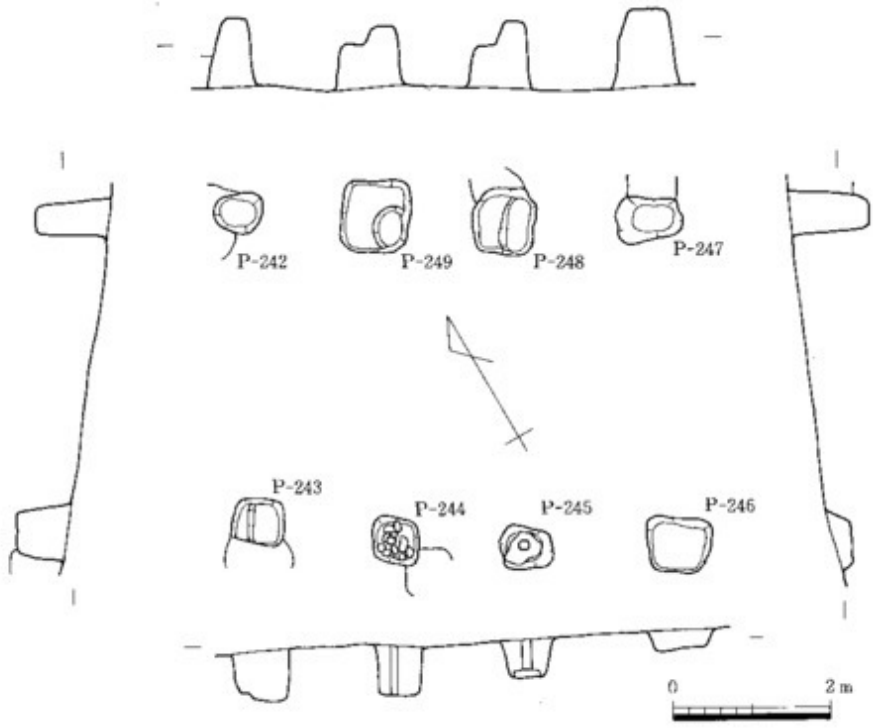
各ピットからは、土師器・須恵器片が出土しているものの、時期を決定できる資料はみられない。しかし、ピット－242が建物－29のピット－209と切り合い、ピット－243、244がそれぞれ建物－31のピット－241、240と切り合っており、いずれも、建物－32のピットのほうが新しい。この事実から、建物－32が、建物－29・31に後出することがわかる。



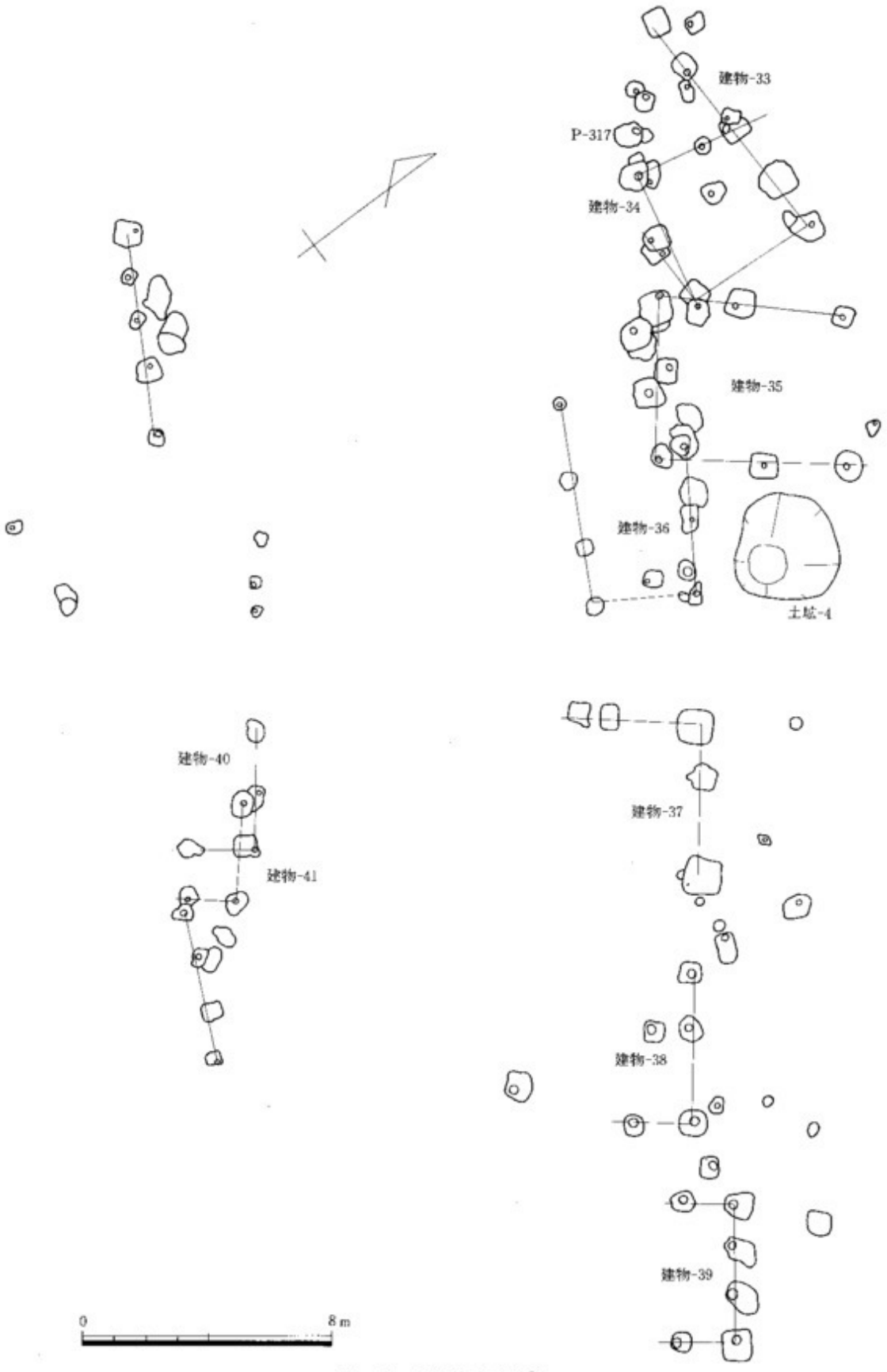
図－37　建物－31（レベル高58.0m）

建物－21から32は、同一平坦面に営まれており、各ピット内からの出土遺物、建物の軸等を参考に、建物の変遷を考えると、以下のようになる。まず、建物－23が最初に建てられたと考えられ、7世紀代でも早い時期であろう。建物－23と方位が一致する建物－22も、その前後の時期であろう。次に、東へ移り、建物－29・30が建てられたと推定される。いずれも、時期が不明であるが、建物－30の周囲をめぐる溝－6から出土しているかえりを有しない須恵器杯蓋（図68－7）が、建物－30の時期と考えてよいと思われる。そして、7世紀第2四半期に至って、建物－27が建てられるが、建物－27は間もなく廃絶され、建物－25に建て替えられる。建物－25と軸を同一にする柵－1・2も同時期と考えられる。それ以後、7世紀後半代には、柵－1・2によって画された区画内に、建物－28、建物－24、建物－26が順次建てられている。井戸－1も、この時期である。この間に、建物－30は、他の建物と異なり、切り合い関係が認められないことから、建物－27や25が建てられる時期まで存続していた可能性が考えられる。また、建物－26が建てられる以前に柵－1は廃絶されている。

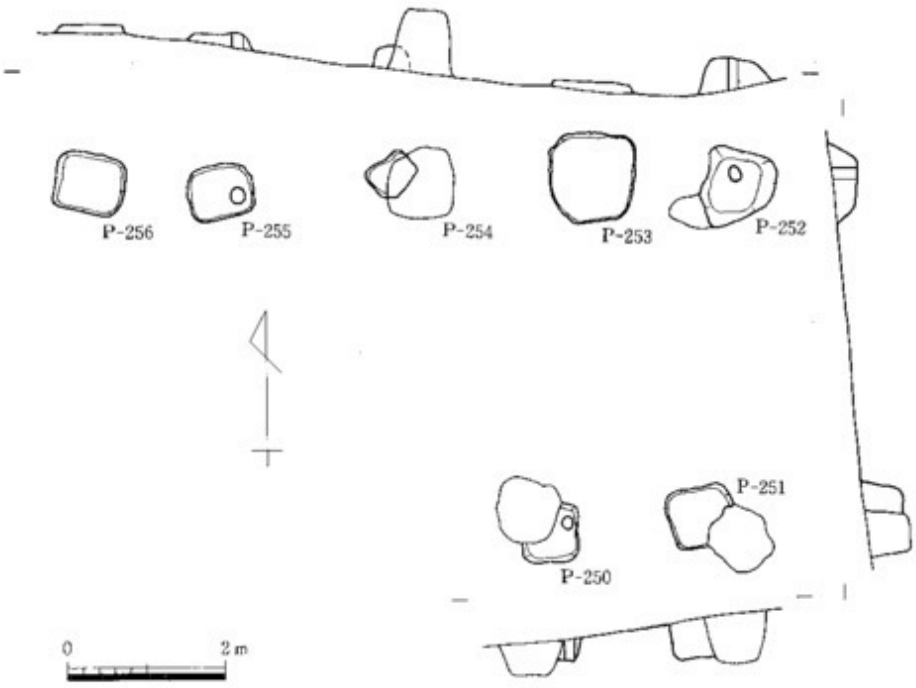
建物－31は、時期不明であり、軸からは、建物－24～28のいずれと併存しても不思議はない。また、建物－31の位置が東へ離れていることを考えれば、建物－26廃絶後の建物と考えることもできる。建物－32は、建物－31に後出し、他の建物と軸が異なることから、最も新しい建物になる可能性がある。建物－21は、軸が大きく異なり、不明であるが、建物－22・23に先行することも考えられる。このように、建物－21から32は、7世紀代全般にわたる建物群であろう。



図－38　建物－32（レベル高58.0m）



図－39　遺構平面図⑤



図－40　建物－33（レベル高51.0m）

建物－33

建物－33～39は、狭い平坦面に営まれ、残存状態は良好とは言えない。更に、斜面下に、建物－40・41を中心とするピット群がみられる。その南側は、農道を経て、鳥坂寺の僧房と推定される建物群に至る。建物－34～41は、いずれも、方位に関係なく、等高線に沿って建てられており、僧房等の建物が、南北方向に建てられている点と異なる。

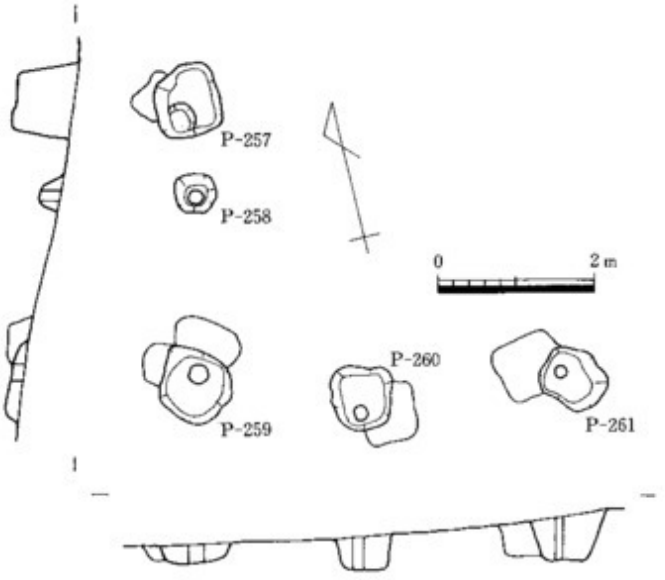
建物－33は、1間以上×4間以上の建物であり、7個のピットを残す。南西方向へ緩やかに削平されているため、他のピットは検出できなかった。梁行は420cmを測り、おそらく、中間にもピットが存在したものと思える。桁行は200cm間隔で800cm以上の規模となる。ピットの平面形態は、隅丸方形を基本としながらも変化に富み、大きさも一辺長60～100cmと一定しない。深さは、10～50cmを残すのみであり、残存状態は悪い。柱の直径は、15cm前後と推定される。建物の軸は、N－89°－Wとなり、ほぼ東西方向に一致する。

ピット－250・251・254は、建物－34のピット－260・261・257とそれぞれ切り合っており、建物－33が、建物－34に先行することが確認できる。

遺物は、ピット－252から放射二段暗文を施す土師器高杯（29）が出土し、ピット－253から立ち上がりを有する須恵器杯身（30）が出土しており、7世紀第1四半期頃の時期が考えられる。他のピットからも、土師器・須恵器片が少量出土している。

建物－34

1間以上×2間以上の建物であり、規模は不明。ピット－257と258は、どちらかが、建物－34に伴うと考えられるが、どちらとも決め難い。ピット－259～261も、間隔は208cm、252cmと一定しない。ピットの平面形態、規模も一定せず、周辺の削平が著しいことも考えあわせると、建物と断定することも難しいように思える。建物の軸は、N－77°－W。



図－41　建物－34（レベル高51.0m）

ピット－257と261から、低い立ち上がりを有する須恵器杯身片が出土している。ピットの切り合いからは、建物－33に後出することがわかるため、その時期は、7世紀第1四半期から第2四半期にかけての時期が考えられる。

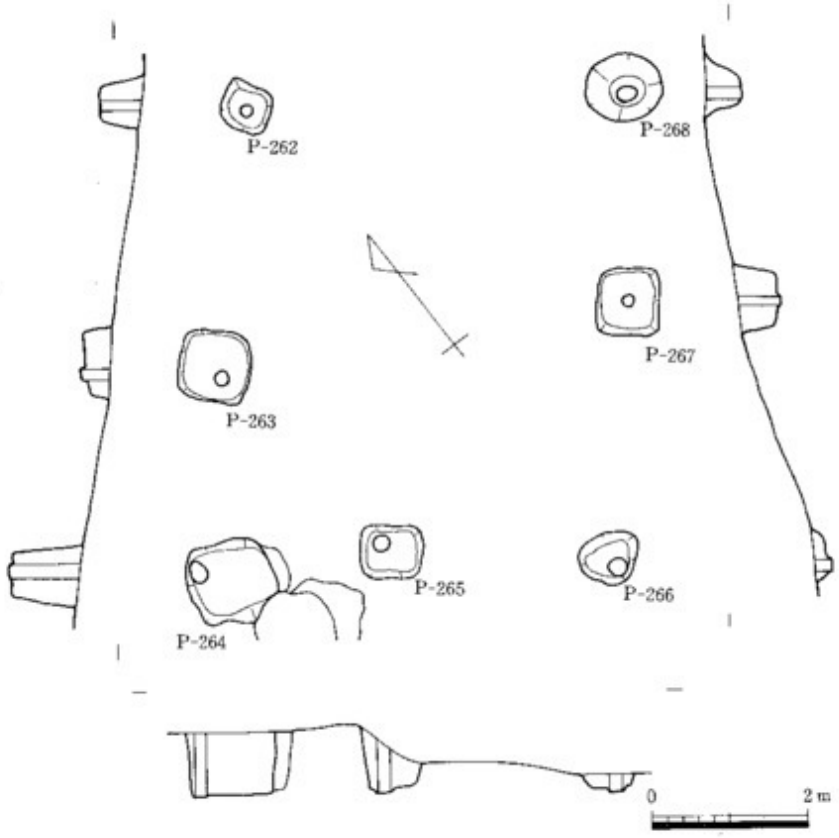
建物－35

梁行2間、桁行2間以上の建物である。梁行柱間寸法は、232cm、300cmとなり、桁行柱間寸法は、東辺で344cm、268cm、西辺で344cm、248cmと全く一定しない。東辺と西辺も平行しない。以上の状況からは、建物と考えることに無理があるようにも思えるが、周辺に対応するピットがみられないため、建物としておく。軸は、N－38°－E。

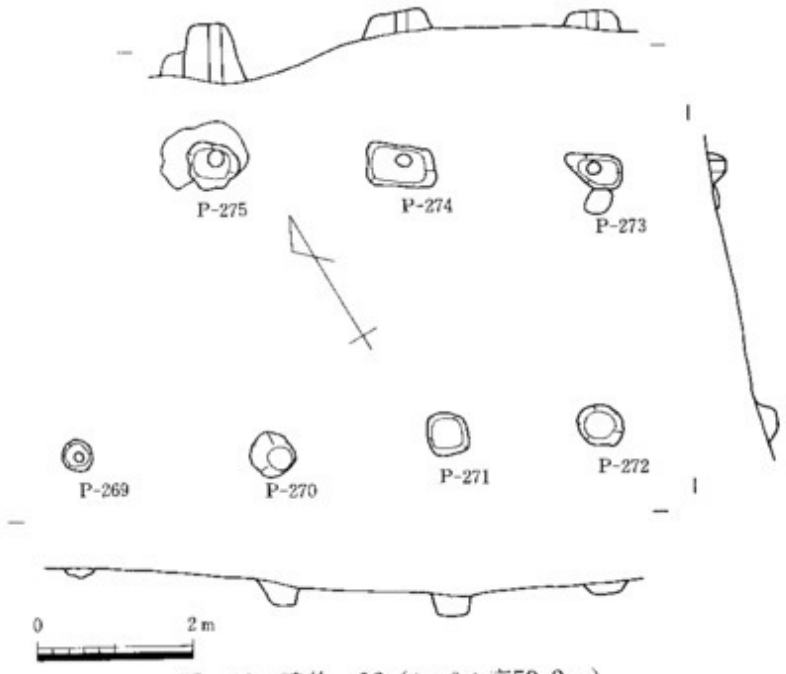
ピット－268から、土師器甕の口縁部（31）が出土しており、ピット－263から土師器竈の口縁部や鉄滓が出土している。竈の口縁部は小片であるが、口縁部に同心円叩きがみられ、柏原市域から出土する7世紀代の竈に、広く認められるものである。また、ピット－264、265の掘方内から焼土塊が多数出土している。焼土塊は、他の建物焼失後の建て替えによるためか、鉄滓の出土にみられるような鍛冶に伴うものか、あるいは、竈に伴うものか、さまざまな可能性が考えられるが、小塊であり、明らかにできなかった。他に、ピット－263から、低い立ち上がりを有する須恵器杯身片が出土しており、建物－33、34に近い時期が考えられる。

建物－36

梁行1間以上、桁行3間以上の建物である。規模は、332cm×660cm以上、桁行北辺の柱間寸法は、240cm間隔、南辺の柱間寸法は約220cm間隔となり、それぞれの柱の位置が少しずれている。ピットは、円形、もしくは方形で、40～60cmと小さい。柱の直径は15cm前後である。主軸は、N－59°－W。時期を確認できる遺物は、出土していない。



図－42　建物－35（レベル高51.0m）



図－43　建物－36（レベル高50.0m）

建物－37

228cm以上×500cm以上の建物である。ピット－277が伴うか否か、また、ピット－279と280のいずれが伴うのか不明である。南側への削平が著しいため、建物の規模を把握できない。ピット－276と278は、一辺100cm以上の隅丸方形を呈し、いずれも底面に礫が充塡されていた。他のピットは、やや小さく、いずれも10～20cmの深さを残すにすぎない。建物の軸は、N－51°－W。

ピット内からは、土師器・須恵器の小片が出土しているが、時期を決定できる遺物は認められなかった。

建物－38

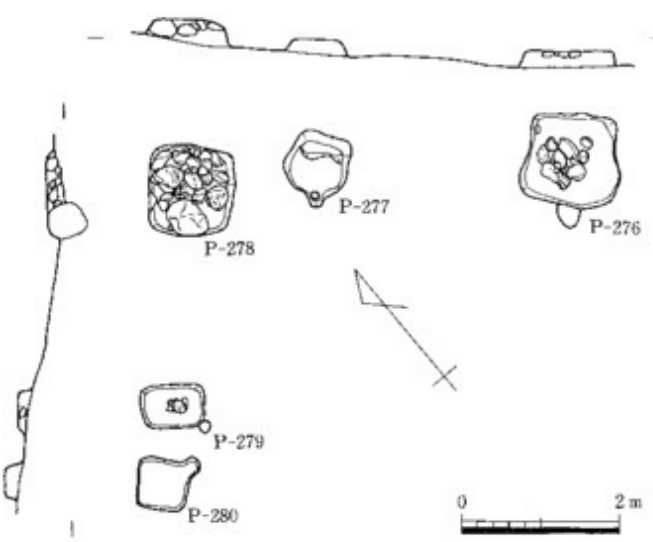
1間以上×2間以上の建物である。規模は、200cm以上×488cm以上となる。ピット－282から284の間隔は、308cm、180cmとなり、不揃いである。ピットは、円形に近い隅丸方形を呈し、一辺80cm～100cm。柱の直径は、25cm前後である。建物の軸は、N－54°－W。

各ピットから遺物は出土しているが、時期を確定できるものは、みられない。

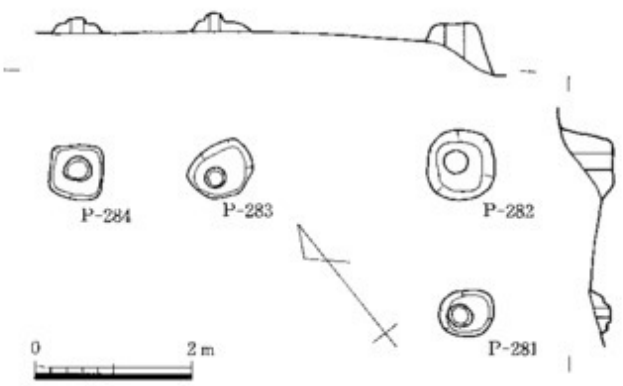
建物－39

1間以上×3間の建物である。ピット－285と286、289と290の柱間寸法は170cm、ピット－286～289の柱間寸法は150cm等間隔となる。この平坦面にみられる建物の中で、ピットの配列が整っている唯一の建物である。南西側が削平されているため、ピット－285・290の残存状態が悪く、それに続くピットは消滅している。ピットは隅丸方形平面を呈し、一辺100cm前後、柱の直径は30cm前後である。主軸はN－53°－W。

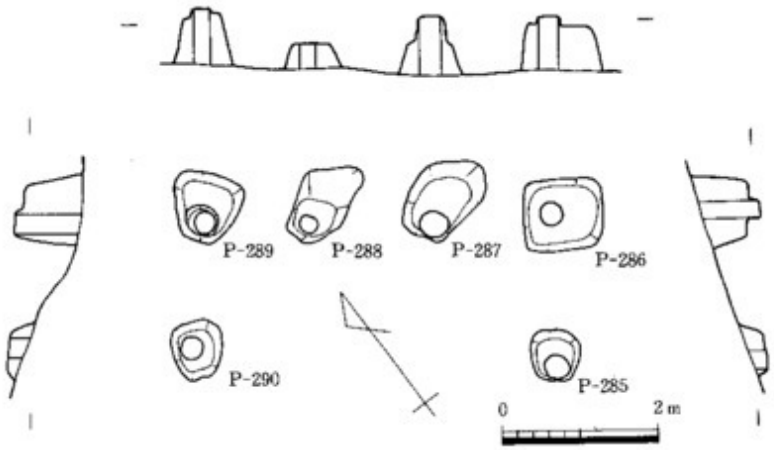
ピット－290から、須恵器平瓶の丸味をおびた体部が出土している。7世紀第2四半期頃か。



図－44　建物－37（レベル高50.0m）



図－45　建物－38（レベル高51.0m）



図－46　建物－39（レベル高51.0m）

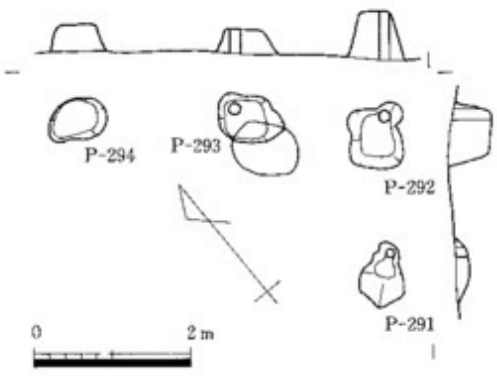
建物－40

1間以上×2間以上の建物。規模は、180cm以上×380cm以上となる。ピットの残存状態は悪く、深さは15～60cmを残す。柱の直径は、15cm前後である。主軸は、N－52°－W。時期を示す遺物の出土は認められない。

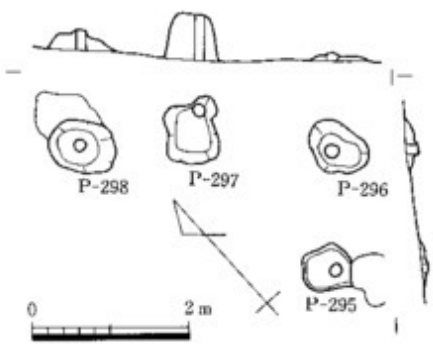
建物－41

1間以上×2間以上の建物。規模は、156cm以上×320cm以上。柱の直径は、15cm前後である。主軸は、N－49°－W。建物－40のピットと切り合い、建物－41のほうが新しい。ピット－295から、かえりを有する須恵器杯蓋片が出土しており、7世紀第2四半期、もしくは第3四半期と考えられる。

建物－33から41は、遺存状態が悪く、他にピットも多数みられるが、配列を明らかにできなかった。その時期は、6世紀末葉まで遡る可能性があり、7世紀前半代を中心にした時期が考えられる。



図－47　建物－40（レベル高46.0m）



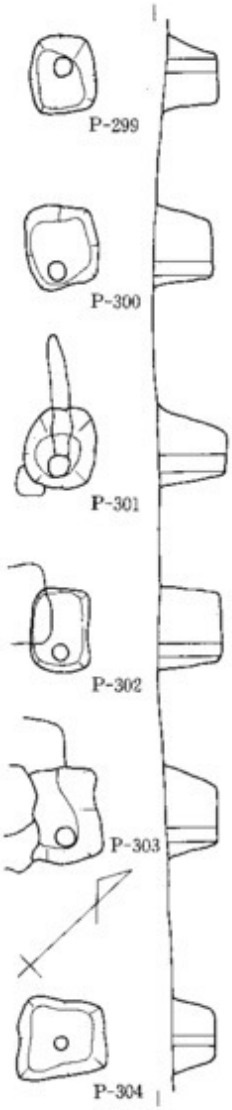
図－48　建物－41（レベル高46.0m）

B．柵

柵－1

ピット6個が一列に並ぶ。柱間寸法は、251cm等間隔で12.55mの長さになる。柵の北東側は、上段の平坦面との間にみられる斜面地となっている。各ピットは、隅丸方形平面を呈し、一辺70～100cmの大きさである。深さも60～80cmと、比較的、良好な残存状態である。柱の直径は、20cm前後である。主軸は、N－47°－W。

ピット内から、土師器・須恵器片が出土しているが、時期を示す遺物は認められない。建物－26と切り合い、柵－1が建物－26に先行する。



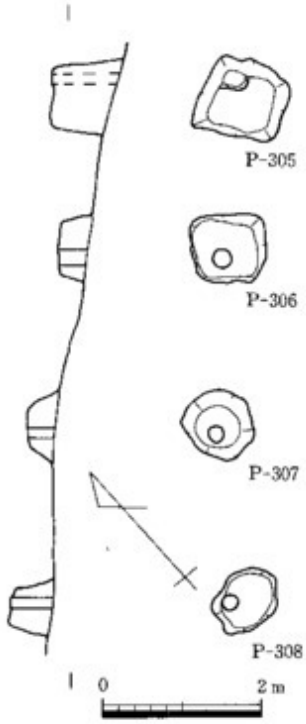
図－49　柵－1
（レベル高59.0m）

柵－2

4個のピットが、ほぼ一列に並ぶ。柱間寸法は、224cm等間隔で672cmの長さになる。ピットは、ほぼ隅丸方形平面を呈し、一辺80～100cmを測る。深さは、40～80cmを残す。柱の直径は、20cm前後となる。軸は、N－43°－E。

ピット内から、土師器・須恵器片が出土しているが、時期を特定できる遺物は認められない。

柵－1と柵－2は、共に時期を示す遺物が出土していないが、直交することから、おそらく、同時期と考えられる。柵－2のすぐ東側には、建物－25が認められ、若干、軸が異なるものの、柵－2が、建物－25に接する部分にのみ認められることから、同時期と考えて間違いないであろう。



図－50　柵－2
（レベル高57.0m）

柵の性格については不明であるが、単なる風防のようなものではなく、屋敷的性格を考慮したものと考えられる。柵－1・2設置時には、建物－24・26は存在せず、建物－25の北側は空地となっていたはずであるが、ここに建物－24を建てることが、既に計画されていたのではないだろうか。そして、柵－1・2の間は、通路として利用され、井戸－1が、この区画外に造られていることも興味深いものである。

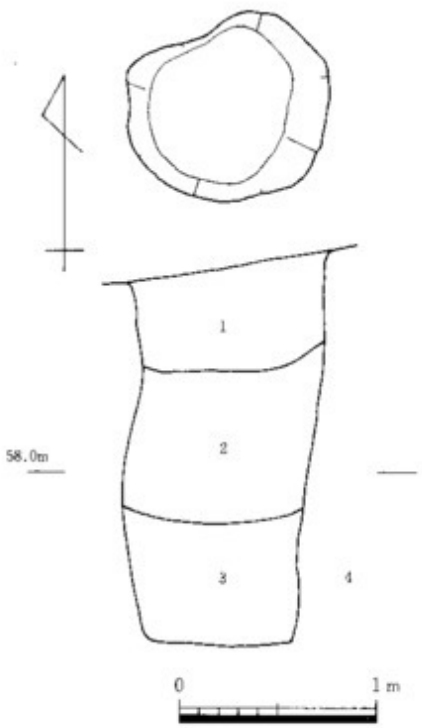
C．井戸

井戸－1（図－65・66）

井戸は、柵－1に接して、1基のみ検出された。井戸としているが、湧水は認められず、本来は雨水等を溜める水溜めとして使用されたものと考えられる。

平面形は、直径約100cmの円形を呈し、礫混じりの暗黄褐色粘質土の地山に掘り込まれている。壁面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ垂直に掘り込まれており、約2mで平坦な底に達する。土層は、上層から灰褐色粘質土、黒褐色粘質土、暗黒褐色粘土と続き、中・下層は溜水時に自然埋没した土層と考えられ、灰褐色粘質土層は廃絶時に埋め戻された土層と考えられる。

井戸内からは、多数の遺物が出土しており、遺存状態の良好なものが多い。出土遺物には、上層から下層にかけて時期差はほとんど認められず、いずれも、7世紀第4四半期の時期が考えられる。水溜めとして利用されていたため、底を清掃したことも十分に考えられるが、出土遺物のみから考えると、井戸－1は、7世紀第4四半期に掘削され、7世紀第4四半期の間に、早くも廃絶されたと推定される。



図－51　井戸－1

D．土坑（図－67）

土坑は11基検出されたが、遺物を出土していない、もしくは良好な遺物が出土していないために、時期不明のものも多い。そのため、時期を確認できる土坑のみを取り上げることにする。土坑－1～4は飛鳥時代に属する。土坑－5は平安時代であるため、後述する。

土坑－1

土坑－1は、建物－42～46が位置する平坦面の西側落ち際で検出された。140cm×200cmの長方形平面を呈し、最も深い部分で約110cmを測る。埋土は、褐色粘質土である。

土坑内からは、土師器の鉢（1）が1点出土している。他に遺物は、ほとんど出土しておらず、周辺には、飛鳥時代の遺構が認められないことから、飛鳥時代の土坑と断定することもできない。また、その性格は全く不明である。

土坑－2

土坑－2は、建物－11の中に位置する。長方形平面を呈し、120cm×220cm、深さは約90cmである。壁面は、ほぼ垂直をなし、底面は平坦となる。土坑－2の周囲には、ほぼ同規模の土坑が他に3基認められるが、他の土坑からは、いずれも遺物の出土を見ない。

土坑－2からは、須恵器蓋杯、土師器杯などの遺物（2～8）が出土しており、7世紀第3四半期から第4四半期にかけての遺物と考えられる。しかし、これらの遺物は、全て土坑－2の上面から出土しており、土坑－2の埋没時もしくはその後の遺物と考えられる。これらの遺物は、建物－11とほぼ同時期と考えられるが、土坑－2が建物－11に伴う貯蔵穴のようなものであるのか、土坑－2埋没後に建物－11が建てられたのかは明らかにできなかった。他の土坑も同様に、時期、性格は不明である。

土坑－3

土坑－3は、建物－21の南に位置し、140cm四方の方形平面を呈する。深さは約140cmに達する。やはり、上層からのみ遺物が出土しており、7世紀第3四半期から第4四半期にかけての遺物（9・10）が出土している。規模や形態からは、土坑－1・2と同じ性格のものと推定されるが、土坑－3の底には、約15cmの厚さの藁灰状の物質が堆積していた。何らかの貯蔵のために利用されたと考えられる。

土坑－4

土坑－4は、建物－36の北に位置し、直径約320cmの円形平面を呈する。底は擂鉢状になり、約160cmの深さを有する。遺物の出土量は、それほど多くないが、壺、甕類が圧倒的に多く、杯類の出土をみない。しかも、遺物の残存状態は非常に良好である。（11～16）

用途は不明であるが、出土遺物からは、祭祀的な性格も考えられる。7世紀第3四半期頃であろう。

E．溝（図－68～72）

溝は多数検出されているが、土坑と同様に、時期不明のものが多く、時期の判明するもののみを取り上げることにする。溝－1～6は、飛鳥・奈良時代の遺構であり、溝－7は、鎌倉時代の遺構である。

溝－1

建物－4・5の下層に位置するほぼ東西方向の溝である。溝幅は平均30cm、部分的に広狭がみられる。長さは11.8mまで確認できた。溝－1から、南北方向に枝溝が数本認められる。深さは、10cm前後である。

遺物は少なく、土師器杯（1）は7世紀第3四半期頃と考えられる。建物－4・5に先行することからも、妥当な時期と考えられ、建物－1・2と同時期と考えられるが、性格は不明である。

溝－2

溝－2は、建物－1～8の北端に位置し、北側は緩やかな斜面、南側は建物群の存在する平坦面となっている。長さは16m、幅は最も広い部分で3.3mを測る。

溝－2からは、多数の遺物が出土しており、その時期は8世紀第2四半期頃と考えられる。遺構の切り合い関係からも、建物群に後出することがわかり、建物群廃絶後に掘削された溝であることがわかる。しかし、そのように考えると、溝の性格付けが困難になる。あるいは、配列や時期の不明なピットの中に、8世紀代に下るものがあるのかもしれない。

溝－3

溝－3は、建物－42～47の建物群と建物－9が位置する平坦面の間の斜面地中段に築かれている。溝の幅は約60cm、長さは等高線に沿って約26mまで確認できた。溝底は緩やかに南へ傾斜しているが、比高差はほとんど認められない。

出土遺物（2～6）の時期は、7世紀第2四半期を前後する時期と思える。遺物の大半が土師器高杯であり、祭祀的な性格が考えられる一方、倉庫である建物－9を保護するために、斜面上からの水を排水する機能を果たしていたとも考えられる。

溝－4

溝－4は、建物－9の約6m北側に掘られており、等高線に直交し、北東から南西調査区外へ続いている。幅は約150cm、長さは11mまで確認できた。深さは平均60cmである。

出土遺物は、7世紀第2四半期から第4四半期のものがみられ、大半は7世紀第3四半期である。埋土は、黒褐色粘質土で滞水していたと考えられる。建物－9の排水を目的とした溝であろう。

溝－5

溝－5は、溝－4のすぐ北側に掘られており、規模、方位、埋土ともに溝－4に一致する。

出土遺物は、7世紀第4四半期から8世紀第2四半期にかけてのものがみられる。おそらく、溝－4廃絶と同時期に新たに掘削された溝であろう。溝－4・5付近は、南西へ開く谷の奥部に当たり、現在も湿潤な地で、粘土が厚く堆積する。また、建物－9の西方には、地形から考えると更に建物群が拡がっていると考えられ、これら建物群への排水を考慮したものと考えられる。

溝－6

建物－30の北側に位置し、建物－30への排水を考慮した溝であろう。幅は60cm前後、深さは最も深い部分で70cmを測る。

溝内からは、あまり遺物が出土していないが、唯一図化可能であった須恵器杯蓋（7）から、7世紀第1四半期から第2四半期にかけての時期と考えられる。

平安・鎌倉時代の遺構

A．建物（図－90）

平安時代の建物は、７棟検出されている。建物－42～47、および柵－１・２が同一平坦面に営まれ、建物－48、土坑－５が、一段上の平坦面に営まれている。

建物－42～47が位置する平坦面は、標高74.5m前後である。浅い溝によって画された約250㎡の長方形状をなす敷地に、整然と建物が配置されている。溝が数本検出され、建物群の周囲をめぐる溝と推定されるが、遺物がほとんど出土しておらず、時期を確認することはできない。

建物－42

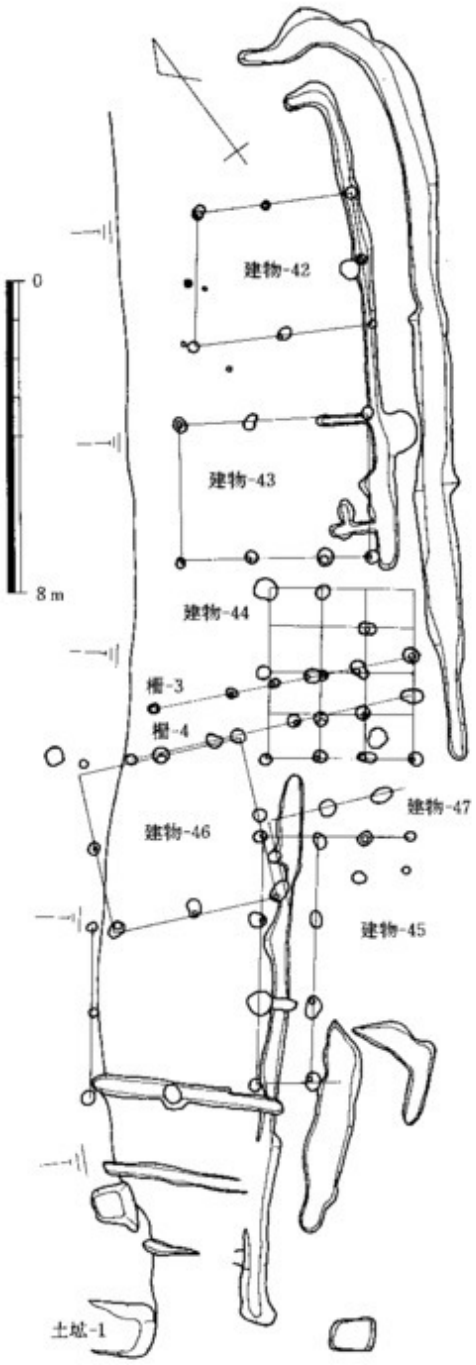
２間×２間の建物である。梁行は、柱間寸法172cmの346cm、桁行は、柱間寸法228cmの456cmとなる。ピット－318のみ、若干位置がずれているが、他は直線に並ぶ。ピットは直径25～30cmの円形を呈し、深さは15～30cmを残す。柱の直径は、10～15cmである。建物の軸は、N－62°－W。

ピット内からは、遺物が全く出土しておらず、時期は不明である。

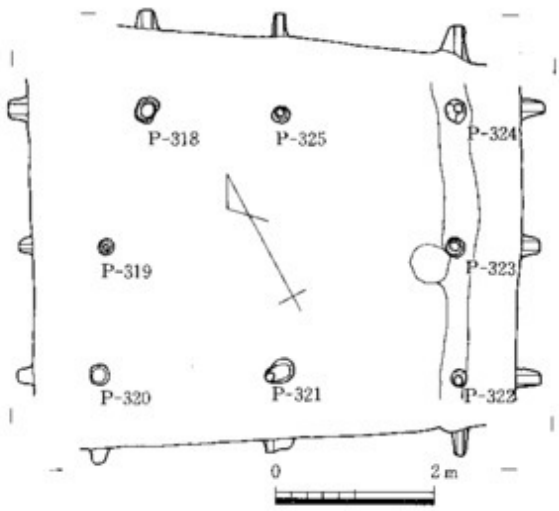
建物－43

２間×３間の建物である。梁行は、180cm間隔の360cm、桁行は、東から120cm、180cm、180cm間隔となり、480cmを測る。ピットは、直径40cm前後の円形、深さは20～50cmを残す。柱の直径は、15cm前後と考えられる。建物の軸は、N－55°－W。ピット－326と333の底面に、上面の平らな石が置かれている。柱の高さを調節するためのものと考えられる。

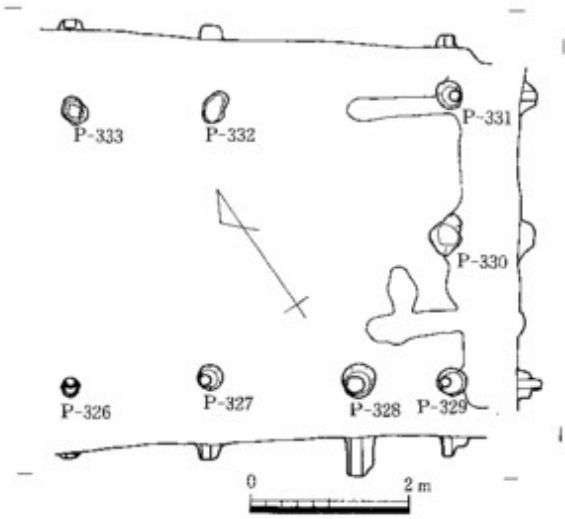
遺物は、ピット－328から、土師器羽釜（１）と土師器小形椀（２）、黒色土器の椀（３～６）が出土しており、10世紀後半～11世紀前半頃と思われる。



図－52　遺構平面図⑥



図－53　建物－42（レベル高74.0m）



図－54　建物－43（レベル高74.0m）

建物－44

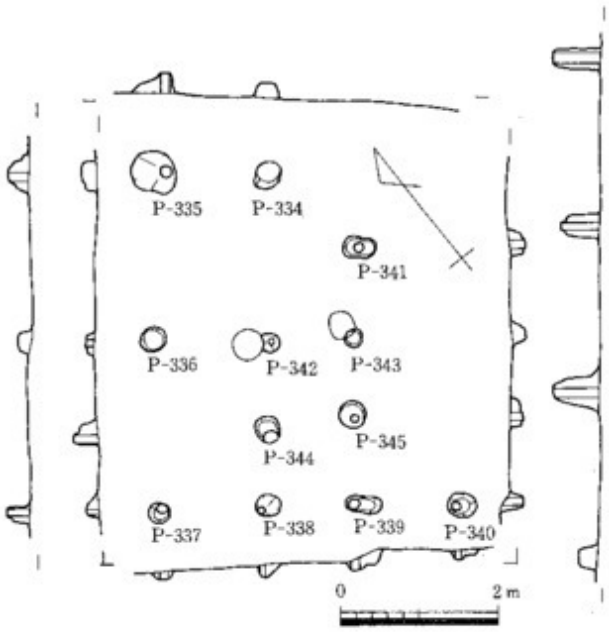
建物－44は、3間×4間の総柱の建物と考えられるが、ピットの残りは悪く、全体の規模、構造は十分に把握できない。ピットの配列もやや乱れるが、梁行が、125cm等間隔の375cm、桁行が108cm等間隔の432cmと復元される。ピットは、直径30cm前後の円形平面を呈し、深さは、残存状態の良好なもので約30cmである。柱の直径は、12cm前後であろう。建物の軸は、N－38°－Eを示す。総柱であることから、倉庫の可能性が考えられる。

遺物は、ピット－344から土師器杯高台（7）が出土しているが、時期は不明である。また、柵－3のピットと切り合っており、建物－44が柵－3に先行することがわかる。

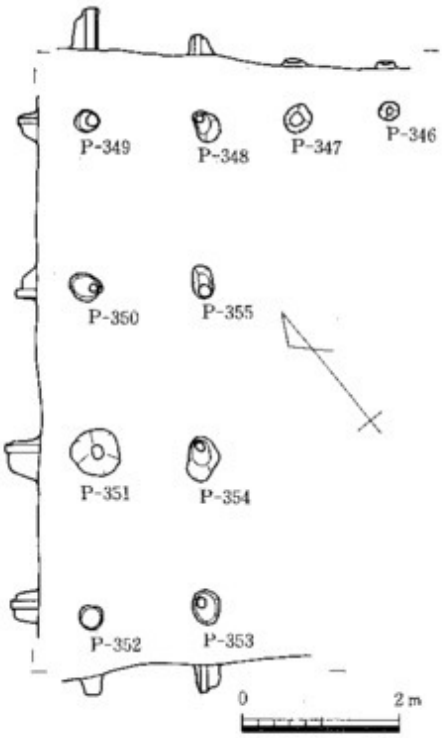
建物－45

3間以上×3間の建物である。但し、西側の1間分は庇になる可能性がある。東側は、遺構面がやや高くなっており、本来は現在よりも高く、後世の削平によって、ピットが消滅したものと考えられる。梁行柱間寸法は、120cm間隔で西側の1間分は140cm間隔となり、総長380cm以上。桁行は213cm前後の等間隔で約640cmとなる。ピットは、直径40cm前後の円形平面を呈し、深さは10～60cmを残す。西側のピットほど遺存状態が良く、東側へ向かうにつれて、遺存状態は悪くなる。柱の直径は、10～15cm。ピット－346と347の底面には、高さを調節するためと思える扁平な石が1個ずつ置かれている。建物の軸は、N－38°－E。

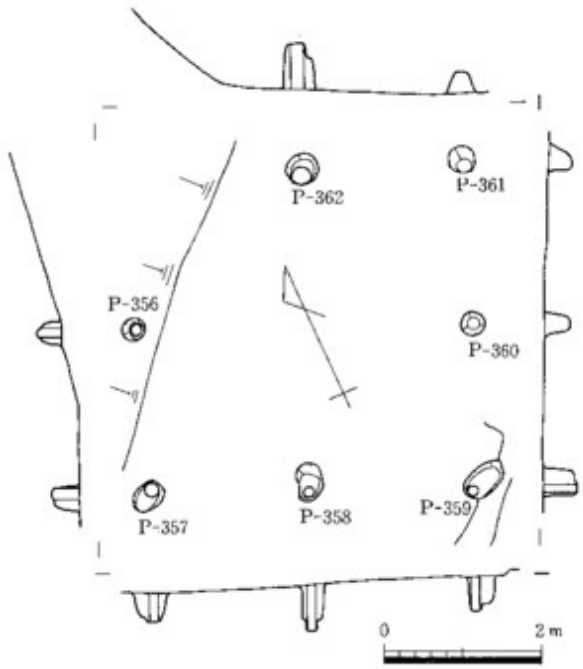
遺物は、ピット－351から、黒色土器の小皿（8）が1点出土しているが、他に時期を示す遺物は認められない。



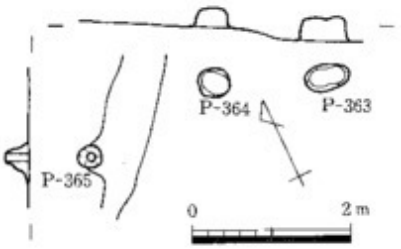
図－55　建物－44（レベル高74.5m）



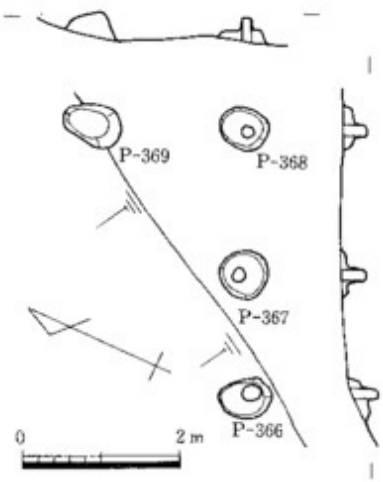
図－56　建物－45（レベル高74.5m）



図－57　建物－46（レベル高74.5m）



図－58　建物－47（レベル高74.5m）



図－59　建物－48（レベル高81.0m）

建物－46

2間×2間の建物と考えられる。一辺約420cmのほぼ正方形プランの建物である。北西のピットは崖面にかかっており消失しているが、他のピットは約210cm等間隔で整然と並んでいる。ピットは、直径30～40cmの円形平面をなし、深さは30～60cmを残す。柱の直径は、約12cmである。建物の軸は、N－24°－E。

ピット－357から、土師器杯（9）と黒色土器椀の高台（10）が出土している。

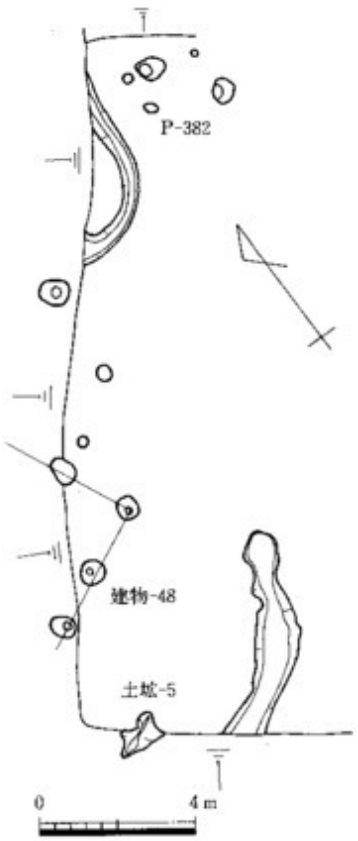
建物－47

1間以上×2間以上の建物である。柱間寸法は、西辺で100cm、北辺で160cmと復元される。建物－45と同様に、後世の削平によって、他のピットが消滅したものと思える。建物の軸は、N－66°－W。

遺物は少量出土しているのみで、図化可能なものは認められない。

建物－48

建物－48は、建物－42～47の位置する平坦面の東側、一段高い平坦地に位置する。標高80mを測り、約3.5mの比高差がある。すぐ南側には、土坑－5があり、東側には配列不明のピットや溝がみられる。



図－60　遺構平面図⑦

建物－48は、その南東部を残すのみであり、北西側は、崖面となり、ピットを消失している。規模は、1間以上×2間以上、200cm以上×340cm以上となる。ピットは、ほぼ円形平面を呈し、直径50～60cm、柱の直径は約15cmである。建物の軸は、N－65°－E。

ピット内からは、黒色土器・土師器の小片が出土しているが、時期は不明である。近接する土坑－5に近い時期と思われる。

以上の建物について概観すると、建物－44・45は同じ方位となり、西辺の柱列がほぼ一致することから同時期と考えられる。また、建物－43も近い方位となり、近い時期が考えられる。建物－42は、その配置と溝の位置から、建物－43と併存した可能性が強い。これらの建物の前後関係は明らかでない。

建物－46・47は、柵－3・4と方位を全く同じくする。しかし、建物－46と47、建物－46と柵－4は同時期に存在することはなく、おそらく、建物－46と柵－3、建物－47と柵－4が同時期と思われる。これらは、方位が全く一致

することから、それぞれ建て替えられたものと考えられるが、少量の遺物からは、前後関係を明らかにし難い。但し、遺構の切り合いから、建物－44に後出することは明らかであり、建物－42～45廃絶後、あまり時を経ずして建てられたものと考えられる。

また、ピット－339・344・349・351・357・359・361・362・370・376・377・378から、焼土塊が多数出土しており、他にも建物－47や柵－3のピット内から焼土が検出されている。焼土が如何なる原因によるものかは不明である。

建物－48は、位置、方位が大きく異なり、近接する土坑－5の遺物から考えると、これらの建物群より若干古くなると考えられる。

建物－42～48は、10世紀後半代を中心に、次々と建て替えられたものと考えられる。

B．柵（図－90）

柵－3

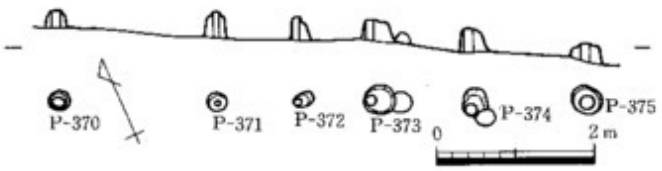
柵－3は、6個のピットからなり、柱間寸法は208cm、100cm、92cm、128cm、144cmと不規則である。ピットは、直径30～40cmの円形、深さは20～30cmを残す。柱の直径は、約10cm。軸は、N－66°－Wである。

遺物は、ピット－372から、土師器の片口鉢（11）が出土している。前述のように、建物－46に伴うと考えられる。

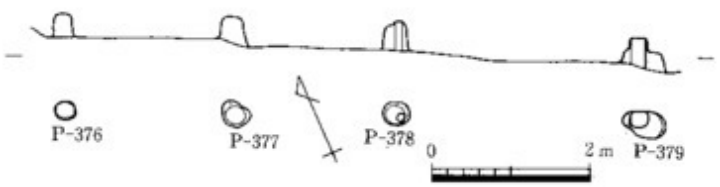
柵－4

4個のピットからなり、柱間寸法は220cm、212cm、300cmと不規則である。ピットは、直径30～40cmの円形、深さは約40cmを測る。軸は、N－67°－W。

ピット－377から、土師器小皿（12）、黒色土師器椀（13）が出土している。建物－47に伴うと考えられる。



図－61　柵－3（レベル高74.5m）



図－62　柵－4（レベル高74.5m）

C．土坑（図－91）

土坑－5は、建物－48のすぐ南側で検出された。南西側が削平されているため、全体の規模は明らかにできなかったが、現状では140cm×100cmの楕円形状の平面形態となる。深さは、約30cmを残していた。

遺物は多数出土しており、黒色土器椀には、内面のみ炭素が吸着するもの（1～7）、内外面共に炭素が吸着するもの（8～11）が約半数ずつ存在する。土師器小皿（12～25）は、形態から数型式に分類可能であり、土師器杯（26～29）、土師質羽釜（30）などが出土している。時期は、10世紀後葉頃と考えられる。

D．溝（図－92）

溝－7は、建物－42の北側で検出され、南東から北西方向へのびる溝である。幅は約50cm、深さ約30cm、長さは約10mまで確認できたが、西端が傾斜面で途切れている。埋土は、黒褐色粘質土。

斜面で切られている西端から、青磁椀、土師器小皿、瓦器椀、土師質羽釜が一括で出土した。青磁椀(1)は龍泉窯産の完形品で、非常に精巧に作られている。正置された状態で出土している。そのすぐ横に、土師器小皿と瓦器椀が(2)から(6)の順に、上から重ねられて出土した。いずれも、破損していたが、接合によって完形品となった。更にその横から、土師質羽釜の破片(7)が出土している。

これらは、出土状況から意図的に埋置されたと考えられ、祭祀関係の遺物と考えられる。第1次調査の際にも、白磁椀と土師器小皿が重ねられた状態で出土しており、同様な性格の遺構と考えられる。しかし、周辺には特別な施設は全くみられず、墓とも考えられない状態である。これら以外にも、鎌倉時代の住居跡が確認されていないにもかかわらず、白磁、青磁片が少量出土しており、同様な遺構が他にも存在したものと考えられる。

瓦器椀(4～6)は、いずれも非常に低い貼り付け高台を有し、外面は指頭調整のみでヘラミガキは認められず、内面見込みの暗文は平行暗文、ヘラミガキは非常に雑に施されており、13世紀後半頃と考えられる。他の遺物も同時期と考えて、問題はないであろう。

溝－7の周辺には、中世の包含層が若干認められ、青磁椀等を埋置するために掘られた溝と考えるよりも、溝の廃絶時に、青磁椀等を埋置して溝が埋め戻されたものと考えられる。

3．遺物

古墳～奈良時代の遺物

A．建物

図－63の遺物は、掘立柱建物のピット掘方内から出土した遺物である。

建物－5　ピット－23から土師器杯(1)が出土。口縁端部は、つまみ上げるようなヨコナデ。内面に放射暗文、外面に横方向のヘラミガキを施す。

建物－6　ピット－31から土師器杯(2)が出土。口縁端部は外反し、丸味をもった底部と推定される。磨滅が著しく、暗文、ミガキは不明。外面底部は指頭押圧調整。

建物－9　ピット－56から土師器甕の口縁部(3)が出土。口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面はヘラケズリからナデ調整。

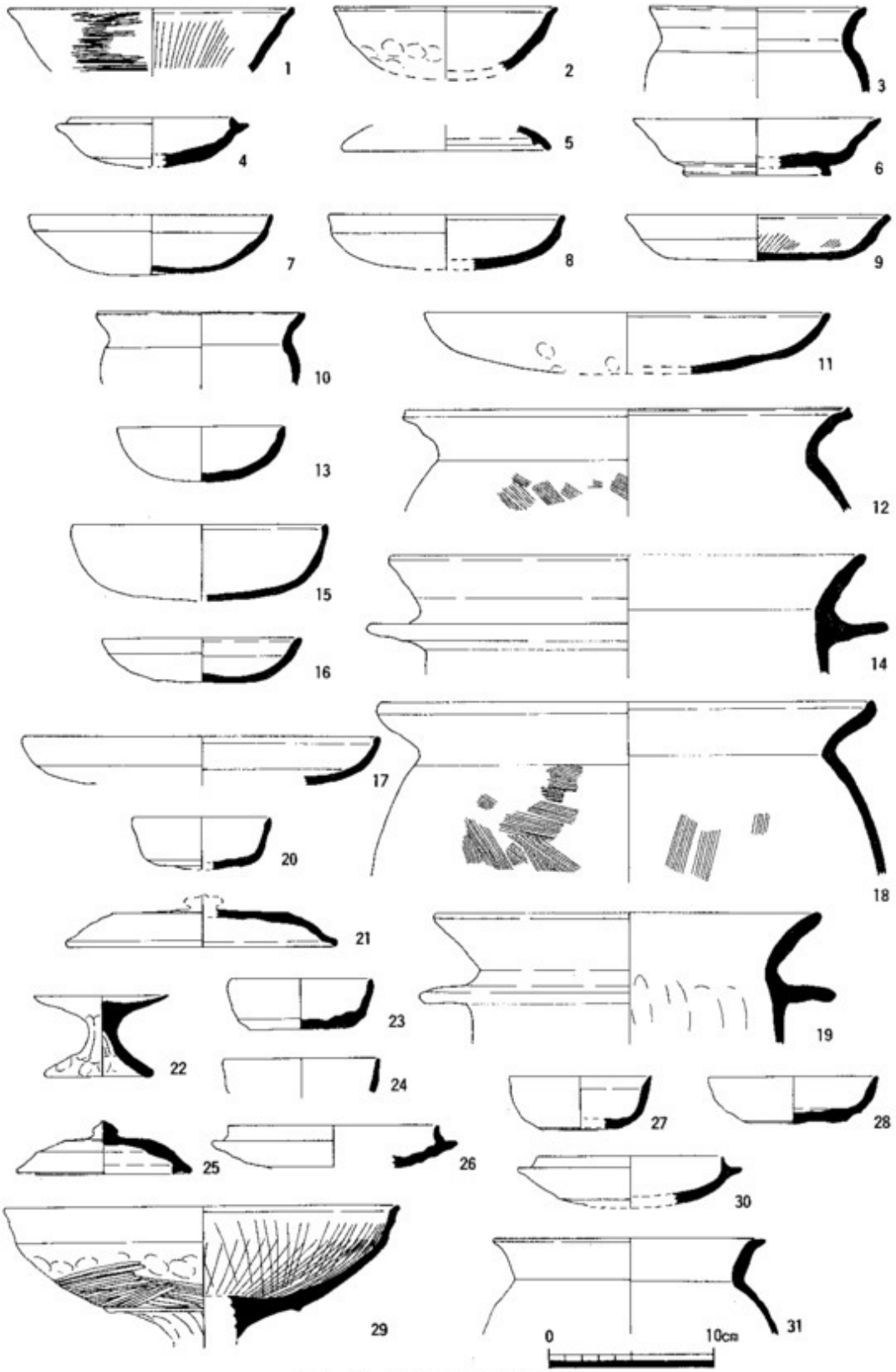
建物－10　ピット－66から須恵器杯身(4)、土師器杯(7～9)、小形甕(10)、ピット－67から須恵器杯蓋(5)、杯身(6)、土師器皿(11)、甕(12)、ピット－70から土師器杯(13)が出土。須恵器杯身(4)は、非常に短い立ち上がりを有する。須恵器杯蓋(5)は、内面に低く、鈍いかえりを有する。須恵器杯身(6)は、高台を有し、体部から口縁部にかけて、斜方向に直線的にのびる。7～9は、土師器杯。7・8は、口縁部ヨコナデ、内外面共にナデを施すが、暗文の有無は不明。9は、口縁端部内面に浅い沈線を有し、内面に斜放射暗文。外面ナデ調整。10は、小形甕。内外面共、ナデ。土師器皿(11)は、口径24.6cmの大皿。内外面ナデ調整、暗文は不明。土師器甕(12)は、口縁部外反し、端部は直立する。体部外面は左上がりのハケメ、内面ナデ。13は、小形の土師器杯。半球形の体部を有し、内外面ナデ調節。ほぼ完形である。

建物－12　ピット－84から土師器羽釜(14)、ピット－85から土師器杯(15･16)、皿(17)、甕(18)が出土。15は、大形の杯。口縁端部は、ややまきこむ。16は、小形の杯。皿(17)は、口縁端部が肥厚気味に内弯する。口径21.6cm。甕(18)は、外反する口縁部が端部で立ち上がる。体部外面は左上がりのハケメ、内面はタテハケから部分的なナデ。

建物－20　ピット－119から土師器羽釜の口縁部(19)が出土。口縁部は厚く、外反し、体部は薄い。鍔は、やや下がり気味になる。体部内面、タテ方向のユビナデ、外面には煤が付着する。

建物－24　ピット－146から須恵器杯身(20)、ピット－150から須恵器杯蓋(21)が出土。杯身(20)は小ぶりで、口縁部は直にのびる。杯蓋(21)は、かえりがみられず、口縁部は弱く屈曲した後、下方へのびる。

建物－25　ピット－158から土師器小形高杯(22)、ピット－163から須恵器杯身(23･24)が出土。小形高杯(22)は手づくねであり、杯部は非常に浅い。杯身(23･24)は共に小形で、立ち上がりを有しない。23は、完形品。外面下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り未調整。他はナデ調整。



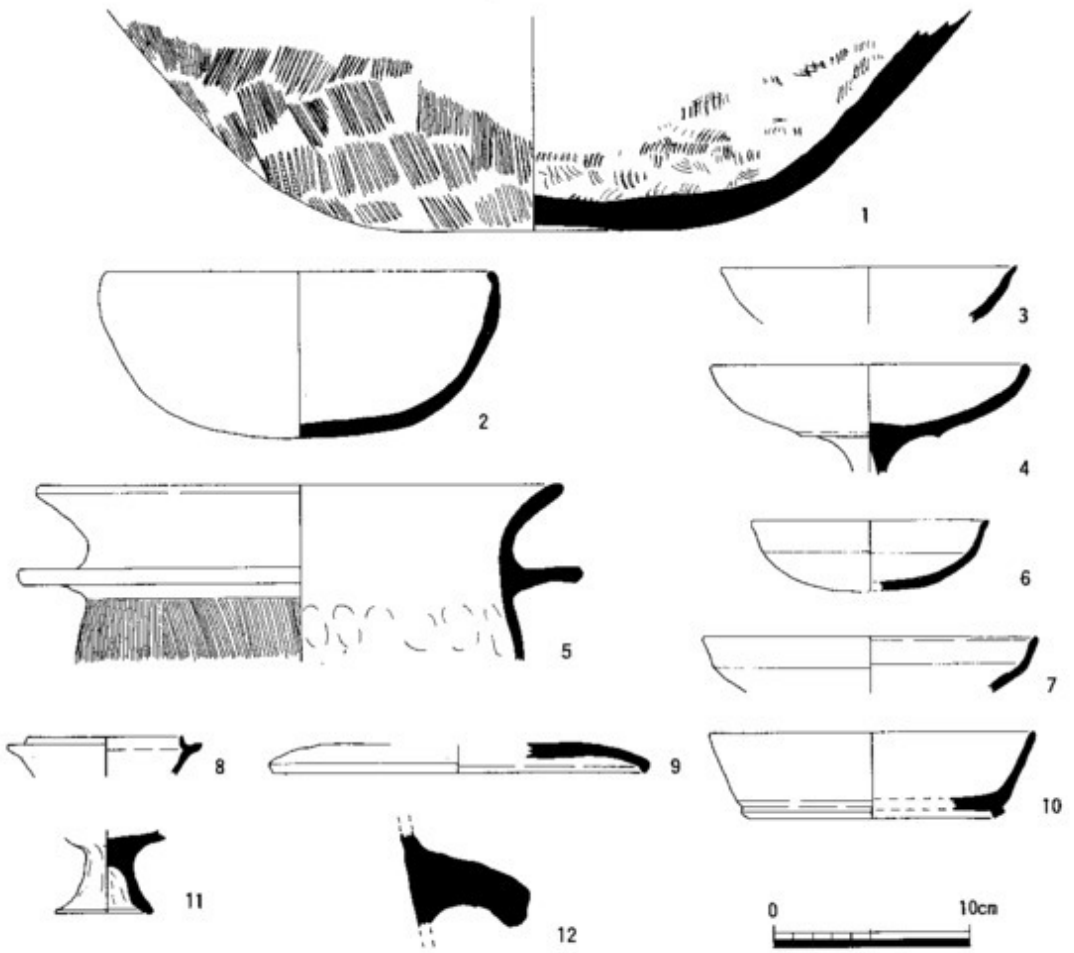
図－63　建物ピット内出土遺物

建物－27　ピット－183から須恵器杯蓋(25)が出土している。内面にかえりを有する小形の杯蓋である。かえりの端部は、口縁端部より、やや下方にある。

建物－28　ピット－190・197・198から須恵器杯身(26～28)が、それぞれ出土している。26は、立ち上がりを有する杯身。全体の約10%を残す小片であるため、混入遺物の可能性がある。27・28は、立ち上がりの消失した杯身。28は、口径が大きく、器高は低い。

建物－33　ピット－252から土師器高杯(29)、ピット－253から須恵器杯身（30）が出土。土師器高杯(29)は、挿入式の脚部を欠失した杯部のみである。内面は放射二段暗文、外面は指頭押圧の後、横方向のヘラミガキを施す。脚部はユビナデ。須恵器杯身(30)は、低い立ち上がりを有する。

建物－35　ピット－268から土師器甕(31)が出土。外反する口縁部は、端部で更に外方へ屈曲する。口縁部ヨコナデ、体部は内外面共ナデ調整。



図－64　ピット内出土遺物

前記以外に建物を復元できなかったピット内からの出土遺物を図－64に図化した。

1は、須恵器大甕の底部。外面に平行叩き、内面に同心円の当具痕が残る。ピット内に据えられた状態で出土しており、あるいは底部を埋めることによって正置され、水甕等に使用されていたものかもしれない。ピット－309から出土。

2は、土師器鉢。半球形の体部を呈し、口縁端部は内彎する。内外面とも、磨耗が著しいが、ナデ調整と思える。ピット－310から出土。

3は、土師器杯。口縁部は弱く外反する。表面剝離が著しく、暗文不明。ピット－311から出土している。

4は、土師器高杯。内外面共にナデを施すが、暗文の有無は不明。ピット－312から出土。

5は、土師器羽釜。口縁部は外反し、鍔は短く、水平にのびる。体部外面タテハケ、内面ユビナデ調整。ピット－313から出土。

6は、土師器杯。内外面共にナデを施すが、暗文は不明。ピット－314から出土。

7も、土師器杯。体部と口縁部の境で、やや屈曲する。ピット－315から出土。

8は、須恵器杯身。非常に小形で、立ち上がりは短い。ピット－316から出土。

9～12は、ピット－317から出土。9は、かえりを消失した須恵器杯蓋。10は、高台を有する杯身。11は、小形手づくねの高杯。12は、竈の把手である。7世紀末葉から8世紀初頭の遺物であろう。

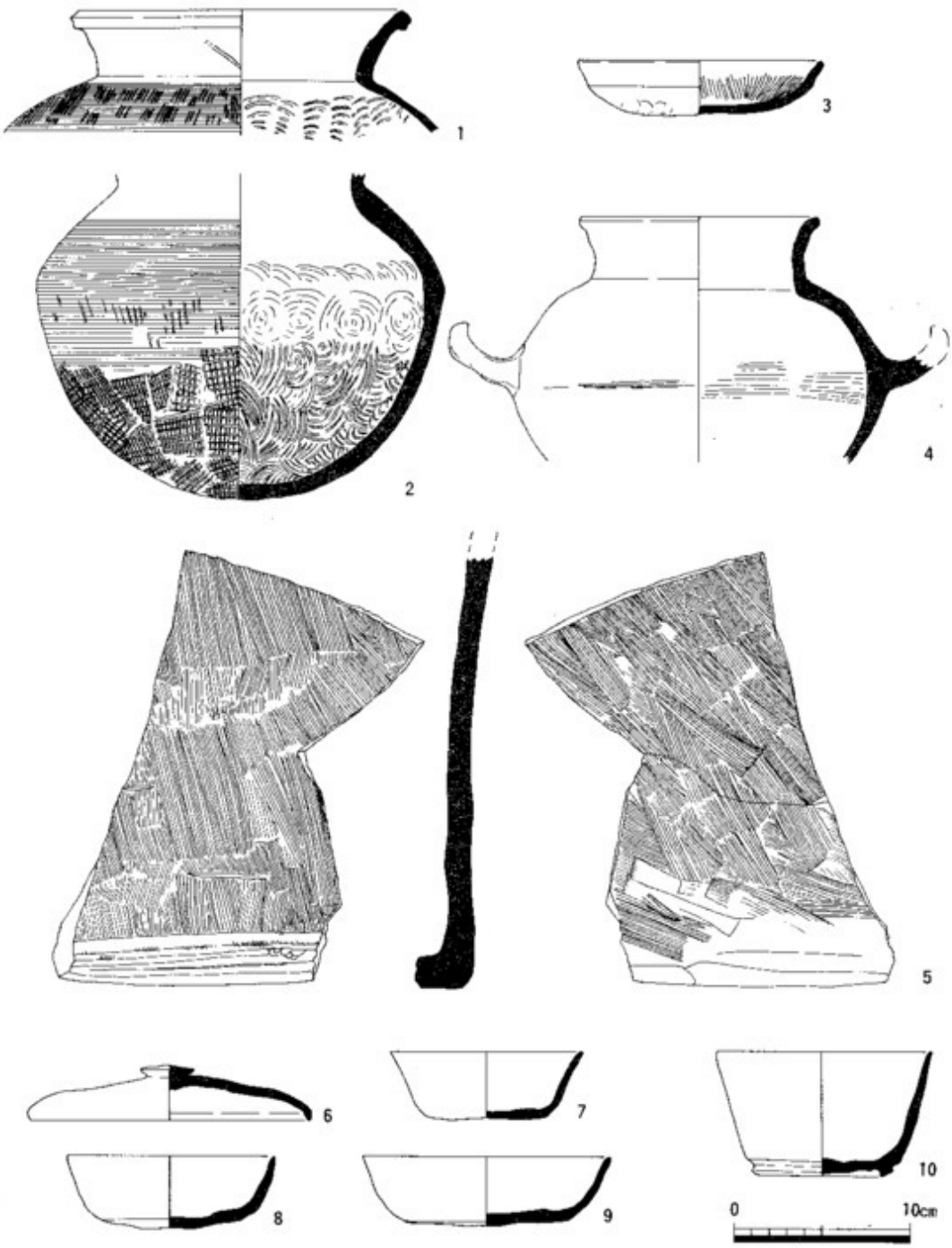
これらの遺物は、いずれも、ほぼ7世紀代と考えられ、掘立柱建物の年代と矛盾するものはみられない。

B．井戸

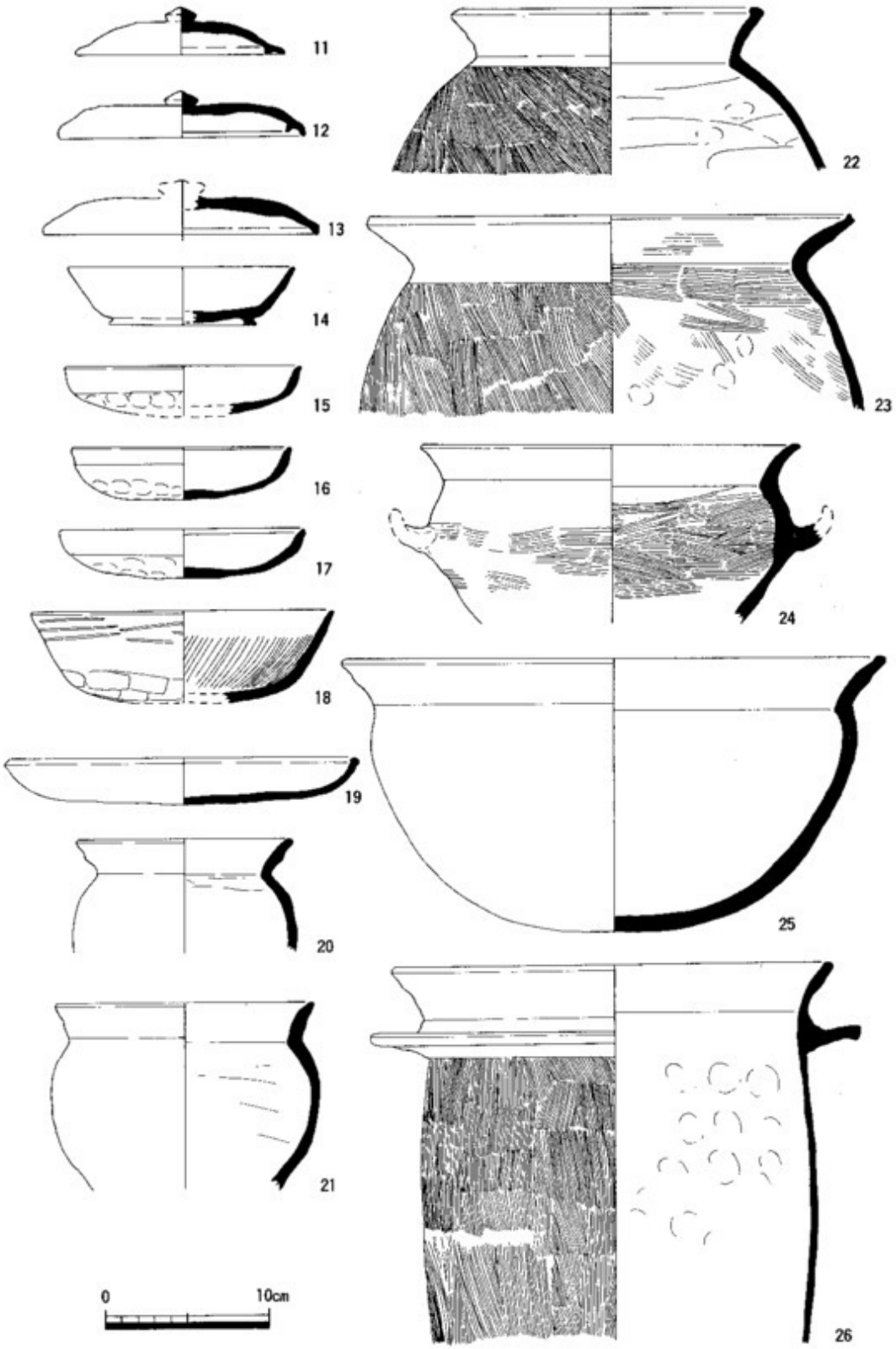
図－65・66は、井戸－1から出土した遺物である。1～5は、下層・暗黒褐色粘土、6～10は、中層・黒褐色粘質土、11～26は、上層・灰褐色粘質土からそれぞれ出土した遺物である。

1・2は、須恵器壺。1は、外面平行叩きからカキメ、口縁部に直線のヘラ記号がみられる。2は、外面格子叩きから上半にカキメを施す。内面は、同心円の当具痕の上半をナデ消している。3は、土師器杯。内面に放射暗文、外面指頭押圧調整。4は、土師器把手付壺。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部で外反する。把手は細く、内弯する。体部外面に横方向のヘラミガキ、内面下半に横方向のハケメが残るが、磨耗が激しく、調整の詳細は不明である。5は、器種不明。灰白色を呈し、瓦質に近い焼成である。下端は外方へ直角に屈曲し、円筒埴輪の凸帯状を呈する。厚さは約1.2cm、内外面共にハケメによる調整。天地が逆になる可能性もある。

6～10は、中層から出土。6は、須恵器杯蓋。内面のかえりは消失。7～10は、須恵器杯身。いずれも立ち上がりは、みられない。10は、低い高台と深い杯部を有する杯身。下層での大形品の出土に比して、中層では須恵器蓋杯を中心とした出土遺物が見られ、対照的な状況を呈している。



図－65　井戸中・下層出土遺物



図－66　井戸上層出土遺物

11～26は、井戸上層からの出土遺物である。11～13は、須恵器杯蓋。内面にかえりを有するもの(11・12)と、かえりを有しないもの(13)がみられる。14は、高台を有する須恵器杯身。15～26は、いずれも土師器である。15～18は、杯。15～17は、いずれも外面下半を指頭調整、内面をナデ調整で仕上げる。暗文は見られない。18は、大形の杯。外面上半に横方向のヘラミガキ、下半に横方向のヘラケズリを施す。内面には放射暗文が見られる。19は、皿。磨耗のため、調整は不明である。20・21は、小形の甕。体部外面ナデ、内面板ナデ調整。22・23は、甕。22は、口縁端部が内方へ屈曲する。体部外面タテハケ、内面ナデ。23は、口縁端部が直立する。体部外面タテハケ、内面はヨコハケを施すが、一部に指頭圧痕が残る。24は、把手付の鉢。口縁部が広く、浅い体部となる。把手は、小さいものであろう。内外面共にヨコハケ調整。25は、大形の鉢。口縁は短く、外方へのび、口径は体部径を上まわる。内外面とも平滑なナデによって仕上げられる。26は、羽釜。口縁部の外反は弱く、鍔は非常に短い。体部外面タテハケ、内面指頭調整。

井戸－1からの出土遺物は、比較的良好な状態で残存している。器種構成も全般におよび、器種による偏りは見られず、祭祀に伴う遺物とは考えられない。また、上層から下層にかけての時期差は認められず、7世紀第4四半期頃の年代が与えられる。

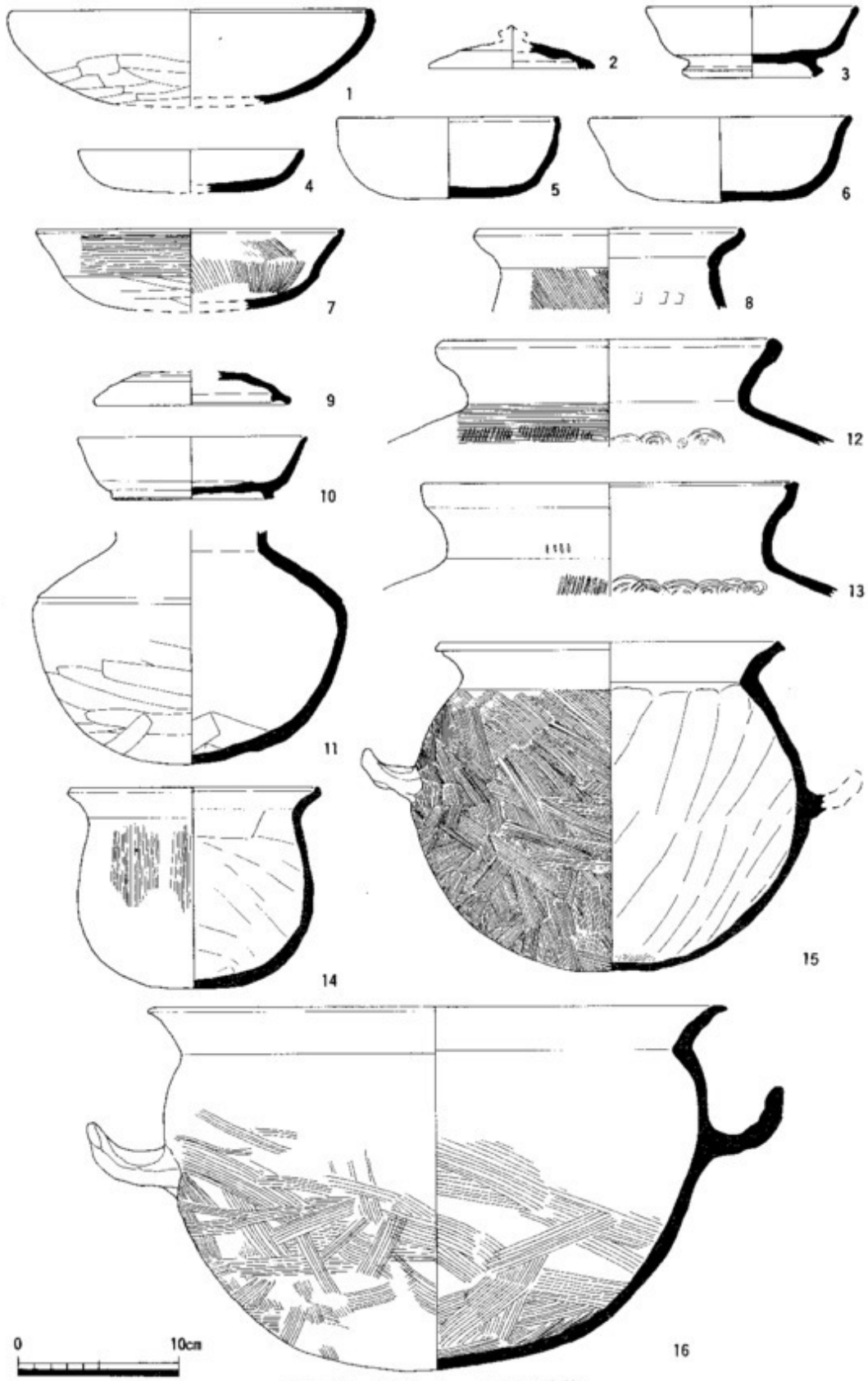
C．土坑

土坑－1　土坑－1から土師器鉢(1)が出土。口縁部は、やや内湾し、端部は平坦におさめる。外面下半ヘラケズリ、内面ナデ調整。

土坑－2　2～8が出土。2は、須恵器杯蓋。内面にかえりを有する。3は、高い高台と浅い杯部を有する須恵器杯身。4～8は、土師器。4～6の杯は、いずれも暗文の有無不明。7の杯は、口縁端部内面に浅い沈線がめぐり、外面上半は横方向のヘラミガキ、下半はヘラケズリ。内面放射二段暗文。8は、甕。口縁部は外反から、端部で直立し、体部は広がらない。外面ハケメ、内面ケズリからナデ。

土坑－3　9・10が出土。9は、内面にかえりを有する杯蓋、10は、高台を有する杯身である。

土坑－4　11～16が出土。11～13は、須恵器。14～16は、土師器。11は、壺の体部。外面肩部に沈線がめぐる。外面底部ヘラケズリ。12・13は壺の口縁部。12は、口縁端部が肥厚し、外面は平行叩きからカキメ。13は、口縁部外反から直立し、端部凹面をなす。外面に平行叩きを施す。14は、甕。口縁部は短く、端部は直立する。体部は下ぶくれとなる。外面タテハケ、内面板ナデ調整。15は、把手付の甕。体部は球形を呈し、把手は小さい。外面タテハケ、内面板ナデ調整。16は、把手付の鍋。口縁は、短く外反し、把手は長く、弯曲が強い。体部下半は、内外面共にハケメ、体部上半はナデ、口縁部はヨコナデを施す。土坑－4からは、大形の壺、甕類のみが出土しており、しかも残存状態は良好である。



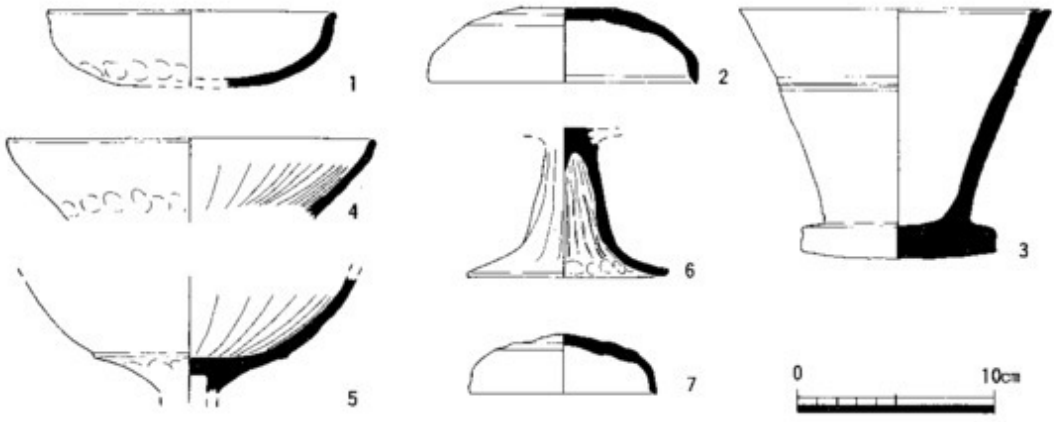
図－67　土坑－1～4出土遺物

D．溝（図68～72）

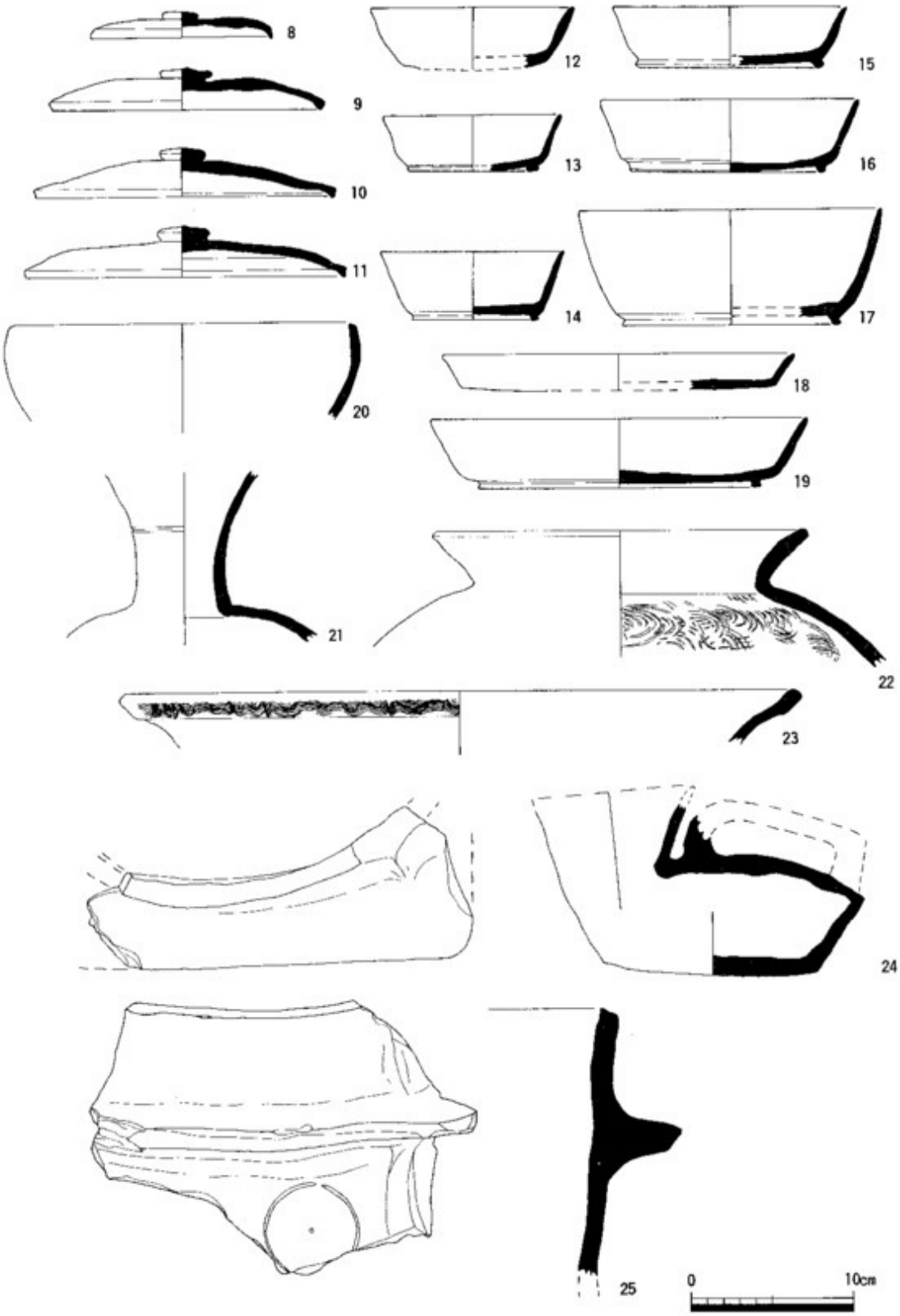
溝－1　溝－1からは、土師器杯(1)が出土。外面底部は指頭押圧、磨耗のため、暗文の有無は不明。

溝－2　溝－2からは、8～46の遺物が出土している。8～25は、須恵器。26～46は、土師器。8～11は、杯蓋。内面にかえりを有するものは見られず、器高は比較的高い。12～17は杯身。12は高台を伴わないが、他は、いずれも高台を有する。15～17は、大形品。特に、17は、口径、器高共に大きい。18・19は、皿。18は、口径に比して、器高が低い。口縁部は、底部から屈曲して立ち上がる。19は、高台を有するやや深い皿。杯身の口径を2倍にしたような形態を呈する。20は、鉢。いわゆる鉄鉢形の鉢である。内外面共にナデによって仕上げられる。21は、長頸壺の肩部から頸部にかけての一部である。頸部外面に、1条の沈線を伴う。22は、壺の口縁部。23も、壺の口縁部であり、やや肥厚する口縁端部外面に、雑な波状文がめぐる。24は、平瓶の体部。口縁部と把手を欠損する。底部は平底となり、肩部に張りが見られる。25は、器種不明。須恵質である。平面が方形を呈すると考えられる鍔状の部分が認められ、上端の平面形は、楕円形に近い不整円形である。下半の隅角部には、鍔状部分を支える粘土の補充がみられ、側面には、円形の線刻文様がみられる。この円形線刻の中心には、針状のものによる刺突痕がみられ、明らかにコンパスを使用して施された文様であることがわかる。断面は約1cmの厚さを有し、直立する。瓦塔のような造形品の一部ではないかと思われるが、明らかでない。

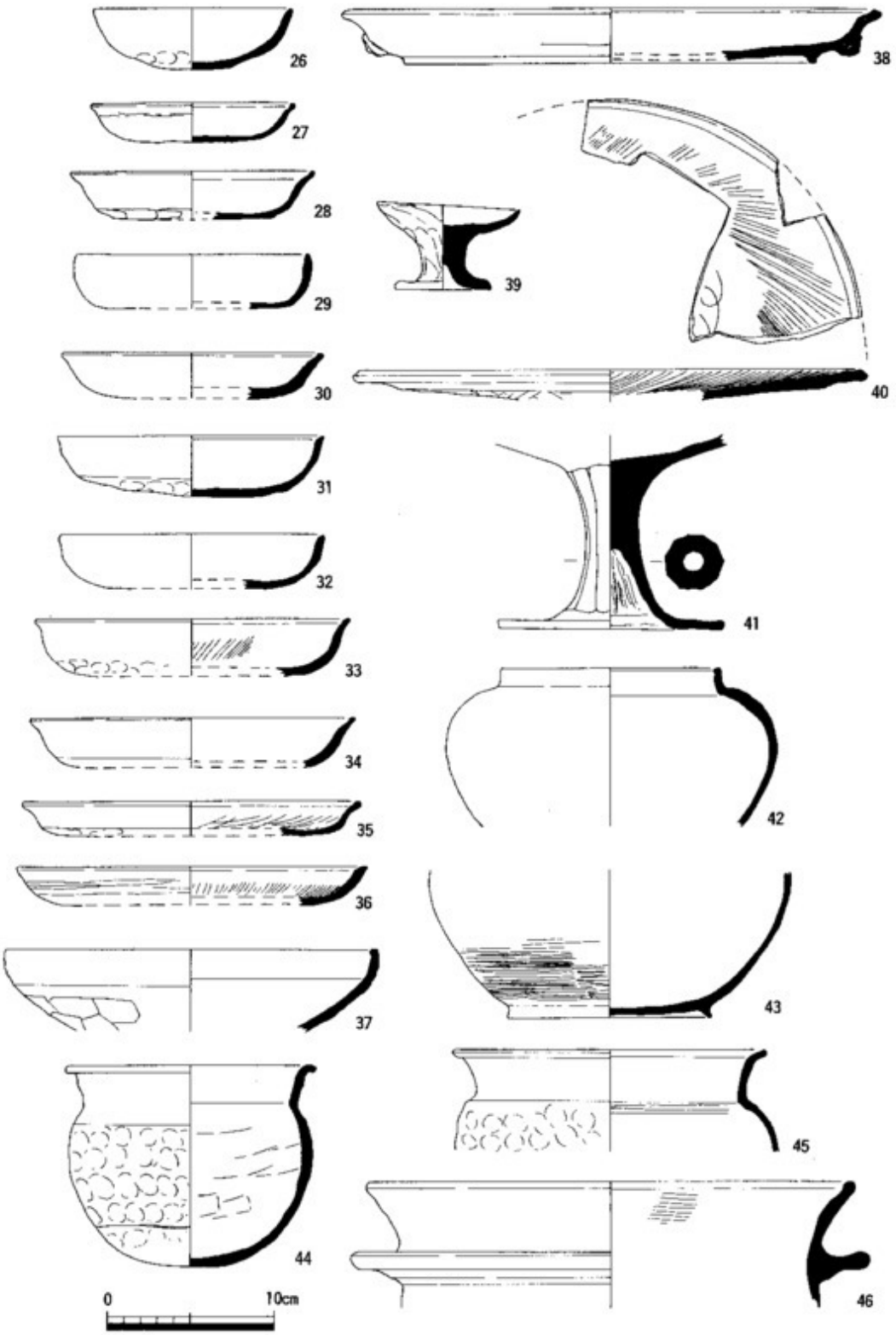
26～46は、土師器。26～36は、杯・皿である。口径が小さい杯から大きい杯まで、種々、出土している。37は、鉢。口縁端部は平坦面をなし、外面底部にヘラケズリを施す。38は、皿。低い高台を有し、口縁部は外反する。貼り付けによる、粘土板を折り返したかのような把手を伴う。39は、小形手づくねの高杯。杯部は斜方向へナデ上げて整形する。40は、高杯杯部。内面中央にラセン状暗文、外縁に斜方射暗文を施す。41は、高杯脚部。脚柱部は、10面の面取りが施され、裾部は水平に外方へのび、端部は、やや肥厚する。内面には、シボリメがみられる。



図－68　溝－1・3・6出土遺物



図－69　溝－２出土遺物①



図－70　溝－２出土遺物②

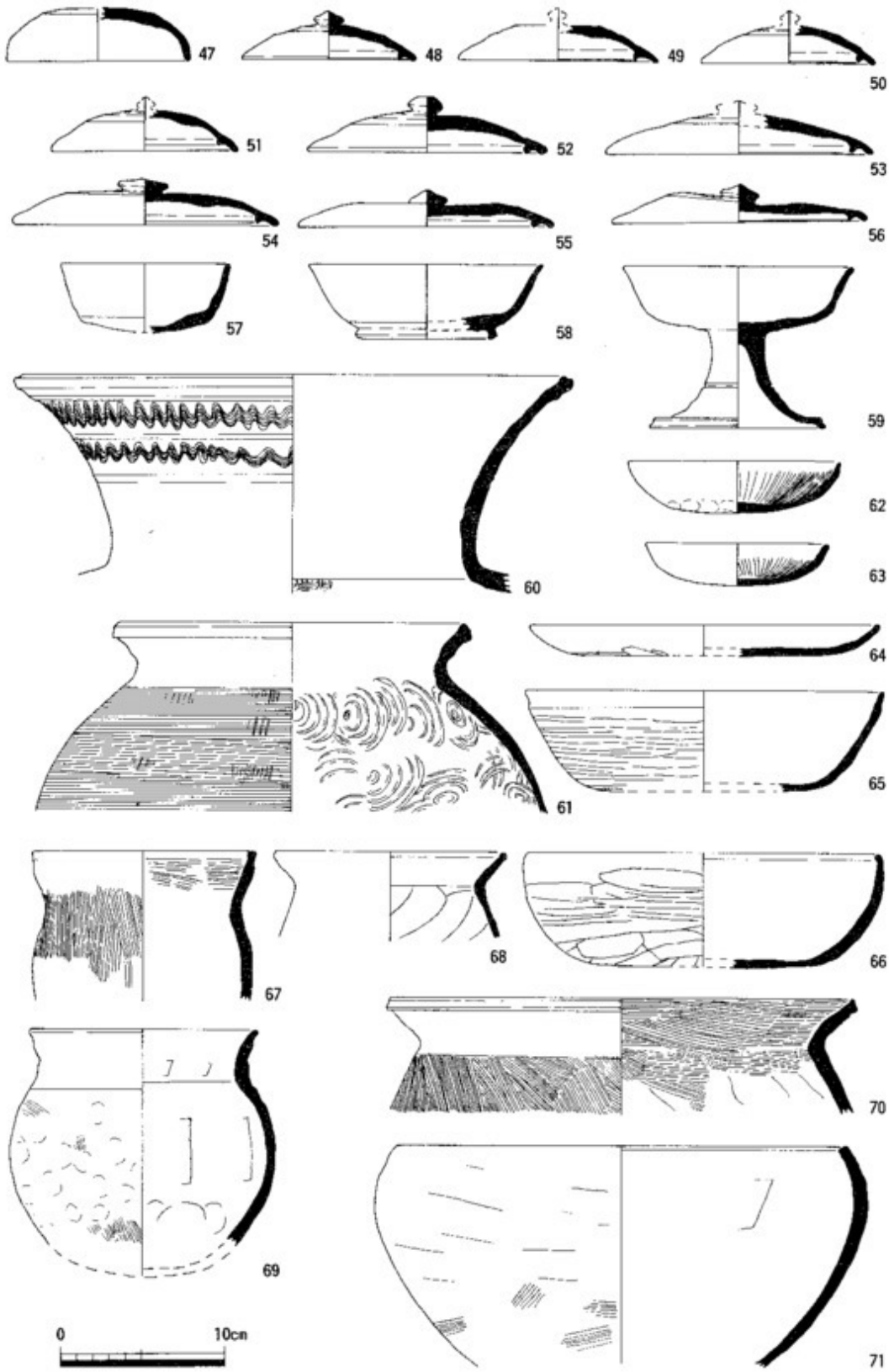
42・43は、壺。42は、口縁部が短く直立し、肩部が張り出した形態を呈する。内外面共にナデ。43は、おそらく42の形態を呈する壺の底部であろう。高台は低く、外方へのびる。体部内面ナデ、外面下半に横方向のヘラミガキがみられる。44・45は、小形の甕。いずれも、端部に至って水平に近く外反する口縁部と張りの弱い体部を呈する。体部外面には、指頭圧痕が顕著に残り、44の内面は板ナデ、45の内面にはハケメが残る。46は、羽釜。鍔は短く、口縁部の外反は弱い。口縁部内面にヨコハケが残る。

溝－3　溝－3からは、2～6の遺物が出土している。2は、須恵器杯蓋。3は、須恵器擂鉢である。口縁端部は、やや凹面をなし、外面に2条の沈線がめぐる。4～6は、土師器高杯。杯部内面に間隔の疎な放射暗文が施される。脚部はユビナデ調整。

溝－4　溝－4からは、47～71の遺物が出土している。47～61は、須恵器。62～71は、土師器。47は、かえりを有しない杯蓋。天井と口縁の境の稜線は見られない。48～56は、内面にかえりを有する杯蓋。かえりは鋭いものが多く、器高も全般に高い。57・58は、杯身。57は、高台を伴わず、58は、高台を伴う。59は、高杯。口縁は、外反気味に広がり、裾広がりの脚は、端部で屈曲する。脚中央に、1条の沈線を伴う。60は、壺口縁部。口縁端部は、やや肥厚する。上半には、1単位6本の波状文が2段にめぐり、各波状文の下に浅い凹線がめぐる。61は、甕。口縁は短く、体部の張りは弱い。体部外面は、平行叩きの後、カキメ。内面は、同心円の当て具痕を残す。

62・63は、杯。内面に放射暗文を施す。62の底部外面は、指頭調整。64は、皿。底部外面ヘラケズリ、内面は、器表面剥離のため調整不明。65・66は、杯。65は、口縁部に強いヨコナデを施し、体部外面は、間隔の疎な横方向のヘラミガキ。66は、口縁部が肥厚し、内弯する。体部外面は、ヘラケズリの後、部分的な横方向のヘラミガキ。内面は、ナデ調整。いずれも、暗文の有無は不明。67～69は、小形の甕。67は、頸部のくびれが小さく、口縁部は直立に近い。体部外面タテハケ、内面は不明。口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコハケ。68は、口縁端部が直立気味に肥厚する。体部外面は、ナデ、およびタテハケ。内面は、弱いヘラケズリを施す。器壁が非常に薄い。69は、球形の体部を呈し、口縁部は外反する。体部外面は、指頭調整の後、部分的にハケメを施す。内面上半は、板ナデ。下半は、ユビナデらしき痕跡が残る。口縁部は、外面ヨコナデ、内面が板ナデからヨコナデ。70は、甕。口縁端部は面をなし、端部直下が沈線状をなす。体部外面、左上がりのハケメ、内面は縦方向のナデ。口縁部外面はヨコナデ、内面は、ヨコハケを施す。71は、鉢。口縁部は内弯し、端部は面をなす。外面は、ヘラケズリからナデ。下半に、部分的なハケメがみられる。内面は、板ナデ。

7世紀第3四半期を中心とした、比較的短期間の遺物を含んでいる。


47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
62
63
61
64
65
67
68
66
70
69
71
0
10cm

図－71　溝－4出土遺物

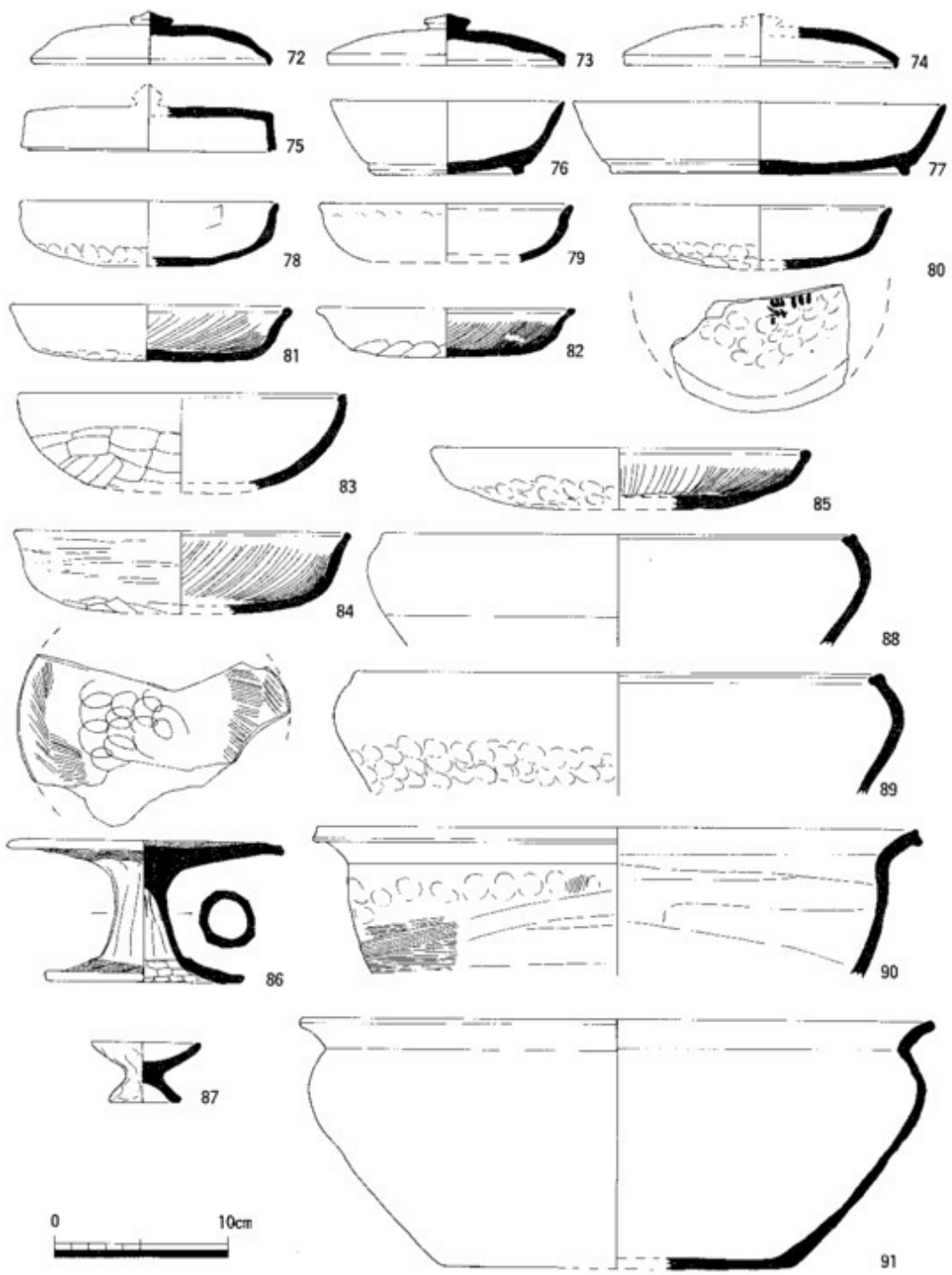
溝－5　72～91は、溝－5から出土した遺物である。72～77は、須恵器、78～91は、土師器である。溝－5からは、比較的新しい時期の遺物が出土している。72～74は、杯蓋。いずれも、内面のかえりは見られない。75は、有蓋短頸壺の蓋であろう。天井から直角に屈曲する口縁部は、端部に、つまみあげるようなヨコナデを施す。おそらく、宝珠状のつまみを伴うのであろう。内外面共に、回転ナデ調整。76・77は、杯身。いずれも、低い高台を伴う。77は、器高に比して、直径が非常に大きい。

78～91は、土師器。78～85は、杯。78～82は、小形の杯である。78～81は、底部外面指頭調整。82は、ヘラケズリを施す。81・82の内面には、放射暗文が見られる。他は、暗文の有無は不明である。形態は、丸味のみられる体部で、口縁部が外反するもの(78～80)、平坦な底部から口縁部が立ち上がり、口縁端部が丸く肥厚するもの(81・82)がある。80の外面底部中央には墨書が見られる。文字の左側を欠損するが、おそらく、「三昧」と書かれたものであろう。1983・84年度の推定鳥坂寺僧房跡の調査の際に、「三昧」の墨書土器が7点出土している。[3] 1983・84年度の調査では、墨書土器が他にも多数出土しているが、大部分が8世紀代の土器であり、80も時期的に矛盾するものではない。今回の調査で出土した墨書土器は、1点のみであるが、この墨書土器の出土は、掘立柱建物の集落と鳥坂寺の関連を示す遺物と言える。

86・87は、高杯。86の杯部は、ほぼ水平に広がり、器壁は厚い。脚柱部には、10面の面取りが見られるが、各面の幅は、必ずしも一定いない。脚裾部は、弱い段をなし、水平に広がる。杯部内面中央にラセン状の暗文、更に外側へ、放射暗文、斜方射暗文が施される。杯部外面は、4分割のヘラミガキ。脚裾部外面は、5分割のヘラミガキ、内面は、横方向のヘラケズリ。脚柱部内面には、シボリ目が見られる。87は、小形手づくねの高杯。杯部と脚部の高さは、ほぼ等しく、直径は、杯部のほうが大きい。88・89は、鉢。どちらも、口縁部が内彎し、口縁端部が浅い凹面をなす。口縁部ヨコナデ、体部外面は指頭調整、内面はナデによって仕上げる。90・91は、鍋。90は、口縁部外反し、端部で面をなす。外面指頭調整とヨコハケ、内面は横方向の板ナデを施す。91は、口縁部がやはり外反し、肩部の張りが強い。底部は平底となる。内外面共、ヨコナデによって、平滑に仕上げる。

7世紀第4四半期から、8世紀第2四半期にかけての時期の遺物と考えられる。

溝－6　溝－6から出土した遺物で図化可能なものは、7のみである。7は、須恵器杯蓋。天井部は丸味を有し、口縁部との境の稜線は見られない。天井部は、回転ヘラ切り未調整。一部、回転ヘラケズリが認められるが、大部分は、回転ナデによって調整される。



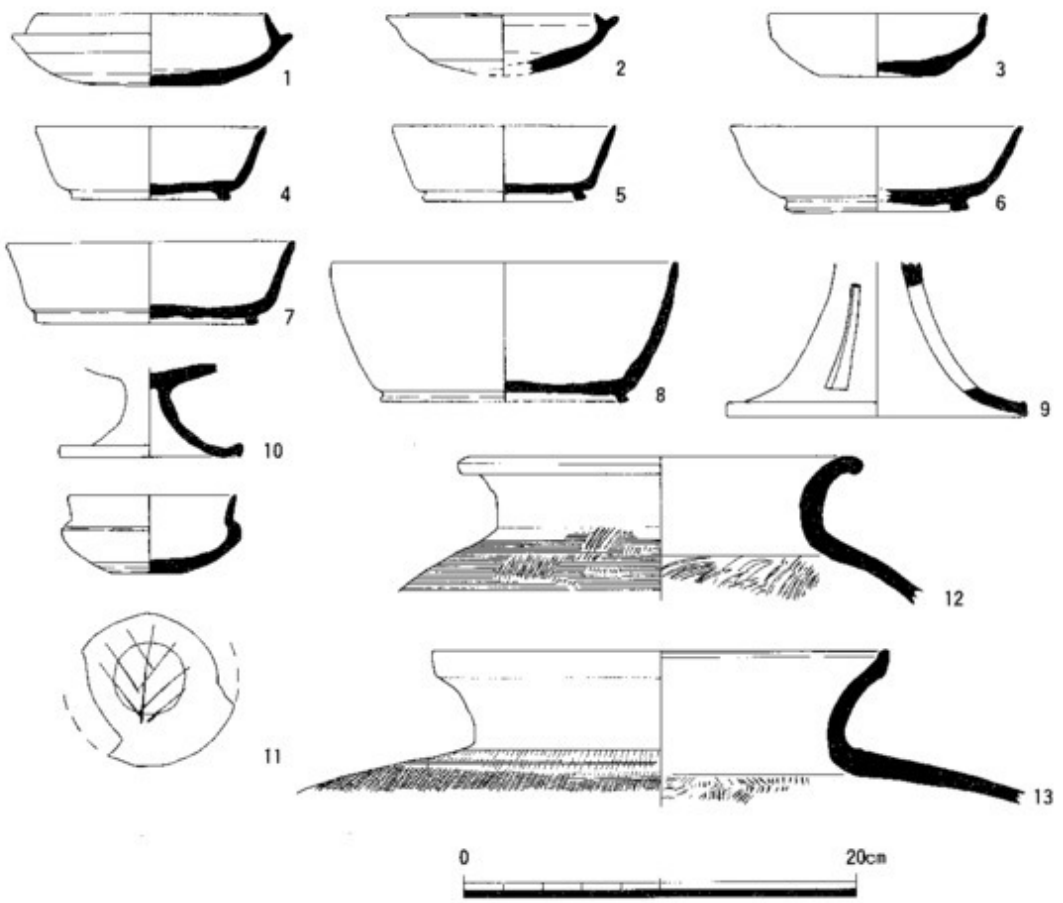
図－72　溝－５出土遺物

E．遺物包含層

層序の項で記述したように、遺物包含層の厚い堆積が認められるのは、谷状の地形を呈する部分のみである。他は、遺物包含層の削平、流失が著しいが、それでもなお、多量の遺物が出土している。遺物は、土器類を中心に、埴輪、屋瓦、金銅製品等が出土している。時期は、6世紀から13世紀にわたる。ここでは、古墳時代から奈良時代の包含層出土遺物について、標高の高い部分から低い部分へ、順次、記述を進めていく。

標高の最も高い掘立柱建物－1～8の周辺では、包含層が非常に薄く、良好な遺物の出土を見ない。わずかな遺物の時期は7～8世紀であり、遺構の時期と矛盾するものではない。

平安時代の掘立柱建物－42～47周辺からは、1～32の遺物が出土している。これらの遺物には、掘立柱建物－48との間の斜面、また掘立柱建物－42～47の位置する平坦面、溝－3・7周辺の遺物を含んでいる。この範囲内には、溝－3以外に、古墳時代から奈良時代の遺構は認められない。しかし、遺物が少なからず出土していることから、建物－48の位置する平坦面、および建物－42～47の位置する平坦面にも当該時期の遺構が存在したことを推測させる。



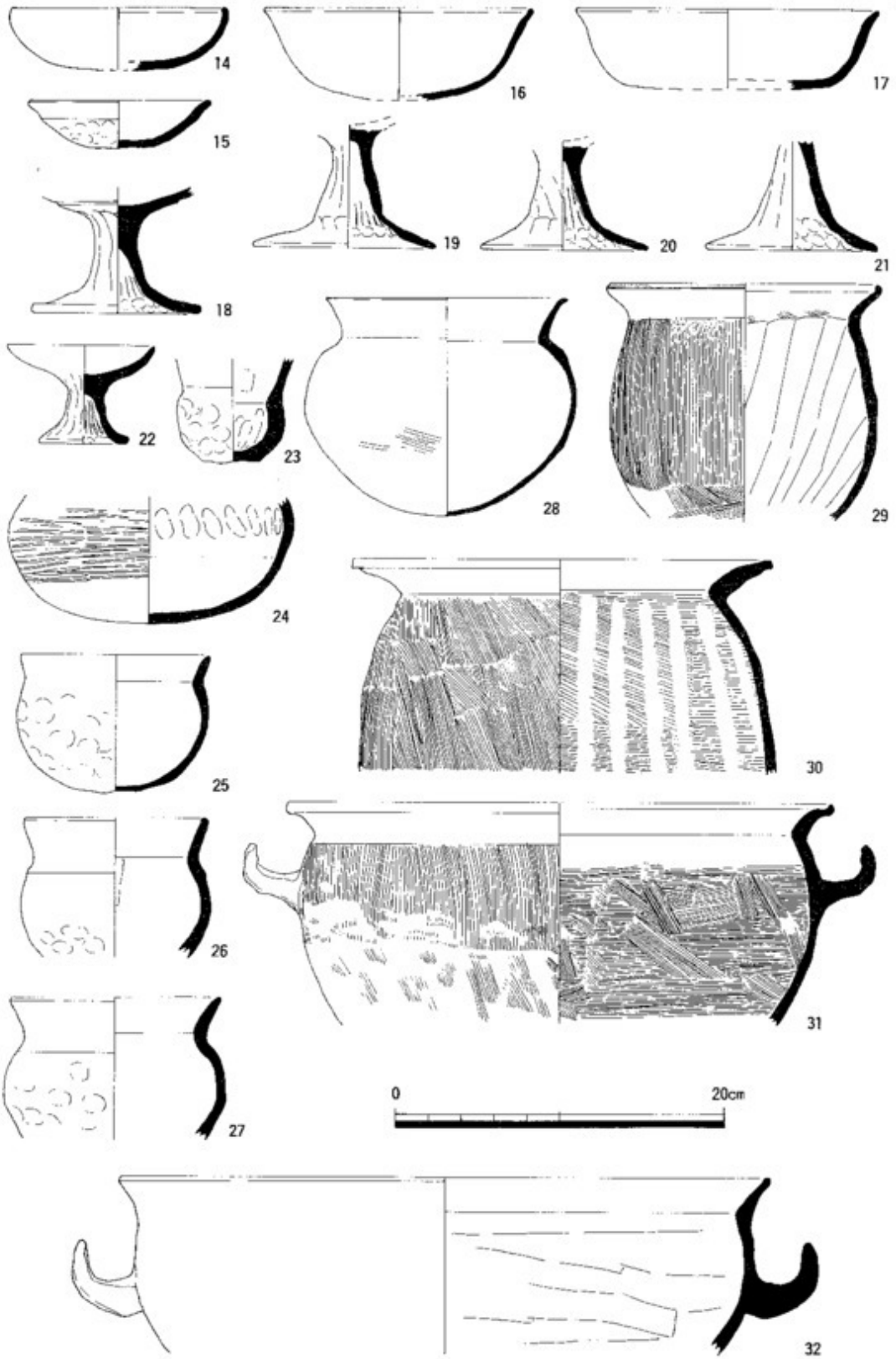
図－73　包含層出土遺物①

1～13は、須恵器。1～8は、杯身であり、6世紀後葉から8世紀前葉の年代である。9は長脚二段三方透しの高杯脚部であろう。10は、小形の高杯。11は、小形の短頸壺である。外面底部中央に、ヘラ描きによる木の葉の線刻が認められる。12・13は、甕口縁部。

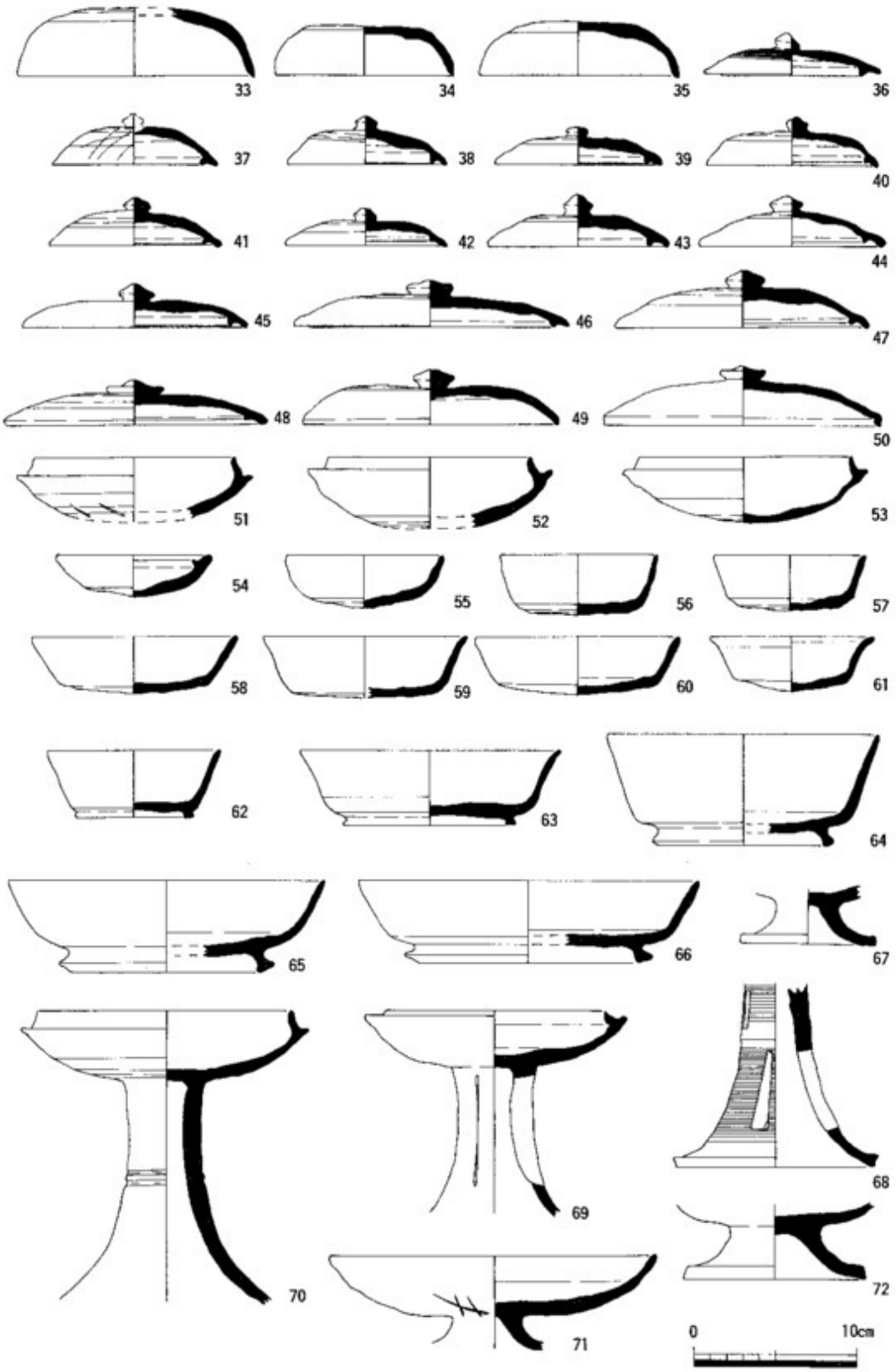
14～32は、土師器。杯（14～17）は、いずれも、表面の剥離が著しい。18～21は、高杯脚部。溝－3周辺から出土しており、溝－3から多数出土している高杯と一連のものであろう。22は、小形手づくねの高杯であるが、杯部が深く、全体に整美な形態である。手づくねの高杯としては、古い時期のものであろう。23は、小形の壺。器壁が厚く、外面は指頭調整を施すが、凹凸が激しい。内面は指頭によるかき上げるようなナデ。口縁部内面は、板ナデの痕跡が残る。高井田横穴群のA号墳出土の小形壺2点に酷似する[4]。その2点は、いずれも外面に赤色顔料が塗布されており、葬送儀礼に伴う特殊の遺物と考えられる。23の小形壺は、赤色顔料の塗布は認められないが、日常生活に使用されたとは考え難く、祭祀に使用する目的で製作された遺物と考えられる。24は、壺の体部。外面は横方向のヘラミガキ、内面下半はナデ、上半は指頭調整。やはり、高井田横穴群の103号墳から、酷似する壺が出土している[5]。103号墳出土の壺は、頸部まで残っており、扁平な体部から直立する口縁部を有する直口壺と考えられる。24の壺は、外面底部の調整が不明瞭であるが、103号墳出土の壺は、底部に弱いヘラケズリを施している。他の形態、調整は全く同じであり、いずれも、器表面が滑らかに仕上げられている。25～27は、小形の甕。短く外反する口縁部と球形に近い体部を呈し、外面は指頭押圧による調整である。28～30は、甕。28は、肩部の張る甕。29は、下ぶくれの甕。30は、長胴の甕であろう。30の甕内面は、横方向のハケメの後、縦方向に、2㎝間隔のユビナデを施すものである。31・32は、把手付の鍋であるが、直径、口縁の形態、調整法等が全く異なるものである。

次に、建物－9、溝－4・5周辺から、溝－3にかけての地区で出土した遺物について記述する。この地区には、遺構は少ないが、南西方向へ延びる谷状地形の奥部に当たるため、厚い遺物包含層が存在した。そのため、出土遺物は多く、残存状態の良好なものが多い。33～118の遺物が、この地区から出土している。遺物は、須恵器、土師器だけでなく、埴輪も多数出土している。これらの事実から、この地区から更に北、もしくは東側の標高の高い部分に、古墳および建物群が存在したと推定される。

33～82は、須恵器。杯蓋（33～50）、杯身（51～66）は、6世紀後葉から8世紀中葉にかけての時期のものが見られ、その間、ほぼ全期間にわたって遺物が認められる。このことから、周辺に中断することなく継続する建物群が存在したものと推定される。67～71は、高杯。67は小形の高杯脚部。68は、長脚二段透しの脚部。透孔は互い違いに穿孔され、カキ目が施される。69・70は、有蓋高杯。69は、三方のヘラ刻みによる透し孔を有し、長脚二段の脚部と思われる。70には、透し孔は認められない。71は、直径の大きい杯部を有し、脚部は小さく、低いものであろう。外面にヘラ記号が認められる。72も、同様の形態であろう。

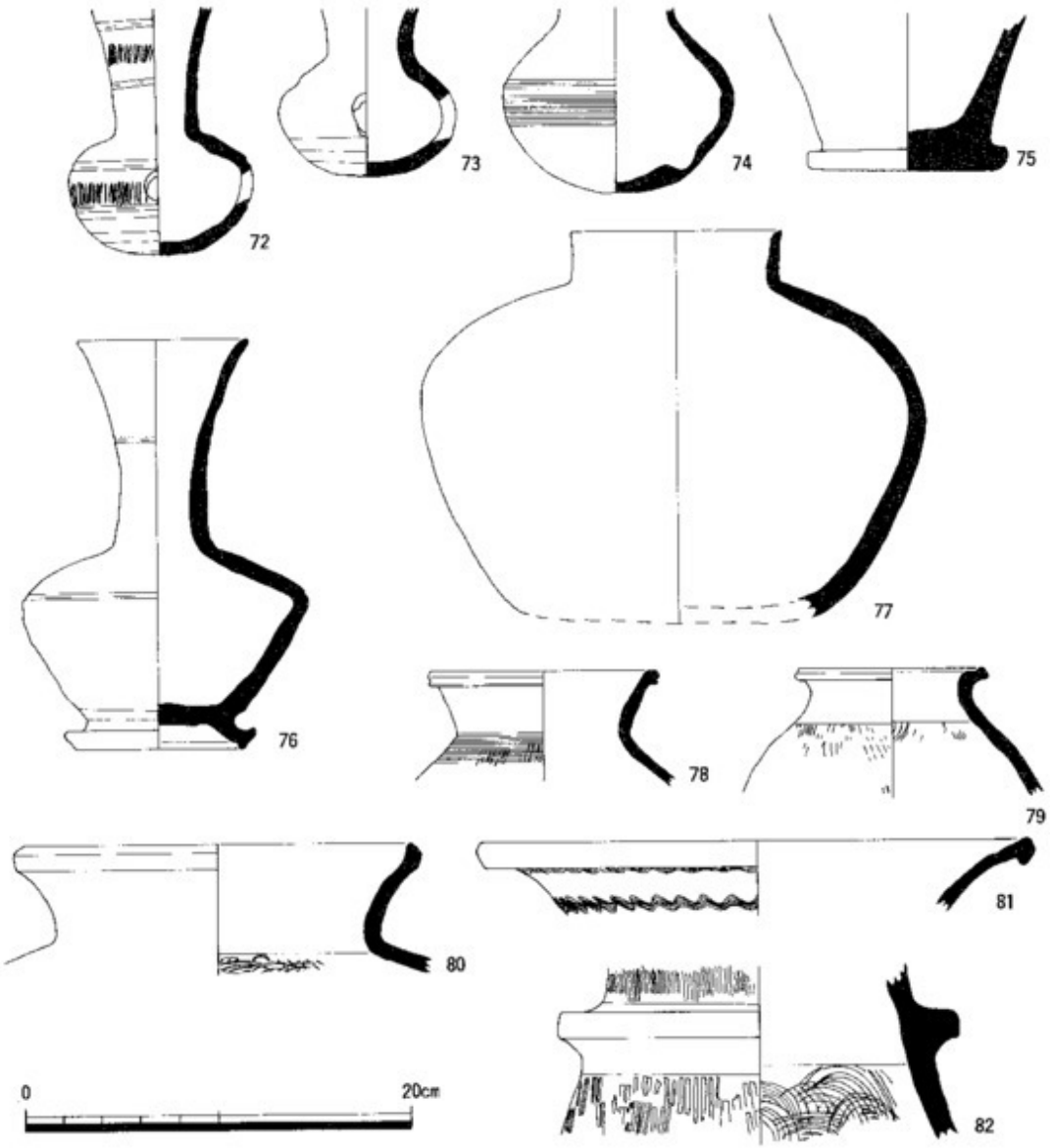


図－74　包含層出土遺物②

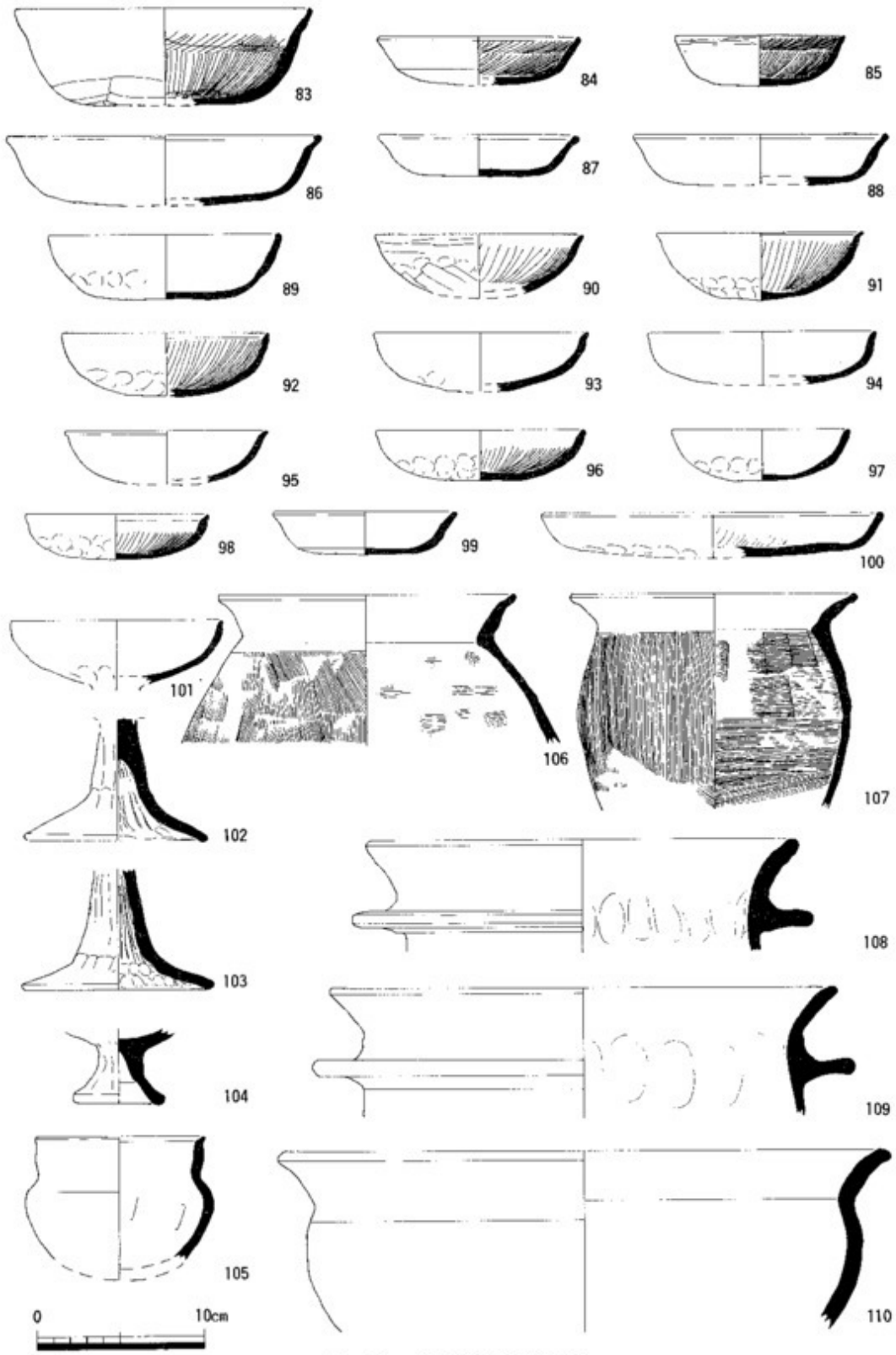


図－75　包含層出土遺物③

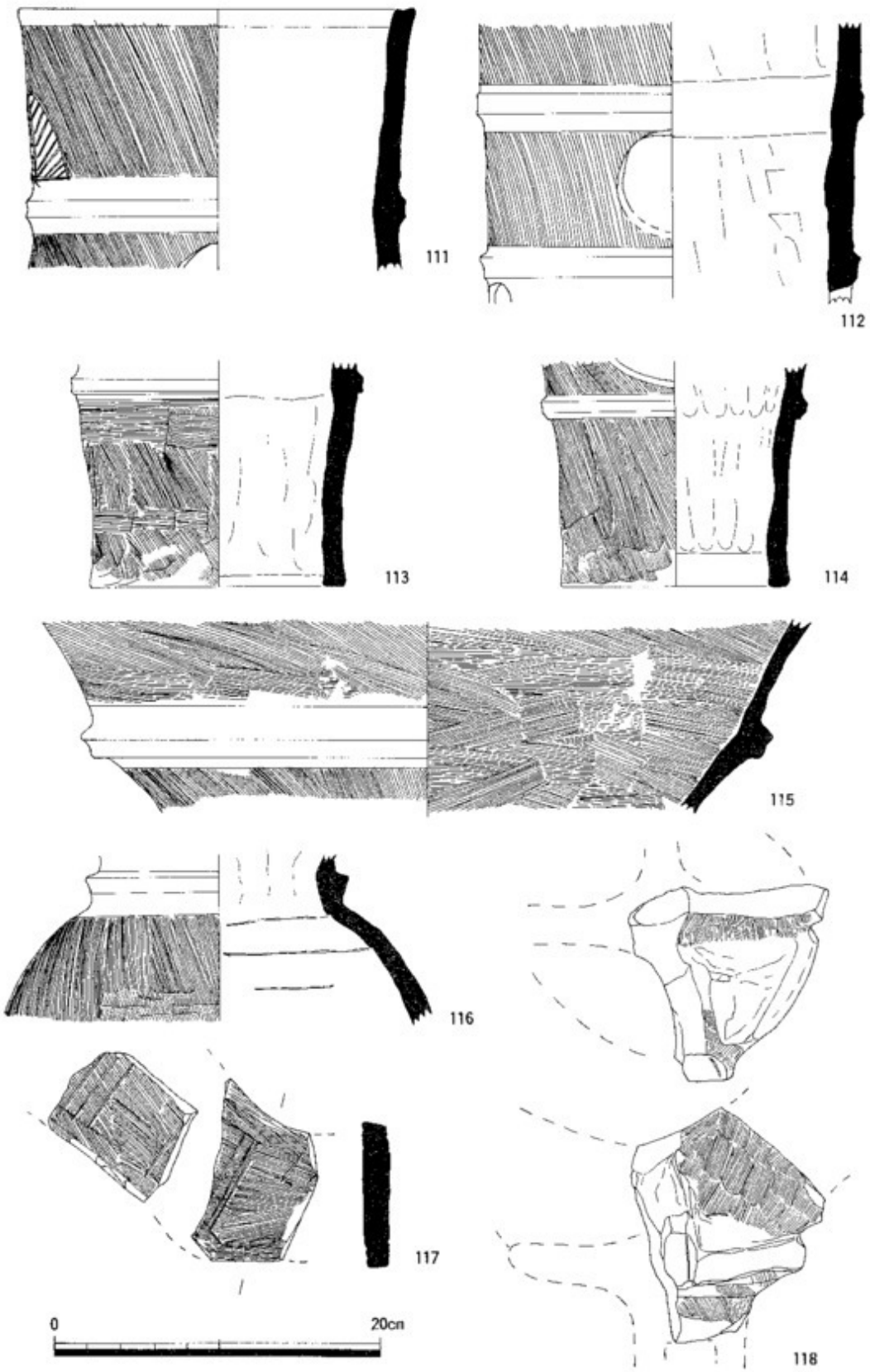
72・73は、甕。72には、頸部と体部に2条の凹線と、その間を埋める刺突文が認められるが、73には、それらは認められない。74は、小形の壺体部。75は、擂鉢。76は、台付長頸壺。ほぼ完形品であり、古墳に伴う遺物ではないかと考えられる。調査区の北端から出土しており、調査区の更に北側に、横穴式石室を内部主体とする古墳が存在するのではないだろうか。77は、短頸壺。蓋を伴うと思われる。78・79は、小形の甕、80・81は、大形の甕の口縁部。82は、須恵器であるが、器種は不明である。円筒埴輪と同様の凸帯がめぐり、体部は裾広がりになる。外面は、凸帯より上をタテハケ、下を平行叩き。内面は、凸帯より上をナデ、下には同心円の当具痕が残る。



図－76　包含層出土遺物④



図－77　包含層出土遺物⑤



図－78　包含層出土遺物⑥

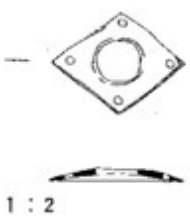
83～110は、土師器。杯（83～99）は、多数出土しているが、表面が剝離しているため、調整の不明なものも多い。放射2段暗文を施すものと、放射暗文が1段のみのものに大別できるが、いずれも、外面下反から底部にかけての調整は、指頭押圧が多い。これは、柏原市域全体の特徴であり、形態から7世紀前半代と考えられる杯においても、ヘラケズリよりも指頭押圧が多用される。同様に、外面のヘラミガキも省略されたものが多い。100は、皿。底部は、指頭押圧による調整。101～103は、高杯、104は、小形手づくねの高杯である。105は、小形の壺。丸底を呈すると考えられ、口縁部は、ほぼ直立する。体部外面ナデ、内面は板ナデ、106・107は、甕。いずれも、内外面共にハケメによる調整である。108・109は、羽釜。短い口縁と鍔を有し、胎土は、雲母を含む褐色の通有の胎土である。110は、鍋。把手を伴うと思われる。

111～118は、埴輪。いずれも古墳時代後期のものである。111は、円筒埴輪の口縁部。外面はタテハケ、内面はナデ、口縁部はヨコナデを施す。口縁部に、ヘラ記号と考えられる線刻が認められる。半円を呈する内部中央に直線が刻まれ、その直線から葉脈状に、左右それぞれ、斜め上方にのびる直線で、半円内が埋められている。112は、円筒埴輪体部。円形透孔は、各段の対向する位置に2個ずつ、段ごとに互い違いに穿たれる。113・114は、円筒埴輪底部。口縁部・体部の直径に比べると、底径がかなり小さいが、個体差によるものであろう。113の外面には、タテハケの後、2次調整として、部分的に継続するヨコハケが施されている。115は、朝顔形埴輪の頸部から口縁部にかけての一部である。内外面共に、非常に密なハケメを施す。116は、朝顔形埴輪の肩部から頸部にかけての破片である。頸部にも、凸帯がめぐる。外面はタテハケを施す。117・118は、蓋形埴輪の立飾りの部分である。117は、最上部の破片であり、2破片は、同一個体と思われる。ハケメによる調整の後、ヘラ描きによる線刻を施す。118は、立ち飾りの立ち上がる部分の破片である。下部を欠損するが、おそらく、中空の円筒状を呈し、笠部にソケット式に挿入されるものであろう。立ち飾りは、四方へのびている。

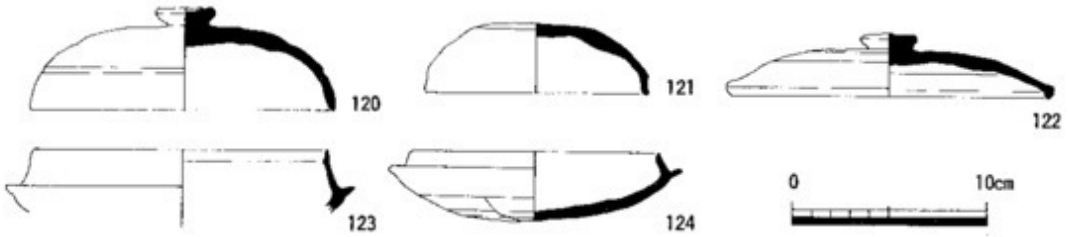
埴輪は、6世紀前葉を前後する時期であろう。土器は、6世紀後葉から8世紀中葉にかけての時期が考えられる。

次に、建物－11上層から出土した金銅製品について述べておく。建物－11周辺の平坦面からは、若干の土器が出土しているが、包含層は薄く、良好なものは認められない。しかし、時期は、他の包含層出土遺物と矛盾するものではない。

その中で、金銅製品(119)の出土は注目される。平面形は横長の菱形を呈し、断面は、やや内弯する。中央に直径11mmの円孔があり、この部分に、何らかの装飾が施されていたと考えられる。四隅には目釘孔と考えられる直径2mm前後の小円孔が貫通する。渡金の依存状態は悪い。用途は不明であるが、何かの装飾に使用されていたことは間違いないであろう。



図－79　包含層出土遺物⑦



図－80　包含層出土遺物⑧

120～124の須恵器は、建物－14～20の位置する平坦面から出土した遺物である。この周辺からの遺物の出土は、非常に少ない。

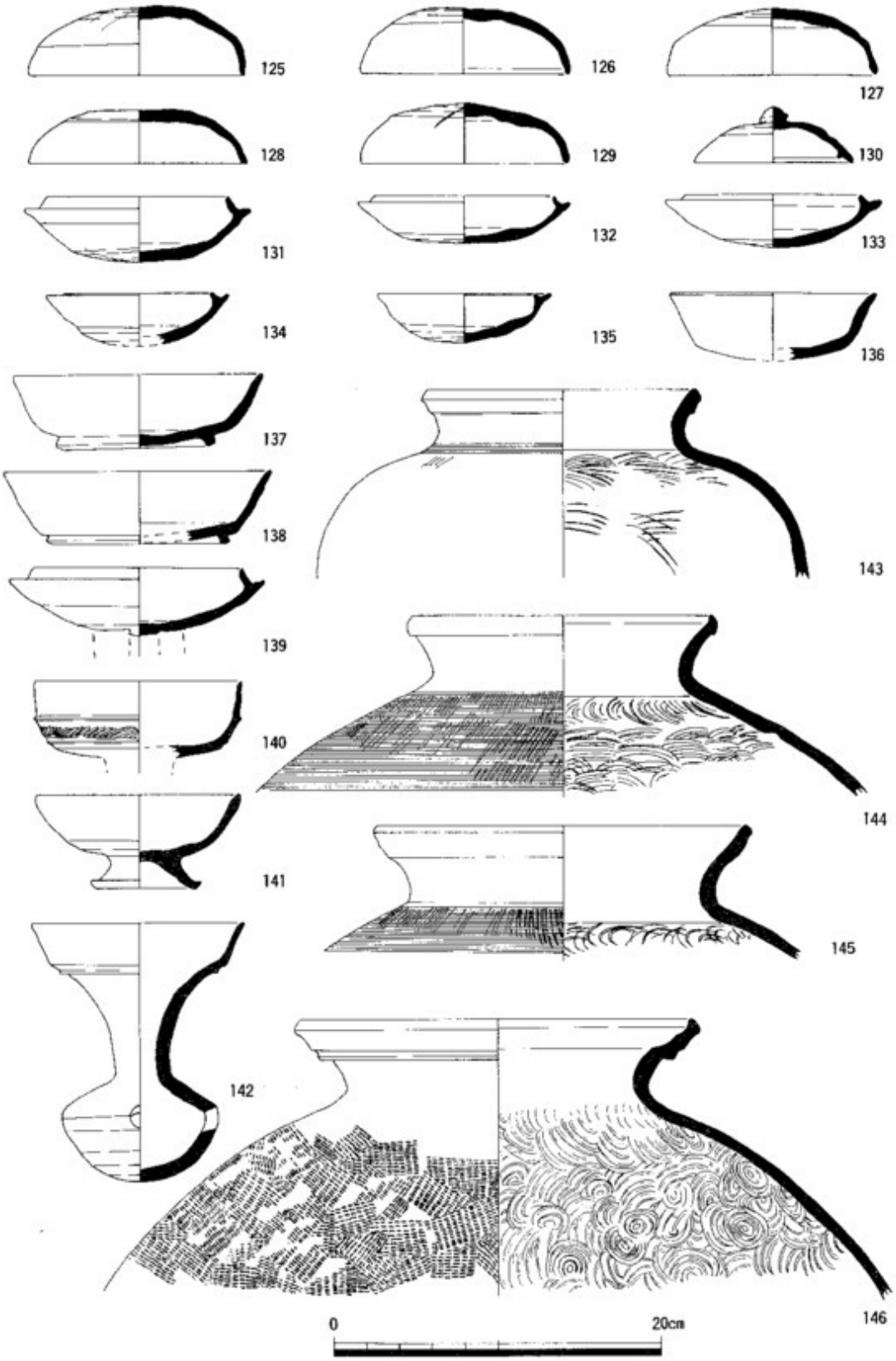
120は、有蓋高杯の蓋。121・122は、杯蓋。123・124は、杯身である。122を除いて、他の遺物は、比較的古い時期に属することが特徴としてあげられる。

125～162は、建物－25～30の位置する平坦面、およびその南西斜面から出土した遺物である。すなわち、建物－22～32による建物群での生活に伴う遺物と考えられるものである。

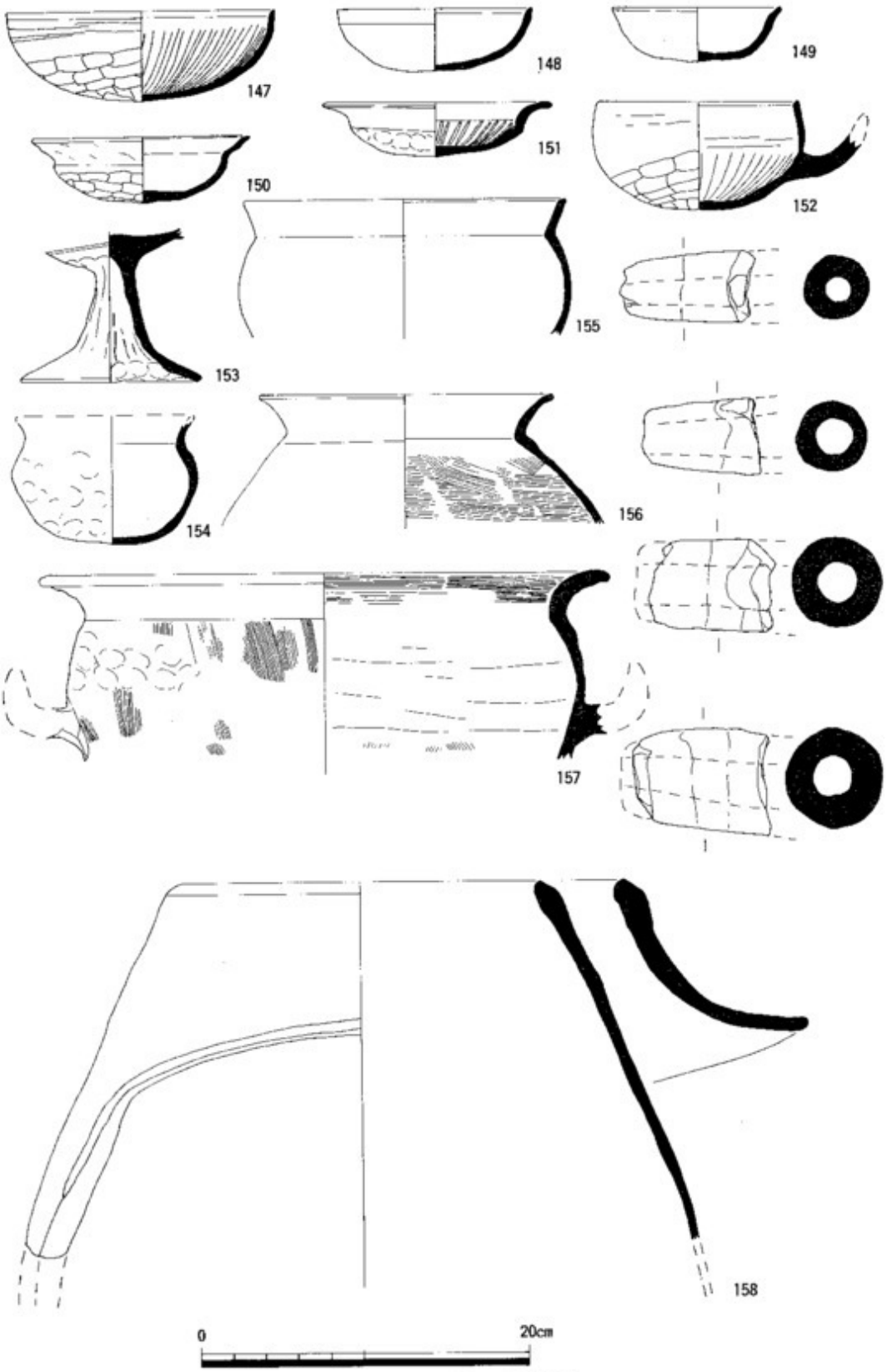
125～146は、須恵器。蓋杯(125～138)は、6世紀末葉から7世紀末葉頃のものであるが、7世紀前半代の蓋杯が多い。139～141は、高杯。140は、外面に2条の凸線がみられ、その間を刺突文で飾る。142は、口径が体部径を上まわる鉢。体部の装飾は見られない。143～146は、壺・甕の口縁から体部にかけてである。

147～158は、土師器。147～149は、杯。150・151は、椀。151の口縁部は、強く外反し、内面には、粗い放射暗文が施される。外面は、150がヘラケズリであるのに対し、151は指頭押圧である。152は、把手付の椀。細長い把手が取り付き、体部は半球形を呈する。内面には放射暗文が見られる。153は、高杯脚部。154は、小形の甕。口縁端部を欠損する。155・156は、甕。157は、把手付の鍋。外面は、ハケメと指頭押圧による調整。158は、移動式竈。下半を欠失するが、竈としては、残存状態の良好なものである。竈の破片は、今回の調査でコンテナ5箱分が出土しているが、図化が困難であるため、158のみを図化した。竈は、全て158に近い形態を示す。庇は曲げ庇であり、付け庇は見られない。脚は、焚口と背の三方に、太い脚が見られ、他の部分の器壁は非常に薄い。口縁部は肥厚し、端部は外傾する面をなす。この面は、ナデを施すものも見られるが、須恵器と同様の同心円叩きを施す例が多く、過半数を占める。このような竈は、柏原市域に広く分布しているが、その時期や分布範囲等については、不明な点が多い。(6) 口縁部以外は、ナデ、粗いハケメによって調整される。胎土は、羽釜と同じ、雲母を含む褐色の胎土である。

その他に、鞴羽口が出土している。直径は小さく、裾広がりにならず、円筒形を呈するものと思われる。鳥坂寺僧房の調査の際にも、鞴羽口が出土しているが、(7) 今回の調査では、建物－25・27・28付近でのみ出土している。おそらく、その年代は7世紀代に限定できると思われる。



図－81　包含層出土遺物⑨



図－82　包含層出土遺物⑩

159～211は、建物－33～41周辺で出土した遺物である。須恵器、土師器、埴輪、屋瓦が見られる。今回の調査範囲内で、最も標高の低い部分に当たり、農道を挟んで西側では、鳥坂寺の僧房が検出されている。

159～175は、須恵器。杯蓋(159～163)、杯身(164～170)は、7世紀後半代のものが多い。171は、円面硯の破片であり、脚部を欠損する。172は、台付長頸壺。焼きひずみが激しい。肩部に1条の波状文がめぐる。173～175は、壺の口縁部である。

176～198は、土師器。176～185は、杯。7世紀代全般にわたる。186は、皿。187～189は、高杯。189は、杯内面にラセン状の暗文と外側に斜放射暗文が施される。190・191は、小形の手づくねによる高杯。192は、土錘。両端が狭まった小形品であり、細い円孔が貫通する。両端は、紐ずれによるものかと考えられるが、明らかでない。他に漁具の出土は見られない。

193～195は、下ぶくれの体部を呈する小形甕。いずれも、外面ハケメ、内面ユビナデによる調整である。196は、甕。197は、羽釜。198は、鍋である。

199・200は、形象埴輪である。199は、蓋形埴輪の立ち飾り部分である。下半は、中空の円筒状を呈し、笠部にソケット状に挿入されるものであろう。四方へのびる立ち飾りは、一部に線刻が残るものの、大半を欠損する。200は、家形埴輪の屋根部分であろう。上面、側面2面、下面4方向からの図を示したが、注目されるのは、下面の図のように、柱が円柱である点である。円柱は大部分を欠損するが、直径4.7cm前後で、中空である。屋根と推定される部分は、2段になる。また、側面の一方は、横にかなりのびるようである。

201は、凝灰岩製の石製品である。形態は、下法にくびれ状のカットを施した砲弾形であり、断面は円形である。下部は、断面が長方形をなし、ソケット状に何かに挿入されたものと思える。整形は非常に丁寧であるが、凝灰岩であるため、風化が激しい。凝灰岩は、白色～黄色を呈し、松脂岩等の礫を含んでいる。

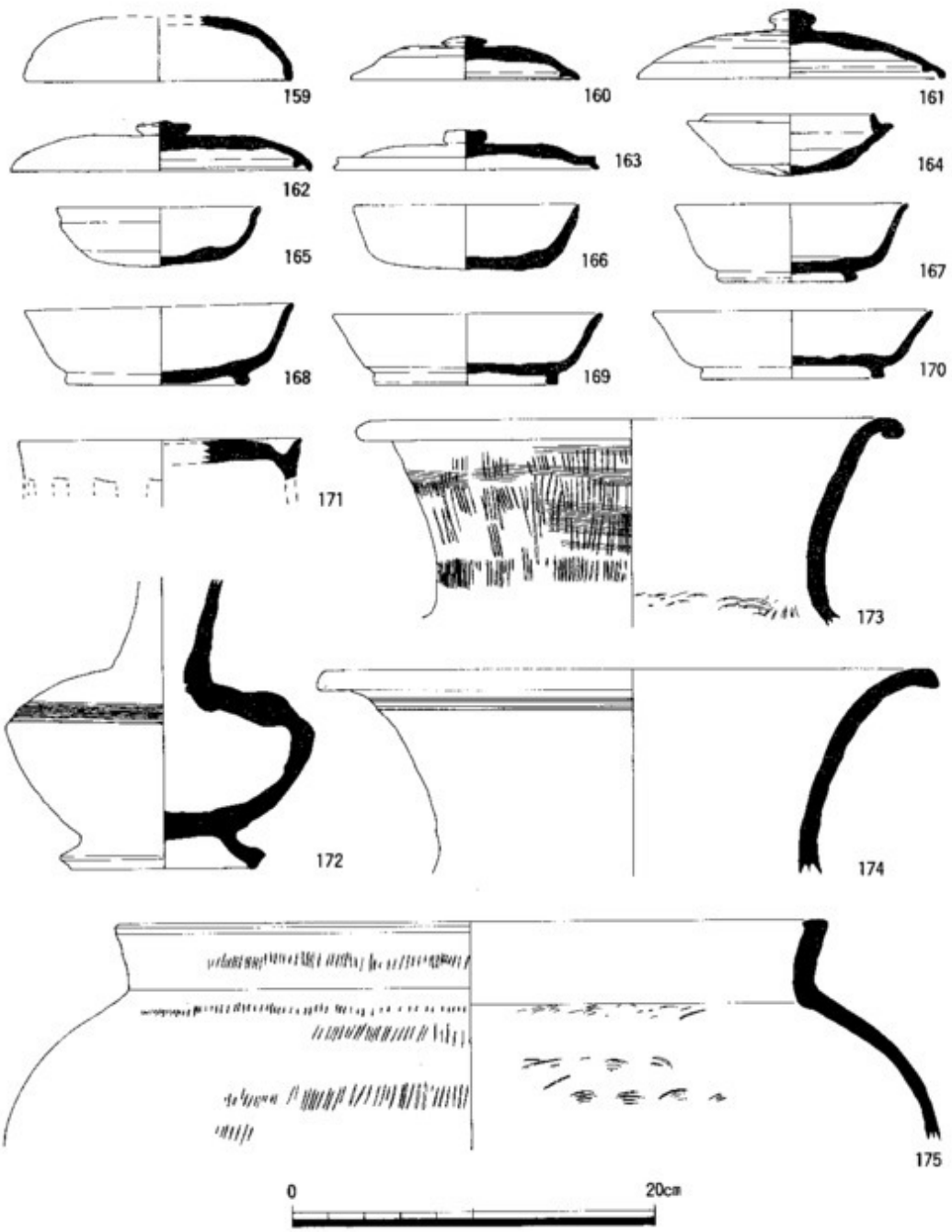
202～211は、屋瓦である。202は、単弁七弁蓮華文軒丸瓦。各弁は子葉を伴い、弁間には珠文が見られる。中房は大きく、蓮子は1＋8。外区は無文である。大阪府教育委員会による報告書のⅧ類に該当する[8]。203は、均正唐草文軒平瓦の小片である。瓦当面中央部から、3方向にペン先形の文様がのび、細い唐草がそれを巻き込むような文様になると思われる。外区は無文。瓦当面の幅は、推定4.5cm。内区の幅、2.7cm。上外区の幅0.9cm、高さ0.7cmである。凹面は、10本/cmの布目、糸切り痕が残る。凸面は、ナデを施しており、叩きは不明。鳥坂寺周辺からは、これまでに、重弧文軒平瓦しか出土しておらず、初見の資料である。

208は、丸瓦。凸面は縄目叩きをすり消している。

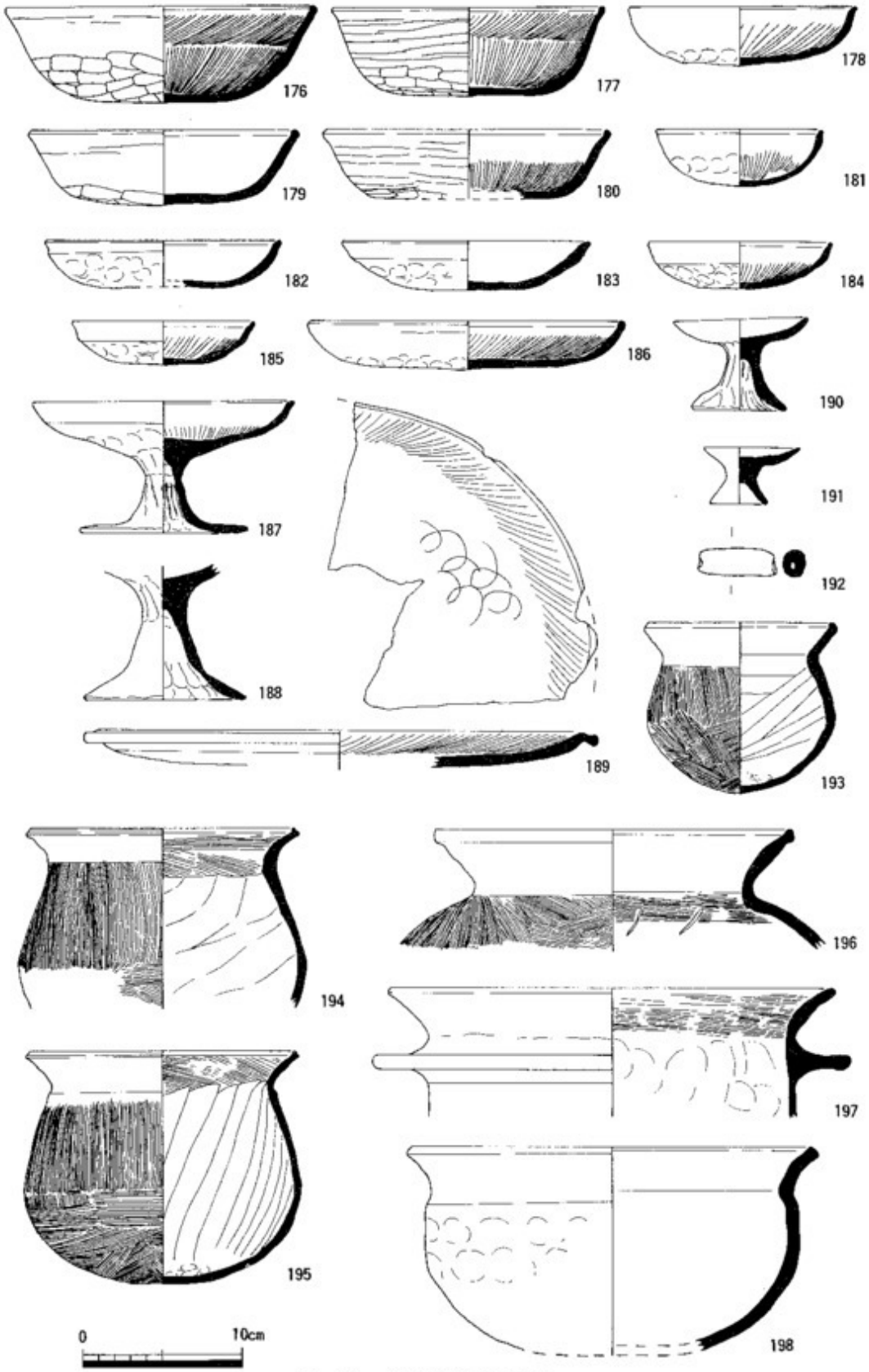
204～207、209～211は、平瓦。204は、平行線を綾杉状に複雑に組み合せた叩きを施す。205は、斜格子状の叩きを施す。凹面には、布の綴じ合せの痕跡が残る。それぞれ大阪府教育委員会の報告書のD－10類、D－4類に対応するものと思われる[9]。

206・207、209～211は、縄目叩きを施した平瓦である。210は、広端縁以外の縄目叩きをナデ消している。206の側縁には、凹面から連続する布目が見られる。207の凸面には、土師器片が混入している。土師器片は、底片4.5cm、高さ2.8cmの三角形状を呈し、焼成前の粘土内に混入していたものである。204・205・209・210は、桶巻作り、他は一枚作りである。

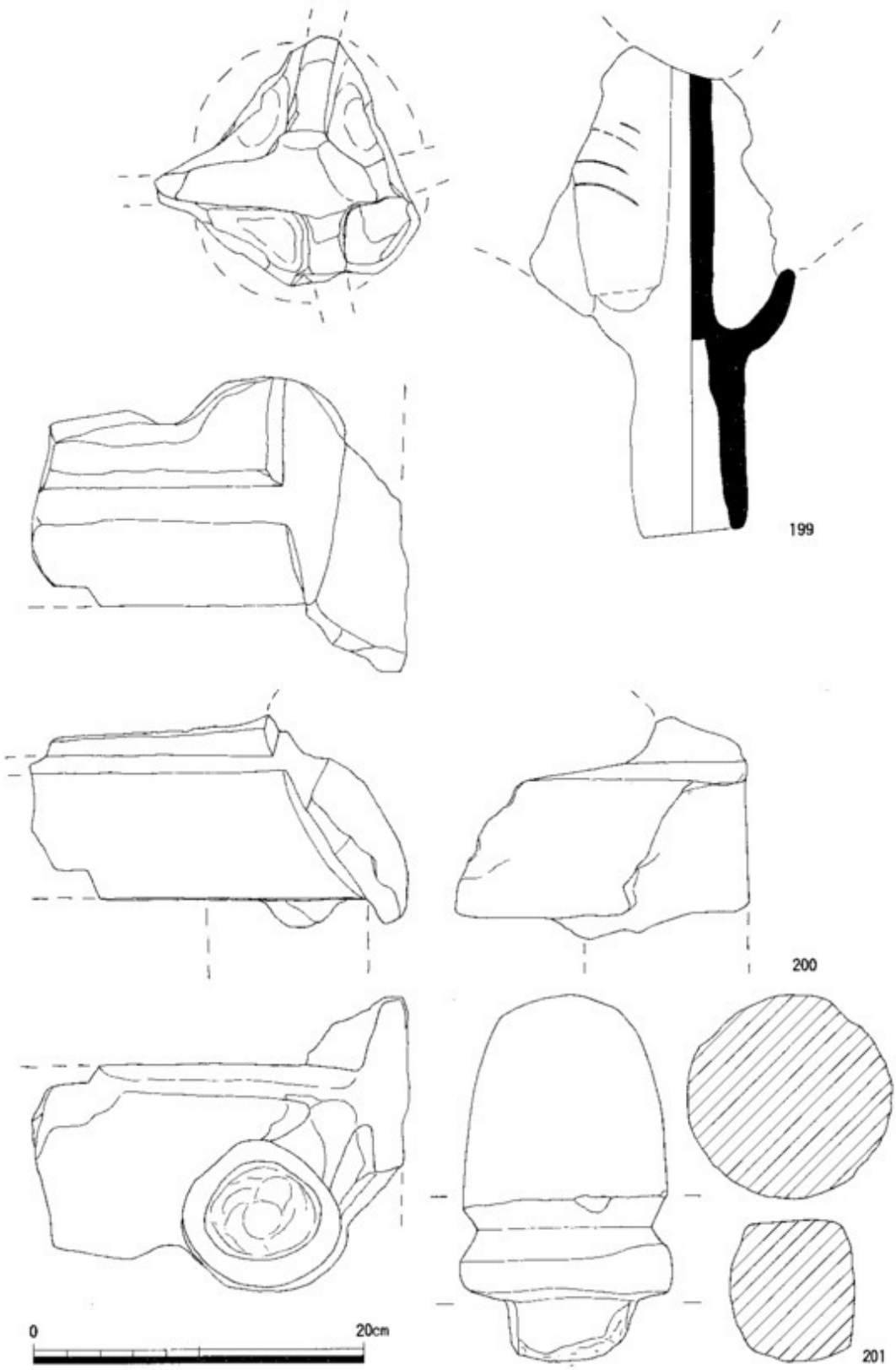
これら以外に、総重量3.2Kgになる鉄滓が出土している。



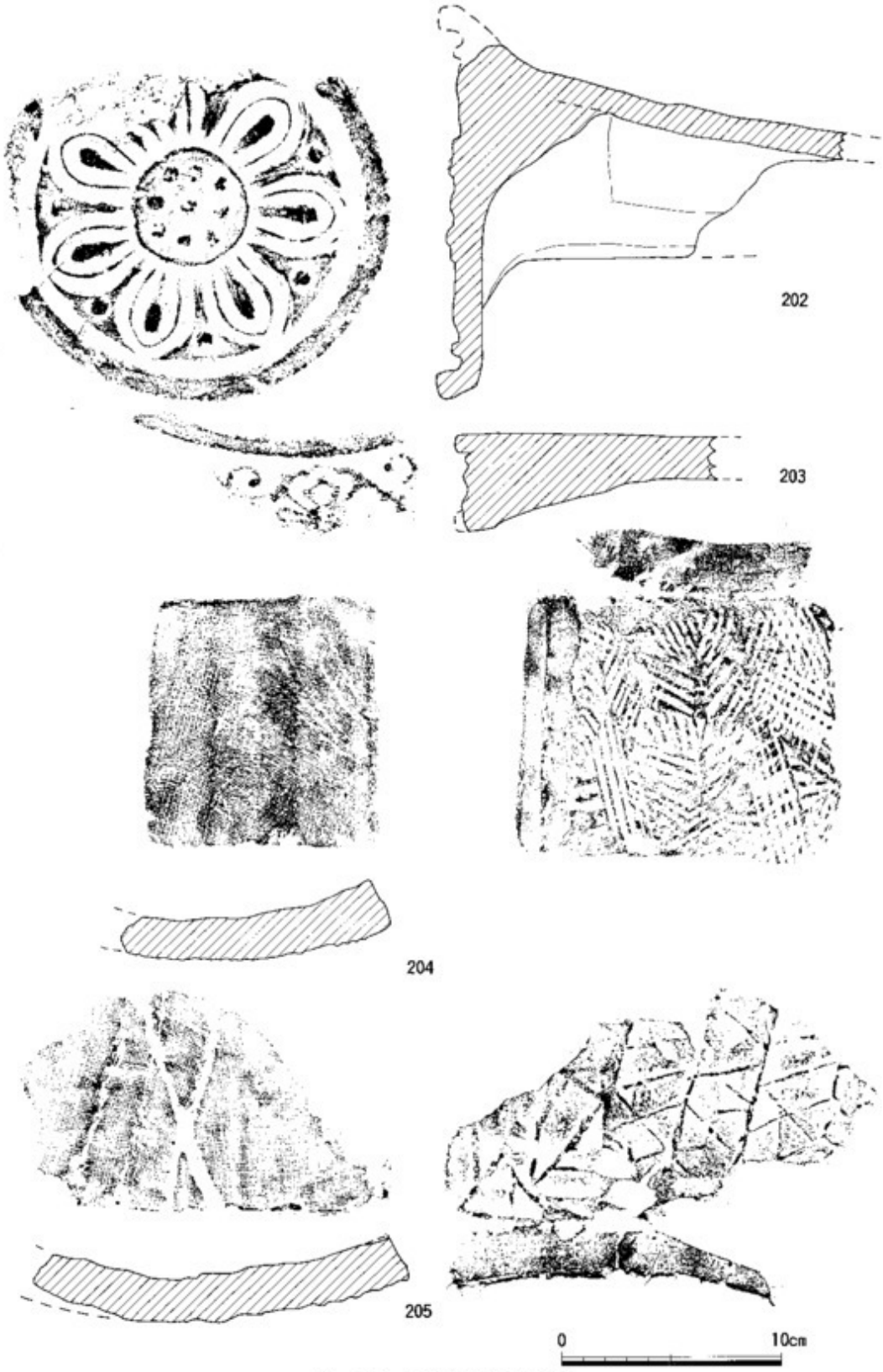
図－83　包含層出土遺物⑪



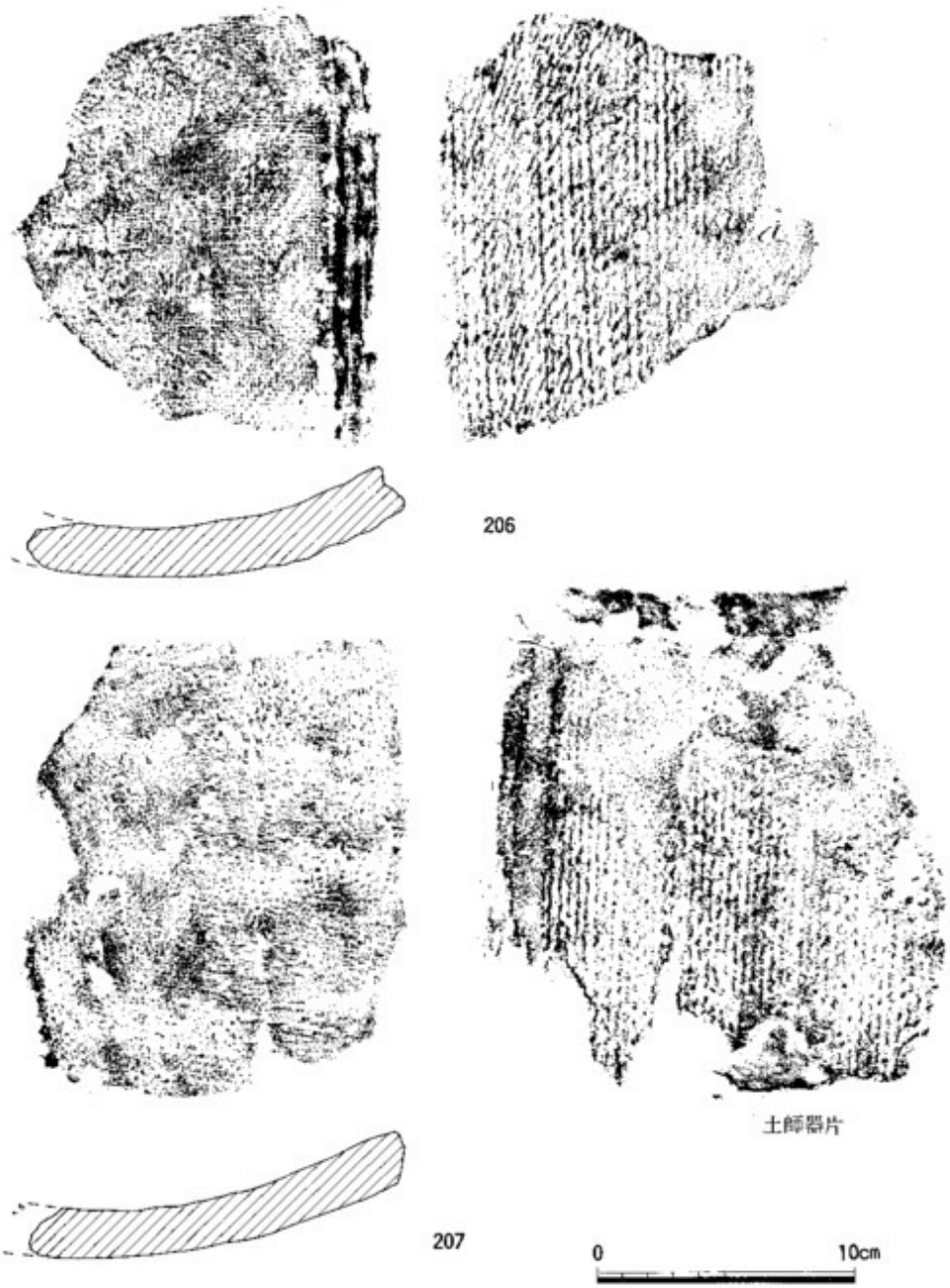
図－84　包含層出土遺物⑫



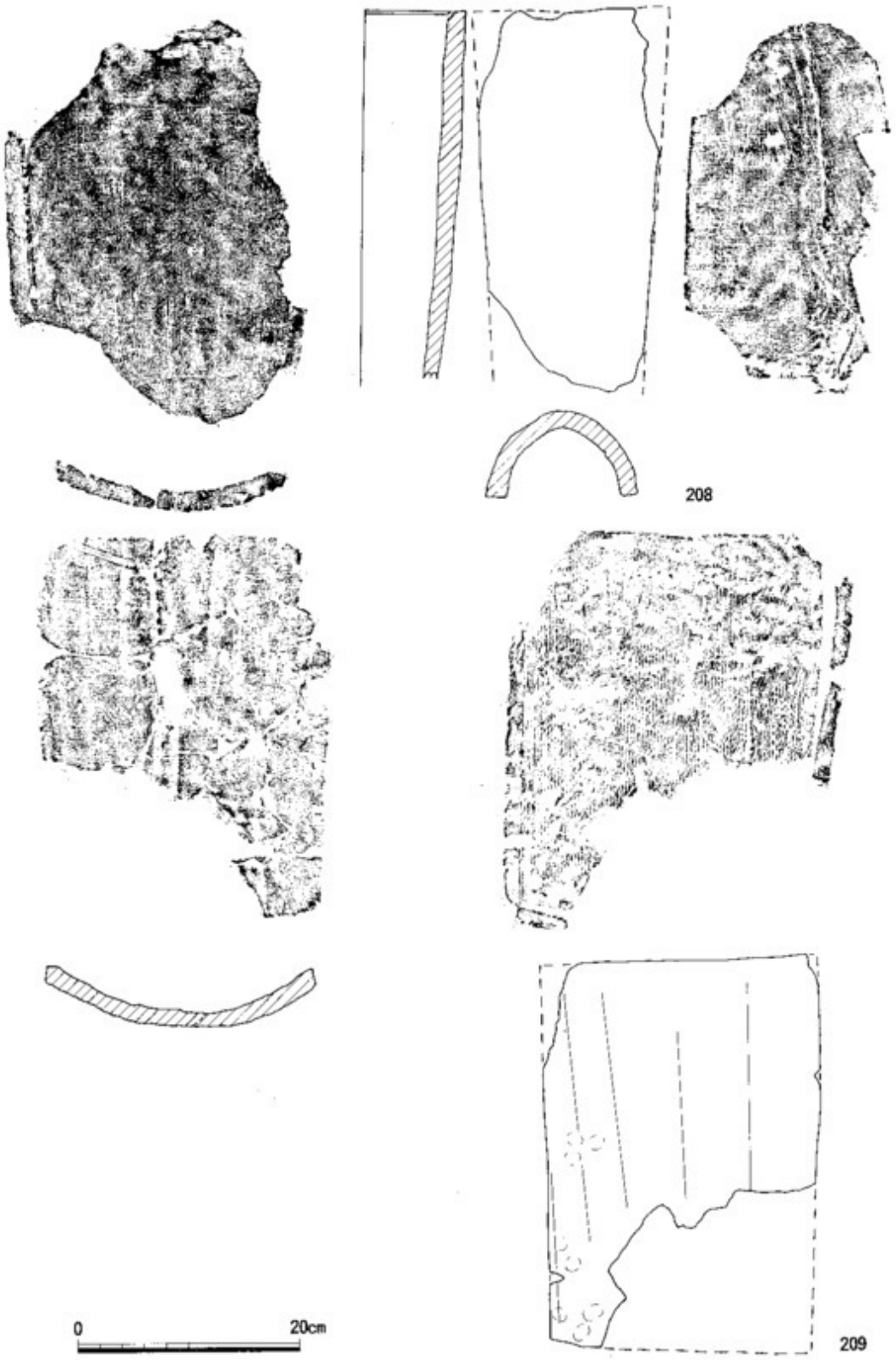
図－85　包含層出土遺物⑬



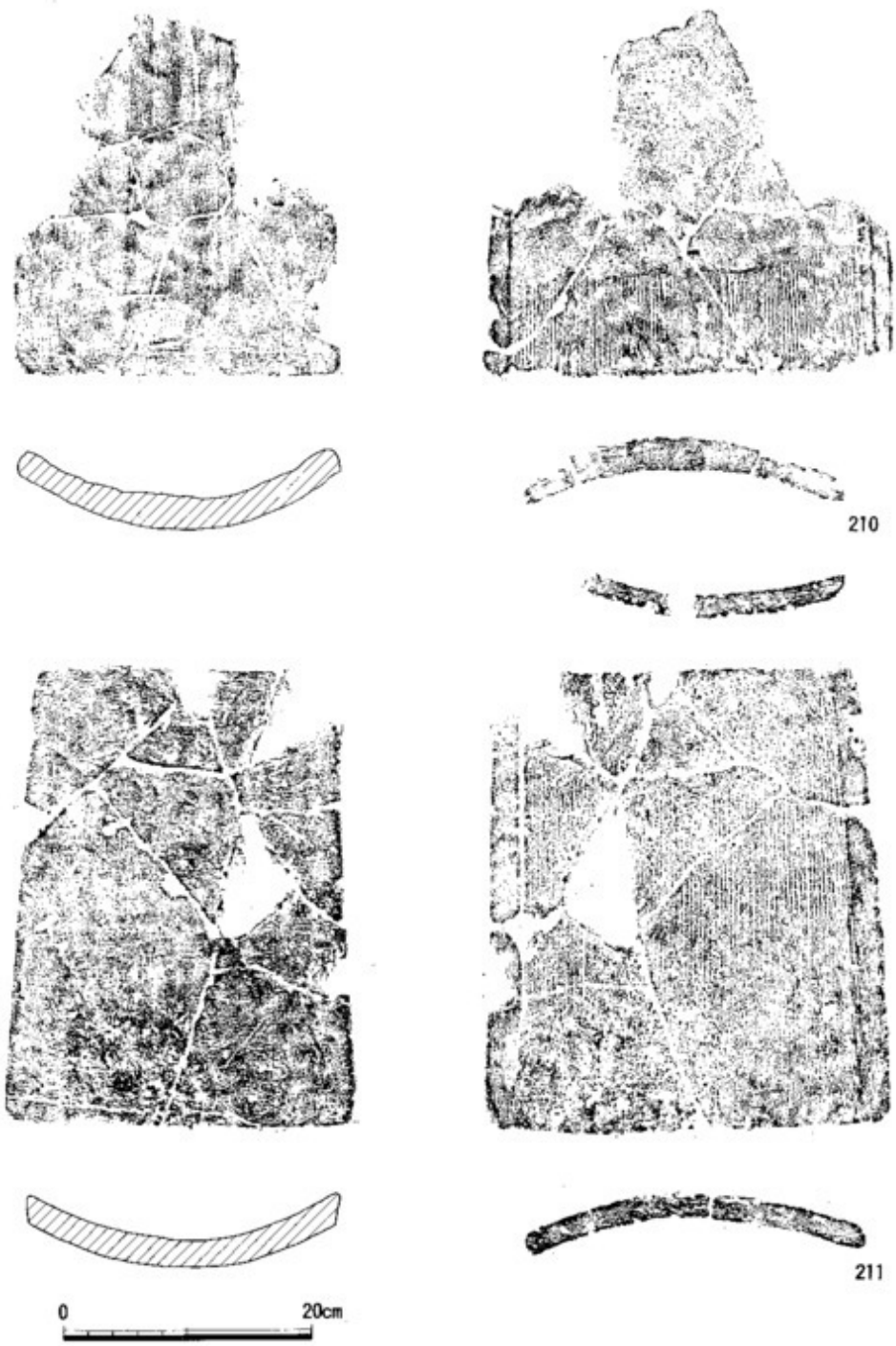
図－86　包含層出土遺物⑭



図－87　包含層出土遺物⑮



図－88　包含層出土遺物⑯



図－89　包含層出土遺物⑰

平安～鎌倉時代の遺物

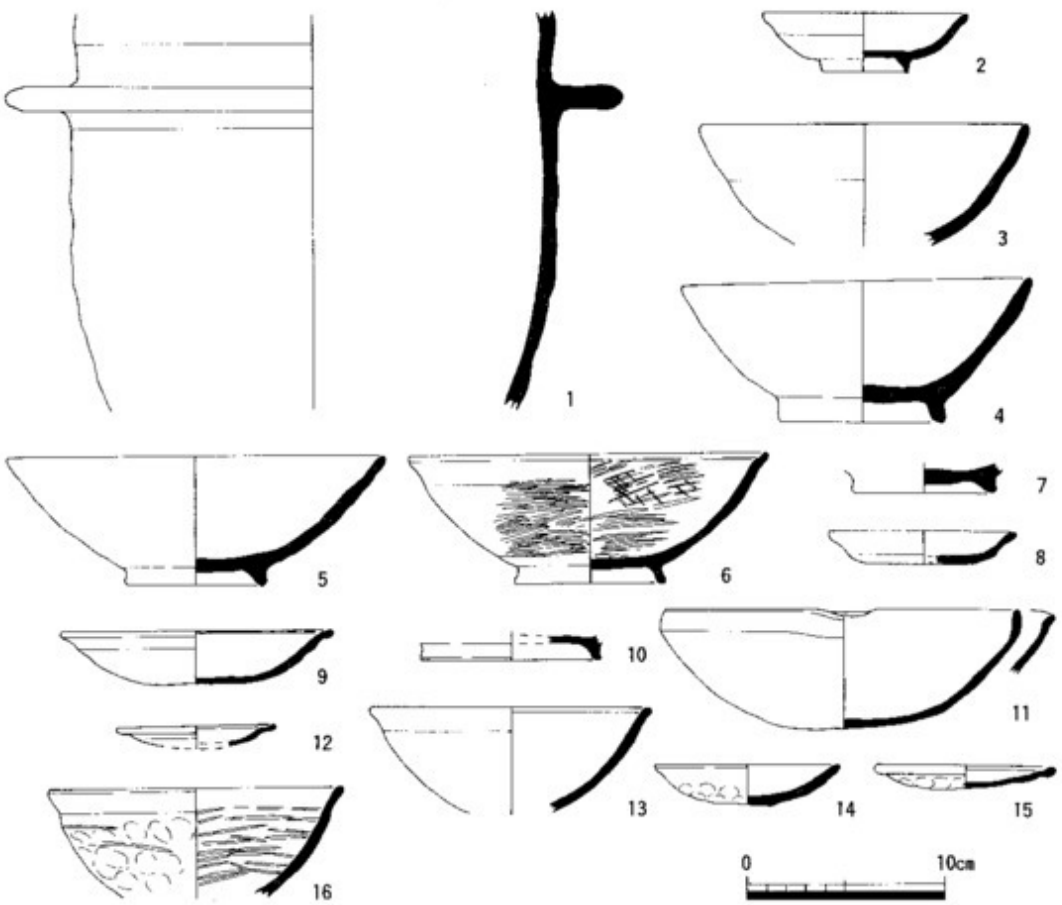
A．建物

建物－43　ピット－328から、土師器（1・2）と黒色土器（3～6）が出土している。土師質羽釜（1）は、口縁部の形態が不明である。内外面共に、丁寧なナデ。2は、土師器小形椀。全面ナデ調整。3～6は、黒色土器の椀。3～5は、内面のみ炭素が吸着、6は、内外面共に炭素が吸着する。3～5は、表面が磨滅しており、ミガキは明らかでない。6は、外面に横方向のヘラミガキ、内面は部分的に斜格子状となる横方向のヘラミガキを施す。

建物－44　ピット－344から、土師器杯の高台部分（7）が出土している。高台は貼り付けで、ナデ調整。

建物－45　ピット－351から、黒色土器の小皿（8）が出土している。内外面共に、炭素が吸着し、ナデで仕上げる。

建物－46　ピット－357から、土師器杯（9）と黒色土器椀の高台（10）が出土している。土師器杯は、器高が低く、口縁端部はやや外反する。黒色土器椀は、内面のみ、炭素が吸着する。高台は、やや低い。



図－90　ピット内出土遺物

B．棚

棚－3　ピット－372から、土師器の片口鉢（11）が出土している。口縁部は、内弯気味に直立する。全面磨滅のため、調整不明。

棚－4　ピット－377から、土師器小皿（12）、黒色土器椀（13）が出土している。土師器小皿は、口縁端部が外反した後、直立する。黒色土器椀は、口径に比して、器高が高い。内面のみ炭素が吸着する。

C．その他のピット

建物、棚を構成しないピットから出土している遺物として、14～16が出土している。おそらく、これらのピットも、建物を構成するものと思える。

14は、土師器小皿。ピット－380から出土している。口縁端部は、尖り気味になる。外面底部は、指頭調整。

15も、土師器小皿。ピット－381から出土している。口縁端部は、外反した後、肥厚気味に直立する。外面底部は指頭調整。12と同形態である。

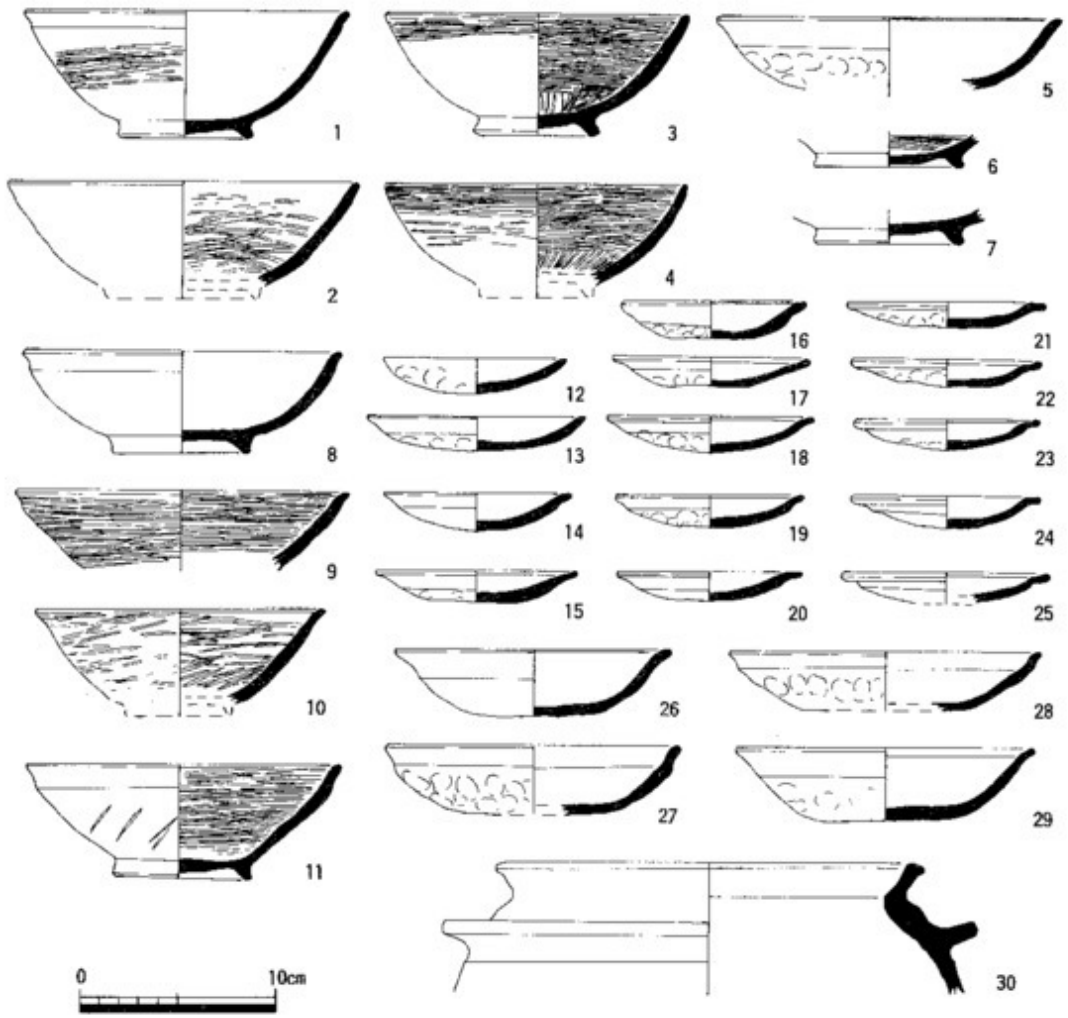
16は、黒色土器椀。ピット－382から出土している。内面のみ、炭素が吸着する。外面は、指頭調整で、部分的にヘラミガキを施す。内面も、横方向のヘラミガキを施す。

建物・棚等のピット内から出土した遺物には、須恵器は、ほとんど含まれず、瓦器は全く含まれない。黒色土器椀、土師器小皿を中心とする。年代は、10世紀中葉から11世紀前半頃と思われ、建物・棚等の年代も、その時期と考えられる。

D．土壙

土壙－5　図－91に示した1～30の遺物が出土している。1～7は、内面にのみ炭素が吸着した黒色土器の椀。1～4は、内外面にヘラミガキを施すが、1の内面、2の外面のヘラミガキは不明瞭。3・4の見込みには、暗文が施される。5には、ヘラミガキが認められず、外面には指頭圧痕が顕著である。8～11は、内外面共に炭素が吸着した黒色土器の椀。いずれも、内外面に細かいヘラミガキが施される。10・11の口縁部内面には、沈線がめぐる。ピット－328出土の黒色土器椀と比較すると、土壙－5出土の杯は、やや浅く、高台の低いことが指摘できる。土壙－5出土の杯のほうが、若干、古い特徴がみられる。

12～25は、土師器小皿。小皿は、体部からそのまま口縁部に至るタイプ（12～15）、口縁部に強いヨコナデを施し、口縁端部が外反するタイプ（16～21）、口縁端部が水平に近く外反した後、直立気味に肥厚するタイプ（22～25）みられる。いずれも、ナデ調整を基調とし、外面底部を指頭調整するものである、技法的に大きく異なるものではない。しかし、12～15は、胎土がやや粗く、石英や長石の砂粒を含んでいるのに対し、22～25は、非常に精良な胎土を呈し、器壁も薄く、焼成温度もやや高いようであり、乳白色の色調のものが多い。16～21は、両者の中間的な胎土、器壁厚となり、三者の製作地の違いが想定される。



図－91　土坑－５出土遺物

26～29は、土師器の杯。26・29は、口縁部が外反し、27・28は、口縁部に強いヨコナデを施す。いずれも、直径に比して、器高は低い。27～29の外面には、指頭圧痕が顕著に残る。

30は、土師質の羽釜。口縁部は、直角に屈曲する。鍔は短く、やや上向きに取り付く。内外面共に、ナデによって仕上げるが、内面には、粘土紐の継ぎ目が明瞭に残っている。

土坑－５の全体の形状や性格については不明であるが、これらの遺物に時期差は認められず、一括遺物として扱うことができる。黒色土器椀の形態等からは、ピット－328出土遺物より、若干、時期が溯ると考えられ、10世紀中葉から後葉にかけての年代と考えられる。

E．溝

溝－7　1～7の遺物が出土している。青磁椀（1）の横に、2～6の順に重ねられた状態で土師器小皿と瓦器椀が出土している。その更に横から土師質羽釜（7）の破片が出土している。これらの遺物は、意識的に埋置されたものであると考えられる。

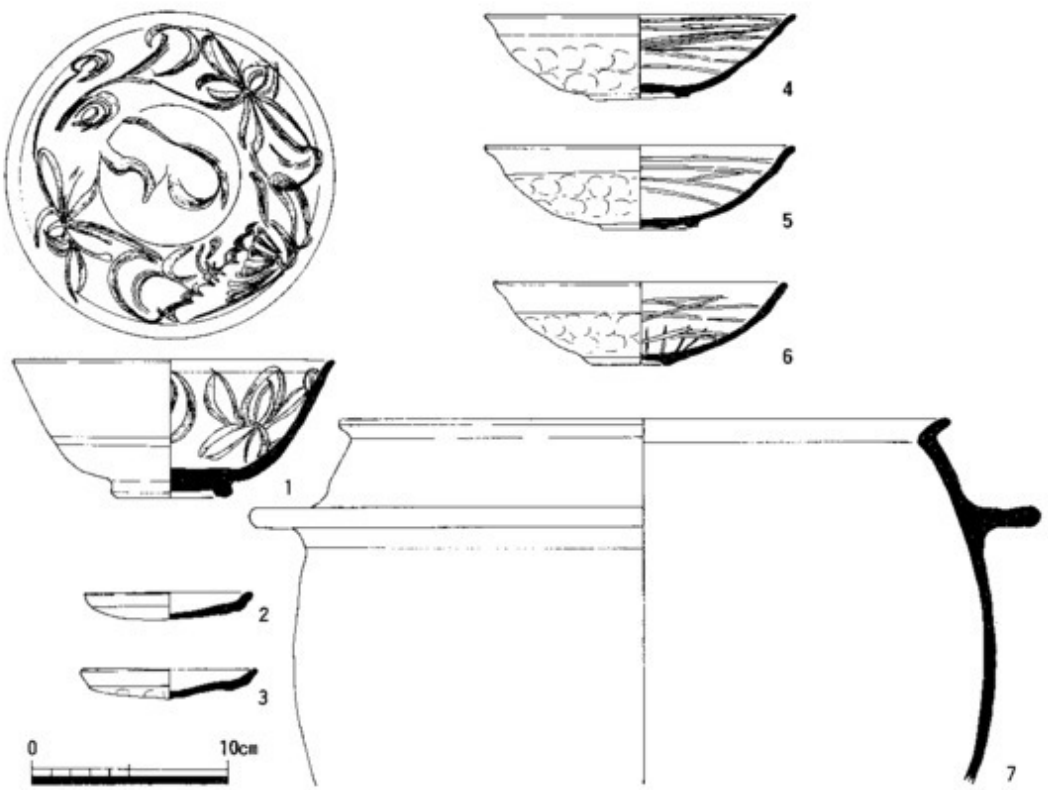
青磁椀（1）は、直径16.2cm、器高7.1cmを測る。内面に片切彫の花文が3単位施される。淡灰褐色の胎土に、内面と外面高台畳付まで緑色の釉が施釉される。龍泉窯系の中国陶磁である。

2・3は、土師器小皿。口縁端部は、やや直立気味となる。外面指頭調整。

4～6は、瓦器椀。いずれも、器高が低く、高台も低い。内面には、間隔の疎な横方向のヘラミガキが施される。6の見込みには、平行暗文が見られる。口縁部はヨコナデをし、外面は指頭圧痕が多数残る。外面のヘラミガキは認められない。

7は、土師質羽釜。体部は丸味を帯び、口縁部は直角に屈曲し、端部は丸くおさめる。鍔は薄く、ほぼ水平に取り付く。鍔端部は丸い。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整。

これらの遺物は、一括遺物であり、その年代は、13世紀後半頃と推定される。中国製青磁と瓦器椀が伴出し、興味深い資料である。



図－92　溝－7出土遺物

F．遺物包含層

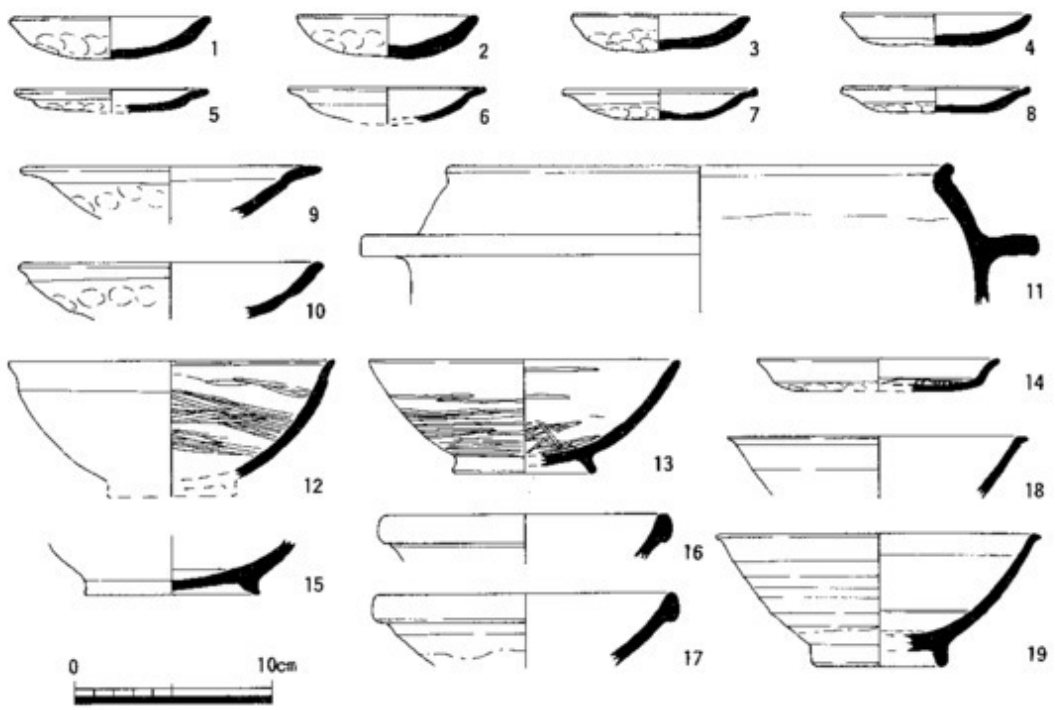
平安～鎌倉時代の遺物は、建物－42～47周辺、建物－９周辺、建物－33～41周辺で出土している。古墳～奈良時代の遺物に比して、出土量は遙かに少なく、時期の偏りも認められる。

１～19は、建物－42～47周辺から出土した遺物である。１～８は、土師器小皿。１～４は、器壁が厚く、胎土はやや粗、体部から滑らかに口縁部に至るタイプである。５は、口縁端部が水平に外反するタイプ、６～８は、器壁が薄く、胎土は密、口縁部は外反した後、直立気味に肥厚するタイプである。９・10は、土師器杯。９の口縁部は強く外反し、10の口縁部は、体部から続き、端部を丸くおさめる。どちらも、外面に指頭痕が残る。11は、土師質羽釜。口縁端部は丸くおさめる。鍔は水平に取り付き、断面は長方形に近い。

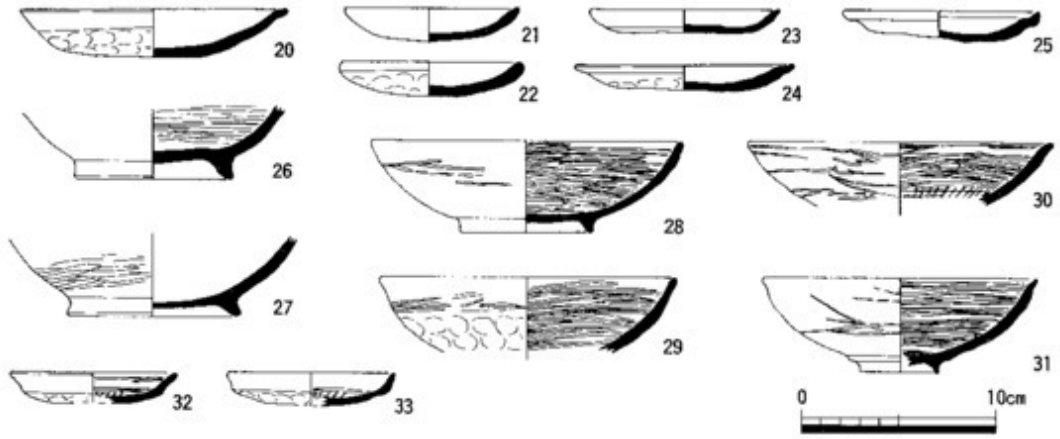
12・13は、黒色土器の椀、どちらも、内外面に炭素が吸着し、内外面共に、細かいヘラミガキを施す。14は、黒色土器の小皿。内外面に炭素が吸着する。底部から立ち上がった口縁部は、端部で外反する。内面見込みにヘラミガキを施し、外面底部は指頭調整。

15は、緑釉陶器の椀底部である。16～19は白磁椀。16・17の口縁部は玉縁となり、18・19は端反りの口縁部である。19の外面は、細かい回転ヘラケズリが施され、内底面には１条の沈線がめぐる。

これらの遺物の中で、土師器・黒色土器は同時期と考えられ、建物に平行する時期である。白磁は、やや時期が下り、溝－７に平行する時期であろう。祭祀関連の遺物であろうか。



図－93　包含層出土遺物①



図－94　包含層出土遺物②

20～33の遺物は、溝－3斜面下から建物－9にかけての範囲の包含層から出土した遺物である。この範囲内には、平安～鎌倉時代の遺構は認められず、溝－7や建物－42・43周辺の遺構に伴う遺物が転落したものと思える。

20は、土師器杯。口縁部は、やや外反する。21～25は、土師器小皿。24は、器壁が厚く、口縁端部につまみ上げるようなヨコナデを施す。類例の少ない形態である。

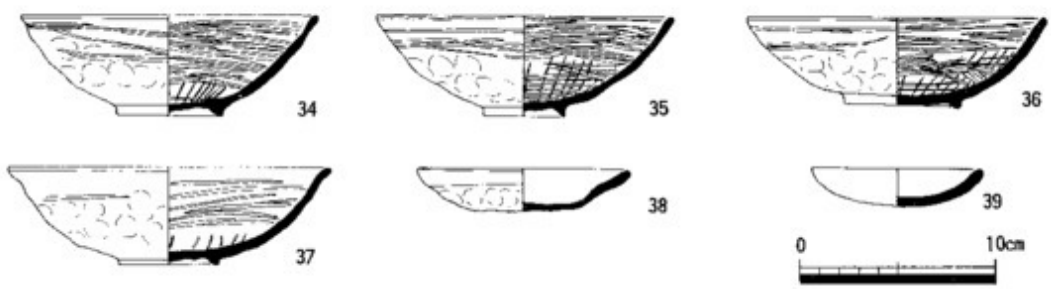
26・27は、黒色土器椀。26は、内面のみ炭素吸着、27は、内外面共に炭素が吸着する。

28～31は、瓦器椀。28・30は、見込みに平行暗文、31はラセン暗文を施す。32・33は、瓦器の小皿。見込みに平行暗文、内面にヘラミガキを施し、外面は指頭調整。

34～39の遺物は、調整区西端の建物－33～41周辺で出土した。

瓦器椀（34～37）は、調査区最西端近くから出土。いずれも、低い高台を有し、外面のヘラミガキは雑、指頭痕が顕著である。34～36は格子暗文、37は平行暗文を、それぞれ見込みに施す。

38・39は、土師器小皿。38は建物－37上層から、39は建物－41上層から出土している。38はやや大きく、口縁部は弱く屈曲し、端部でやや肥厚する。外面指頭痕が残る。39は、器壁が厚く、端部は丸くおさめる。



図－95　包含層出土遺物③

註

（1）柏原市教育委員会『高井田遺跡Ⅰ』1986　P.44、図－27の1番の土器。

（2）同上　P.44　図－27の2・3番の土器。

（3）柏原市教育委員会『鳥坂寺』1986　P.63～65

（4）柏原市教育委員会『高井田横穴群Ⅰ』1986　P.26、図－21の12・14番の土器。

（5）同上　P.43　図－39の5番の土器。

（6）田中久雄「太平寺・安堂遺跡」『柏原市所在遺跡発掘調査概報――大県遺跡、太平寺・安堂遺跡――1984年度』柏原市教育委員会　1985

柏原市教育委員会『鳥坂寺』1986　P.95

（7）柏原市教育委員会『鳥坂寺』1986　P.88～89

（8）大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』1968

（9）同上

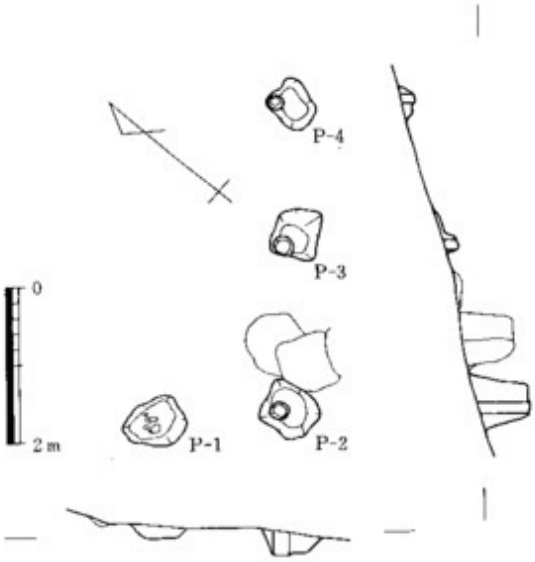
第4章　第3次調査の成果

1．遺構

第3次調査区は、1983・84年度調査区の東側、第2次調査区の南側に位置する。盛土予定地であったが、1974年度の大阪府教育委員会による平尾山古墳群分布調査の際に、横穴が1基報告されており、その確認のために、調査を実施することにした。この横穴は、平尾山古墳群安堂支群第7支群1号墳とされ、南西に開口する横穴と報告されているが、内部についての記述は全く見られない。（大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』1975）

第3次調査は、1986年4月1日から8日まで実施し、調査面積は、約630㎡である。第2次調査区と同様に、包含層の堆積は、ほとんど認められず、盛土を除去すると、明黄褐色砂礫土の地山が表われる。地山面で建物2棟を含むピット30、土坑2、溝2を確認した。時期を明確にできる遺構は少ないが、少量の遺物から、いずれも7世紀代の遺構と考えられる。しかし、横穴は確認できなかった。地山は、全て砂礫土、もしくは粘質土で凝灰岩は全く認められない。多少の削平を考慮しても、第3次調査区内に横穴が存在したことは、あり得ないであろう。むしろ、第2次調査区へ至る崖面の一部に、凝灰岩層が確認されており、現在の道路から第2次調査区へ至る間には、横穴が存在した可能性が考えられる。現状では、この付近にまで横穴が存在した可能性があるという表現に留めざるを得ない。

標高は、34～41m。谷川へ向かう南向きの斜面となる。2棟の建物は、第2次調査区検出の建物に続け、それぞれ建物－49・50とする。他の遺構番号は、新たに付すことにする。



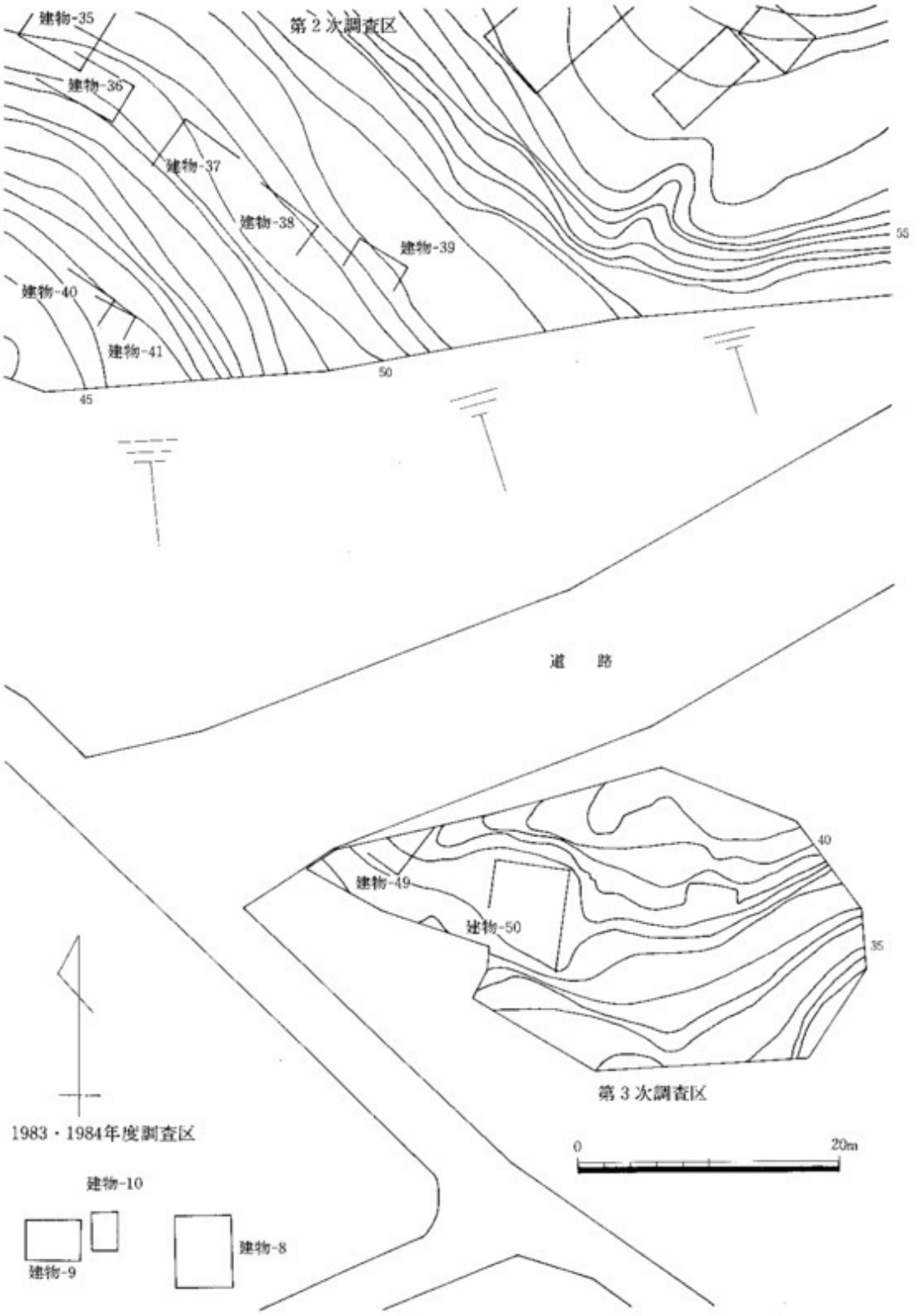
図－96　建物－49（レベル高38.0m）

A．建物

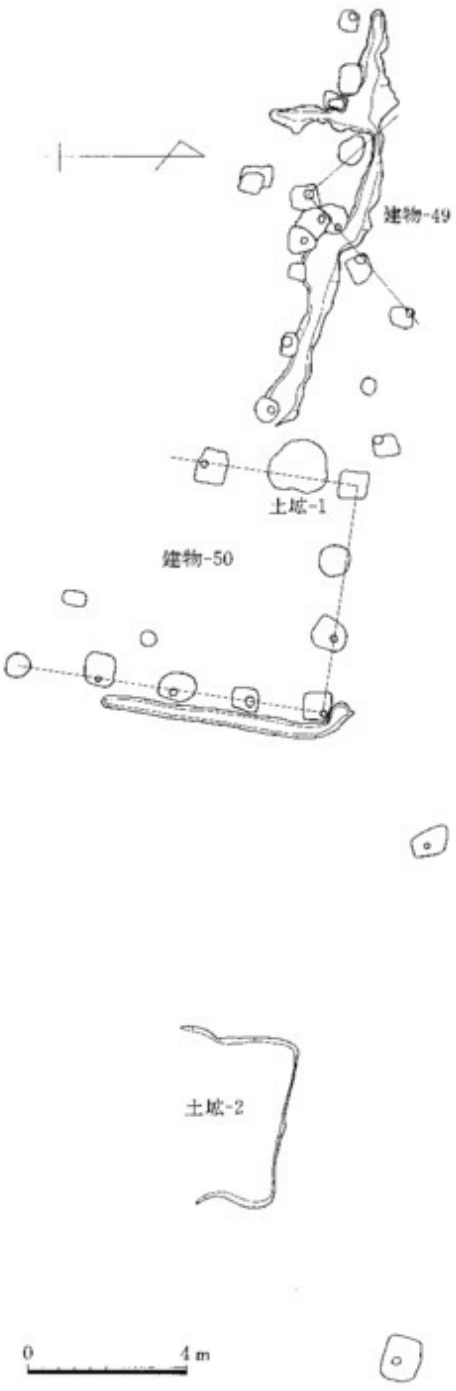
建物－49

1間以上×2間以上の掘立柱建物である。北側は、地山が削平されており、ピットが残っていない。柱間寸法は、160cm、200cm、200cmと推定される。建物の軸は、N－49°－E。

ピットは、1辺60cm前後の方形平面を呈する。深さは、最も残存状態の良好なピット－2で約70cmを測る。柱の直径は、約15cmと復元される。ピット内からは、少量の土器が出土しているが、時期を決定できるものは見られない。


建物-35
第２次調査区
建物-36
建物-37
建物-38
建物-39
建物-40
建物-41
55
50
45
道　路
40
建物-49
建物-50
35
第３次調査区
0
20m
1983・1984年度調査区
建物-10
建物-9
建物-8

図－97　調査地位置図



図－98　遺構平面図

建物－50

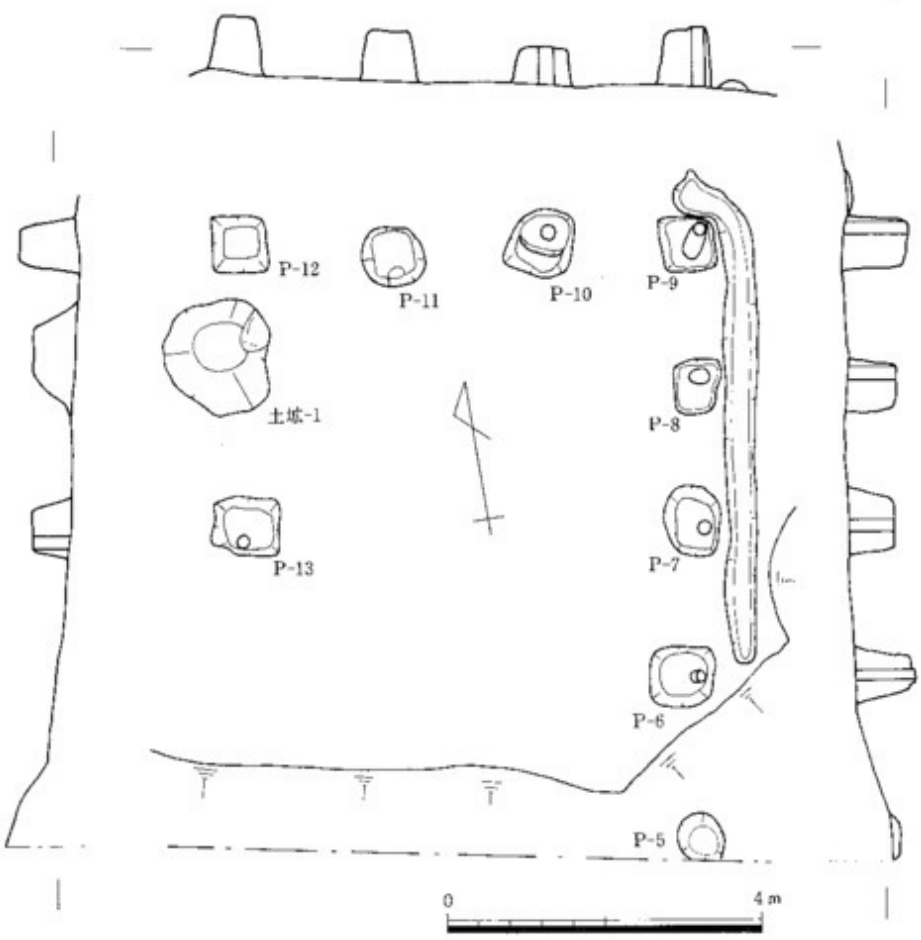
梁行３間、桁行４間以上の建物である。梁行柱間寸法196cm等間隔、桁行柱間寸法192cm等間隔で、梁行、桁行の柱間寸法は、ほぼ等しい。建物の規模は、588cm×768cm以上と復元される。建物の軸は、N－9°－Eとなり、南北方向に近い。

地形が南西方向へ傾斜し、ピット－６の南側で大きく落ち込んでいるため、南辺、および西辺南半のピットは削平されている。また、ピット－12とピット－13の間に、ピット－８に対応するピットが存在するはずであるが、土坑－１がこのピットに重複しているため、確認できなかった。土坑－１がピットに後出すると判断される。

建物－50は、斜面の山側を大きく削平して建てられている。そのため、建物のすぐ北側は、傾斜の強い斜面となり、比高差は160cmに及ぶ。東側も、地山を若干削平して平坦地を確保している。東辺のピット－６～９に接して、浅い溝がめぐっている。溝は、ピット－９を取り巻くように西へ屈曲して終わっており、おそらく、建物－50に伴う溝と考えられる。溝の幅は、平均38cm、深さは12cm前後である。おそらく、斜面上からの水を排水するための溝であろう。

ピットは、ほぼ方形平面を呈し、１辺の長さは80cm前後である。深さは、最も残存状態の良好なピット－９で82cmを測る。柱の直径は、18cm前後と復元される。なお、ピット－９では、柱を建物の中心部へ向かって倒し、抜き取った痕跡が確認できた。

ピット内からは、少量の土器片が出土しているが、時期を決定できる資料は見られない。土坑－１出土遺物より若干時期が溯ると考えれば、６世紀末から７世紀初頭であろうか。



図－99　建物－50（レベル高38.0m）

B．土坑

土坑－1

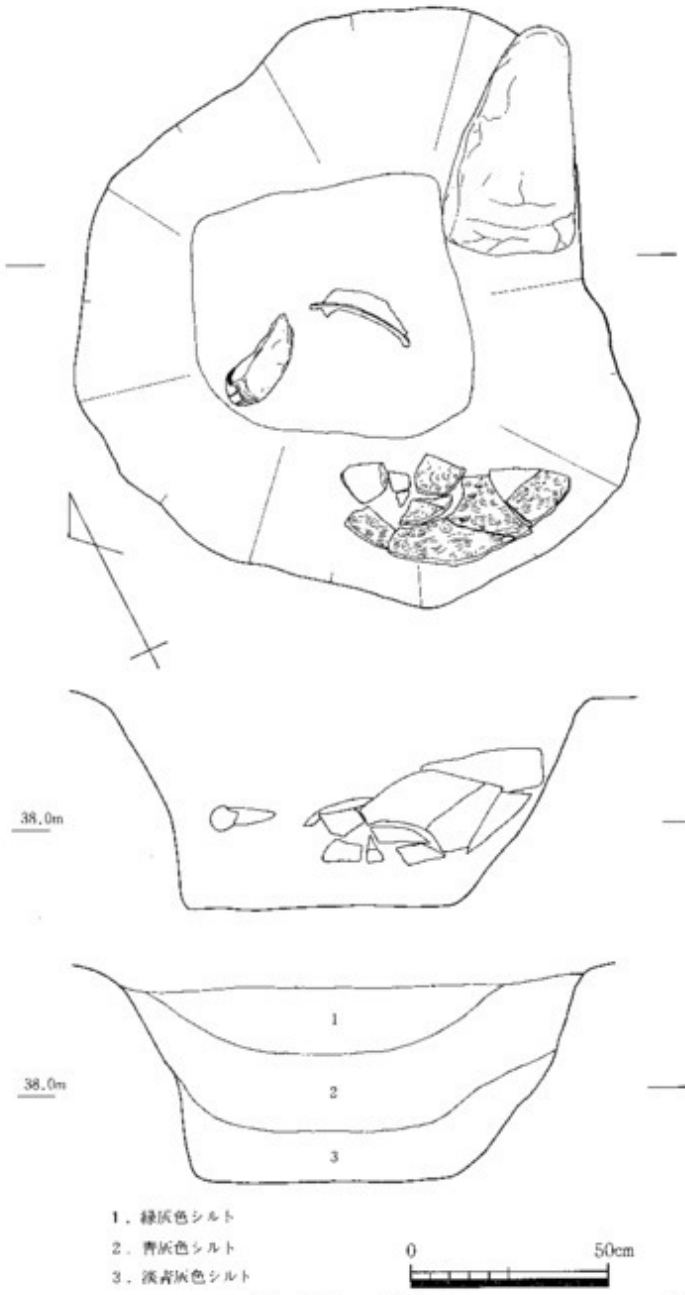
長径154cm、短径128cmの楕円形平面を呈する土坑である。深さは、55cmを測り、底面は隅丸方形状で平坦面になる。埋土は青灰色系のシルト、やや水分を多く含む。底面からやや浮いた状態で、須恵器甕（1）、甕、土師器甕（2）、杯（3）が出土している。性格は不明である。

土坑－2

方形状の土坑であるが、南辺は確認できない。規模は、410cm×300cm以上である。底面は、ほぼ平坦面となる。埋土は褐色土。遺物は少なく、時期を確認できないが、金銅製帯金具が1点出土しており、注目される。竪穴住居址の可能性も考えられる遺構である。

C．溝

溝は、建物－50を囲む溝と、その西側で東西方向の溝が確認されている。しかし、後者の溝は、遺物の出土が少なく、時期を決定できない。切り合い関係からは、建物－49、およびその周辺のピット群より古いようである。



図－100　土坑－1

2．遺物

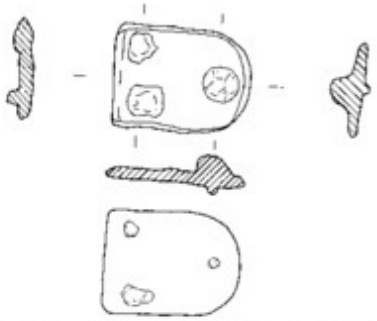
A．土坑

1は、須恵器甕と考えられる。体部には2条の凹線が3段にめぐり、上方の凹線間には羽状の刺突文がめぐる。

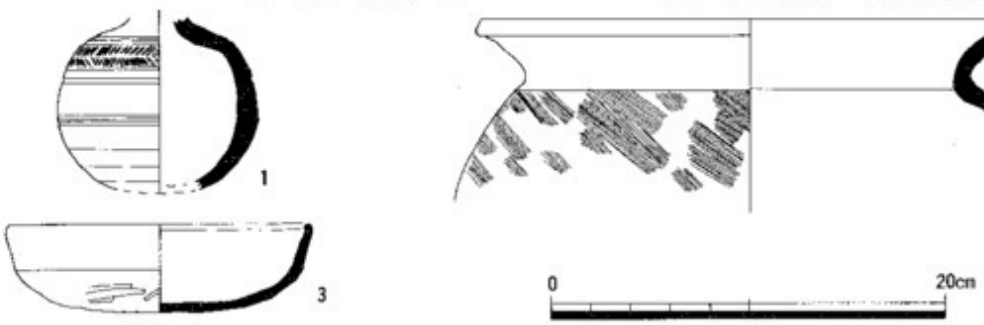
2は、土師器甕。口縁端部は、つまみあげるようなナデ。外面はハケメ。

3は、土師器杯。口縁端部は肥厚し、内弯する。暗文の有無は不明。以上が土坑－1から出土している。

土坑－2からは、金銅製帯金具が1点出土している。銙尾の表に当たる部分であり、3箇所に突起がある。



図－102　土坑－2出土帯金具（1:2）



図－101　土坑－1出土遺物

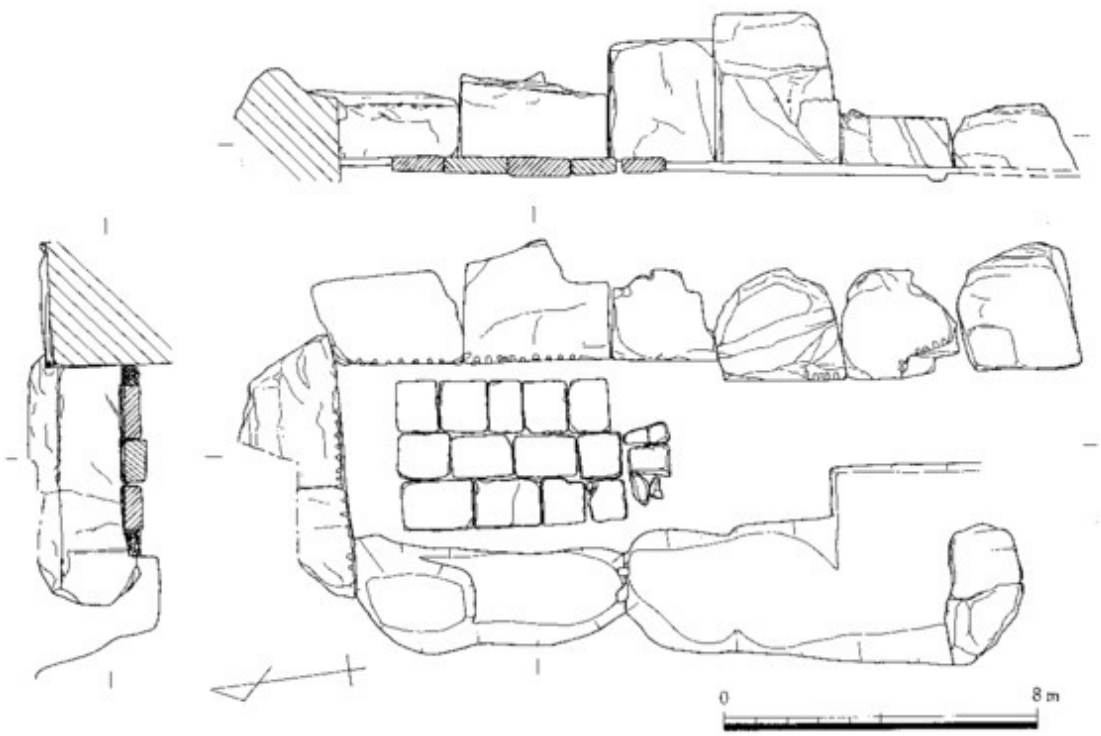
第5章　安堂第6支群3号墳横穴式石室の移設

1．概略

安堂第6支群3号墳（以下、安堂6－3号墳と略記）は、1985年4月から6月にかけての第1次調査の際に発見された古墳である。[1] 南斜面に東西24m、南北20m前後と推定される方形平坦面を地山削平によって築き、直径22～23mと推定される円墳を築造したものである。墳丘はほとんど削平されているが、墳丘北西部に周溝が残存していた。

内部主体は、花崗岩の切石によって構築された横穴式石室である。西側壁と石室上半の石材が全て後世に持ち去られており、東側壁と奥壁の一部を残すのみであった。玄室床面には、凝灰岩の切石が南北340cm、東西185cmの長方形に敷き並べられている。玄室上層から石棺材と考えられる凝灰岩が多数出土しており、凝灰岩の敷石は棺台と考えられる。凝灰岩の敷石の周囲には小礫が充填されている。石室の規模は、全長950cm以上、玄室長495cm、玄室幅240cm、主軸は真南北を指す。

石室は、約14m四方の隅丸方形状の掘方の中に構築されており、掘方は版築によって埋戻されている。版築によって埋戻された後、石室の周囲に自然石を充填した排水施設をめぐらしている。このように、安堂6－3号墳は、他に例を見ない古墳として注目されるものである。



図－103　安堂6－3号墳石室実測図

2．横穴式石室の移設

安堂６－３号墳は、切石による横穴式石室、いわゆる岩屋山式石室であり、柏原市内では初めての石室であった。また、玄室床面の敷石や石室周囲の排水溝は他に例を見ないものである。そのため、高井田土地区画整理組合に対し、安堂５－16号墳と共に現状保存するよう要望した。しかし、２基の古墳は計画地盤高より数m高い地点で検出されており、設計変更を行なっても古墳を現状保存することは不可能であるとの回答があった。その後も協議を続けたが、現状保存を断念せざるを得ない状況にあり、区画整理組合から申し出のあった安堂６－３号墳の石室を移設することで合意した。現状保存できなかったことは非常に残念であるが、区画整理組合もその重要性を認識し、移設できたことは、ささやかな成果であったと考えている。

その後、移設地、移設方法について検討を加えた。移設について、柏原市教育委員会からはできるだけ原況に近い環境であること、移設後は一般に公開するために見学に不便や危険の生じない場所であること等の条件を呈示し、協議の結果、調査地東方の緑地内に移設することになった。移設地は南斜面であり、背後が古墳保存のために緑地として残されている場所であり、条件を満たすものであった。移設方法については、石材重量が10ｔを越えると推定されたため、クレーンによって石材を吊り上げ、スクレイパーに積んで移設地まで運搬し、またクレーンで石材を設置することになった。その間、柏原市教育委員会で立ち会い、指導をすることにし、1986年４月８日に、まず移設地の掘削工事を実施した。重機によって緑地の一部を掘削し、整地し、石材を設置できるようにした。

そして、４月25日・26日の両日、石室石材の移設を実施した。

25日８時半より、石材周囲の土を重機で取り除き、搬出可能な状態にする。この掘削に伴っての遺物の出土は見られなかった。続いて南側の石材から順に、クレーンで吊り上げて取り除いていく。クレーンは45ｔ用のものを使用したが、羨道第１石は15ｔの重量があった。この石材取り除き作業によって、石材は根石を使用せずに石材の裏側に土をつめることによって安定させていることが判明した。ただ羨道第２石のみが例外で、70cm×50cm×50cm程度の石材を裏から差し込むように使用していた。また、奥壁が側壁と密着する部分に深さ２～３cmのくり込みがみられることを報告したが、今回の石材取り除き作業によって、このくりこみが奥壁のみでなく東側壁第１石にも施されていることが確認できた。いわゆる相欠きの技法によって、奥壁と側壁の密着を高めることを意図したものであり、当然、西側壁も同様の構造であったと思える。これと共に、東側壁第１・２石の裏側が、石室内面と同様に平滑に加工されていることが確認された。一部に自然面を残しているため、重量を少しでも軽くするために加工を施したものと考えられるが、軽くするためならば、石室内面と同様に平滑に仕上げる必要は無いと思われ、若干の疑問も残る。また、羨道第２石の裏込め土内から、須恵器杯身が１点出土しているが、これについては後述する。

25日13時より、移設地での石材設置作業を開始した。まず、奥壁東半を設置し、玄室1～3石の順に設置していった。設置方法は、原位置で打っておいたレベルの基準線が水平になり、石室内面が垂直になるようにクレーンで吊り上げた状態で調整し、石材の周囲に土砂を詰めて石材を設置するというものであった。しかし、石材の自重が思いため、うまく安定せず、特に石材の接着面を密着させるのは非常に困難であった。また、時間の経過と共に、石材が傾くという事態も生じた。

26日も8時半より石材の設置を開始した。まず、奥壁西半を設置したが、これも困難を極めた。奥壁はその上半が割られて持ち去られていたが、その際に生じたと考えられる亀裂によって東西2個に割れていた。この割面が複雑な面をなしており、両者を接合させるのに2時間を費した。次に羨道第1石から順に設置したが、羨道第1石と第2石の接合面で、それぞれの石材の一部が欠けるように割れていた。これも、後世に石材を割った際に生じたものと考えられるが、石室調査時には両石材の自重によって、割石は原位置にあった。そのため、両割石を原位置に戻して石材を設置しようと試みたが、数十kgの重量の割石を宙に浮かせた状態で羨道第2石を設置しなければならず、技術的に困難であった。そのため、やむを得ず、羨道第1石の割石のみを原位置に戻し、第2石で安定を計った。そして、第2石の割石は第2石の設置後に、裏側を若干打ち欠いて挿入し、コンクリートを流し込むことによって接合した。石材を設置し、床面、および石材の裏側を埋めて石室移設作業を終了した。ただクレーンで吊り上げた石材を設置していくだけの作業であったが、1個の石材を設置するのに1～2時間を要し、しかも奥壁の接合面や各石材の接着面、羨道の割石など満足のいくものではなかった。クレーンやワイヤーロープやレベル、それに数人の作業員を要しても、満足のいく移設ができなかったことから、改めて古墳を築造した人々の技術と労力に驚嘆させられた。

この移設作業を通じて、古墳築造時の作業について少し考えてみた。おそらく、石室石材の据え付けは、今回の作業と同様に、丸太で足場を組んで滑車を利用して石材を吊り上げ、土砂を充塡して行なったものであろう。しかし、そのような方法で石材を据え付けた場合、石材の上面を一定にすることは非常に困難であり、石材据え付け後に上面を再び加工している可能性も考えられる。羨道石材の重量が15t、奥壁は30t近くと推定され、天井石は更に重かったであろう。そのような石材を、数mm程度の誤差で構築するためには、我々が想像できないような技術と、石材を1石据え付けるために数日を費したと考えられる時間、そして多勢の人員の導入による労力をもって初めて可能であったと考えられる。

この移設作業に対して、作業中に15tの側壁の石が割れたと新聞報道があったが[2]、15tの側壁だけでなく全ての石材が割れることなく移設を完了している。奥壁の誤まりかと思われるが、奥壁は上述のように発見時から割れており、これは概報を見てもすぐわかるはずである。誤まりを指摘すると共に、活字にする際には十分な取材と責任をもって望んでもらいたい。

3．まとめ

ここで改めて、安堂６－３号墳の年代について考えてみたい。先述のように、石室移設作業中に、羨道第２石の裏込め土内より須恵器杯身が出土している。小形で、蓋の内面にかえりを伴うタイプの杯身である。やや厚い底部から口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口径9.0cm、器高3.2cm。底部は回転ヘラ切り未調整、体部は下半一部のみ回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整である。この杯身は、50%残存しており、他に出土遺物は見られない。年代は、７世紀中葉を前後する時期であろう。この年代は、前報告において、石室内出土遺物から７世紀第４四半期と推定した築造年代と齟齬をきたすものである。この点について、現在の時点で考えられる可能性について列挙しておきたい。

まず、石室裏込め土から出土した須恵器については、

A．古墳築造時に伴うものであり、築造年代を示す。

B．古墳築造時に混入したものであり、築造は須恵器の年代よりも新しい。

の２つの可能性が考えられる。Bについては、安堂６－３号墳の北斜面上に位置する建物群から同時期の須恵器が多数出土しており、そこから転落したと思われる土器が、安堂６－３号墳の周辺からも多数出土しており、築造時に混入しても不思議はないと考えられる。

また、石室内出土の遺物は７世紀第４四半期と考えられるが、それについても、

A．埋葬が２次的埋葬であり、古墳の年代は更に古い。

B．埋葬は７世紀第４四半期の一度限りであった。

の２つの可能性が考えられる。これについては、前報告で指摘したように、２次埋葬と考えられる根拠が全く見られないため、Bの可能性が高いと考えている。調査結果から考えると、安堂６－３号墳の年代は、７世紀中葉に築造し、第４四半期に埋葬したか、もしくは築造・埋葬共に７世紀第４四半期であったかのいずれかと思われる。後者の可能性のほうが高いように思われるが調査によって確認できなかったため、調査例の少ない岩屋山式石室の年代に問題を提起するに留めておきたい。

安堂６－３号墳の石室移設地の整備について、現在は次のように考えている。石室床面の凝灰岩製敷石についてはレプリカを作製し、セメントで固め、周囲に小礫を散布する。石室の西側壁や天井は復元しない。説明板を設置し、古墳についての理解を深めてもらう。これら以外にも、安全性や景観を考慮して整備したいと考えている。それによって、古墳に対する知識や理解を深めていただければ、石室を移設した成果があったと言えると思う。

図－104　出土遺物
（1：4）

註

（1）安村俊史・石田成年『高井田遺跡Ⅰ』柏原市教育委員会　1986

（2）1986年５月19日付、朝日新聞夕刊１面。

第6章　まとめ

高井田遺跡の第1～3次調査によって検出された建物址は50棟に達する。内訳は、飛鳥時代の建物43棟（うち1軒は竪穴住居）、平安時代の建物6棟である。これに、1983・84年の鳥坂寺寺域内の調査によって検出された建物11棟を加えると、飛鳥・奈良時代の建物は54棟となる。消滅した建物や建物と確認できなかったものを含めると、総数70～80棟になると思える。

飛鳥・奈良時代の建物群の変遷を見ると、6世紀末葉頃に最初の建物が出現していると考えられる。まず、山裾で建物が建てられ、徐々に標高の高い地へと居住域は拡大し、7世紀中葉には調査区域内で最も標高の高い地点にまで建物が建てられている。この間に建物の数は少しずつ増加したようであり、7世紀後葉から末葉にかけてピークに達したようである。

これらの建物群は、斜面を削平することによって平坦地を造成しており、これに伴う土木工事はかなりの大工事であったと思える。柏原市域の生駒西麓では、6世紀代まで沖積地に立地していた集落が、7世紀代に急に山地斜面へ移動する傾向が見られる。しかも、一辺1m近い大形の方形掘方を伴う掘立柱建物群としてである。如何なる目的のために、農耕も不可能な斜面地を生活の場に求めたのか、理解し難い面がある。

ところが、この建物群も8世紀初頭頃には忽然と姿を消す。8世紀代になると、鳥坂寺寺域内に数棟の建物が見られるだけであり、斜面上では溝などのわずかな遺構を残して建物は見られなくなる。鳥坂寺寺域内の建物は、寺院の維持・管理にあたった僧房的性格を有するものと考えられるため、集落は消滅したと考えてよいであろう。徐々に規模を大きくしていた集落が急に消滅したことは、集落全体の移住があったものと考えられる。

このように、6世紀末葉頃と8世紀初頭頃に大きな変革があったと考えられる。その原因は、政治的、社会的な原因によるものではないだろうか。6世紀末葉には推古朝が始まり、物部氏の滅亡、蘇我氏の抬頭が見られた時期である。居住氏族の交替があった可能性も考えられるし、この時期に既に寺院建立などによる平野部の土地利用計画が立案されており、そのために居住地を山麓部へ移動させたことも考えられると思う。

鳥坂寺は8世紀代に天皇が巡拝するような寺院であり、それを支える集落が完全に消滅したとは思えない。やはりその背後に、政治的、社会的な原因を考えてみる必要がありそうである。8世紀初頭といえば、都が飛鳥の地から平城へ遷された時期にあたる。それに伴って、氏族の移動が行なわれた可能性も考えられるのではないだろうか。

この2つの変革期は、鳥坂寺と高井田遺跡のみでなく、柏原市域、更に広く河内地域の集落変遷を追求したうえで改めて考えてみる必要がありそうである。その中で、再び鳥坂寺と高井田遺跡について考える機会をもちたいと思う。

	建物	間×間	規　模	柱間寸法	方位	時　期	備　考
1次	建物－1	3 ×(2)	372 ×(332)	124×166	N9°E	7CⅢ	
調査	2	2 ×(1)	392 ×(180)	196×180	N8°E	7CⅡ～Ⅲ	建物－1に先行
	建物－3	2 × 3	430 × 450	215×150	N4°E	7CⅣ	建物－5に先行
	4	2 × 3	360 × 460	180×150	N5°E	7CⅣ？	建物－5に先行
	5	2 × 3	410 × 640	205×213	N7°E	7CⅣ	
	6	2 × 4	380 × 848	190×174・250	N3°W	7CⅢ～Ⅳ	
	7	2 ×(1)	400 ×(192)	200×192	N1°W	7CⅢ～Ⅳ	
	8	2 × 4	400 × 720	200×180	N8°W	7CⅢ	
	9	2 × 3	400 × 408	200×136	N29°W	7CⅢ～Ⅳ	総柱建物
	10	2 × 4	440 × 880	220×220	N48°W	7CⅣ	
	11	3 × 4	456 × 780	152×195	N44°W	7C～8C	
2	12	(1)×(2)	(208)×(408)	208×204	N51°E	7CⅣ	建物－11に先行
	13	1 × 1	180 × 200	180×200	N50°E	7CⅣ？	
	14	竪穴住居	350 ×(264)		N59°W	？	
次	15	(1)×(1)	(144)×(184)	144×184	N17°W	7C代	
	16	(1)×(3)	(156)×(540)	156×180	N60°E	7C代	建物－17に先行
	17	(1)× 3	(172)× 680	172×227	N78°E	7C代	
調	18	(2)× 3	(336)× 520	168×173	N29°W	7C代	
	19	2 ×(2)	429 ×(464)	246×	N50°E	7CⅢ	
	20	(1)×(4)	(152)×(784)	152×	N40°W	7C代	
査	21	2 ×(1)	360 ×(140)	180×140	N60°E	？	
	22	(1)×(4)	(248)×(568)	248×	N60°W	7CⅠ？	
	23	(1)×(4)	(220)×(880)	220×220	N60°W	7CⅠ？	
	24	3 × 4	460 × 892	153×223	N50°W	7CⅣ	建物－26に先行
	25	2 ×(2)	440 ×(454)	220×227	N42°W	7CⅡ	
	26	2 × 5	368 × 1000	184×200	N50°W	7CⅣ？	
	27	2 × 5	432 × 1000	216×200	N48°W	7CⅡ	建物－25・28に先行
	28	3 × 3	420 × 532	140×177	N50°W	7CⅡ～Ⅲ	
	29	2 × 3	440 × 620	220×207	N58°W	7CⅠ～Ⅱ	建物－32に先行
	30	3 × 5	600 × 1088	200×218	N34°E	7CⅠ～Ⅱ	

建物規模一覧表①

表中の（ ）内は現存値、数値はcm、時期は四半期を示す。

	建物	間×間	規模	柱間寸法	方位	時期	備考
	建物－31	2 × 4	376 × 696	188×174	N38°E	7C代	建物－32に先行
	32	(1)× 3	408 × 519	×173	N61°W	7C代	
	33	(1)×(4)	420 ×(800)	×200	N89°W	7CI	建物－34に先行
	34	(1)×(2)	(320)×(464)		N77°W	7CI～II	
2	35	2 ×(2)	532 ×(602)		N38°E	7CI～II	
	36	(1)×(3)	332 ×(660)	×230	N59°W	?	
	37	(2)×(2)	(288)×(500)		N51°W	?	
次	38	(1)×(2)	(200)×(488)	200×	N54°W	?	
	39	(1)× 3	(170)× 450	170×150	N53°W	7CII	
	40	(1)×(2)	(180)×(380)	180×190	N52°W	?	建物－41に先行
調	41	(1)×(2)	(156)×(320)	156×160	N49°W	7CII～III	
	42	2 × 2	346 × 456	172×228	N62°W	10C～11C	
	43	2 × 3	360 × 480	180×180	N55°W	10C～11C	
査	44	3 × 4	375 × 432	125×108	N38°E	10C～11C	総柱建物
	45	(3)× 3	(380)× 640	120×213	N38°E	10C～11C	西側に庇？
	46	2 × 2	420 × 420	210×210	N21°E	10C～11C	
	47	(1)×(2)	(100)×(320)	100×160	N66°W	10C～11C	
	48	(1)×(2)	(200)×(340)	200×170	N65°E	10C～11C	
3次	49	(1)×(2)	(160)×(400)	160×200	N49°E	?	
調査	50	3 ×(4)	558 ×(768)	196×192	N9°E	6C～7C	
	1	2 ×(12)	470 ×(2600)	240×210	N8°W	7CIV	僧房？
一	2	4 × 5	1040 × 1520	270×304	N5°W	7CIV	西側に庇、食堂？
九	3	3 × 3	420 × 550	140×180	N76°E	8CII	総柱建物
八	4	2 × 3	390 × 570	195×156	N45°E	8CIII	
三	5	2 × 3	390 × 630	195×210	N40°E	8CII	総柱建物
・	6	(1)× 3	(150)× 700	150×233	N11°W	8CI	
八	7	1 × 2	250 × 450	250×225	N3°W	8CI	
四	8	3 × 3	444 × 570	135×180	N4°E	7CIII	
調	9	2 × 4	300 × 450	150×110	N89°E	7CIII	
査	10	1 × 2	220 × 300	220×150	N2°W	7CIII	
	11	2 × 2	290 × 290	145×145	N38°W	8CIII	総柱建物

建物規模一覧表②

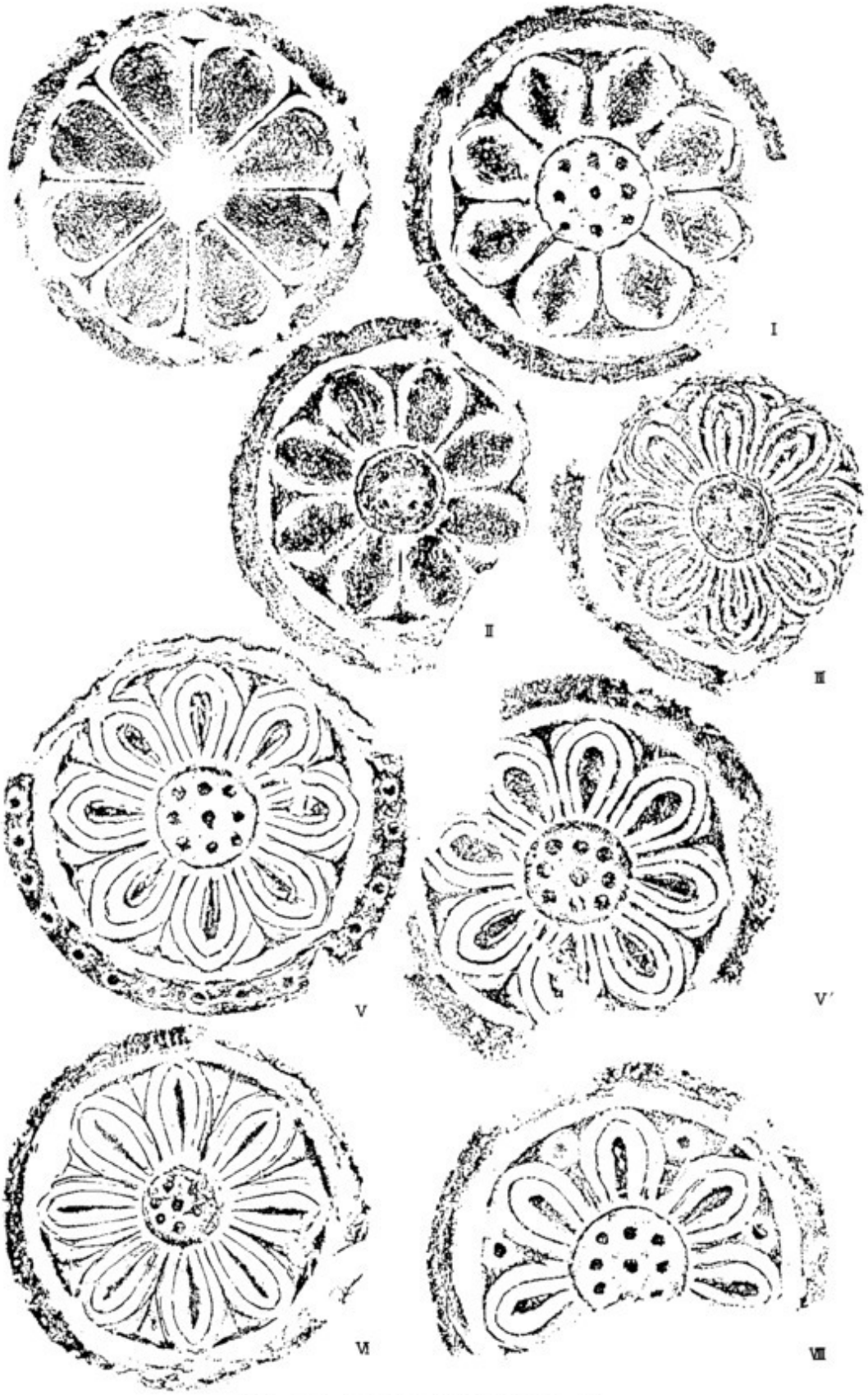
ここで改めて、7世紀以後の高井田遺跡について概観しておきたい。まず鳥坂寺については、従来から考えられているように、鳥取氏の氏寺と考えてよいと思われる[2]。また、高井田遺跡は鳥坂寺に接して東方に拡がっており、鳥坂寺建立氏族の居住地と考えられる。つまり、高井田遺跡の集落が、鳥取氏の集落である可能性が高いと思われる。

そこで鳥坂寺、主にその創建年代について少し考えてみたい。1960・61年に鳥坂寺の塔・金堂・講堂跡が調査されており、報告書では出土量の最も多かったⅠ型式の無子葉弁単弁蓮華文とⅤ・Ⅴ′型式の重弁の単弁蓮華文軒丸瓦を創建瓦と考えている。この軒丸瓦は、いずれも中房が大きく、Ⅴ型式の丸瓦部に縄目叩きを残すものがあることから、その年代を7世紀後半としている。『聖徳太子伝補闕記』太子四十七才の条に「斑鳩寺被災之後、衆人不得定寺地、故、百済入師率衆人、令造葛野蜂岡寺、令造川内高井寺、百済聞師、下氷君雑物等、三人合造三井寺」と記事があり、文中の川内高井寺は鳥坂寺のことと考えられる。すると、斑鳩寺、つまり法隆寺の焼失が670年であり、その後に鳥坂寺が建立されたことになり、文献との矛盾も見られないとする考えである[3]。

しかし、森郁夫氏はⅠ型式の軒丸瓦の年代は、その型式から7世紀中葉頃まで溯るのではないかと考えている。更に、発掘調査結果から『聖徳太子伝補闕記』の記事が信用できないことを指摘している[4]。

また、当時の調査によって、Ⅰ型式の原形になったと考えられるⅡ型式の軒丸瓦と、Ⅴ・Ⅴ′型式の原形になったと考えられるⅢ・Ⅵ型式の軒丸瓦が出土している。出土点数は少ないが、いずれも中房の直径は4cm前後であり、飛鳥時代の軒丸瓦と考えて問題は無いであろう。これらの屋瓦は、鳥坂寺創建に伴って焼成されたと考えられる。また、調査に伴う出土ではないが、無子葉弁の単弁八弁蓮華文軒丸瓦の出土が報告されている[5]。この軒丸瓦は、原山廃寺、家原寺の創建瓦と考えられているものと同型式である。（図－105左上）

筆者は、これらの軒丸瓦の年代が7世紀前葉、もしくは中葉の古い段階まで溯るのではないかと考えている。報告書で創建瓦とされたⅠ・Ⅴ・Ⅴ′型式は、堂塔の建立が終了し、最終的に屋根に瓦を葺く際に大量に製作されたと考えられ、それ以前に少しずつ製作されていた瓦が、Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ型式などの軒丸瓦ではないだろうか。Ⅰ・Ⅴ・Ⅴ′型式は、中房の大きい点にのみ注目されているが、その特徴は中房の1＋8の蓮子を放射状におかず、方形に配している点にあるといえる。これは中房および蓮子を意識的に誇張したものであり、鳥坂寺式の中房と言えるものである。周辺の寺院からも同型式の中房を有する屋瓦は多数出土しているが、鳥坂寺で最初に採用されたものと思える。そのため、森氏が指摘しているように、中房の大きさほど軒丸瓦の時期は下らないであろう。以上のことから、筆者は、鳥坂寺の建立は7世紀前葉、もしくは中葉の古い段階に着手され、7世紀中葉頃に主要堂塔が完成したものと考えている。軒丸瓦を見る限り、そのように考えられるのである。



図－105　烏坂寺出土軒丸瓦（1：3）

鳥坂寺は、高井田遺跡に集落が成立して30～50年後にその建立に着手されたものと思える。主要堂塔が完成した7世紀中葉頃から次第に集落は大きくなり、8世紀に至って消滅するが、寺院は繁栄を続けたようである。この7世紀代に、2基の古墳が築かれている。安堂5－16号墳と6－3号墳である。[6] 周辺に後期古墳は多数存在するが、両古墳共に近接する古墳を見ない点、家形石棺を安置していたと考えられる点、追葬が認められない点などから、特定の個人に対する単独墳と考えてよいと思われる。前者は7世紀第1四半期、後者は7世紀第4四半期と考えられ、鳥取氏のごく限られた人物の古墳と考えられる。

また、高井田遺跡から谷川である高井田川を隔てて南側に拡がる高井田横穴群が鳥取氏と関係があるかもしれない。しかし、高井田横穴群では7世紀代に横穴の掘削はほとんど行なわれておらず、追葬もあまり見られない。追葬が続いても、7世紀中葉以前で終わっていることから、高井田遺跡と高井田横穴群の盛期が明らかにずれており、直接的な関係を考えることは困難である。むしろ、高井田遺跡の成立を機に、高井田横穴群の使命が終わっているように思える。高田横穴群内では、8世紀から10世紀にかけての火葬墓群も発見されており[7]、これは鳥坂寺との関係が考えられる。柏原市内では、古代寺院に近い山地中腹から火葬墓が発見される例が多く、この火葬墓群も鳥坂寺に関連する人々が埋葬されている可能性が強いように思われる。なお、安堂6－3号墳の東方でも火葬墓が1基確認されており、その周辺に更に火葬墓が存在した可能性を指摘しておきたい。

このような貴重な成果を生み出した発掘調査は、20,000㎡以上の広大な面積を調査することによってもたらされたものであり、その大部分が発掘調査後に破壊されてしまった。鳥坂寺寺域で検出された建物跡は埋戻し、公園用地として保存される予定である。また、安堂6－3号墳の石室は移設し、公開することにしている。しかし、失ったものがあまりにも大きいのが残念である。「今、何故、貴重な文化財や自然環境を破壊してまでも、宅地開発が必要なのか」という素朴な疑問を提起して、まとめにしたい。

註

（1）柏原市教育委員会『鳥坂寺』1986

（2）大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』1968
藤沢一夫「高井田廃寺という寺院」『柏原市史』第四巻・史料編（Ⅰ）1975

（3）（2）に同じ

（4）森郁夫『かわらのロマン』1980

（5）藤沢　前掲書

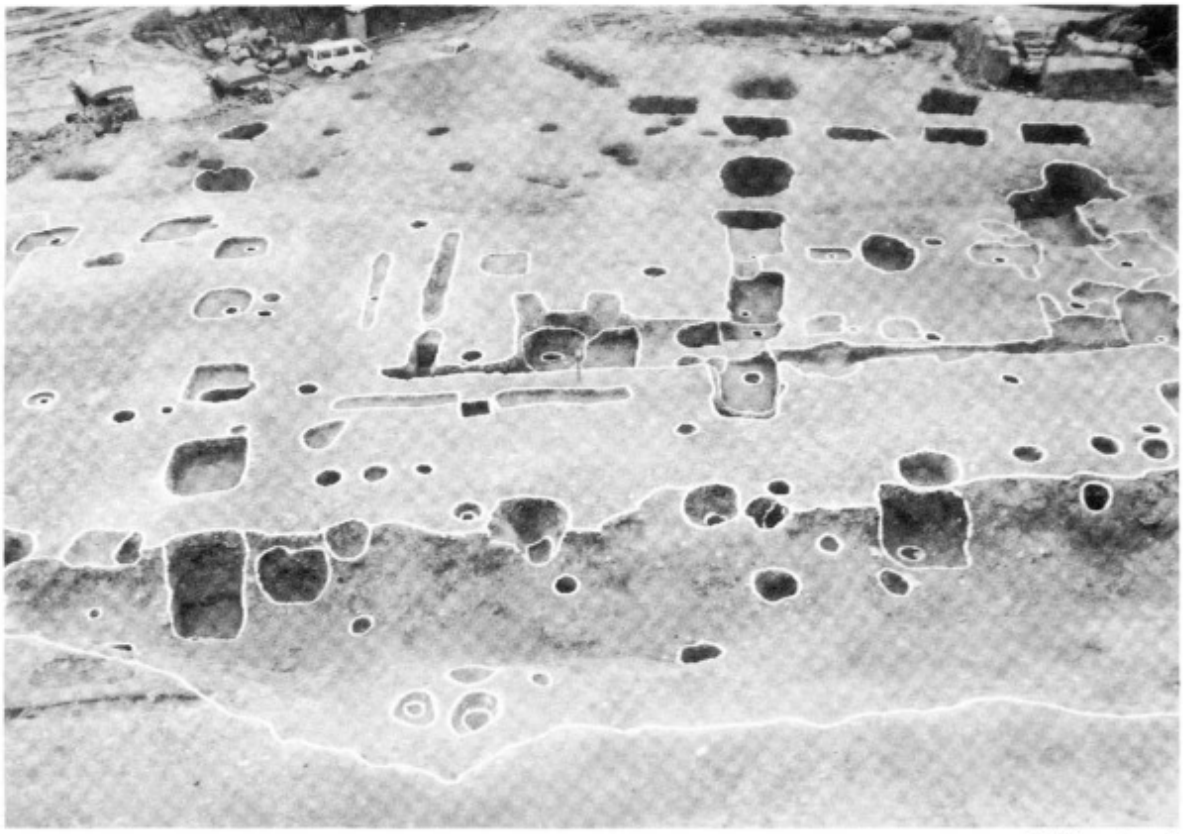
（6）柏原市教育委員会『高井田遺跡1』1986

（7）柏原市教育委員会『高井田横穴群Ⅱ』1987

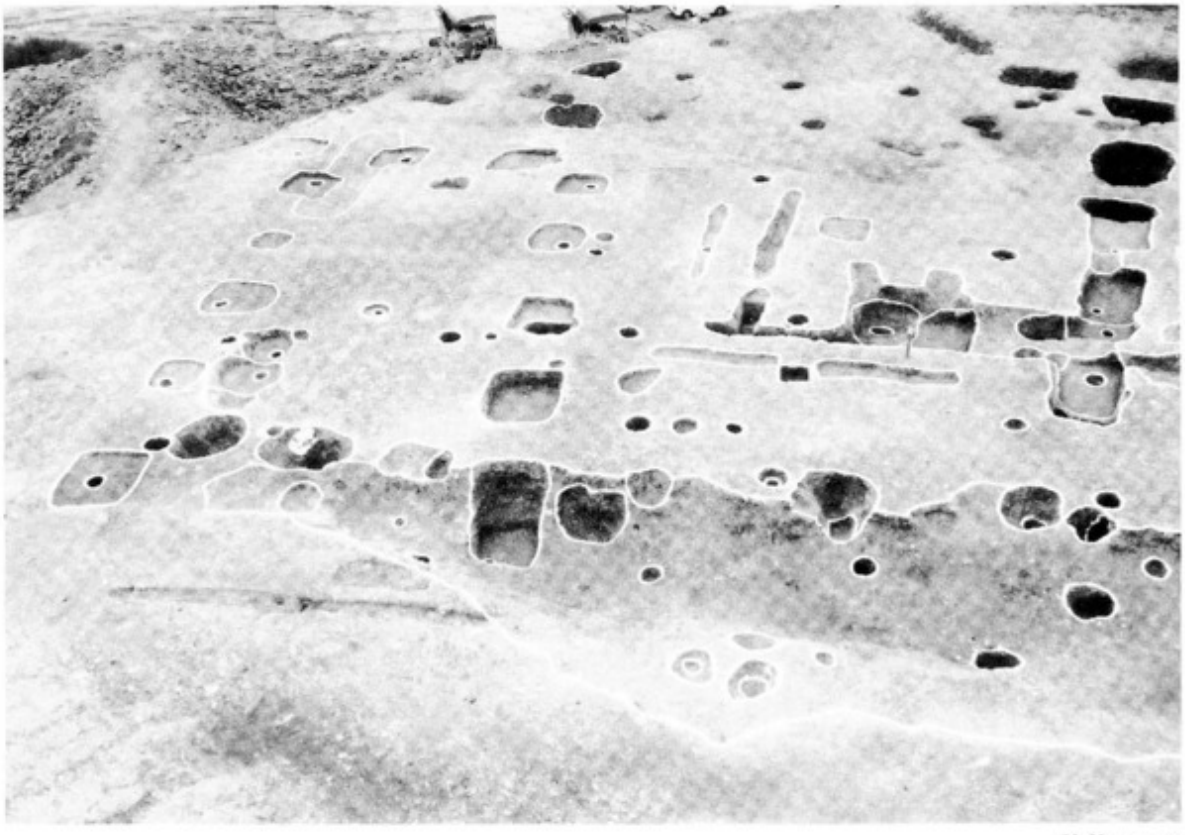
図　　版

調査前状況

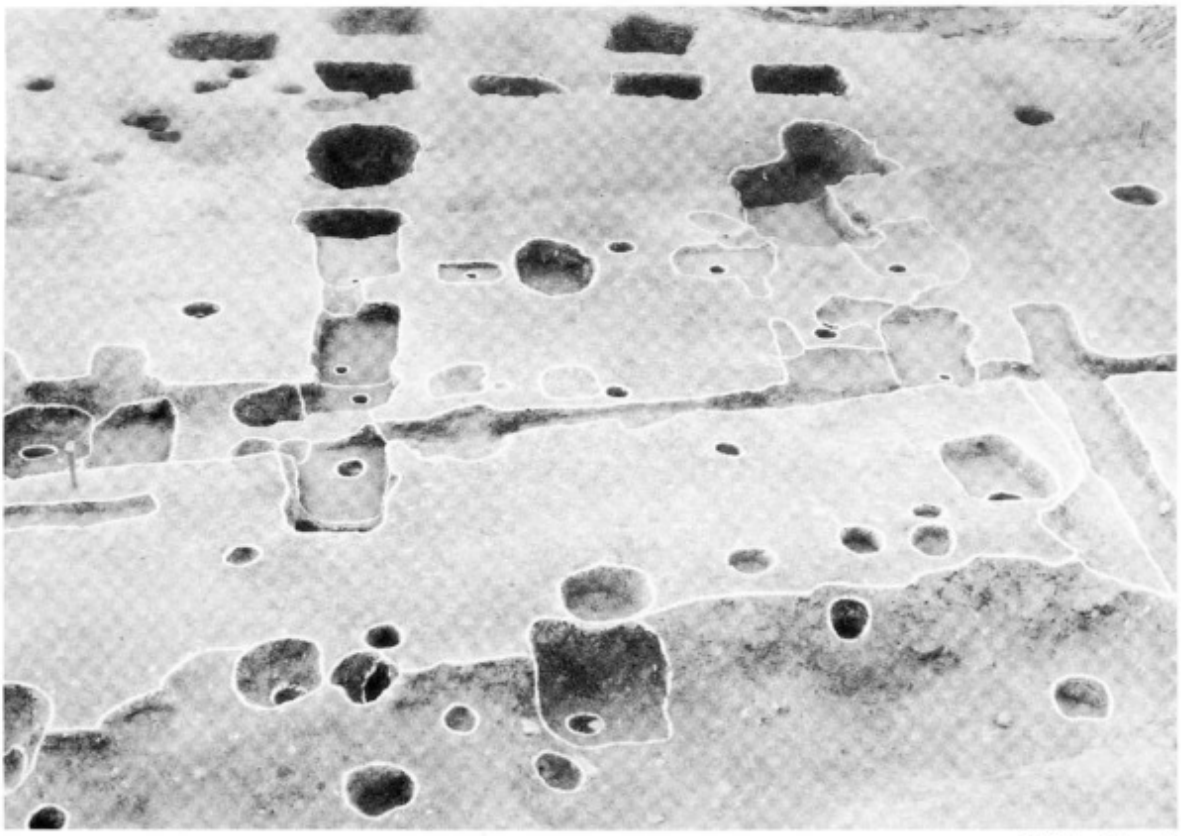
鳥坂寺跡



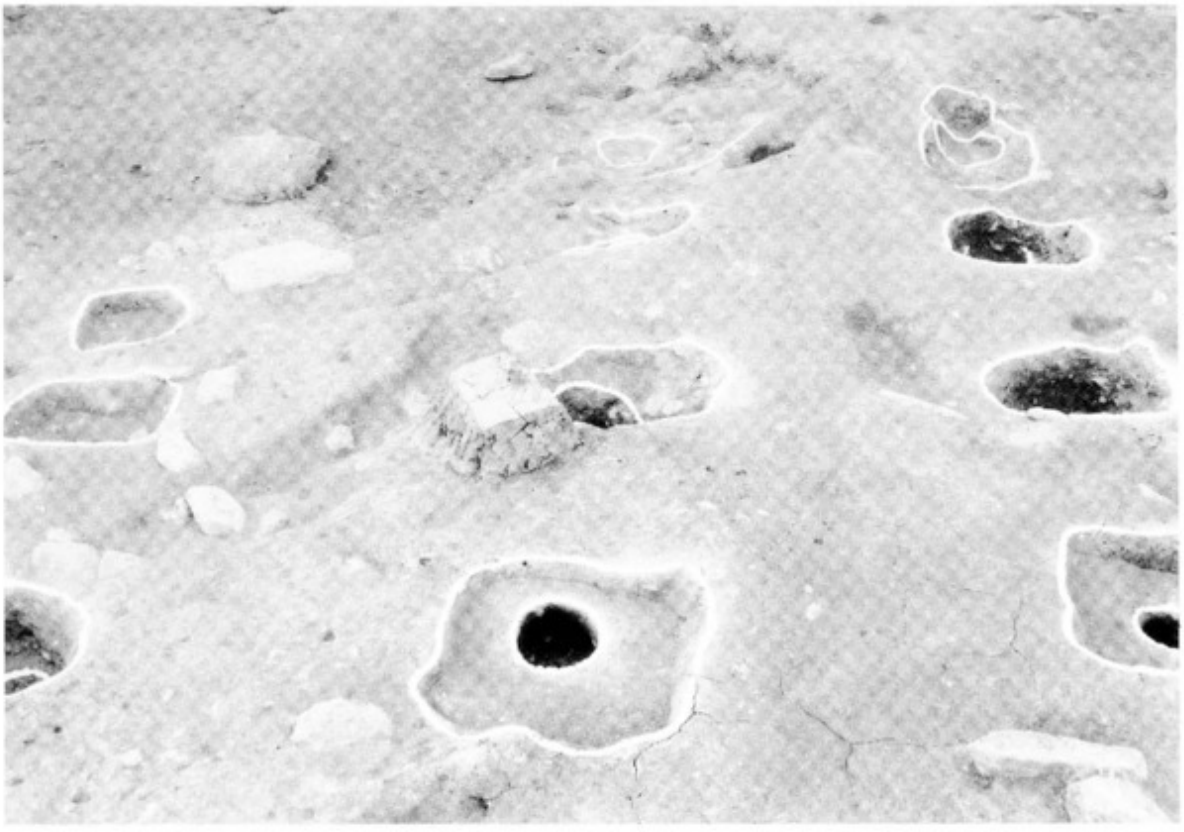
建物－3～8



建物6～8



建物－3～5



建物－9

建物－10・11

建物－12・13

建物—10

建物—13

建物－14～17

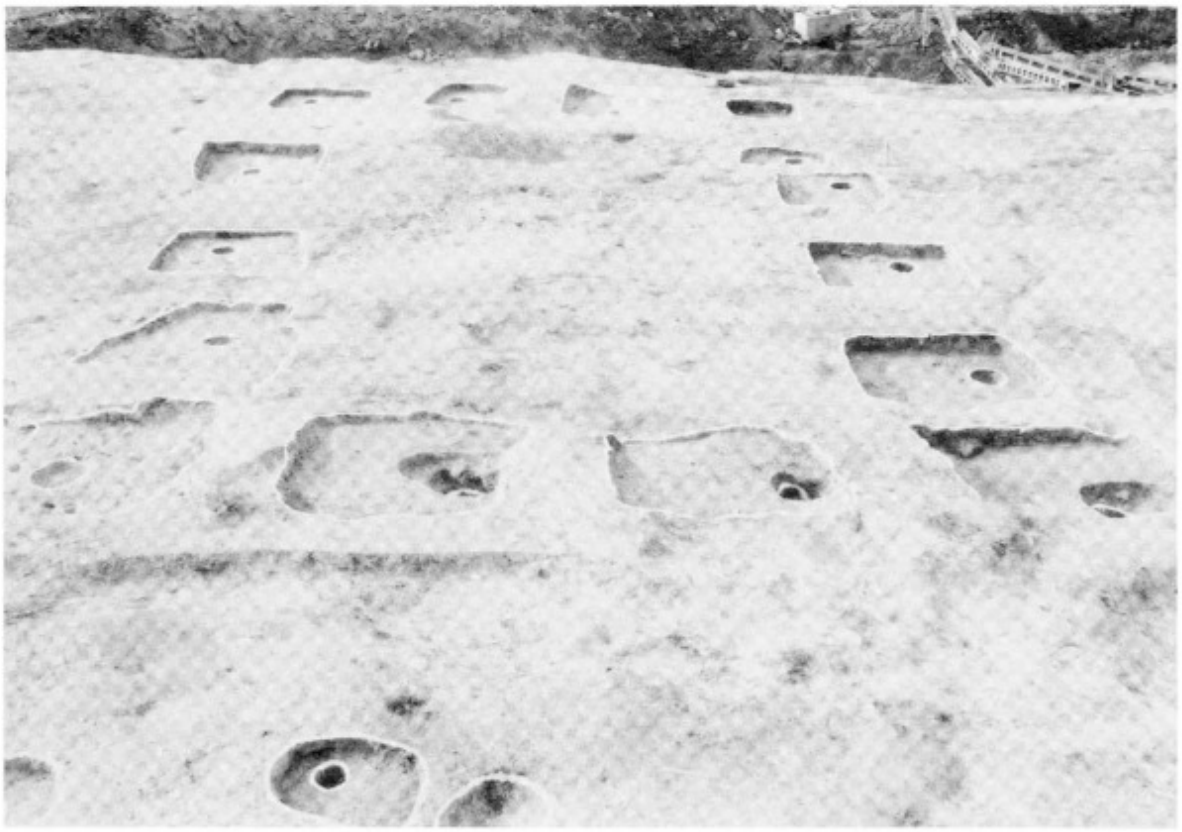
建物－18周辺

建物－19・20

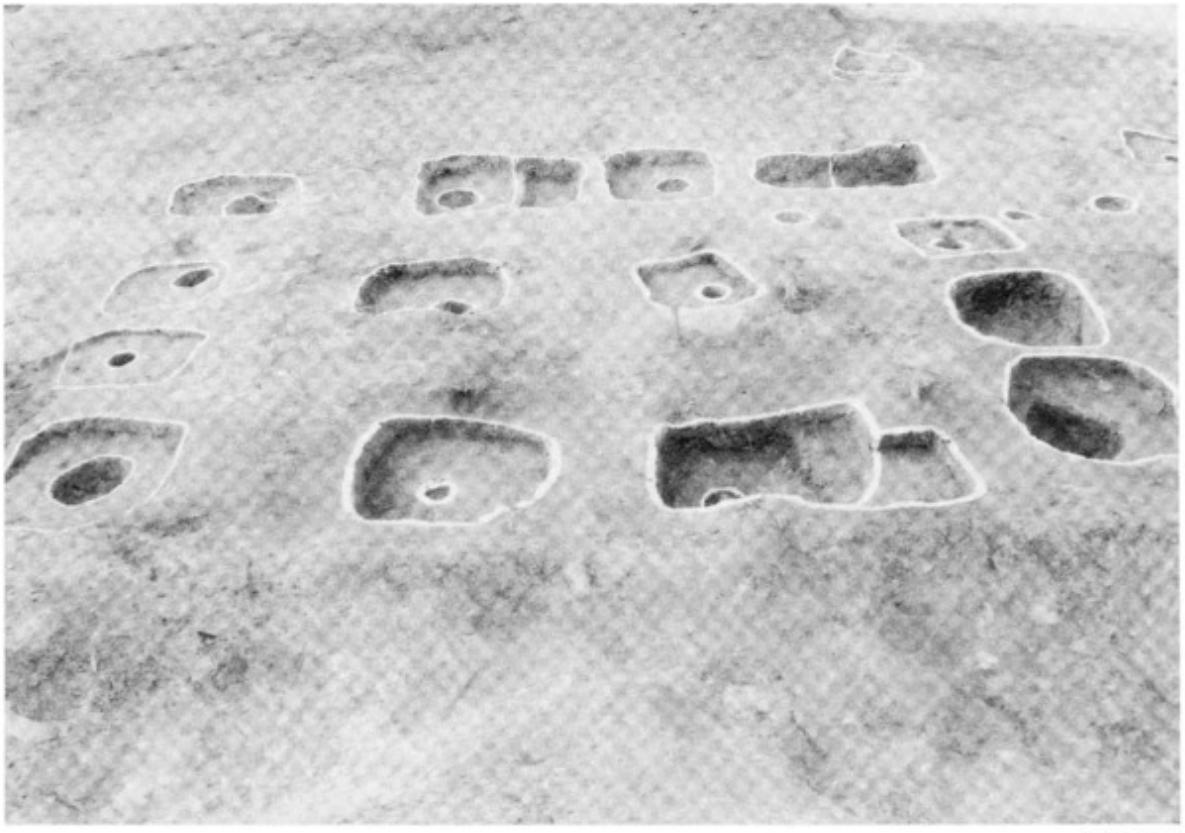
建物－24～32

建物－29

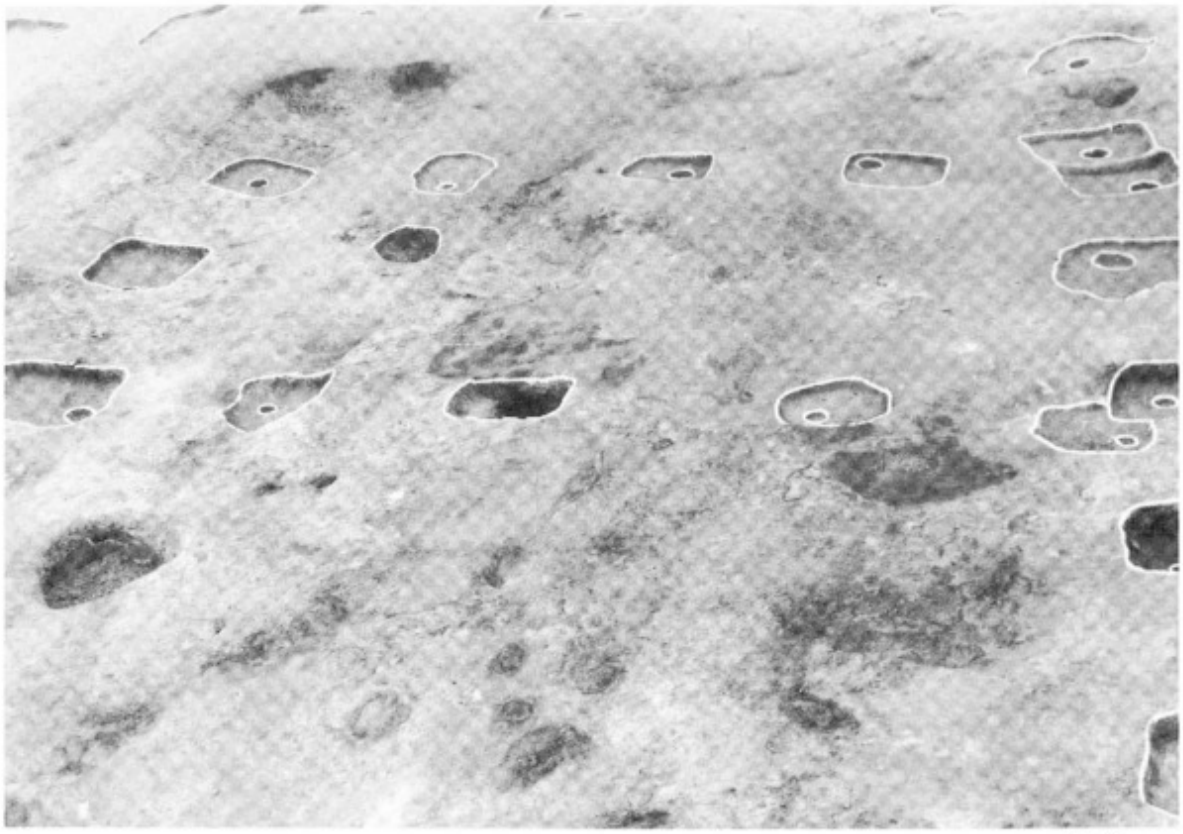
建物－28・30



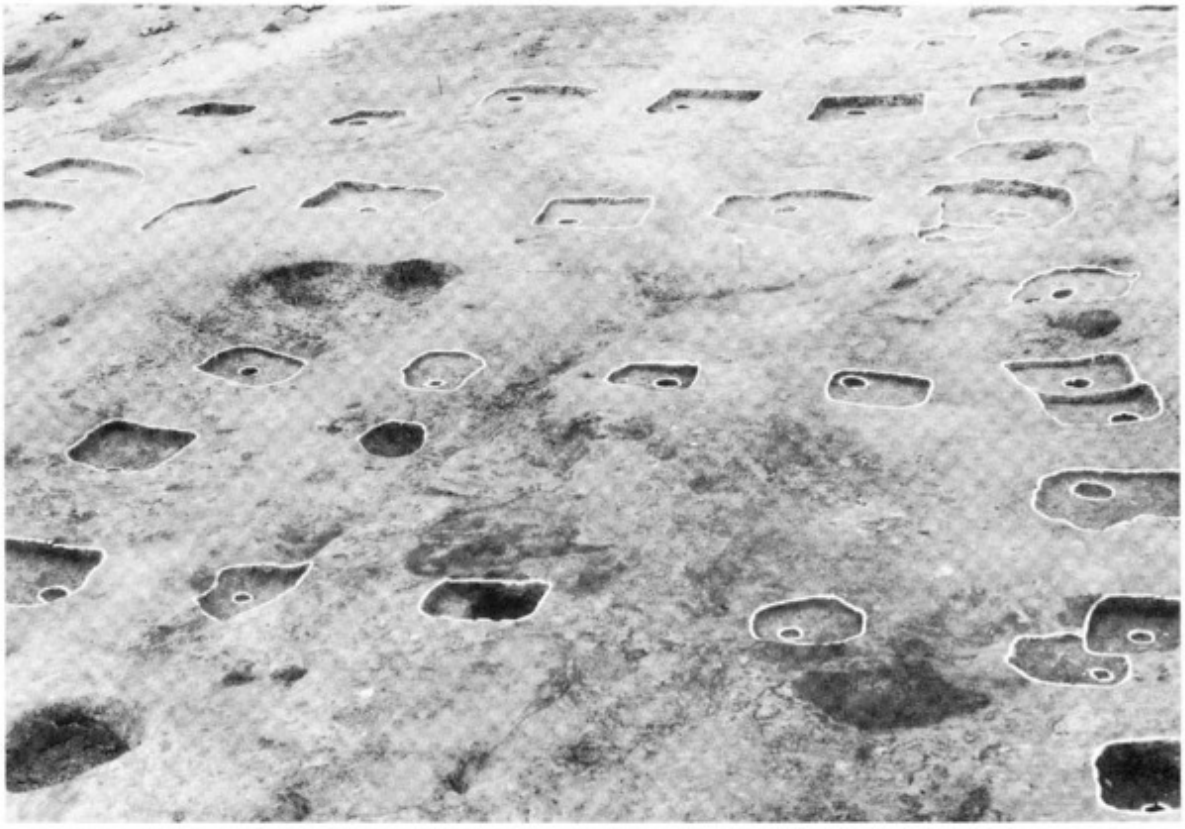
建物－30



建物－28

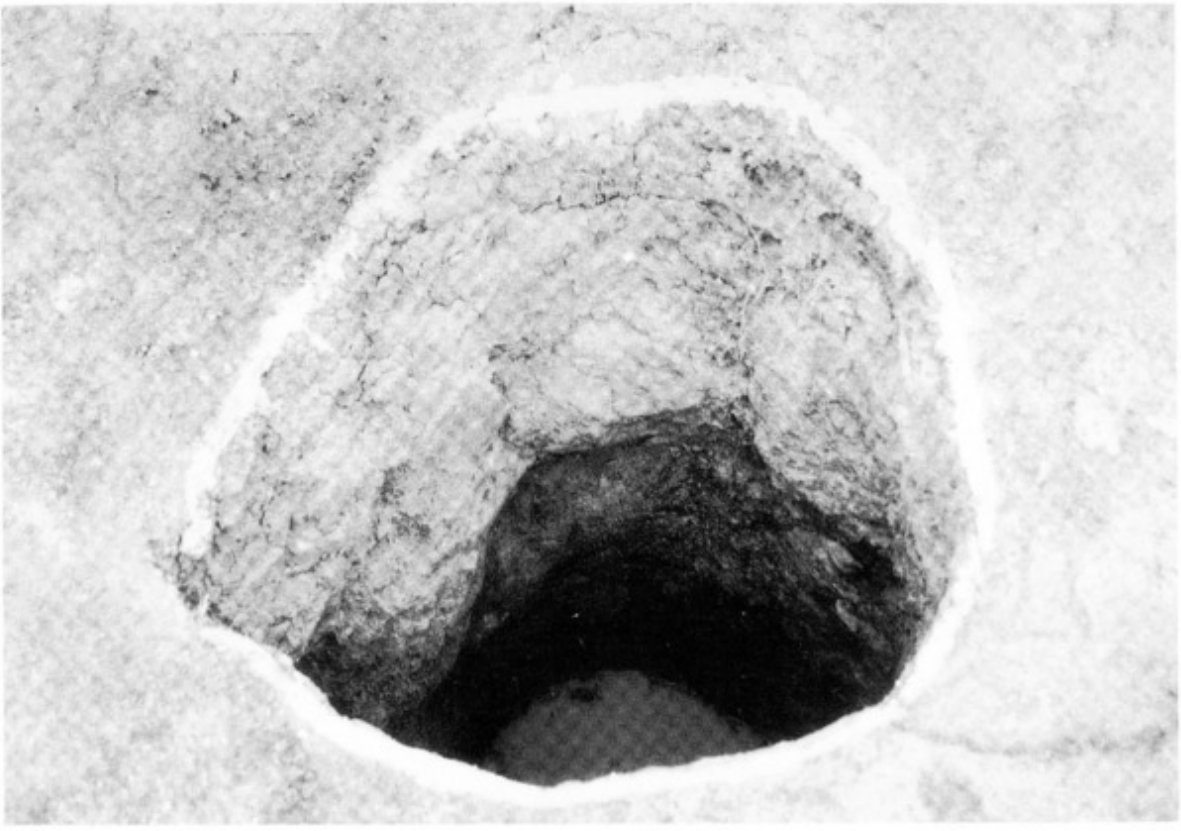


建物－31



建物－30・31

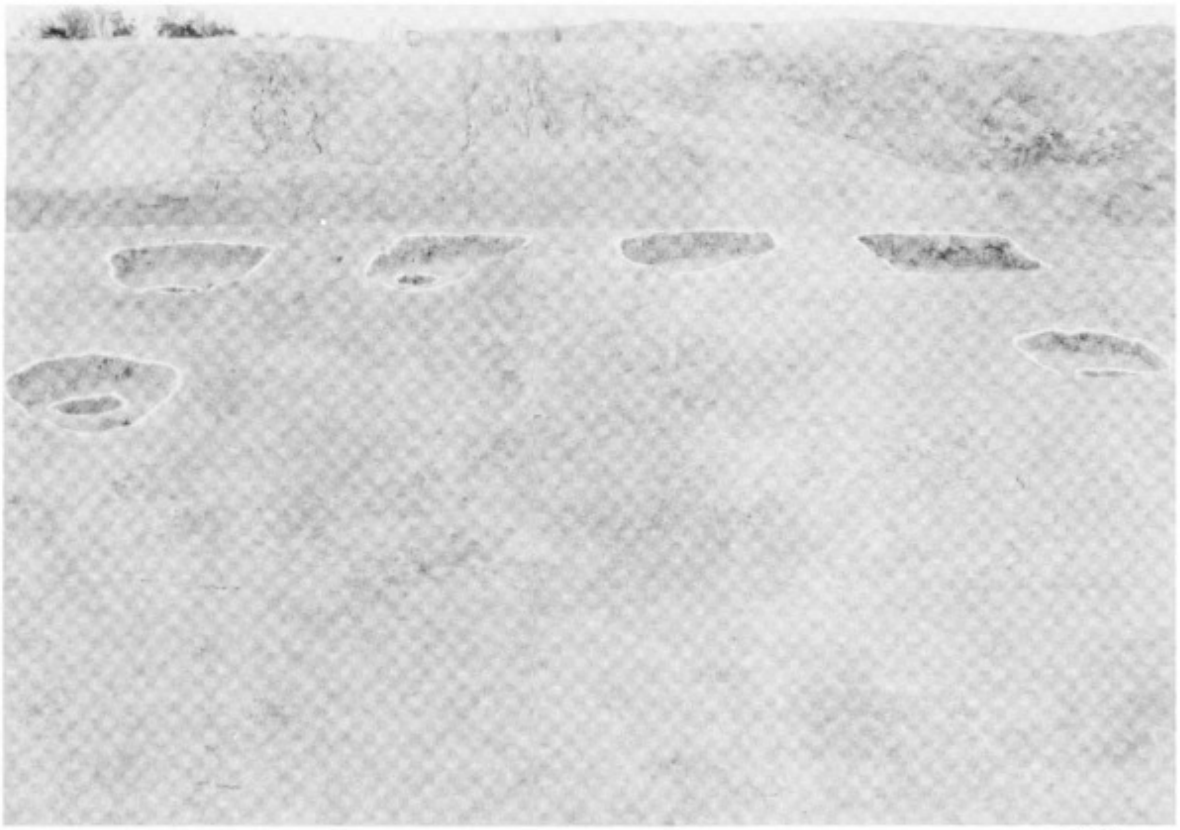
建物－24・26、柵－1



井戸－1

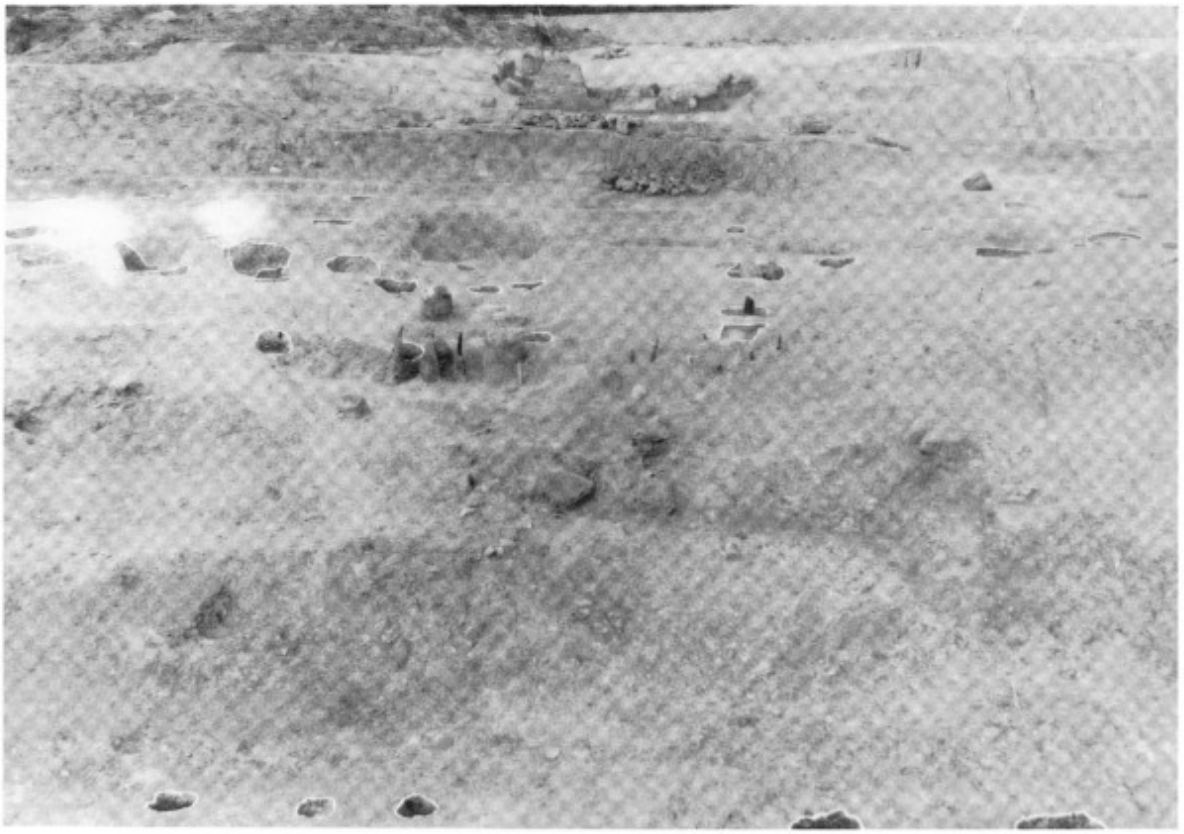
建物一33〜39

建物一33・34

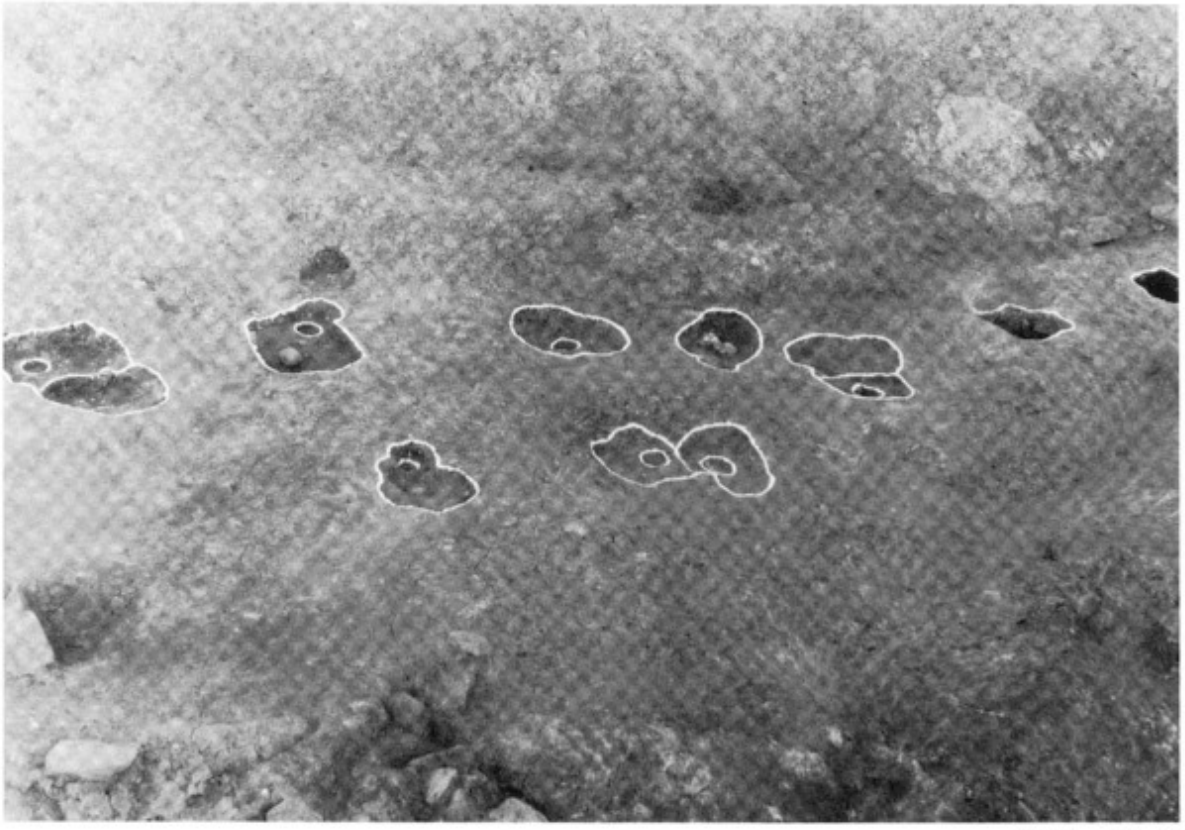


建物－39

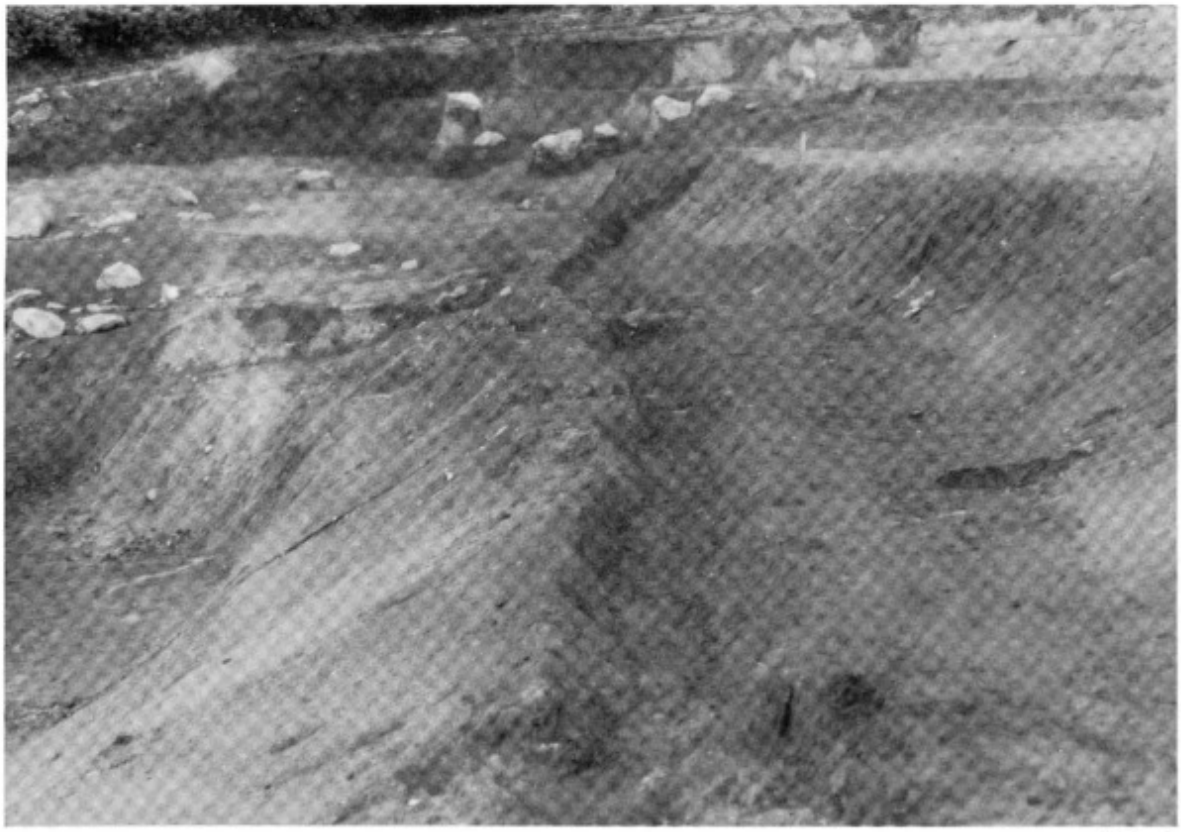
軒丸瓦出土状況



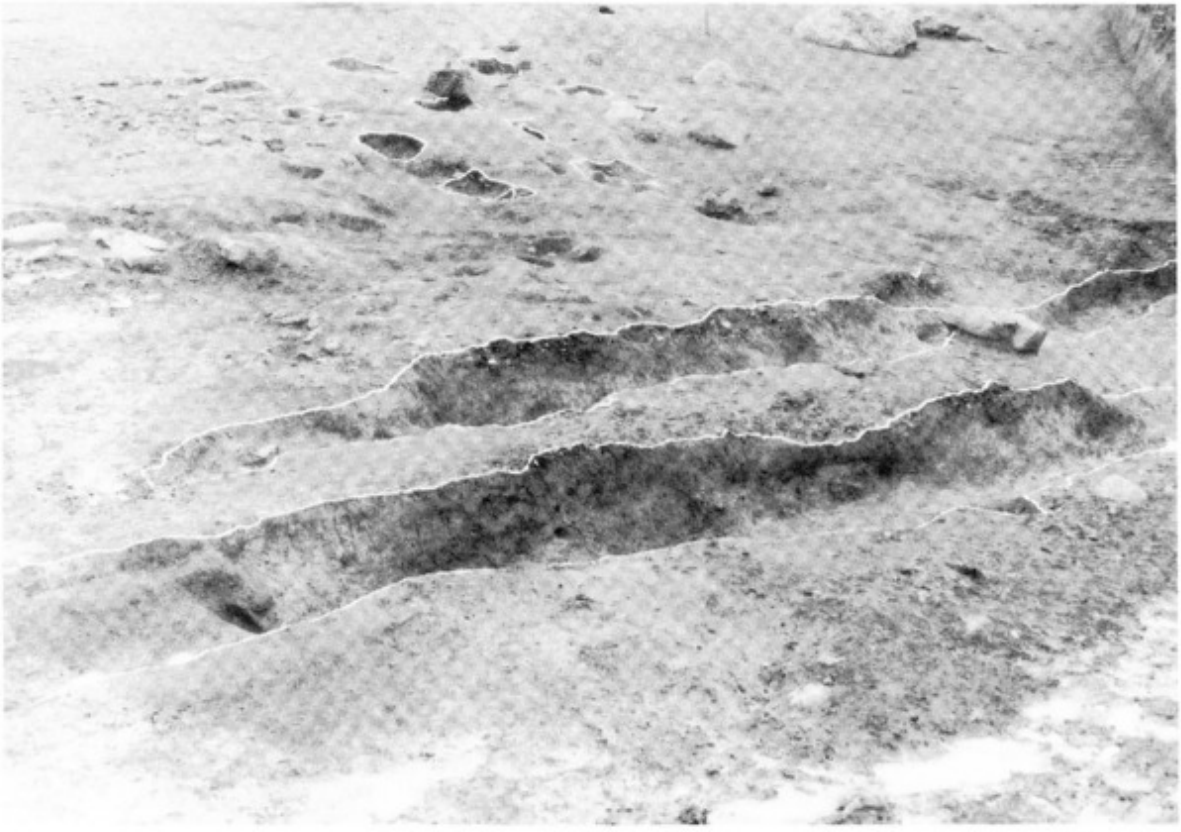
建物—36・37



建物—40・41

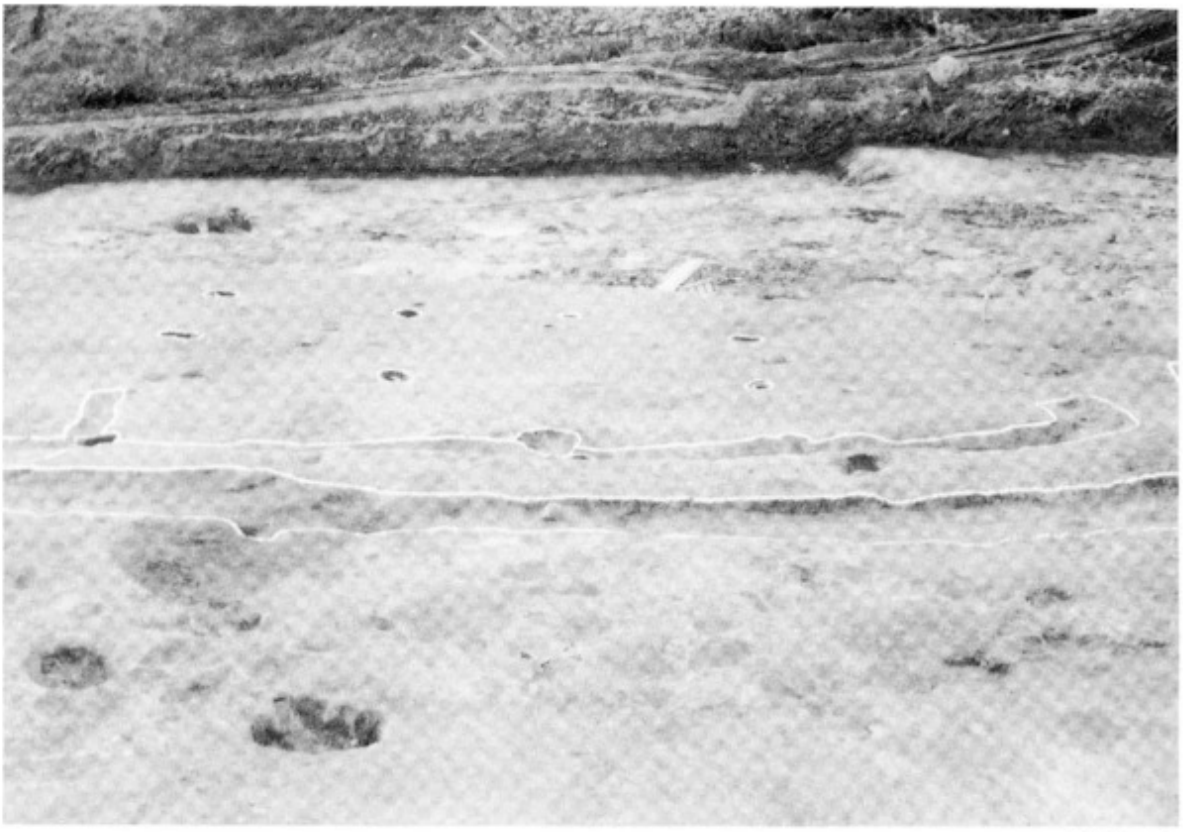


溝－3

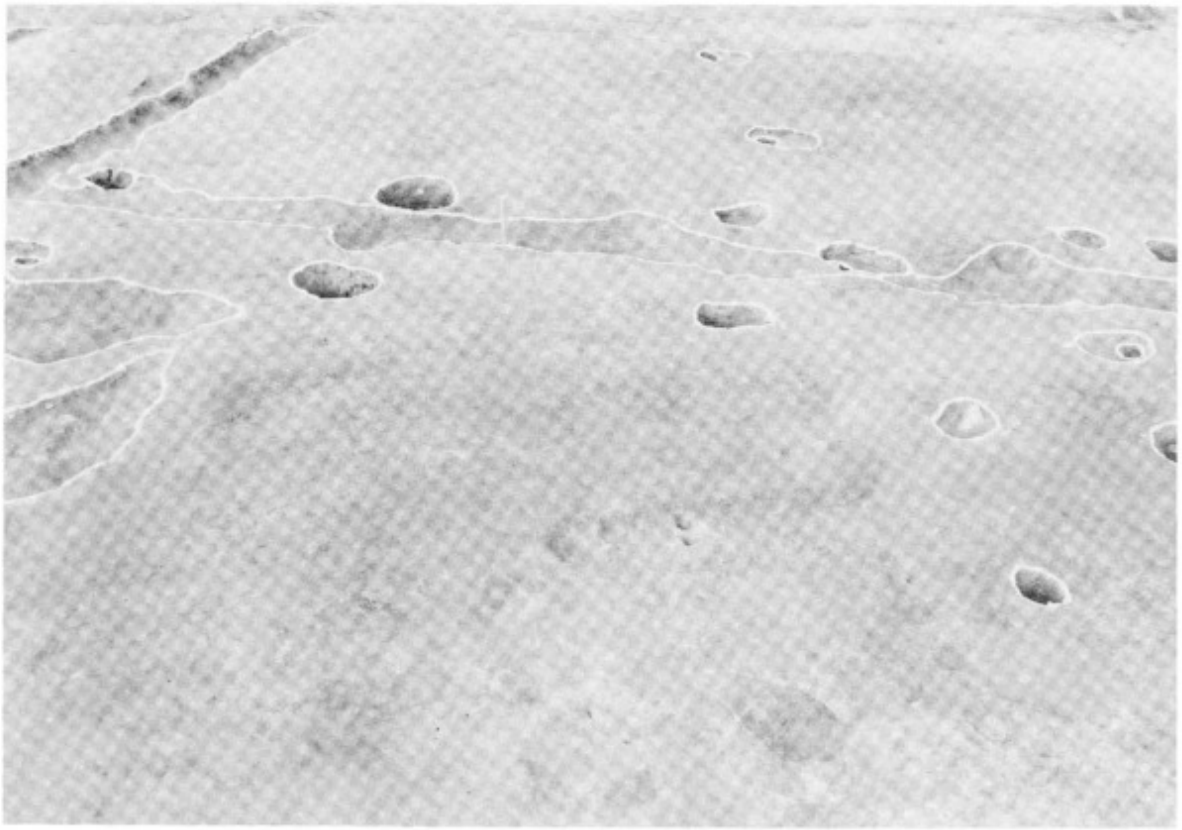


溝－4・5

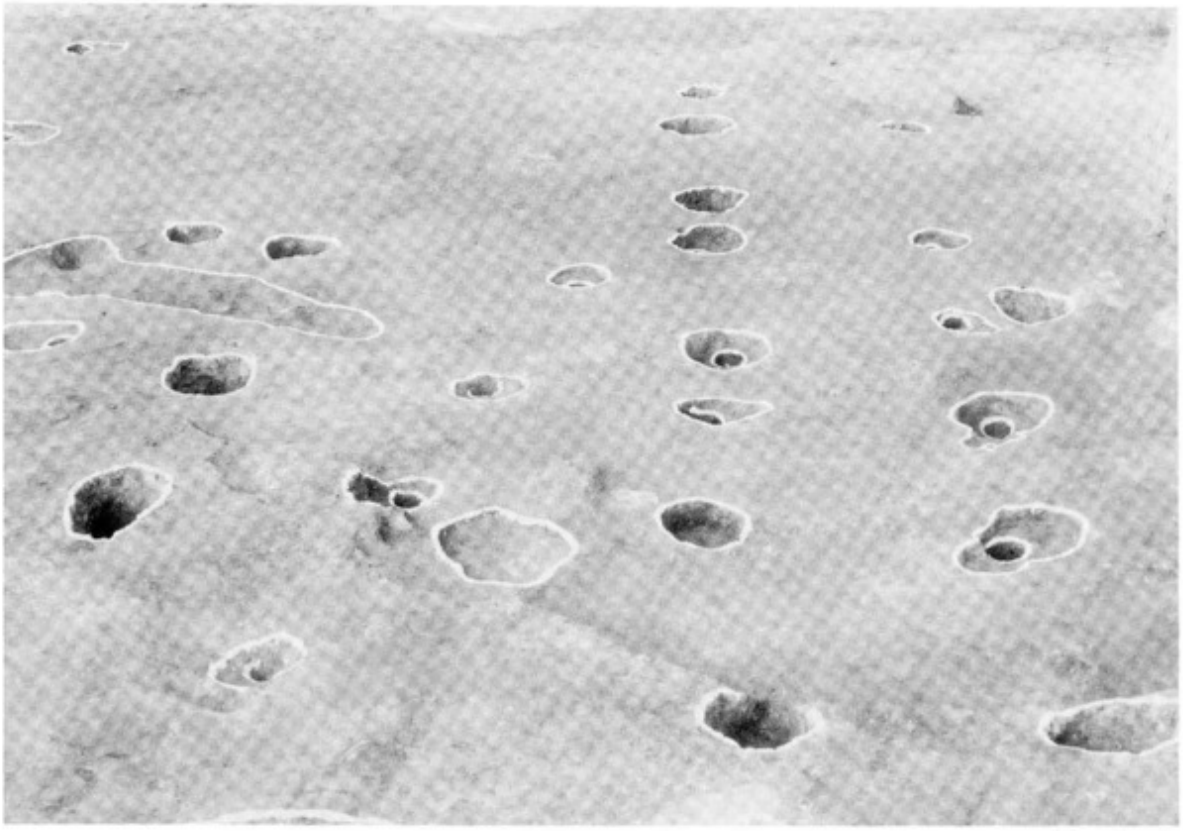
建物－42～46



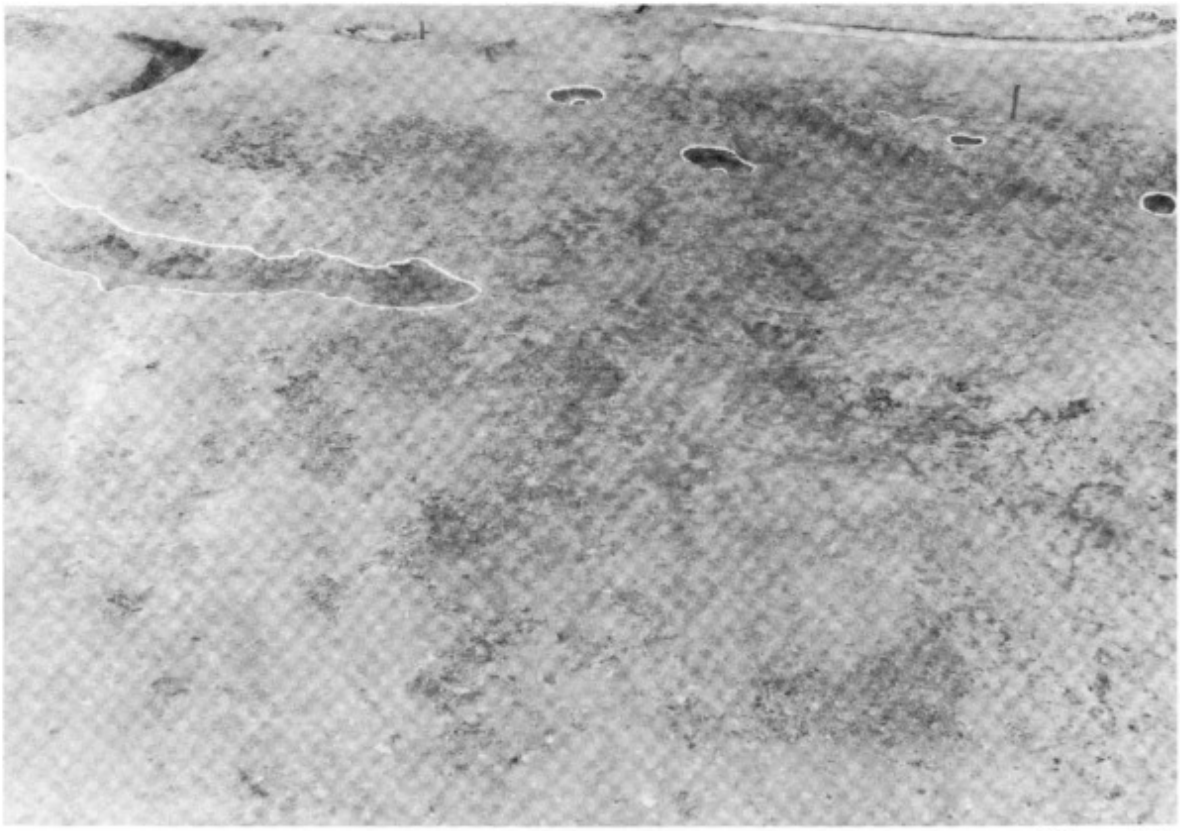
建物－42



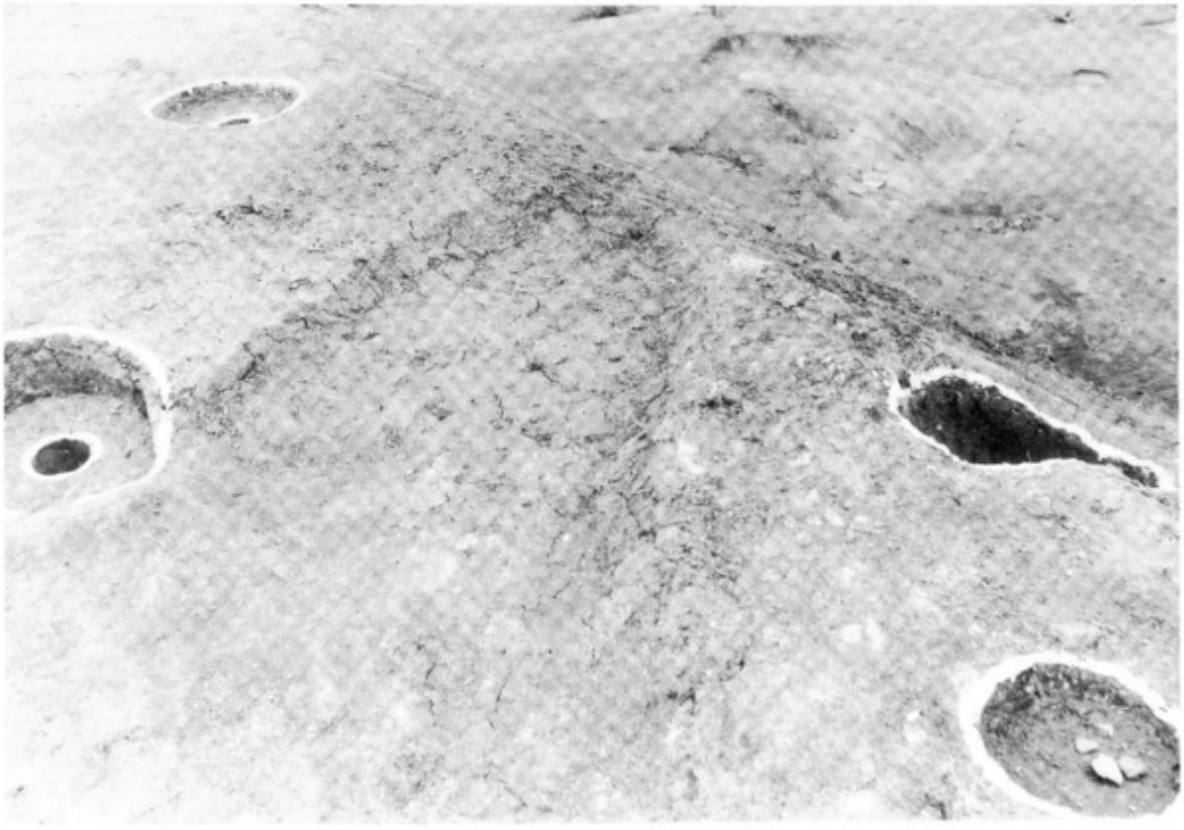
建物－45



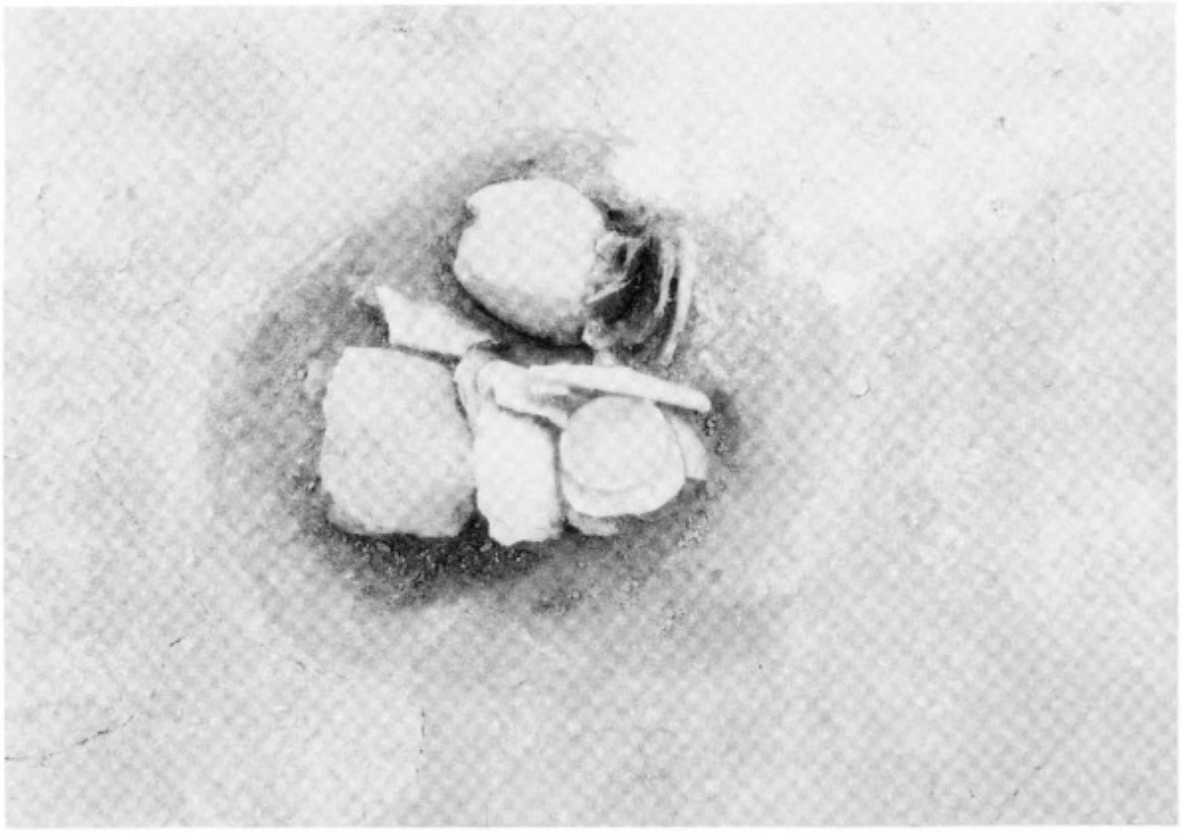
柵－3・4



建物－48周辺

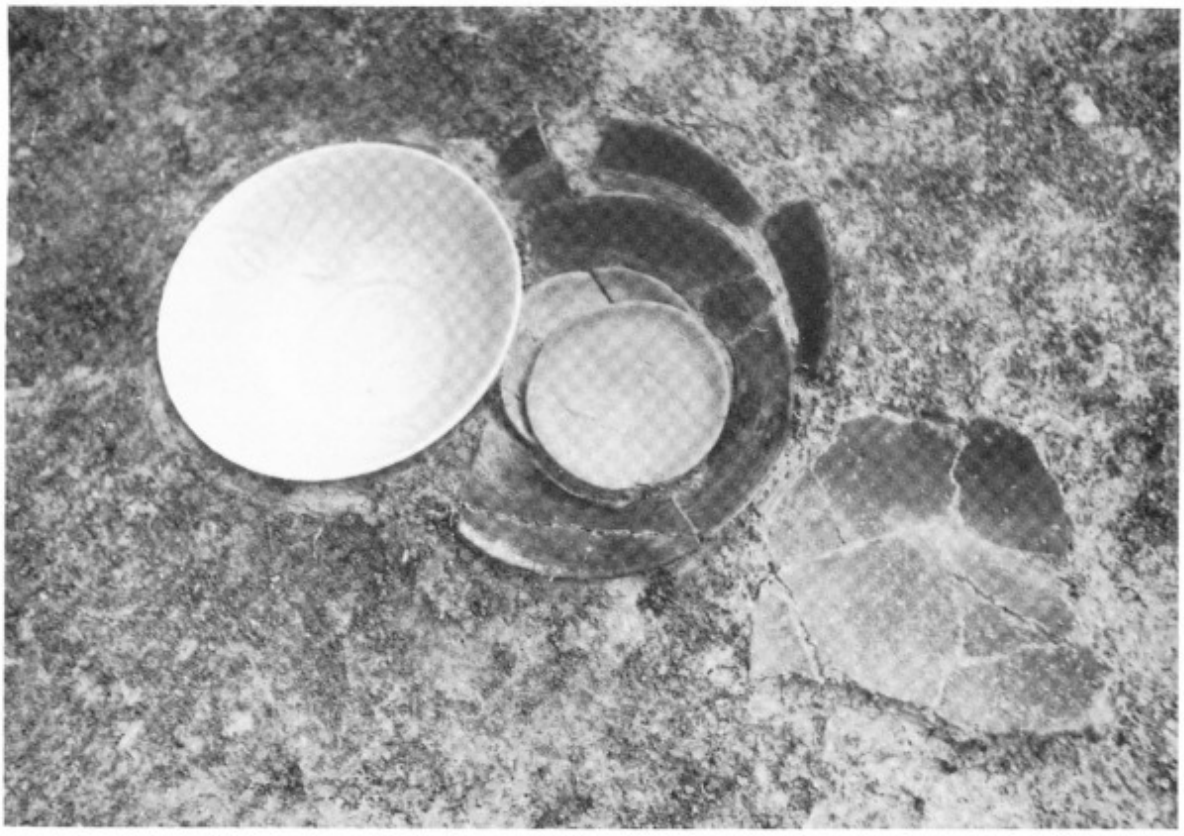


建物－48



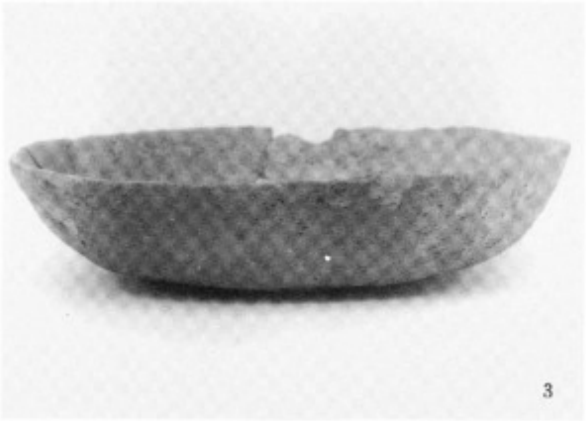
建物－43・ピット－328

土坑－5



遺物出土状況

青磁椀

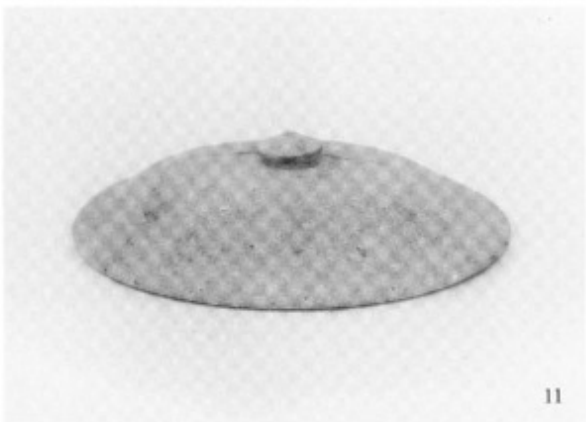

3

7

8

9

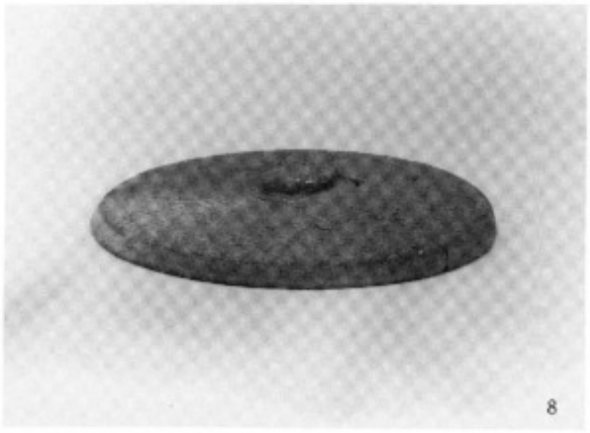
10

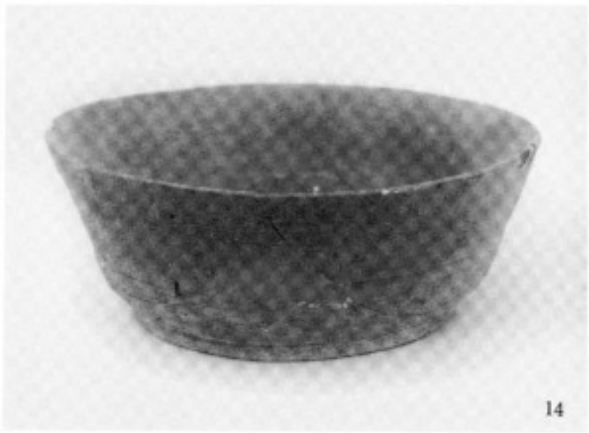

11

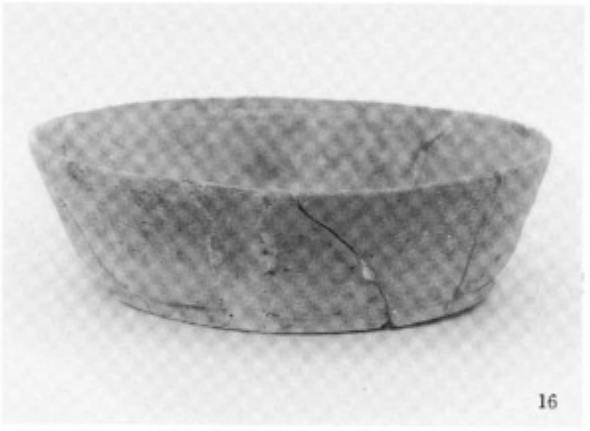
16

26

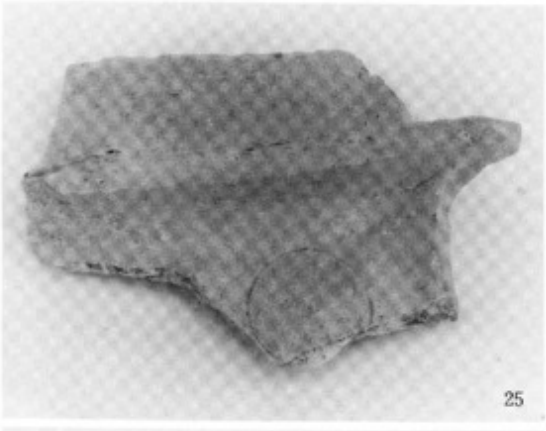
井戸中・下層(3～10)　井戸上層(11～26)

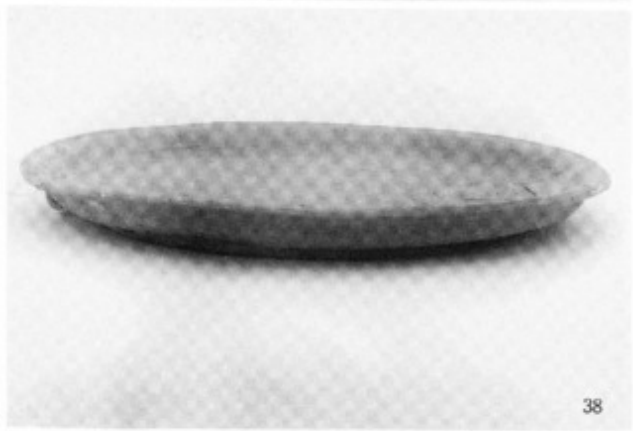

8


14


16

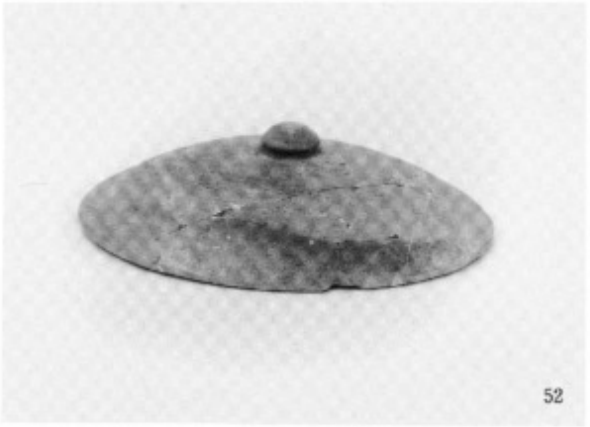
19

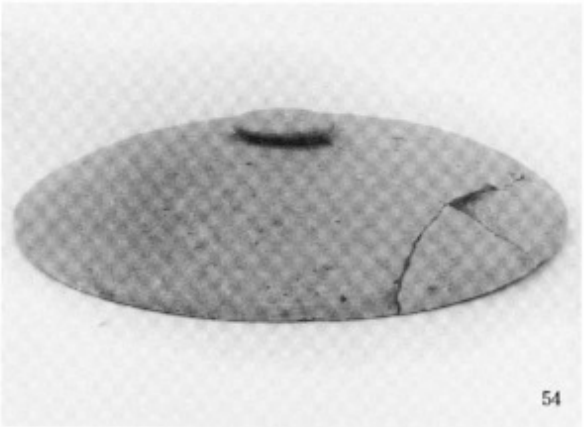

25


38

39

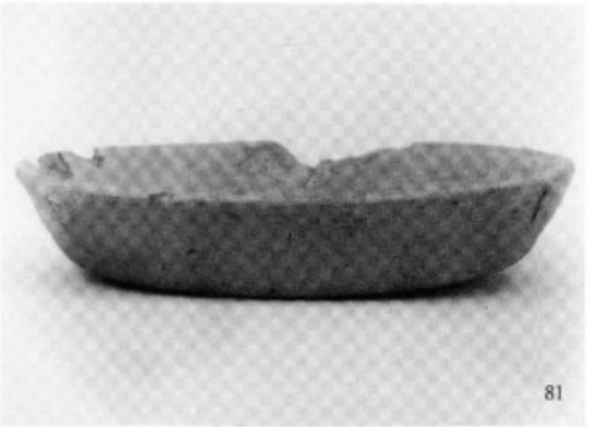
44


52


54

57

59


81

84

86

91

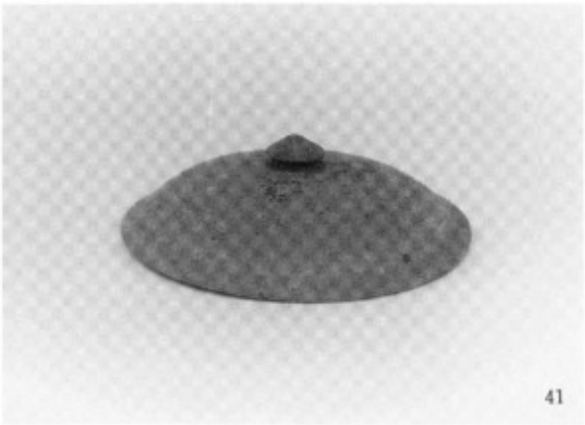
溝－4（52～59）・溝－5（81～91）

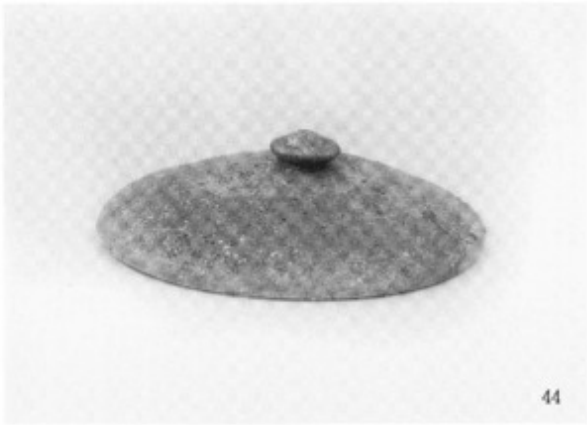
15

22

25

34


41


44

61

70

72

76

77

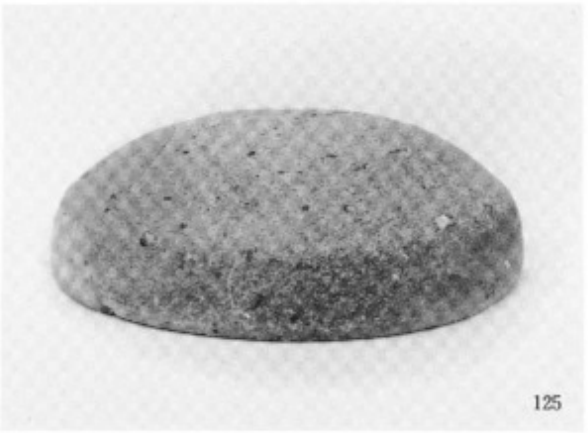
87

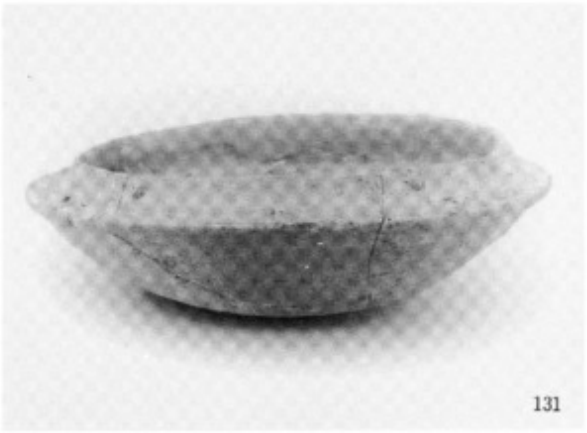
98

120

121

124


125


131

141

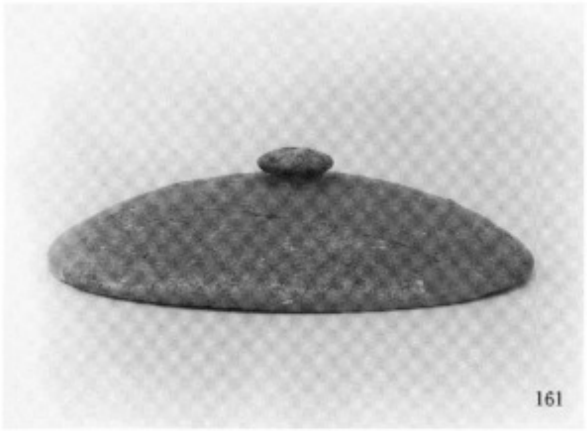
142

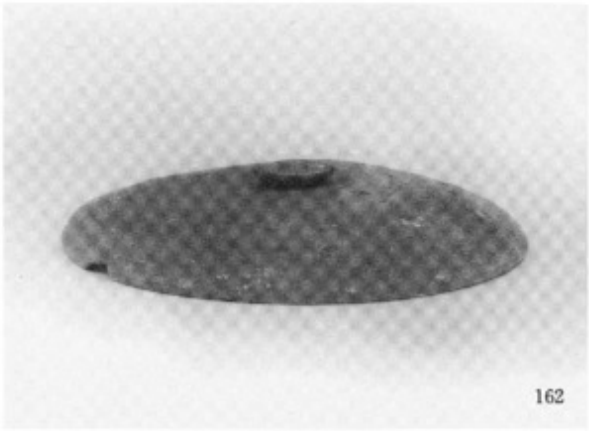
148

149

151

154


161


162

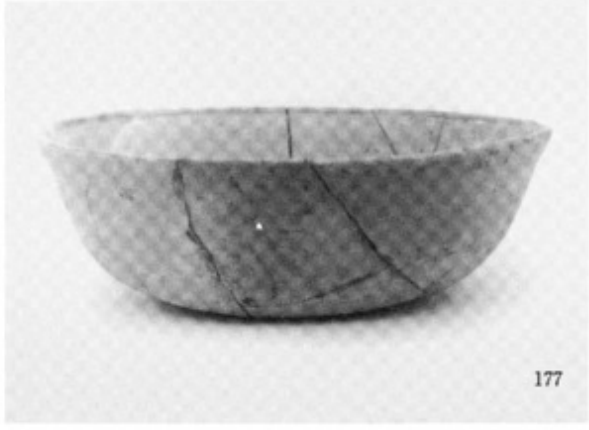
164

165

167

172

176


177

178

184

187

190

193

195

202

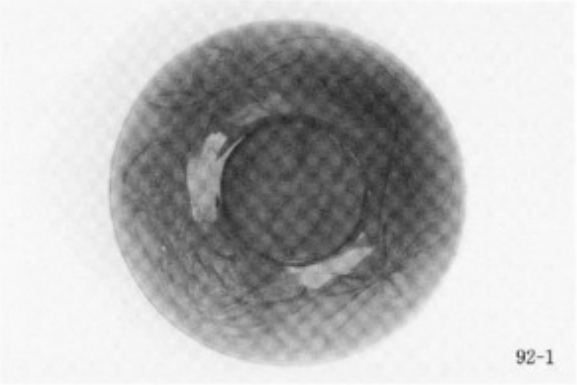
203

90-2

90-4

90-6

90-11


92-1

92-4

92-1

92-5

92-3

92-6

平安時代ピット(90)・溝ー7(92)

1

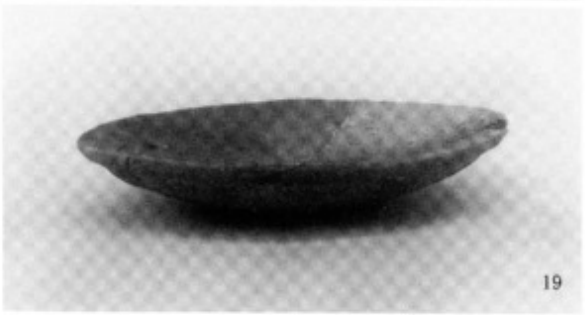
3

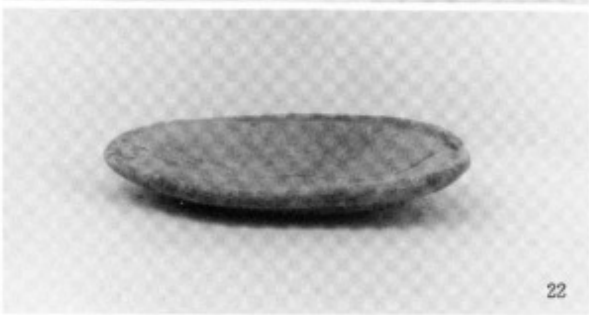
11

29

16

17


19


22

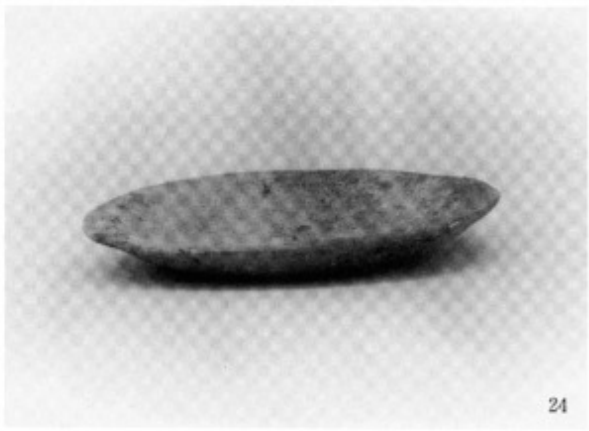
23

24

2

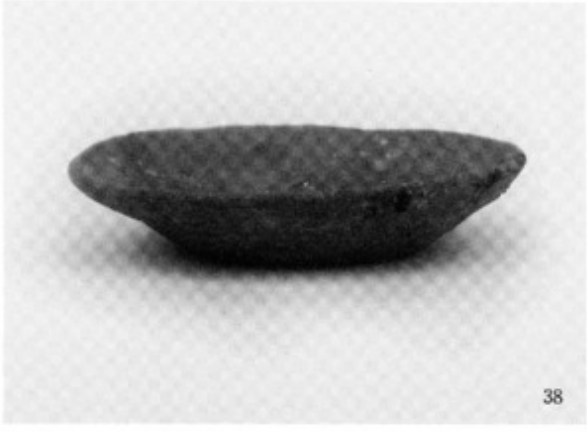
4

21


24

34

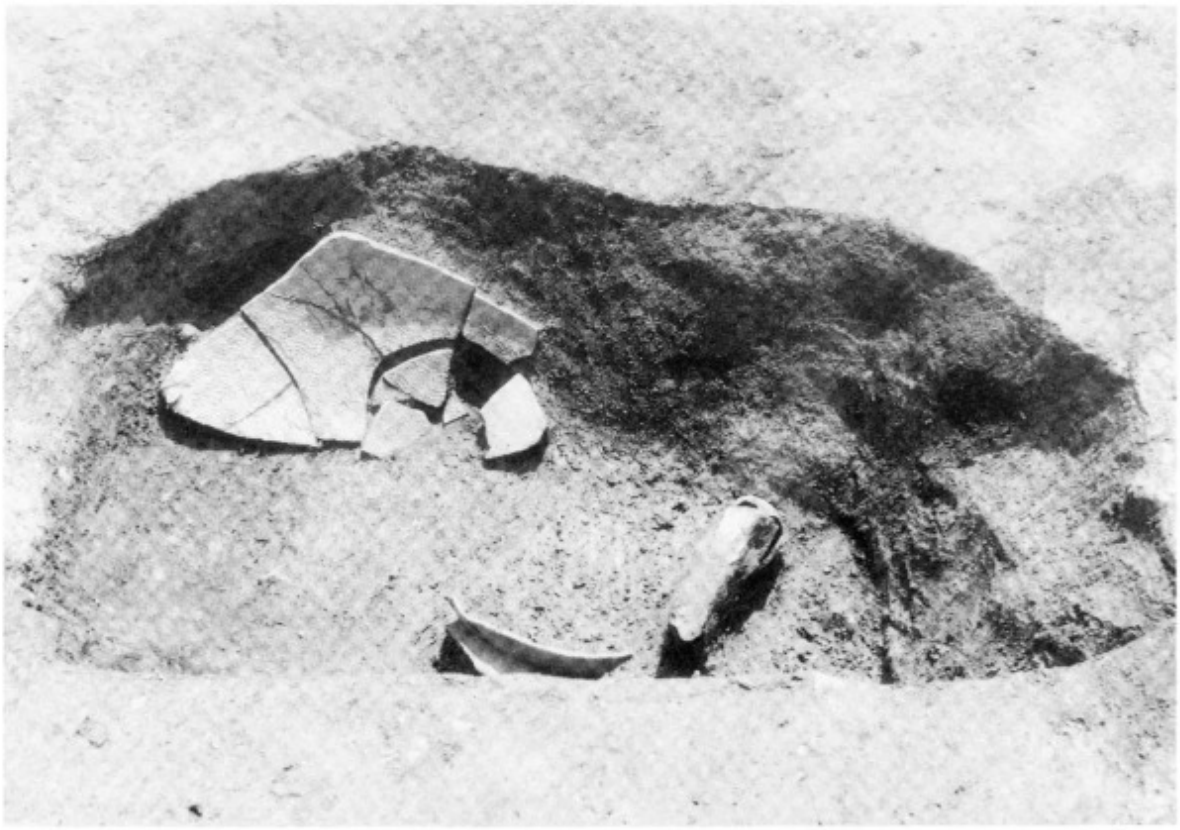
36


38

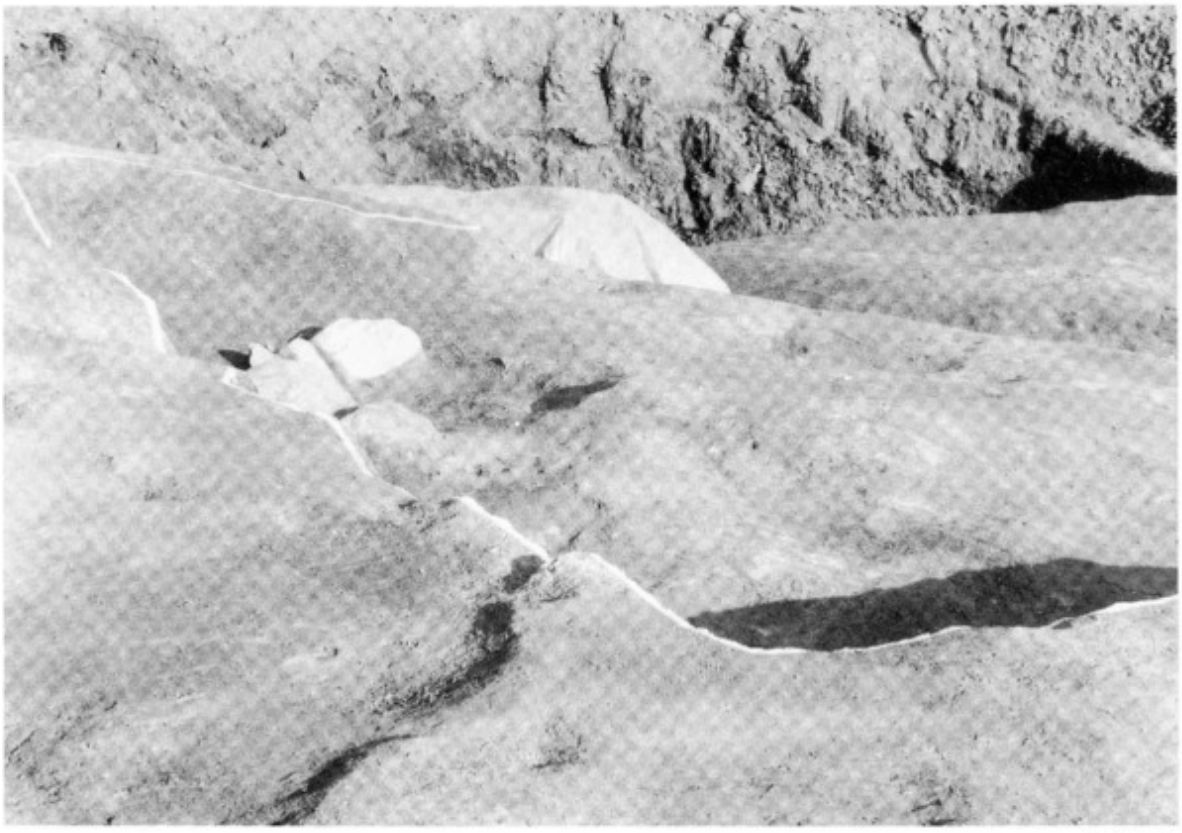
39

建物－50

建物－49



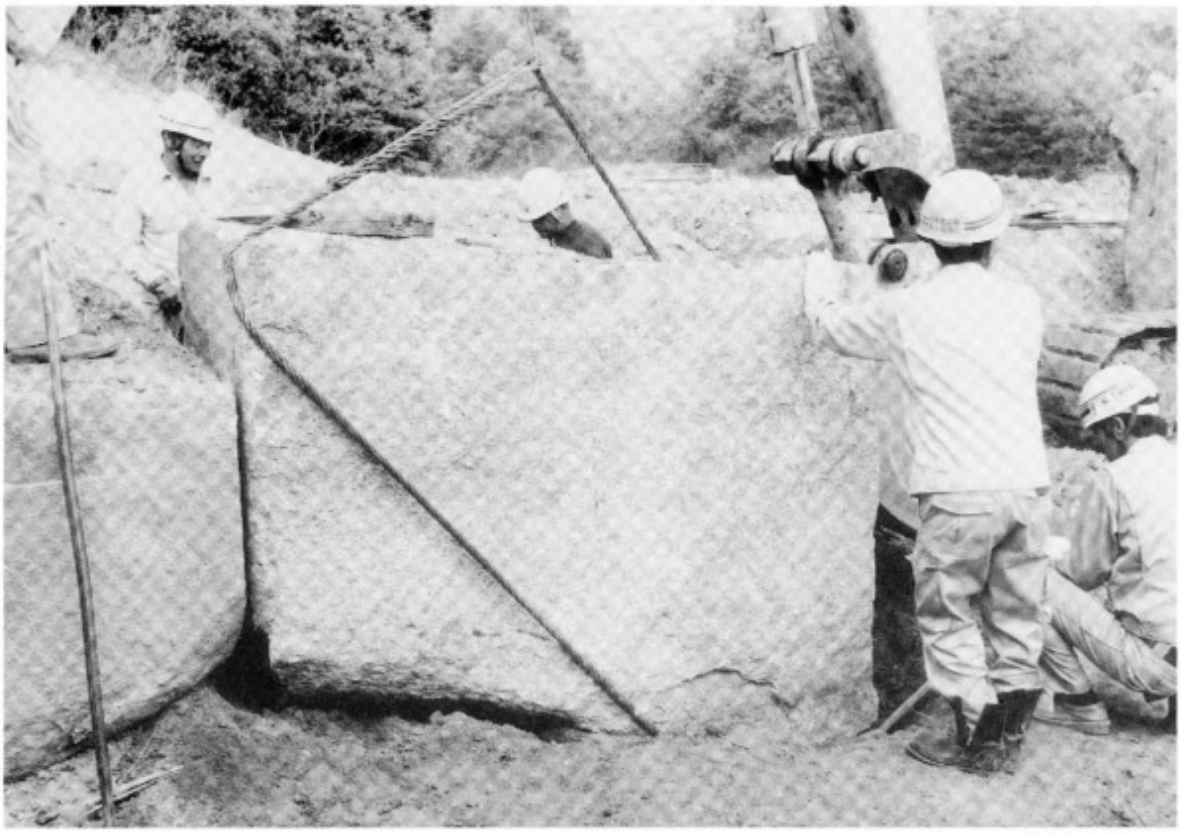
土坑－1



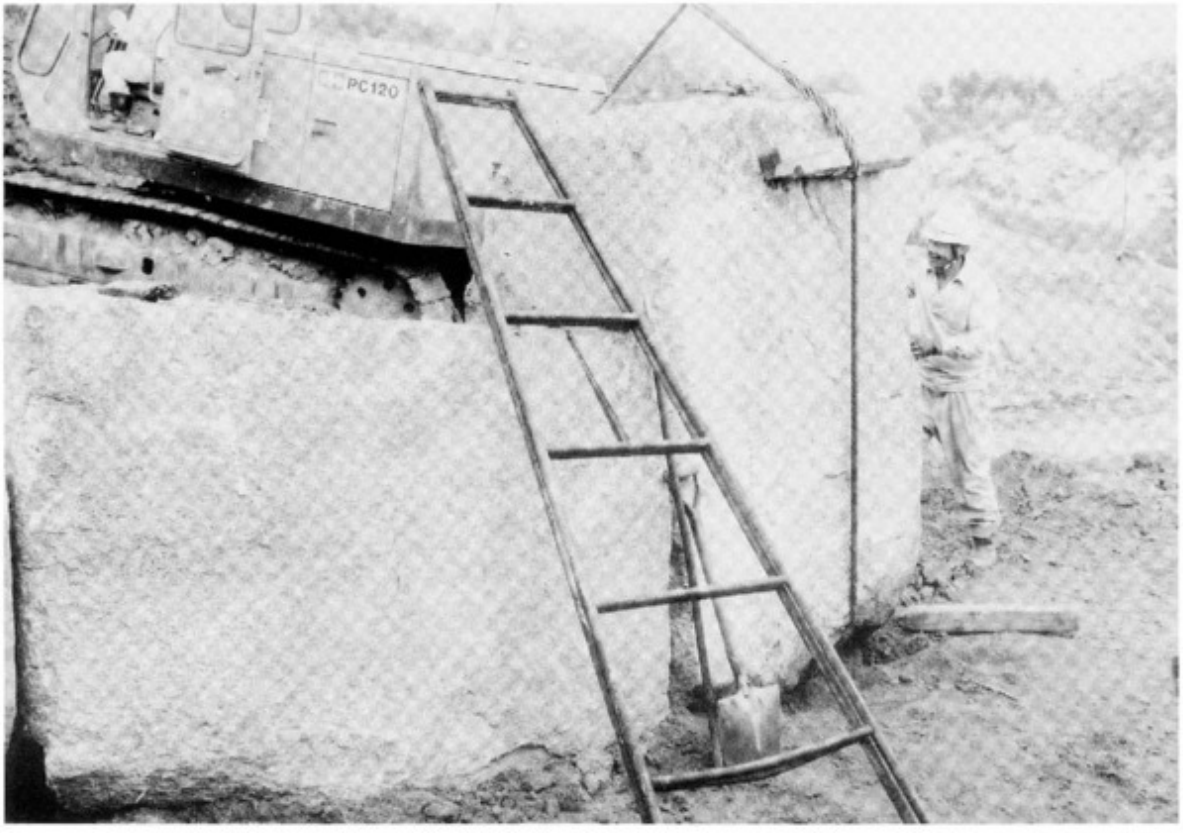
土坑－2

移設前状況

羨道第1石取りはずし

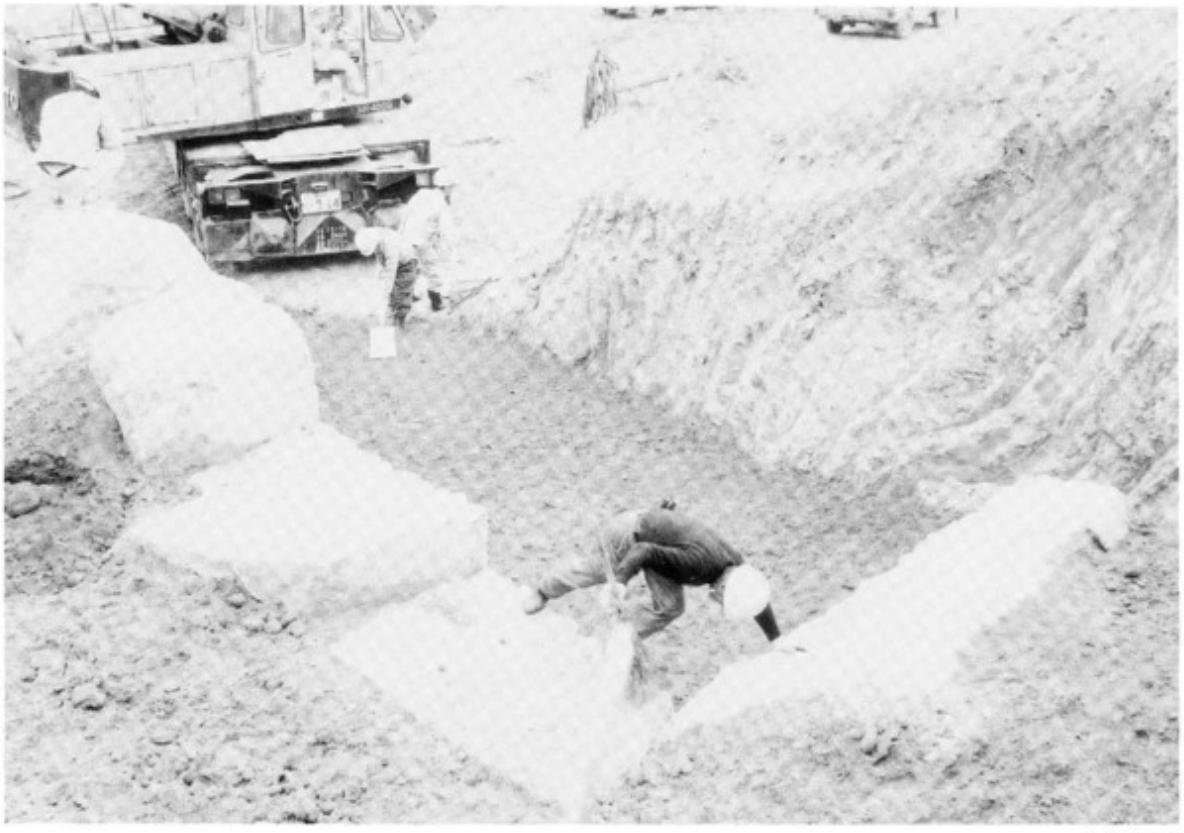


左壁第2石設置



左壁第3石設置

羨道第2石設置



移設終了

高井田遺跡 II

編集・発行　柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話(0729)72−1501　内716
発行年月日　昭和62年3月31日
印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所